

【完結】お兄様スレイヤー

どぐう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

? 十師族・四葉家には八つの分家が存在する。

? 分家の一つ「武倉家」の長男として生まれた主人公は、前世の記憶を持っていた。それ故に、自分が生きる世界は「魔法科高校の劣等生の世界」だと知ってしまう。

? 原作知識を利用して、「お兄様」の生み出すトラブルを解決すべく、彼は奮闘する。

○話の内容上、ネタバレが多いです。原作既読推奨。

○原作27巻までの設定と、「司波達也暗殺計画」の設定を利用する予定です。「優等生」を入れるかはまだ分かりません。

○「ヒロインはリーナ」タグがありますが、彼女が登場するのは来訪者編からです。

○2019/4/9に本編完結！ ありがとう！

○この作品のパラレルという設定での実質続編「魔法科高校の退学処分者」を連載中です。そちらも是非↓ (<https://syosetu.org/novel/191722/>)

目次

入学編

1

2

3

4

九校戦編

1

2

3

4

ダブルセブン編

1

2

3

4

来訪者編

1

2

3

4

星を呼ぶ少女編

1

2

3

1

10

19

29

38

46

54

62

70

79

85

93

102

108

116

124

131

138

146

GIVE! ME! LOVE!	291
アンタッチャブルは止まらない	284
番外編	
4	278
3	270
2	263
1	256
師族会議編	
4	248
3	240
2	232
1	224
四葉継承編	
4	216
3	209
2	199
1	190
ステイプルチェース編	
3	184
2	177
1	169
入学編II	
1	161
追憶編	
4	153

亜夜子、助けに来たぞ！
さらば、愛しき子供達よ

入学編

1

? 十師族に選出される資格を持つ二十八家の1つである四葉家には、他の二十七家には存在しない制度である「分家制度」が存在する。

? 四葉家現当主である四葉真夜の姉、四葉深夜の為だけに作られたこのシステムは割と曖昧だ。

? 苗字の違いは仕事の役割分担でしかない。血の濃さに違いがあっても、本家当主以外はおしなべて平等。分家といっても、完全に四葉から独立した地位を確立している訳ではないのである。

? 僕、武倉理澄^{むぐらりずむ}は、八つある四葉の分家のうち「武倉^{むぐら}」という家に生まれた。それだけなら、普通の魔法師に過ぎなかった筈だ。勿論、四葉における「普通」ではあるのだが。

? そんな僕だが、他人と違うところがあるとすれば、前世の記憶を持っているという点だろう。

? 僕は前世で「魔法科高校の劣等生」という本の愛読者だった。厨二心をくすぐってやまない魔法設定は、当時中学生だった僕には「なつ、なんかよくわかんねーけど、カツコいいぜ!」といった気持ちにさせられた。

? しかし、歳を重ねるにつれ、ラノベはめっきり読まなくなってしまう。しかし、大学生くらいになっても偶に読み返すくらいには気に入っていたように思う――。

? ――そこまでは覚えているのだが、そこからどういうプロセスで転生に至ったのかは何も思い出せない。

? 気が付けば、原作に存在しないキャラクター、「武倉理澄」としてこの世界に存在していたのだ。前世でどのようにして死んでいったのか、そもそも何歳まで生きていたのか、何も分からない。僕は不安を覚えながらも、とにかく無我夢中で生きるしかなかった。

? 転生者とはいえ、魔法の才能については最強主とは言い難い。と

はいえ、四葉家次期当主候補に名を連ねられるレベルなので、決してチートで無いことはないのだが。なろう系故に、強さの基準が基準なので難しいところだ。

？得意魔法は、加速・加重系の重力操作。干渉力には自信があるものの、戦略級魔法は使える程の力は無い。

？あの「お兄様」と戦ったならば、「分解」1つですぐに勝負はついてしまうだろう。普通であれば。

？だが、ものすごく低確率とはいえ、僕にはお兄様こと司波達也に勝つことが出来る方法がある。もしかすると、これは僕固有の魔法というよりは、転生特典なのかもしれない。

？系統外・精神干渉魔法「ワルキューレ」。

？精神そのものに死を与える魔法。司波深雪の「コキュートス」同様、彼を止めることができる力だ。

？だからこそ、達也の本当の力を知っている者は、僕の「ワルキューレ」を最後の希望と捉えている節がある。事情をよく知らない人間は深雪を次期当主と捉えているが、逆に深く知る者は僕を次期当主に推すというおかしな事態になっている。

？とても迷惑な話だ。理論上可能というだけで、負ける確率の方が高いというのに。

？幸いなことに、母であり武倉家当主である武倉藍霞あすみは、達也と全面的に事を構えることは危険と考えている。敵対フラグはまだ回避される余地はあるだろう。

？新発田しばたの家とかに生まれなくて本当に良かった。割かしマトモな感性を持つている勝成さんでも、親の滅茶苦茶な要求で苦労していたのだ。僕は絶対やっていけない。

？……まあ、ぐだぐだとした状況説明は終わりにしよう。

？僕は明日、原作開始イベントである第一高校入学式を迎えることになる。

？この出来事が波乱の幕開けとなることは、まだ誰も知らない——そんな風に格好つけてみても、いいかもしれない。

◆ 「納得できません！」

「? どうやら本格的にイベントは始まったようだった。原作通り、深雪と達也が講堂の前で言い争っている。言い争っていると云っても、達也の方は妹を諫めているだけではあるが。」

「? 2人から距離を取りながらも、そつと様子を窺う。すると、達也が深雪の頭を撫で始めた。兄妹とは思えない甘ったるい光景だ。」

「? 深雪はリハーサルに参加する為に達也と別れ、講堂へと行った。そろそろ、登場するタイミングとしてはちょうど良いだろう。」

「やあ、達也。おはよう。入学式日和の良い天気だね」

「……さつきからコソコソ見ていただろう。どうして、最初から来なかつた?」

「エレメンタルサイト 精霊の眼で気づいていたのだろう。流石は俺TUEEE系主人公のレジエントだ。」

「夫婦喧嘩は犬も食わないってね」

「俺と深雪は夫婦じゃなくて、兄妹だといつも言ってるだろう。……それにしても、理澄。どうして入試で手を抜いた?」

「……僕が手抜きしたって知ってたの」

「さつき深雪が言っていた。7位だったとな。もしお前が本気を出していれば、深雪が総代になる可能性は少し低くなっただろう」

「? 随分な過大評価である。確かに魔法力はその辺の十師族並にはあるはずだが、深雪に勝てたかというと微妙なところだ。」

「御当主様にもそれとなく釘を刺されたし、お母様にも、優秀すぎるとか規格外だとか思われないうようにしろ、って言われたしね。逆に言われてないわけ?」

「入学前に叔母上に会ってないからな」

「なるほど」

「? 確かに正論だ……。しかし、詭弁でもある。」

「? 中庭を歩き回り、手ごろなベンチを見つけた僕達は腰を下ろした。」

「それにしても……。どうしてそんなに早く？ 式は2時間後だぞ。浮かれて早くやつてくる性格でもないだろうに」

「家についても暇だし」

？ 原作の展開を間近で見ようと思いましたが、なんて言えないので適当に誤魔化す。

？ どちらにせよ、家に居ても暇なのは本当だ。というのも、キャビネット通学できる距離で一人暮らしをしているからである。この時代、マ ニュ ピ レー タ 付 き の H A R (Home・オートメーション・Robot)があれば、家事が出来なくても殆ど困ることがない。

？ 一応護衛を付けてはいるが、使用人やガーディアンはいない。対外的には今でも僕は四葉家次期当主候補だが、いずれその座を返上する予定にしている。そのため、気ままに一人で生活できるのだ。

？ 下手に僕が当主となり「お兄様」を刺激するくらいなら、何もしないほうがマシだからである。達也のことを殺したがっている派閥によつて、僕は祭り上げられている。そんな僕が四葉を率いれば、彼はとても警戒するだろう。最悪の場合、完全に達也は四葉の敵に回るかもしれない。そんなことになれば、世界が終わる。

？ 達也は言葉を返さず、黙って端末を取り出した。会話が面倒臭くなったか、急に本を読みたくなったか。多分、前者だろう。

？ 僕もそこまでお喋りに興じた訳でもないのに、彼を咎めはしなかった。そもそも、2時間も話す程のネタを持ち合わせていない。適当なところで話を切り上げてくれるほうが有り難かった。なので、僕も端末を立ち上げて動画を見ることにした。

？ 一科生と二科生が並んで座っていると、少しばかり……。いや、かなり目立つだろう。だけど、移動するつもりは無かった。この後、達也は七草会長とエンカウトするからだ。それを見る為には、ここにいた方がいいのである。

？ 映像が流れている画面上に、軽い電子音と共に通知が現れた。式の始まる30分前に鳴るようにしておいたタイマーだ。もちろん、設

定した理由はそれだけではない。

「新入生ですね？ 開場の時間ですよ」

？ 僕と達也の目の前に、背の低い女性——第一高校生徒会長である、七草真由美が立っていた。やはり彼女は、達也の年季の入ったスクリーン型端末に目を向けた。僕もスクリーン型端末を愛用しているのだが、このイベントの為に端末を新しく変えている。「感心ですね、スクリーン型ですか」

？ 僕にとっては知り尽くした流れだが、達也にとっては思いがけないものである。煮え切らないような、どこか言い訳じみた返事を返していた。

「あつ、申し遅れました。私は第一高校生徒会長を務めています、七草真由美です。ななくさ、と書いて、さえぐさ、と読みます。よろしくお願いしますね」

「俺、いえ、自分は、司波達也です」

「僕は、武倉理澄です」

？ 自分は蚊帳の外であるような気はしたが、自己紹介をしないのもおかしいので、達也に続いて名乗っておいた。七草会長は僕を見て、少しだけ愛想笑いを浮かべたが、すぐに達也へと向き直った。

「司波達也君。そうですね……、あなたがあの、司波君でしたか」

「……」

？ 達也は無表情のまま、黙り込んでいた。沈黙は金、とも思っているのだろう。

「先生方の間では、貴方の噂で持ちきりでしたよ。……入学試験、7教科平均、百点満点中九十六点。特に圧巻だったのは魔法理論と魔法工学。合格者の平均が七十点に満たないのに、両教科とも小論文を含めて文句なしの満点。前代未聞の高得点だった」

「……ペーパーテストの成績です。情報システムの中だけの話ですよ」

「すごいじゃないですか。少なくとも、私には真似できませんよ？」

私はこの学校で二年も学んでいますけど、同じ問題を出されても司波君のような点数はきつと、取れません。……貴方も、そう思いませ

か？」

？急に彼女は、僕に話を振ってきた。達也とだけ話しているのも悪いと思つて、気を遣つてくれたのかもしれない。

「武倉君、ですよね？ 一科生の貴方が、こうして司波君と一緒にいるということは、彼の実力を認めているという事だと思つたんですけれど……」

？そんなに気に留めていなかったらうに、よくちゃんと名前を覚えてるものだ。上に立つ人間なだけは、流石にある。

「才能で人を選ぶ趣味は、僕にはありませんが……。もし、そうだったとしても、達也は僕と肩を並べられるどころか、それ以上の實力のある人間だとは思いますが」

？それを聞いて、七草会長は嬉しそうに微笑んで「仲が良いのね」と言つた。

？確かに表面上だけ見れば、友好的な関係を築いているように見えなくもない。けれども、そうではないのだ。彼の本来の力を知る立場の者としては、彼を過小評価することは危険過ぎて絶対に出来ない。

？世界を滅ぼしてしまうかもしれない、悪魔のような魔法師。それが僕の横にいる男、司波達也の正体なのだから。

？



？講堂に入ったところで、達也とは別れた。座席が何となく前列は一科生、後列は二科生という風に分かれてしまつてゐるからだ。初日からわざわざ暗黙のルールに逆らう気も無いし、後で深雪と一緒に合流するしか無いだろう。

？入学式は特に変わったことも起こらず、恙無く終了した。学校によつては入学式すらもオンラインで済ませるくらい、式典というのは形式的なものだ。相当なことがない限り、アクセシブリティというのは発生するはずがない。

？そのまま、人の流れに任せて列に並び、IDカードを受け取る。

クラスはB組だった。瑣末な手続きを終わらせ、この場所で一番見つけやすい人間であろう深雪を探しながら歩く。

？もう既に彼女は、達也たちと帰ろうとしているところだった。僕も足早にそちらへ行き、声を掛ける。

？達也と深雪がこちらに気づき、振り向いた。

「あら、理澄君」

？深雪の言葉によって、前を歩いていた2人も僕に気づいたようだった。

「ねえ、深雪。この人友達？」

？ショートカットの少女——千葉エリカがそう尋ねた。その横にいる眼鏡の少女、柴田美月も口にこそしていないが、気になってはいるようだった。

「友達というより……。昔からの知り合いっていう方が近いかな。小学生の頃とかは、割と頻繁に顔を合わせていた」

？深雪の代わりに達也がその疑問に答えた。

？よく会っていた、と言つても、一緒に楽しく遊んでいた訳ではない。四葉本家で行われている戦闘訓練に参加していたのだ。

？親達の懸念を余所に、僕達の世代は達也を中心に奇妙な関係で結ばれている。

？彼のお陰で「四葉」としてのアイデンティティを得た黒羽の双子達。彼の存在によって、逆説的に存在価値が生まれている僕。何だか、皮肉な話である。

「二年B組の武倉理澄です。よろしく。気軽に理澄と呼んでくれて構わないよ」

「OK。私は千葉エリカ。エリカ、でいいよ」

「わっ、私は柴田美月です！ よろしくお願いしますね」

？美月は少し緊張しているようだが、エリカはとても気安い対応だった。深雪にも物怖じせず受け答えをしていただけはあるな、と思う。

？

「でもさ、りずむ、って変わった名前よね。戦争があったからか、男の

子の名前って割と武骨になってきてるじゃん。男女差別する訳じゃ無いけどね」

？エリカの言う通り、2010〜20年代に流行した所謂「キラキラネーム」は戦争の勃発により、鳴りを潜めた。世界情勢に合わせてか、勇ましい名前を子供に名付けたがる親が増えたからだ。

？ただ、あまり好戦的な名前にするのは憚られた。あの時代には「戦争」という言葉すら、忌避する風潮が蔓延していたからだ。故に、古風で硬いイメージの名前の流行という結果へと落ち着いた。その方向性は現代まで続いている。

？つまり、僕の名前はとても珍しいのだ。

「まあね。自分でもそう思ってるところはあるよ」

「でも、いい名前ですよ。綺麗な響きです」

？美月がエリカの言葉を取りなすように言う。捉え方によってはケチを付けているように聞こえるかもしれない、と気付いてしまったのだろう。僕は全く気にしていなかったが。

「あのさ、美味しいケーキ屋さんがあるらしいのよ。良かったら、みんなで行かない？」

？微妙な空気になるのを避けてか、エリカは努めて明るくそう提案した。

「入学式の場所はチェックしていなかったのに、ケーキ屋は知っているのか……？」

「当然！ 大事なことでしょ？」

「当然なのか……」

？達也のツツコミに、平然とした顔で返すエリカ。講堂の場所は校内で誰かに聞けば教えてくれるので、学校近くのケーキ屋だけ探しておく——ある意味、合理的思考とも言えなくは無い。

？僕はもとより外食をする予定だったので、一も二もなく頷いた。達也と深雪はどうだろうか。

「お兄様、どういたしましたでしょうか？」

「いいんじゃないか。せっかく知り合いになったことだし。同性、同年代の友人はいくらいても多過ぎるということはないだろうから」

？達也の妹思いなこの発言によって、後の方針は決まった。僕達は揃って、校門へと足を向けた。そろそろ、お昼には丁度いい時間だ。

? 入学式の次の日には、クラス毎にオリエンテーションが行われる。校内規則の説明や履修登録の案内、カウンセラーの自己紹介など、学生たちがスムーズに学校生活を送れるように用意された日らしい。完全実力主義を謳っている割には、やけに親切なことである。

? 登録後は実習見学があるようだったが、別に見たいわけでもない。本当なら、早退届でも出してさっさと帰りたい。だが、そうはしなかった。

? 今日の放課後には、一科生達と達也達が、深雪を巡って揉める一幕があるからだ。

? 下校時刻、深雪を待っていた達也達は、A組の何人かの生徒に難癖を付けられていた。中心人物となっているのは、「劣等生」内でも数少ないネタ（）キャラ、モブ崎こと森崎駿だ。

? 騒ぎに便乗し、僕もシレッツとした顔で混ざる——無論、E組側に。エリカが小声で「何とかしてよイツラ」と言ってきたが、森崎達とは面識も何も無いのにどうやって止めるというのか。「誰だよお前」と言われるのがオチだ。

「いい加減に諦めたらどうなんですか? 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう」

? おつとりとした雰囲気的美月が真つ先に一科生達に噛み付いた。原作を読んでいた頃は、意外だと思っていた。でも、今考えると別段おかしいことではない。

? 美月は、魔法師の家系ではない「第一世代」だからだ。

? 魔法師の世界は、十師族を頂点とする明確なピラミッド社会。構造が既に差別を前提としているのだ。幼い頃からそういう場所で生きていたら、嫌でも慣れてしまう。

? 外からでない、違和感というものはわからない。いの一番に噛み付いたのも、不思議ではなかった。

「別に深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんてしていないじゃないですか。一緒に帰りたいかったら、ついてくればいいんです。何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか」

「？だが、人と感覚が少しズレてはいる——天然なのかもしれない。？これからの展開を知っているから、美月は予言者か何かなのか、と僕は穿った見方をしてしまっただ。とはいえ、いくら「水晶眼」と言えども、そんな設定は流石に付けていないはずだ。やはり、天然ということだろう。」

「彼女に続き、レオとエリカも口論に参加する。レオはともかく、口の上手いエリカは中々に相手を翻弄していた。」

「うるさい！ 他のクラス、ましてやウィードごときが僕たちブルームに口出しするな！」

「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですか？」

「？美月の言葉は、魔法師業界のシステムをよく知らない人間だから言えるものだ。けれども、正論は正論。今の在り方で利を得ているものには耳の痛い話でもあつた。」

「……どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」

「ハッ、おもしろえ！ 是非とも教えてもらおうじゃねえか」

「だったら教えてやる！」

「？売り言葉に買い言葉。レオの煽りに乗せられ、森崎は特化型CADを突きつけた——はずだった。しかし、エリカの振り抜いた伸縮警棒が彼のCADを弾き飛ばす。」

「この間合いなら身体を動かした方が速いのよね」

「それは同感だが teme 今、俺の手ごとブツ叩くつもりだっただろ」

「？緊迫した状況をぶち壊すような、漫才じみた会話が始まったが、僕はそれを無視して森崎の背後に回った。起動式を呼び出す為にCADを操作しようとしている、ある少女の手を掴む。」

「あっ——」

「やめておいた方がいい。後ろ見てみなよ」

「？指差した先には、厳しい顔でこちらを見る三年生達——七草真由

美と、風紀委員長の渡辺摩利がいた。

「あなたたち、1―Aと1―Eの生徒ね。あと、B組も？ どちらにせよ、事情を聞きます。ついて来なさい」

？入学して早々の非常事態に、今まで居丈高だった森崎も固まってしまっていた。頼りにならない奴である。すると、達也が深雪と共に会長達の前に進み出た。

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ？」

「はい。森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまり真に迫っていたもので、思わず手が出てしまったようです」

？白々しい言い訳をいけしやあしやあと言い放つ達也。思いがけない展開の転がりように、皆はぽかんとしている。

？風紀委員長——渡辺先輩だけは疑わしげな目を向けていた。目の前に転がるCADやエリカの警棒で、何があったか一目瞭然なのだから当たり前である。

？だが、被害者が何も無かったと主張しているのだから、どうしようもない。有耶無耶のまま事態は収束した。

「君の名前は？」

？上手く丸め込まれてしまったことが気に入らなかつたのだろう。去り際に渡辺先輩は振り向いて、達也に名を尋ねた。

「1―E、司波達也です」

「覚えておこう」

？それを聞いて、彼は苦虫を噛み潰したような顔をした。厄介事を呼び寄せてしまった、と気づいたに違いない。

「……借りだなんて思わないからな」

？役員達が去ったあと、森崎は刺々しい口調で言った。庇われたことでプライドが傷つけられたからか、かなり苛ついている。

「……僕の名前は森崎駿。お前が見抜いたとおり、森崎の本家に連なる者だ。」

「ああ、森崎ってボディガード業で結構有名だよな」

？支流とは言え、百家の血が流れているのは彼にしてみれば誇りなのだろう。何だか可哀想なので、適当に相槌を打っておいた。

？でも、クイックドロウで粹がるのはちよつと恥ずかしいと思う。彼は、二年次にCADを抜かずに照準を合わせる高等技術「ドロウレス」を習得することになる。せめて、それくらいになつてから威張つて欲しい。

「僕はお前を認めないぞ、司波達也。司波さんは、僕たちと共にあるべきなんだ」

？けれども、僕の話は無視された。森崎は達也に言葉を投げつけるのと、返事も聞かずに帰っていく。捨て台詞だったのかもしれない。

？全員が疲労を滲ませながらも下校しようとした時、一科の女子生徒がそれを阻んだ。まだ何かする気なのか、と誰もが身構えた。しかし、それは勘違いだった。

「光井ほのかです。さっきは失礼なことを言つてすみませんでした」

？彼女は達也の前に立つやいなや、勢いよく頭を下げたのだった。「私たちを庇ってくれて、ありがとうございました。森崎君はああ言いましたけど、大事にならなかつたのはお兄さんのおかげです」

？流石に達也もこの展開には面食らつたようだ。無難な返答で切り上げようとしているみたいだが、女子生徒——光井ほのかの押しが強く、あまり上手くないっていいようだった。内心面倒がつているのが容易に分かる。でも、ラブコメ展開の始まりだぞ、少しは喜べよ。無理なのは分かつているけれど、ついそんなツツコミを入れたくなつてしまった。



？次の日、教室で自分の端末を確認すると、部活連からメッセージが届いていた。要約すれば、風紀委員会に入らないか、というものだった。

？深雪から入手した入試成績によると、僕の順位は実技が4位で、

理論が18位で総合7位。実技の席次順で僕の上にいる男子は森崎だけ。彼が教職員枠で入るなら、僕に話が回ってくるのも領ける話だ。

？部活連枠で委員会に入るのあれば、部活動をしなくてはならない。何に入っておくのが良いだろうか。クラブ紹介を眺めて、良さげなものを探す。少し考えて、テニス部——魔法が使用可能な方の「リフレクトテニス部」に入る事にした。

？普通のテニスと違う点は、魔法以外にもいくつかある。まず、コートが全面が透明な箱のようなもので覆われている点で、その為にアウトが存在しない。そして、CADが内蔵されたラケットを使用する点。つまり、ボールをラケットで打ち返さないと魔法を使うことは禁止なのだ。

？リフレクトテニス部は、九校戦のクラウド・ボールへの出場実績もある真面目なクラブだ。それに、加重系統の得意な僕なら活躍の機会にも恵まれるはずだろう。

？風紀委員になれば、CADの携行許可が貰えるという特典もある。話を受けて損なことはない。そういう訳で、承諾の旨をしたためたメッセージを送って、僕は端末を閉じた。

？風紀委員や生徒会の勧誘が、入学式の直後という比較的早い時期に行われるのには理由がある。

？これから新入部員勧誘期間が、一週間始まるからだ。

？将来有望な新入部員を獲得するために、どの部活もやり過ぎなくらいに激しい勧誘活動を行う。これには仕方ない面もある。クラブから九校戦のメンバーに選出され、その上優勝でもしたともなれば、その部には予算が普段の倍以上になることも。学生のお遊びでは済まないのだ。

？様々な思惑が蠢く勧誘期間の初日、風紀委員会本部では顔合わせを兼ねた業務会議が開かれた。

「何故お前がここにいるー！」

？達也の存在に気づいた森崎が叫ぶ。やはり、スルーはできなかつ

たようだ。気持ちは分かる。分かるけれども、この場所で叫ぶのは非常識だった。渡辺先輩に怒られてしまい、彼は顔を青ざめさせている。

？三年生が部屋に入ってきて、風紀委員全員が席に着いたところで会議は始まった。

「そのまま聞いてくれ。今年もまた、あの馬鹿騒ぎの一週間がやって来た。風紀委員会にとつては新年度最初の山場になる。この中には去年、調子に乗って大騒ぎした者も、それを鎮めようとして更に騒ぎを大きくしてくれた者もいるが、今年こそは処分者を出さずとも済むよう、気を引き締めて当たってもらいたい。いいか、くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすような真似はするなよ」

？何人かが気まずげな顔をしているところを見るに、この委員会にはトラブル体質の人間が多いようだ。所謂、祭りの取材に行つて、いつのまにか神輿を担いでしまうタイプだろう。

「今年は幸い、卒業生分の補充が間に合った。紹介しよう。立て」

？呼ばれることは分かつていたので、特に動揺することもなく立ち上がる。森崎はガチガチに緊張しており、少し面白い。

「1―Aの森崎駿と1―Bの武倉理澄。そして、1―Eの司波達也だ。今日から早速、パトロールに加わってもらおう」

？達也を見ても、皆あまり驚いていないようだった。委員長の見立を信用しているのかもしれない。1人だけ、岡田とかいう二年生が嫌味なことを言っていたが、渡辺先輩に反論しきれずに結局は引き下がってしまった。

「では早速行動に移ってくれ。レコーダーを忘れるなよ。司波と武倉に森崎。お前らには私から説明する。他の者は、解散！」

全員が一斉に立ち上がったと思えば、踵を音を鳴らして揃え、右手の握り拳で左胸を叩いた。「イエッサー！」とでも言いそうな雰囲気だ。吹き出しそうになるのを堪えて、無表情を決め込む。

？二年生と三年生が出て行った後、僕達はビデオレコーダーを支給された。胸ポケットに入れて、証拠を撮影するらしい。だが、風紀委員の証言は原則として証拠として扱われるようだ。不正が横行する

のではないかと気になったが、僕の心配することでもない。

？通信コードも送信され、CADについての注意も受けた。後は巡回に行くだけだ。

？部屋を出たところで、森崎が僕達に因縁を付けてきた。正確には、達也にであるが。

「はったりが得意なようだな。会長や委員長に取り入ったのもはつたりを利かせたのか？」

？達也の両腕には二個のCADが巻かれている。

？基本的に複数個のCADを同時に使用するというのは難しい。機器から出る想子波が干渉しい、相克を起こしてしまうからだ。これは、魔法師の中では常識中の常識であり、森崎も勿論知っている。それ故に、彼は声高に達也を罵る。

「羨ましいのか？」

？しかし、達也の切り返しに詰まってしまふ。それでも何とか煽るだけ煽って退散していった。

？何がしたいのかだんだん分からなくなってきた。だが、これでも面白キヤラ粹なのだ。

「何だったんだ……？」

「でも、僕もどうして達也が風紀委員になったのか気になるな。まさか自分から名乗り出た訳じゃないだろ？」

？ほのかの魔法発動を僕が妨害したので、達也の起動式を読む技能は知られていないはずだ。そのせいで、風紀委員に選ばれることも無くなっているかもしれないと思ったのだが、現に彼は委員になっている。先程、実は僕も森崎と同程度には驚いていたのだ。叫んだりしなかつたけれども。

「深雪の推薦だ。忍術使いの弟子とか、戦闘では負け無しとか言うから、服部副会長と決闘をする羽目になってしまった」

？ぼやくような言い方だが、声音は楽しげだった。妹のことを心底可愛がっているのが見て取れる。

？けれども、深雪は兄の地位向上に熱心に取り組み過ぎだ。少しは自重という言葉覚えて欲しい。

「これからどうする?」

「別行動にしよう。連れを待たせているんだ」

「それ普通にサボりじゃない……? まあ、いいけど。じゃあ、またあとで」

? 僕は達也と別れ、一人で巡回することにした。元々風紀委員の仕事はコンビを組んでやるものでもない。

? 適当に校内を歩きつつ、暴発寸前の生徒間の揉め事を仲裁して回る。特に魔法を使わずとも、対処できる平和的なレベルだった。

? 休憩を兼ねて、格闘技専用体育館——通称、闘技場に演武を見に行く。闘技場に足を踏み入れると、見覚えのある人物が二人居た。

「あれっ、達也にエリカ? 一緒だったの?」

「やつほー。理澄くんじゃない。そうなのよ、一人でウロウロするのって、なんか味気なくない?」

「その割には、待ち合わせ場所から随分離れたところに居たけどな」

「あつ、やつぱ達也くん根に持ってたのね!」

? エリカの声はとてもよく通る。その為か、周囲の人間が迷惑そうにこちらを見ていた。本人もそれに気づいたのか、誤魔化し笑いを浮かべた。

「……静かにした方が良さそうだね」

「そうみたい」

? 僕の呟きに、エリカは小さな声で同意した。

? 剣道部の演武は、思ったより迫力のあるものだった。魔法を使わない為に剣術に比べ、インパクトに欠けるのではと考えていたが、それは誤解だったようだ。

「すごいな……」

? 思わず感嘆の声をあげてしまう。それ程に、剣道部の——その中でも一人の女子部員の演武は見事なものだった。

? 男子部員との体格差を感じさせない身のこなし。攻撃の受け流し方も、しなやかだ。正直、あまり期待をしていなかったけれども、見て良かったと思えた。

? しかし、横で同じものを見ていた筈のエリカは不満げな顔だ。

「……こんなの試合なんかじゃないわよ。立ち回りも派手だし、これじゃあ殺陣だよ」

？剣に対する思い入れの違いか、僕とは正反対の意見を述べている。

「勧誘の為のデモンストレーションだからな。仕方ないだろう。……まあ、そろそろ帰るか」

？憤っているエリカを達也が宥める。そもそも、僕も達也も業務中であり、のんびりしている場合では無い。だが、職務怠慢の誹りを受けることは多分、無いだろう。何故なら、今からこの体育館で事件が起こるからである。

？出入り口まで戻ったところで、異変は起こった。先程まで雑然としていた集団が、だんだんと一つの場所に集まっていくのである。僕達は顔を見合わせて、野次馬達の中に飛び込んだ。

？人を押し退けて進み、何とか見える所まで辿り着く。ここでは、先程演武を披露していた女子部員——壬生紗耶香が、竹刀を手にした男子生徒と対峙していた。

？二人は竹刀の剣先を向け合ったまま、言い争っている。内容はと言えば、剣道部員に暴力を振るったとか、振るっていないとかそのよ
うなことだ。男子生徒にしてみれば——原作通り、剣術部の桐原武明
だ——ふざけ半分のように、壬生先輩の抗議も聞き入れるつもりは無
さそうだ。

？口論を眺めながら、楽しそうな口ぶりでエリカが呟く。

「面白くなってきたわね。さっきの茶番より、ずっと面白そうな対戦
だわ、こりゃ」

「あの二人を知っているのか？」

？達也とエリカが当事者達の噂をするのを尻目に、僕は胸ポケット
に入れていたビデオレコーダーのスイッチを入れる。これからの成
り行きを考えれば妥当だし、せっかくなので使わないと勿体ない。

「そろそろ始まりそうね」

？エリカの予想通り、彼らは言葉での争いで終わらず、実力行使に
出た。

？魔法を使わず、剣のみの戦い。これはやはり、壬生先輩に分があ
る。桐原先輩も剣技が下手な訳ではないのだが、顔を狙うのは極力避
けるようで、動きが制限されている。これでは、勝つのは難しいだ
ろう。

？すぐに勝負はついた。壬生先輩が勝利を宣言する。

「……真剣なら致命傷よ。あたしの方は骨に届いていない。素直に負
けを認めなさい」

？しかし、彼は負けを認めようとはしなかった。笑い声を上げて、
こう言い放つ。

「真剣なら？ 俺の身体は、斬れてないぜ？ 壬生、お前、真剣勝負が
望みか？ だったら……お望み通り、『真剣』で相手をしてやるよ！」

？そう言うやいなや、桐原先輩は右手で自分の左手首を押さえる。
手首に巻いているCADを操作したのだ。

？けれども、魔法は発動しなかった。

「なっ……！」

？答えは簡単。僕が領域干渉をしているからである。

？魔法の作用する領域こそ、僕は四葉内では狭い部類に入るが、一定範囲での干渉力でなら深雪をも上回る。「高周波ブレード」のような刀身だけに干渉力が集中する魔法でも止められるのだ。

「CADを外して床に置いてください。デモンストレーション目的ではない魔法使用は違反ですよ」

？桐原先輩の前に進み出て勧告する。本人は納得できないのか、怖い顔で睨みつけてくる。

「おい！ それなら壬生も同罪だろ！ 何で桐原だけなんだよ！」

？僕の介入により一瞬静かになったギャラリィ達も我に返ったのか、外から野次を飛ばしてきた。外野が好き勝手言いやがって、と少し思ったが、返事は返してやることにした。

「そうですね。魔法を使っていないとはいえ、挑発に乗って喧嘩を買っていますし。壬生先輩、貴女にも後で事情を聞かせてください」

？そう言い終えてから、本部に連絡を入れる。じきに応援も来るだろう。そして、踵を返そうとしている背中に声を投げかける。

「お前も風紀委員だろ。勝手に帰るなよ」



？部活連本部。そこで僕は事件の顛末を話していた。達也とは言え、便乗して違反行為に走る生徒がいなか確認していたので見逃した、という滅茶苦茶な言い訳で帰っていった。要は面倒なので、僕に押し付けたのである。こんな言い分を信じる渡辺先輩も渡辺先輩だ。

？生徒会長に風紀委員長、それに部活連会頭。今日の前にいるのは、錚々たる顔ぶれだ。しかし、僕が怒られている訳ではないので、淡々と報告をする。

「それで、桐原はどうと？」

「最初こそ反抗されましたが、最終的には非を認めておられました」

「ふむ……いいだろう。訴追は、摘発した者の判断に委ねられているのだからな。聞いての通りだ、十文字。風紀委員会としては、今回の事件を懲罰委員会に訴追するつもりはない」

「寛大な決定に感謝する。高周波ブレードなどという殺傷性の高い魔法をあんな場で使おうとしたのだ。怪我人が出ずとも、本来ならば停学処分もやむを得ないところ。それは本人も分かっているだろう。今回のことを教訓とするよう、よく言い聞かせておく」

「頼んだぞ」

？話が流れるように進む。組織間の擦り合わせというより、形式的なものようだ。大体の問題はこうして内々で処理しているのだろう。

？退室の許可を得たので、僕は帰ることにした。

？しかし、そのまま家には帰らない。学校を出てから、付かず離れずの距離で居る護衛を呼び寄せる。

「どうされました？ 理澄様」

「反魔法組織『ブランシユ』のアジトをすぐ探し出せ。あと、駅前に車を回すよう連絡しろ」

「えっ？ その……。一体何事なんです？」

「いいから黙って早くやれ」

「はっ、はいっ！」

？直属の部下ではないので、反応が鈍いのは仕方ない。慌てて仕事に取り掛かる護衛を放置して、僕は駅へと向かった。

？第一高校前駅にはショッピングモール並みとは言わないまでも、かなり多くの店が併設している。勿論、飲食店もいくつか存在する。

？僕は喫茶店に入り、端末を広げて宿題をしながら待つ。しばらくすると、車が到着したというメッセージが届いた。あの護衛は仕事をきちんとこなしてくれたようだ。

？駅前に停められた黒いワゴン車。助手席のドアを開けて乗り込む。運転席には少し呆れ顔の部下が座っていた。

？彼は僕の直属部隊に所属していて、名瀬北斗という。精神干渉系魔法の適性が高く、認識阻害の魔法が得意だ。元々、僕のガーディア

ン有力候補として育成されており、高校入学までは一緒に過ごしていた。結局、ガーディアンになることは無かったものの、彼は一番信を置いてある部下である。

「理澄様。ブランシユを叩き潰すおつもりですか？」

「悪い？」

「いえ、そうではなく。あまりにも急なのでどうされたのかと」

「現時点では、ブランシユは脅威でも何でもない。筋の通らない主義主張をして騒いでる変な団体止まりだ。僕だけが、彼らが第一高校を襲撃するテロリストとなることを知っている。彼の疑問も無理ないことだった。」

「どうもアイツらが学校に食い込んできてるらしくてね。面倒ごとが起る前に片付けてしまおうと思って」

「分かりました。現地に数名待機させてますし、すぐ向かいますよ」
「話が早くて助かるよ」

「？一時間もかからないうちに、ブランシユのアジトである廃工場へ到着した。門の前に降り立つと、近くで気配を殺して待っていた部下達が現れる。」

「北斗、お前だけ付いて来て。他は逃げられたりしないように周りを警戒しておいてくれ」

「？そう命令すると、再び彼らの気配が消える。感覚では捉えられないが、工場の周りに散らばっていつているはずだ。」

「さて、行こうか」

「？CADを操作する。呼び出す起動式は「跳躍」。自分の慣性を小さくすることで数メートル上空へ飛び上がり、閉ざされた門扉の向こうへと降り立った。」

「？工場内は薄暗く、埃っぽい。アジトというのだから、もう少しくらい居住性を高めたほうが良いのではないか。そんなくだらないことを考えながら歩く。」

「君は第一高校の生徒だね？一科生みたいだけど、こんなところに何の用だい？」

「？元は工場の生産ラインが引いてあったのであろう広い空間に、二

十人程の人間が待ち構えていた。屈強な男達が多い中、一人だけヒョロリとした学者然とした男がいた。彼がブランシユのリーダー、司一だ。彼は芝居掛かった口調と共に、両手を大きく広げた。

「名声欲しさにヒーローごっこでもしにきたのかな？ 魔法は万能じゃない。銃に撃たれたりでもしたら死んでしまうのだよ」

「ご親切にどうも。テロリストに撃たれて死ぬようなやわな鍛え方はしてないけどね」

？挑発として、手にしていた端末型CADをこれ見よがしに振ってやる。そうすると、彼の顔は面白いくらいに歪んだ。

「それなら身を以て教えてやろう！ 死という高い授業料を払ってもらうがね！」

？司一が右手を上げて、構成員達へ合図をする。すると、彼らは武器を構えた。それなりには訓練されているようだ。

？魔法を使用すると同時に、銃弾が一斉に僕に向けて撃ち込まれる。

？しかし、一発も僕には当たらない。

？加速・移動・加重の複合術式「ディレクション・リバース」によって、銃弾が逆向きに戻っていったのだ。慣性を大きくして、スピードも速くしているので、元より威力を増して戻っていく。

？四葉の戦闘訓練で対魔法師用のハイパワーライフル相手に使っていた魔法だ。チャチな銃火器相手に負けることは無い。

？効果を確認せずに、もう一度CADに指を走らせる。銃を無力化したのでは無いからだ。

？単一の加重術式をブランシユの面々が立つ地面に向けて構築。正の向きに大きなGを急にかけられた彼らは、脳に血液が供給できなくなり、意識を失った。

「あっけなかつたな」

「これなら私は居なくても良かったのでは？」

「馬鹿いえ。認識阻害の術式を掛けてたくせに。そうじゃなかったら、今頃大騒ぎになってるぞ」

？原作で達也があれだけ暴れても噂程度に済んでいたのは、十文字

の力が大きい。

？僕も家に手を回せば黙らせられるが、せつかくこつそりしているのに「ウチがやったから」と名乗り出ては意味がない。だからこそ、北斗と一緒に連れて来たのだ。そうでなければ、一人でここに来ていた。

「ゴイツらは拘束して、本家に持って行かせて」

「かしこまりました」

？四葉本家では洗脳した使い捨ての魔法師集団を組織している。普段はそんなもの必要ないのだが、数が必要な時に備えて用意しているのだ。せつかくなので、彼らもその中に入れてやろう。そこまで強い魔法師ではないが、使えないことはないはずだ。

？こんなことになるのも、舐めプなんかするからである。大方、銃に囲まれて僕が怖気付いたところで、洗脳する算段だったのだろう。もし、アンティナイトを最初から使おうとしていたら、「ワルキューレ」で皆殺しにするしかなかった。満足に魔法を使えなくなる状況で、加減してやる程に僕は甘くない。



？現場の後始末を終えて、僕はようやく家へと戻った。とても空腹だったが、食事を食べる前にやらなければならないことがあった。

？四葉への秘匿回線を開けて、動画電話を繋ぐ。ロードするまでの数秒間、無意識に唾を飲み込む。「あの人」と話す時はいつも怖い。

「久しぶりね、理澄さん」

「お久しぶりです。急にお時間を取らせて頂いてしまい、申し訳ありません」

？ただでさえ意識して伸ばしているはずの背筋が、更に伸びようとする。画面越しに向かい合っている相手を考えれば、それは無理ないことだった。

？四葉家当主、四葉真夜。

？見た目だけなら、黒いドレスに身を包んだ妙齡の美女だ。しか

し、僕は彼女を前にして、少しも油断することはなかった。

？ 転生者というアドバンテージも、強力な精神干渉魔法を持っていることも、この世界で安心して生きていけるという確信には繋がらなかった。

？ 達也や深雪のことだって、本当は怖くない訳がないのだ。

？ 生きていた痕跡を何も残すことが出来ないで、この世から消滅させられてしまうかもしれない。

？ 精神を止められてしまうかもしれない。

？ けれども、彼らは理由もなく人を殺すことはしない。彼らが人を殺す時はいつだって、自分達の為だ。だから、信頼できる。

？ だが、この人は——四葉真夜は違う。

？ 正常な人間ではない。端的に言えば、狂っている。実際に会えばよく分かる。設定だけでは分からない、十二歳で時間が止まってしまった彼女の闇が。

？ 誰にも助けることができない。当たり前だ。「過去の事は忘れて前に進もう」だなんて言えるものか。そんなもの、何も知らない馬鹿しか言えない台詞だ。

？ 四葉一族は復讐に走るという選択で、彼女の心を救おうとした。しかし、それでも足りなかった。現に彼女は、今でも世界が灼き尽くされて焦土と化する幻想を夢見ている。

「ふふふ、畏まらなくていいのよ。分家の子供達はみんな私の子供のようなものだから」

「はい、ありがとうございます」

？ 礼の言葉と共に、軽く頭を下げる。リップサービスを額面通りに受け取れる程、僕と御当主様の距離は近くない。

「そういえば……。反魔法組織『ブランシュ』を壊滅させたそうだけど。私、そんな命令を出したかしら」

？ わざとらしく首を傾げて、御当主様は僕に言った。

？ 僕は貼り付けた笑みで動揺を隠し、帰りの車で何度も反復した言い訳を話す。いつまでも、怖い怖いと言っていられないからだ。

「今回の件は緊急性があると判断し、独断で行いました。事後報告に

なったことをお許しください」

「緊急？ あんなお遊びみたいな集団にリソースを割く必要があったの？」

「彼らの手は第一高校へと伸びていて、いつ襲撃があってもおかしくありませんでした。そうなれば、達也は動くでしょう。既に彼の異常性に七草などは気付き始めています。その前に片付ける必要はあったかと」

「深雪さんの兄だからという訳ではないの？」

「そうでないのは、御当主様。貴女が一番ご存知の筈です」

？御当主様の目がすつと細められる。僕は慌てて取り繕うでも無く、黙ったままでいた。

「……まあ、いいでしょう。手土産も貰ったことですし。ブランシユ自体には価値がありませんが、バックアップしている黒幕がいるでしょうしね」

？多分、本気で僕の行動を咎めるつもりは無かった筈だ。ブランシユを潰した件は、得も無いが損も無い。

「寛大な御処置、感謝致します」

「いいのよ。……ところで理澄さん。高校生になってから一人暮らしをしているけれど、困ったことは無い？」

「ご心配には及びません。H A Rのおかげで家事には困りませんから」

？急な話題転換に対して、脳内で警鐘が鳴る。何か分からないが、嫌な予感がする。

「そうは言っても、実家と違って細かいところは行き渡らないでしょうから、何かと不便でしょう。それで、貴方をお願いがあるの」

「お願い、ですか……？」

「ええ。貴方の下でメイドとして使って欲しい子がいるの。『桜シリーズ』なのだけど、少し魔法が特殊で。ガーディアン向きとは言えないのよ」

？調整体魔法師「桜シリーズ」は日本政府主導で開発された調整体である。ノウハウを政府から譲り受け、現在は四葉家が開発を続けて

いる。強固な対物耐熱障壁を生成する能力を強化されているのが特徴だ。

?しかし、遺伝子操作は毎回上手くいくとは限らない。当たり前だが、失敗作も生まれる。勿論、生まれてきた者に罪は無い。上手く使い方を考えるのは雇い主だ。僕につけることで、生きる術を与えられるなら拒むことは出来ない——何か別の企みがあったとしても。

「貴方のお母様も慣れない一人暮らしを心配していたのよ。メイドを付けたら少しは安心するんじゃないかしら」

?母の話を出すということは、根回し済みなのだろう。お願いという形を取っていても、これはもう決定事項だ。尚更、断れない。

?向こうも分かっているようで、画面に映る人物が急に替わる。御当主様御付きの執事である葉山さんだ。彼は四葉の使用人達を統括する執事長である。代表してメイドのこれからのことを頼むのは当然といえた。

?通信を終えて、僕はやっと一息ついた。

?今回僕がやったことは、原作ブレイクに他ならない。しかし、今生きる世界は原作の内容だけで成り立っているのではない。

?沖縄戦も起こったし、入学後のイベントも概ね見覚えのあるものだった。でも、それは一部分であり、描写されていない出来事の方が沢山起こる。

?これは密かな決意表明なのだ。「魔法科高校の劣等生」という物語から脱却する、という決意表明。僕は僕自身で物語を紡いでいかなければならない。「武倉理澄」を主人公とする、新しいストーリーを。

?そろそろ食事にしようかと、調理機の置いているキッチンへと向かおうとした。その時、来客を知らせるチャイムが鳴った。こんな時間に関係ない誰なのか。住んでいる場所はマンションなので、妙な客人は入り口で弾かれるはずなのだが。

?訝しみながらも、モニターを確認する。どうも、女性のようだった。

「えっと、どちら様?」

「これから理澄様の下で、お世話になる予定のメイドです」

? 随分とタイミングが良い。ずっとここで待機していたのだろうか。

? 一応襲撃に警戒し、ベクトル反転の魔法式を演算領域に待機させてから、ドアを開ける。

? そこには、黒い襟付きのワンピースを着た少女が立っていた。髪をツインテールにしており、幼い印象を受ける。中学生なのか高校生なのかは判断が付かない。

「桜宮菜子と申します。よろしくお願い致しますね。理澄様」

? 彼女は本家で仕込まれたのであろう、丁寧な一礼をしてから、にっこりと笑った。

?

? 四葉本家の当主私室では、遅めのティータイムが行われていた。葉山が真夜の前にカップとソーサーを置く。ポットから紅茶が注がれ、白い湯気が立ち上った。

「そういえば、理澄様の下にメイドを送り込んだ理由をまだ聞かされておりませんか」

「そうだったかしら。聞きたい?」

「よろしければ」

? 真夜はカップを手に取り、口元に運ぶ。目を瞑って香りを楽しみ、元の場所に戻す。まだ熱かったのかも知れない。

「理澄さんの魔法技能はかなり優秀だわ。次期当主が魔法力だけで選ばれるとしたら、深雪さんと迷ってしまうでしょうね」

? 質問の答えにはなっていないが、葉山は口を挟むことなく黙って聞いている。

「でも、そういう訳にもいかないのが実情。パワーバランスを考えないといけませんから」

「理澄様が次期当主になれば、後ろに付いている黒羽や新発田が本家のやり方に口出しする可能性があります。それは危険かと」

? 分家制度の役割には戦力を分散する意味もあるが、それだけではない。本家の当主に権力を集中させて、一族での争いを避ける目的もあるのだ。分家当主の意見が全員一致していても、本家当主の意見が優先されるといふ原則が崩れてしまえば、いずれ四葉は瓦解してしまう。それだけは避けねばならなかった。

「貢さん達は、達也さんのことを殺そうとしているものね。理澄さんにその気が無くても、無理やりにもやらせる筈。けど、きつと死んでしまうもの。そんなことになったら、可哀想だわ」

? 誰が、とは言わなかった。言わなくても、ここに居る二人には死ぬのはどちらか分かっているからだ。

「でも、理澄さんはとても怖がりな子よ。自分の力を完全に信用しきれていない。そんな子が菜子さんの能力を知ったら、とても怯えるで

しよう。唯一、信じられる魔法に対してもね」

「恐怖で『ワルキューレ』を封じようということですか……。流石ですな、奥様。お見それ致しました」

？葉山の言葉に、真夜はサデイスティックな笑みを浮かべた。そして、ちようどいい温度になった紅茶を飲み干した。



？玄関で話し込む訳にもいかず、新しくやってきたメイド——桜宮菜子を部屋に招き入れる。だが、勧めたソファには座ろうとはしなかった。キッチンをちらりと見て、彼女はこう言った。

「お食事はもうお済みですか？　まだなのでしたら、お作り致しますけれども」

「今から食べるつもりだったんだけど……」
「すぐにぐ用意します！」

？菜子はキッチンへと駆け込んで行く。取り残された僕はソファに座って、彼女のデータを照会することにした。

？驚くべきことに、彼女は18歳であった。僕よりも年上だ。見かけというのも当てにならない。

？調整体魔法師というのは、特定の遺伝子操作を受けた受精卵から作られる。開発の段階では種類ごとに番号をつけられているのだが、生まれてからも番号で呼ぶことはまずない。何を今更とは思うけれども、倫理的にもよろしくないのである。

？そのために、苗字によって区別される。「桜シリーズ」であれば、桜井とか桜崎とかだ。彼女の苗字が桜宮ということは、原作キャラ達とは異なる受精卵から生まれたのだろうと推測できる。

？しかし、彼女は障壁魔法を使えない代わりに、特殊な魔法を持っているらしい。一体、どのような魔法なのか。特殊な魔法、とわざわざいうくらいなのだ。桜崎奈穂のように小さな障壁しか張ることができないというのは、また違うような気がする。

? しばらく待つっていると、キッチンから料理を載せたトレイを持って、菜子が戻ってきた。この家に来たときには付けていなかったエプロンを付けている。圧縮して、ポケットにでも入れていたのかもしれない。

「お待たせしました。お食事にしましょうか」

? メニューはエビグラタンだった。元々、僕が調理機にリザーブしておいたものであり、それをそのまま使ったのだろう。とはいえ、上に乗ったチーズの焦げが綺麗に付いているし、パセリも乗っている。デフォルトではなく、細かく調整をしたという証拠だ。カスタマイズ機能で上手く作ることができるというのは、高い家事スキルを示している。

? だが、彼女はあまり満足はしていないようで、「次は手作りにしますから!」と意気込んでいた。どちらでも良かったが、人の領分に口を出す気にもなれず、適当に頷いた。

? 味は予想以上に美味しかった。機械も使う人間によるということだ。

「そういやさ……」

「はい、何でしょうか?」

? 食事を終えたのち、僕は気になっていたことを尋ねた。彼女の魔法についてである。

「御当主様が菜子の魔法は特殊だと言っていたんだけど。どんな魔法なの?」

「あつ、それならお見せしますよ。何か私に向けて魔法を打って貰えますか?」

? 随分と軽いノリで菜子は言う。CADを手にしていないあたり、フラッシュ・キャストを組み込まれているのだろう。

? 僕はCADを取り出して、「浮遊」を彼女に掛けようとした。

「うそっ! なんぞ!」

? それなのに、浮き上がったのは僕だった。変数の入力は間違えていなかった筈なのに。

「……一体、どうなってるの？」

「私の作る障壁は魔法式を跳ね返しちゃうんです。『略奪』と便宜的に名付けられたんですけれど」

？現代魔法において、他人の魔法は引き継げない。けれども、彼女は魔法の座標だけ変えてそのまま返している。魔法式にエイドスは存在せず、魔法式そのものを改変できない。例外は、達也のグラム・デイスバージョン「術式解散」などだが、それも魔法式の構造が理解できて初めて出来ることだ。

？しかし、彼女はそれを「跳ね返る」という現象で解決させてしまうのだ。どちらかといえば、魔法の原型である超能力に近い。調整体からBS魔法師のような魔法師が生まれるというのは、なかなか面白い。

「でも、この魔法しか使えない上に、結構制約もあって……。私自身にかけられた魔法でないと防御できないんです」

「その感じだと、広域干渉系の魔法も駄目そうだね」

？事象改変された後に防ぐことができないというのは、確かに致命的な欠点だ。ガーディアン向きでないというのもこの理由だろう。実際の戦闘より、モノリス・コードなどの競技向きの能力だ。ルールで制約されていて、やっと役に立つ。護衛どころか、暗殺にも使いにくい。

？本当にメイドとしての役割だけで送られてきたのか、と納得しかけたところで、ふと一つの考えが浮かんできた。

「……もしかして、魔法式つてことは精神干渉魔法も返せる？」

「はい。すべての魔法を試した訳じゃないんですけど」

？ゾツとした。もし彼女が敵だったとして、僕が初手で「ワルキューレ」を使っていたとしたら。跳ね返されて、命を落としていた。領域干渉で防いではまえば大丈夫だが、それは今だから分かることだ。

？ようやく、御当主様の狙いが分かった。これは脅しだったのだ。達也を殺せる僕への、脅し。

？だけど、屈する訳にはいかない。この世界で、僕は生きていくと

覚悟を決めているのだから。



? 一人暮らしは上手くやれていると思っていたが、菜子が来たことで生活レベルが格段に向上したのは確かだった。

? やけに苛ついて仕方ない覚醒を促す音を含んだアラームを起床時に使う必要もない。それに、食事を自分で用意する手間も減った。

? とはいえ、その変化は家庭内のことで、学校生活が劇的に変わることはない。新入部員勧誘期間も無事に過ぎ去り、一応校内も平和になった。

? 風紀委員の仕事も巡回の回数は減った。しかし、資料の作成などで忙しかった——一年生が。? 誰もしないので、自動的に下っ端の仕事になっているのだ。そのため、放課後には僕と達也、森崎で仕事をしている。

? 森崎はやはり達也のことが嫌いなようで、碌に話しかけもしない。煽るのをやめただけ良いのだろうか。

? 僕に話しかけるのはまだマシならしく、同じ部屋にいるのに、僕経由で森崎は達也への用事を済ませる。やめてほしい。

「先日、剣道部にスカウトされたんだ。……いや、正確に言えば少し違うか。」

? 無言の室内で、急に達也が話し始めた。沈黙に耐えかねたというのは、絶対にあり得ない。何らかの理由で話しておきたいと思ったのだろうか。

「違う? どういうこと?」

? そう問いかけながらも、状況は大体把握できていた。「平等」を掲げて、自分に都合のいい主張を押し通そうとする団体ができようとしているということだ。ブランシユこそ壊滅したが、その教義に染まった者はたくさん残っている。そもそも、人間というのは否定されると逆にムキになる生き物だ。

?自分たちが正しいから、不都合に思う奴らが迫害してくる。そう信じ込んで、泥沼に嵌っていく。

「非魔法系のクラブが連帯して連合を作るらしい。学校に意見書を出すそうさ。その為に剣道部に入って欲しいとか言っていたな……。勿論、断ったが」

「へえ……。それはまた。何でそんなことするんだろ。予算が欲しいの?」

「それもあるが、魔法を上手く使えないというだけで、人間性そのものまで否定される風潮が許せないんだそうさ」

「おーおー。どう、森崎? めっちゃお前嫌われてるぞ」

「何で俺に言うんだ」

?森崎が心底嫌そうな顔をする。

「いや、だってコイツらが言ってるのって森崎みたいなことじゃん」

「才能の有無で待遇が違うのは、魔法師の世界ではよくあることだろう。ここだけのことじゃない」

「まあ、それは正しいよね」

?差別される方はたまったものではないが、彼の言い分も間違っている訳ではない。

?魔法師は兵器だ。実戦の役に立たない魔法師は切り捨てられる。戦いの前では、元より人間性など尊重されない。戦わなければ生き残れない、を地で行く世の中だ。

「そもそも、魔法の能力はほぼ血で決まる。文句があるなら十師族にでも言え」

「だから、言おうとしてるらしいんだって」

「どうかしてるんじゃないのか?」

?呆れたように森崎は言う。彼は百家の傍流で、いわゆる「血統コンプレックス」。数字付きナンバーズに対して、並々ならぬ劣等感を抱いている。

?きつと、入学当初に深雪に執着したのも、彼女が十師族直系と知らないからだ。可憐で美しく才能もある少女を、彼なりに崇拜したかったのかもしれない。達也やE組のメンバーによって、それは閉ざ

されたけれども。

？この学年には十師族も師補十八家も居ないことになっているが、本当は居る。四葉とか四葉とか四葉とか。この事実を知ったら、森崎は泣いてしまうのではないだろうか。

「とにかく、この件は生徒会にも報告してある。これから何か事件が起こるかもしれない。そんな厄介ごとは勘弁だが」

？達也がこの話をした理由について、何となく予想がついた。深雪に危害を加えられそうな出来事があったら、好きに暴れるぞという警告なのだ。僕と達也は風紀委員会本部でしか、殆ど顔を合わせない。言うタイミングがここしか無かったのだろう。

？どいつもこいつも、言外に僕へ色んなことを言ってくる。しがない転生者には、荷が重すぎることばかりだ。

？数日後、一日の最終授業が終わったあとのことだった。

『全校生徒の皆さん！』

？耳にダメージが入りそうなくらいの、大音量の音声スピーカーから飛び出した。僕は思わず顔をしかめずにはいられなかった。

「何、急に？」

「うるさいな。何なんだ」

「故障か？」

？帰り支度の手を止めたクラスの生徒が、口々に話し始める。

『――失礼しました。全校生徒の皆さん！』

？少しバツが悪そうな風で、もう一度同じ台詞が流れた。

『僕達は、学内の差別撤廃を目指す有志同盟です。僕達は生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します』

？そこまで聞いたところで、僕は放送室へと向かう。どうせ召集されるのだ。さっさと行った方が良い。

？放送室前には、既に風紀委員と部活連のメンバーが何人か揃っていた。「おはようございます」と風紀委員会特有の挨拶をして、彼らの輪に入る。

？数分後、生徒会からは会計の市原先輩がやってきた。その後もゾ

ロゾロとメンバーが集まり、最後に達也と深雪が現れた。

「鍵が閉まっている。マスターキーを持ち込んだらしい」

「結構用意周到ですね……。では、このまま突入しますか？」

？ 渡辺先輩の呟きに返事を返す。僕が一番近くに立っていたからだ。

「それもやむを得ないかもな。少々強引でも、短時間での解決を図るべきだろう」

「確かにそうかもしれないですね。どちらが優位かは分からせておかないと、もし交渉を受けるにしても話が拗れそうですから」

「それでは、向こうの要求する『対等な交渉』で無くなってしまう。それも問題かと」

？ 市原先輩も口を挟む。その意見も尤もで、取るべき解決策が出てこない。とりあえず、このまま待機する方向で進むだろう。

「大丈夫よ、リンちゃん。ちゃんと方法は考えてあるから」

「会長……！」

？ 現れたのは、七草会長だった。小柄な人だが、こういう時には存在感がある。彼女は達也の前で足を止めた。

「達也くん。壬生さんに電話を掛けてもらえないかしら」

「構いませんが……。何故俺が番号を持っていると知っているんですか？」

「やっぱり持ってたんだ。達也くん、手が早いからね。知ってるんじゃないかと思って」

？ 深雪の様子が明らかにおかしくなったのが、距離があっても分かる。けれども、こんな時に兄へとちよっかいを出したりしない分別はあるようだった。

？ 学校側が「学内の差別撤廃を目指す有志同盟」との交渉を受けるということを、会長の口から言われたことで事態は收拾がついた。

？ ブランシユのフロント団体である「エガリテ」はまだ残っているが、簡単なサークルのようなものであり、テロを起こす力が無いのは調べが付いている。「平等」という甘い言葉に縋る人々は多く残るが、それも仕方のないことだ。

？そういえば、桐原先輩から謝罪を受けた後、壬生先輩は結局彼と付き合うことになったらしい。純粹な愛の力は洗脳をも塗り替えるのか、と精神干渉魔法の使い手としては少しばかり興味を覚えた。

九校戦編

1

「そういえば、そろそろ九校戦の季節ですよね。私、毎年楽しみにしてるんですよ。今年は、理澄様も新人戦で出場されますよね？」

？夕食を食べている時、菜子がそう話を切り出した。わざわざ好んで観るほどに、彼女が九校戦が好きだというのは意外だった。

「まだ選手は決まってないけど、出るんじゃないかな」

「絶対応援しますから！ それで、どの競技に出られるんですか？」

「クラウドか早撃ちじゃない？ 得意魔法が使えるのがそれだからね」

？クラウドはクラウド・ボール。早撃ちはスピード・シューティングだ。原作を読んでいた時は「誰がこんな略称で呼ぶんだよ」と思ったものだが、周りが呼ぶので僕もそう言うようになってしまった。

「理澄様ならどちらも代表になれますよ」

「さあ……。こればかりはね」

？クラウド・ボールは入っている部活が部活なので、出場できるはずだ。しかし、スピード・シューティングの方は出られるか確定していない。でも、一高は枠が三人分あるので大丈夫な気もする。

「まあ、まずは期末のことを考えなきゃね。理論は流石に勉強しておかないと、圏外になっちゃう気がする。それはちよっとマズいし」

？今日は期末試験の一日前だ。必須科目や得意科目の魔法構造学は勉強しているが、魔法史学や魔法言語学などの暗記系は何も覚えていない。このまま試験に臨めば、爆死は確実だ。少しは勉強をせねばならない。

？四葉には脳に直接知識を書き込む機械があるが、この家にはそんなものは無い。知識を詰めるには、自分でやるしか無い。今日は徹夜だろう。

？一週間後、一夜漬けの成果を存分に発揮した期末試験も何とか無事に終了して、結果も学内ネットで公表された。

？今回もトップは深雪だ。それも2位と点差を大きく引き離しての1位。理論は達也が1位、深雪が2位である。

？僕は相変わらず手を抜いていて、実技が3位、理論が19位の総合5位。理論は筆記なので楽だが、実技は調整が難しい。まさか、森崎を超えてしまうとは思わなかった。彼は実技が4位だったのだ。

？風紀委員会で会った時に、「次は負けられないからな！」と宣言されました。僕はライバルと認識されているのだろうか。



？九校戦といえば、気がかりなのは国際犯罪シンジゲートである「ノー・ヘッド・ドラゴン無頭竜」による妨害だ。そんなことになれば、おちおち試合もしていられない。だから、僕は九校戦の始まる前に根回しをすることに決めた。

「理澄様。ご実家の方から、メールが届いております。こちらでお開けしましょうか？」

「ああ。開けてくれる？　そこに映してくればいいから」

？リビングにあるディスプレイにメールを表示させる。差出人は母親からだ。無頭竜ノー・ヘッド・ドラゴンの件について、内情と公安とで密約を交わしたというものだった。つまり、彼らについての情報を流す代わりに、武倉が動くのを握り潰してもらうのだ。

？四葉は秘密主義で有名だ。他の十師族のような、表向きの職業も持たない。潔癖なくらいに、政治などとは距離を置いている。しかし、分家となると話は別だ。本家のやらない仕事を分担して行っている。

？例えば、黒羽家であれば「諜報」が仕事だ。そして、武倉家の仕事は「交渉」である。

？様々な組織の仕事を請け負うことで、コネクションを繋ぎ、本家の利になるものを選別する。閉鎖的な四葉の中で、唯一社交的なのが武倉なのである。無論、武倉が四葉の分家であることが露見しないよう、百家の傍流だと偽装している。故に、僕は勝手に森崎へ親近感を

持っているところがある。

？しかし、社交的と言っても七草ほどではない。子供の誕生日を毎年盛大に祝うなんて、やり過ぎだ。小さい頃ならともかく、思春期くらいになったら恥ずかしくて堪らないだろう。

「許可も出たことだし。……片付けてこようか。菜子、今日はもう夜ご飯の用意はしなくていいよ。どこか好きなどころで、食事をしておいで。欲しいものがあるなら、それも買っていいから」

「宜しいんですか!？」

「たまにはそんな日があつてもいいんだよ。じゃあ、行ってくるから」
？一万円の入ったマネーカードを渡して、僕は家を出る。マンションの前には、母親の用意させた車がもう停まっていた。

？今日は運転手が扉を開けてくれた。前のように目立つような場所ではないからだ。車内にはやはり、北斗が待機していた。僕を迎えに来るのは、いつも彼と決まっているのだ。

「どこが本拠地か調べはついたんだ？」

「横浜グランドホテルのようですね。最上階に一般客に知らされていない部屋があります。そこに東日本支部を構えています」

「黒羽みたいなことやってるな……。いや、あっちが懐古主義なのか」
「あの家は当主様のご趣味も少し……。変わっていらっしやいますので」

？北斗が歯切れの悪い言い方で、黒羽についてそう述べた。僕も割と同感だった。大昔のジュブナイル小説を好んで読むなんて、この時代ではとても珍しい。

「まあ、いいや。ところで、侵入経路は？ 下からだど、想子センサーに引つかかるよね？」

「しばらくしましたら、へりに乗り換える手筈になっております。大型のものが最近、配備されたことはご存知ですかと」
「そうだったね」

？これが黒羽であつたら飛行船を使ったに違いない。そんなことを考える時、僕は武倉で良かったと思えるのだった。

？横浜に入る前にへりに乗り込み、目的地のホテルを目指す。まだ飛行魔法が実現していないので、上空の想子センサーは数が少ない。認識阻害の魔法を使用して、対人間の心配だけしていれば良いのだ。リーダーやカメラなどは、公安や内情が何とかしてくれる。

？闇に紛れて、ホテルの屋上に降り立つ。入り口の鍵を無理矢理壊して、中へ侵入する。階段は途中で上がったたり下がったりするので、高さの感覚が掴みにくい。わざとそうしているのであろうが。

「ここがちょうど隠されているアジトの位置ですね」

？知覚系魔法の使える部下が壁を叩いて言う。この壁の向こうに無頭ノ・ヘッド・ドラゴンの幹部達が揃っているのだろう。

「幹部が五人、ジェネレーターが四人。会合の時間なのは、事前調査通りです」

「ご苦労。壁をぶち抜くのは僕がやるよ。誰か書くもの持ってない？」

「どのくらいの大きさにしましょうか？」

「五、六人が一気に突入できるくらいのサイズで」

？部下がスプレーで壁に枠を描く。これは魔法を認識しやすくする為だ。魔法というのは全体に作用させるのは比較的容易い。しかし、部分的にだと、魔法師自身が上手く作用のイメージが出来ない為に失敗しやすい。

？線で何となく囲んでいても、上手く成功する魔法師は少ない。壁を全部壊したら建物が崩れる可能性もあるので、僕がやることにしたのだ。

？加重魔法「破城槌」によって、圧力を掛けられた枠内の壁は簡単に崩れ去る。ジェネレーターによる障壁は張られていたが、干渉力で押し切ったのだ。

？無頭ノ・ヘッド・ドラゴンの幹部達は中国語で——国名が何度か変わっているものの、そう呼ばれ続けている——何か叫んでいるようだった。早口で何か聞き取れないので、無視してジェネレーターの破壊に取り掛かる。

？四体に照準を合わせて、まとめて「ワルキューレ」を放つ。電池

の切れたオモチャみたいに、彼らは床に転がって動かなくなった。

「ジエネレーターが全滅!」?

「おいおい、アンタ達も魔法師だろう。少しは自分で戦おうとしない」と

?へたり込んでいる一人の幹部を蹴り上げる。残念ながら、領域干渉を広げているので魔法は使えない。これは言ってみただけだ。

「何なんだ! 一体何が目的だ!」

「アンタ達のことを知りたがってる人が居るらしくてね。ちよつとしたおつかいだよ」

「何故だ! 我々はまだ何もっ!」

「うるさいな。もういいよ」

?話すのも面倒なので、意識を失わせた。他の幹部も部下達の手によって、気を失っている。

?いつまでも長居する訳にもいかない。転がしておけば、近くで待機している公安などの人間が回収してくれるだろう。ジエネレーターは僕の魔法で殺してしまったので、僕らが持つて帰らないといけなかったが。でも、慣性を低くして軽くすればいいので、そこまで大変でもない。

?屋上まで戻ってきたところで、ヘリの中から血相を変えた顔の北斗が出てくる。彼は、ヘリコプターの存在と室内での騒ぎを隠すことを担当していた。何かあったのか、と問う前に彼が叫ぶ。

「魔法協会に知覚系魔法持つてる奴が詰めてたんです! そろそろ誤魔化すのも限界です! 早くズラかりますよ!」

「分かった!」

?慌てて全員がヘリに乗り、カタログスペックよりも速い速度で無理に離脱した。もしバレても、四葉から手を回せば揉み消せるが、それは最悪の手。今回の仕事は本家からの任務では無く、武倉家内での仕事だから、尚更だ。

「誰なんだ! 魔法協会のシフトを確認しないで『異常無し』と言った奴は!」

?何とか安全な空域にまで移動した後、北斗は部下に怒鳴り始め

た。普段は高校に通っている僕の代わりに、部隊の指揮を執っているのは彼だからだ。つまり、実質この中のリーダーである。

？今回のことは予想外の事態であり、怒るのも無理はなかった。

「落ち着いてよ。今から犯人探ししても仕方ないだろう？」

「それはそうですが……」

「御当主様からの仕事だったら、処分も致し方無かったかもしれない。でも、そうじゃない。だから、今回のことは不問にする」

？御当主様、という言葉聞いて、ここに居る誰もが顔を強張らせる。四葉に関わりのある誰もが畏怖の念を起さずにはいられない存在、それが「夜の女王」四葉真夜なのだ。



？全校集会での正式な選手発表がある前に、僕は代表選手として出場しなければならぬことを生徒会から伝えられた。

？それを受けて、僕はある場所へ訪れることにした。その場所は、達也と深雪の住む家だ。彼らが内心どう思っているのかは不明だが、表面的には僕を歓迎してくれた。

「珍しいな。ここに来たのは初めてじゃないか？」

「多分そうだと思う」

「そうですよ。ちよつとビックリしましたもの」

？深雪がアイスコーヒーとお菓子を持ってきてくれた。普段から、家の中では露出の高い服を着ているはずだが、そうではなかった。僕が来たので、外出用の服に着替えたのだろう。全員が座ったところで、僕は話し始めた。

「深雪もそうだろうと思うけど、九校戦の代表に選ばれたんだ。それで一つ、アレンジしてほしい魔法がある」

「どうしたんだ？ 理澄が九校戦で本気を出すとは思わなかったぞ？」

「こつちにも色々あって」

？御当主様の脅しへの返答として、出場する競技全てで優勝しよう

と考えたのだ。あの人は下手に出るより、少しくらい反抗した方が氣にいるタイプだ。そこまで圧倒的な力を見せたりする訳でもないし、少々目立つくらいなら大丈夫だ。

「もちろん、仕事の分の報酬はきちんと支払うつもりだ。君の父親と違つてね」

「……それは別に気にする必要はない。それで、何の起動式をアレンジして欲しいんだ？」

『インビジブル・ブリット』
『不可視の弾丸』だ。あれは加重系だからね」

「まあ、別に構わないが」

「あの……。お兄様、少しだけよろしいですか？」

？深雪がおずおずと達也へと、話に入る許可を求める。

「お兄様が報酬を求めないと言うのであれば、私にも異論は無いわ。でも、お兄様の偉業に相応しい評価は得られるべきだと思わない？」

？冷房とはまた違う冷気が室内をうねる。既にアイスコーヒーは凍りつき始めていた。ここで思わないと言えば、どうなるだろうか。生きては帰れる……と思う。けれども、死ぬより恐ろしい目には合うかもしれない。

？元々、深雪は僕のことを嫌っているとまでは言わないまでも、好きではない。僕の方が、達也を傷つける可能性があると思っっているからだ。

？その感情を兄である達也が分からない筈が無く、深雪の魔法が僕の前で暴走する時はいつも、彼は妹を止めることはしない。

「カーディナル・ジョージしか使えない筈の魔法を用意した魔工師について聞かれたら、達也だと答えればいいの？」

？そう言った途端、室内の温度が元へ戻る。

「ええ。分かってくれて嬉しいわ」

「黒羽や新発田の叔父様がうるさいんだけどなあ……。あつ、いや。なんでも無いんです……」

？再び魔法の兆候を感じ、言葉を引っ込める。了承してもそこまで深刻なことにはならないので、これは割り切るしか無いだろう。本当に対立しなければならなかったら、普通に魔法の撃ち合いをするだけ

だが、今はそんな時ではない。

「その魔法を使いたいということはスピード・シューティングか？
てつきりクラウド・ボールだと思っていたが」

「どっちも出るんだ。クラウドは使う魔法も揃えてあるから大丈夫だ
けど、早撃ちはそういう訳にいかなくて」

「分かった、数日で完成させる。メールで送るから、後で受け取って
くれ」

「ありがとう。達也もエンジニアで出るんだろう？ 忙しいのに引き
受けて貰って悪い」

？技術系が得意な生徒が足りないので、前例の無い一年生——しか
も二科生から達也は選ばれることになった。原作とは段々異なっ
てきたものの、やはり出るころでは出て来るものだ。どうやら服部先
輩が達也のチーム入りを支持したらしい。

「耳が早いな」

「部活の先輩から聞いたんだ」

？達也がエンジニアとして脚光を浴びるリスクは、目を瞑るしか無
い。そもそも、僕も片棒を担いでもった。モノリス・コードに出場
したり、一条将輝を倒したりされるよりは幾分かマシになったのだけ
ら、この辺で妥協するしかあるまい。

？数日後、僕用にアレンジされた「不可視の弾丸」インビジブル・ブリットの魔法式が送ら
れてきた。

？開会式前には出場する生徒だけで行われるパーティーがある。そうはいっても、本格的なものではない。名のある魔法師の家に生まれていれば、パーティーに参加する機会も多いだろうが、大多数は普通の生徒。彼らが気後れしないようにという配慮もあり、簡単な立食パーティーだ。

？会場の雰囲気は和やかとは言い難い。これから九校戦が始まるということもあり、上級生などは宣戦布告などをお互いに行っている。だが、僕は一年生だし、ましてや他校にマークされている訳でもない。気楽に食事をするだけで良かった。

「お客様、お飲み物は如何ですか？」

「ああ。貰おうか……って、あれ？もしかして、エリカ？」

「久しぶりだね。私、ここでバイトしてるの。どう、似合う？」

？彼女は片手で飲み物を載せた盆を持ったまま、その場で一回転する。クラシカルなスカートがひらりと舞う。グラスを落したりしない辺り、かなりのバランス感覚だ。

「とても似合ってるよ。長めのスカートなのも新鮮だ」

「そんな真正面から褒められたら、流石に照れるわね。……それにしても、理澄くん意外にパーティー慣れしてる？」

「えっ、どうしてそう思うの？」

「さっきから飲み物を渡してて思うんだけどさ、普通の家の人はグラス貰うの一つ恐縮してるのよ。理澄くんは、そうじゃなかったでしょ？」

？さて、どうすれば良いのか。こういう時は、少し真実を混ぜて嘘を言うのがベストだ。

「僕は百家の傍流だから。本家筋のパーティーとかに偶に参加している。それで、他の人よりは慣れているんだと思う。あんまり、自覚は無かったけど」

「そっか。確かに代表に出れるレベルの一科生だもの。どこかで百家と繋がっててもおかしくはないよね」

? ウンウンと納得したように頷くと、彼女は去っていった。上手くいったようだ、と僕は安堵した。

?そこに、背後から声が掛かった。振り向くと、同じクラス的女子である、英美ⅡアメリカⅡ明智Ⅱゴールドエイが立っていた。

「武倉君が女子と気安く喋っているところ、初めて見たかも。必要以上にと話してないイメージがあるから」

「そんなつもりは無いんだけどね」

「ほんと? そんな風に思えないんだけどなあ。ていうか、私の名前覚えてるかも怪しいよ」

「覚えているよ。エイミイだろ? あれだけクラスで主張していたら忘れられないよ」

? 僕の言葉に、英美は目を丸くした。思いもよらない返答だったらしい。

「武倉くん、思ったよりフランクな人だね。話しかけても、素気無い対応される気がしたけど、そんなことなかったし」

「そんな嫌な感じのイメージ持たれてたの、僕? ちよつとショックなんだけど……」

「でも、なんか武倉くんのこと分かってきたかも。人見知りでしょ?

話しかけられないと喋れない系の」

「言われてみると……。そうかもしれない」

? 昔から一人で居る方が好きなタイプだった。四葉に生まれてからは、誰かがいつも構ってくれる環境で育ったのもある。友達を作る為に話しかけるといふ経験値は、圧倒的に不足していた。

「やっぱり! 同じ屋根の下で過ごして分かることってあるよねー」

「ちよつとそれは誤解を生む言い方だよ! それに、まだ一日も経って無いのに!」

「あれ? どんな誤解が生まれちゃうのかな?」

? 英美のセリフにどうしたら良いか分からなくなり、目を白黒させる。その姿が面白かったのか、彼女は声を上げて笑った。

「せっかくだから理澄くん、私達の所においでよ?」

? いつの間にか、武倉くんから理澄くんと呼び方が変わっているこ

とに気づいた。嫌ではないので、指摘はしなかった。

？ 私達の所、というのは女子代表が集まっている場所のことだろう。一人の相手でこんなに変なものに、女子ばかりのところ集まれば、いいように遊ばれるのは目に見えている。だが、断るのは難しい状況に置かれているのも確かだ。戸惑っている僕に痺れを切らしたのか、英美はいきなり僕の手を掴んだ。

「あーもう！ 拒否権は無いからね！ 女の子に誘わせて、断るなんてありえないのよ！」

？ グラスを持っていない方の手を引かれ、女子の集団の方へと連れて行かれる。誘いなのに拒否権が無いとはどういうことだ。

？ けれども、よく考えてみれば、ここで英美と少しでも話しておけたのは良かった気がする。閉会式後のダンスパーティーに誘いやすくなるからだ。流石に、誰も相手がいないまま終わるのは悲しすぎる。

？ この後、僕が深雪と顔見知りであることがバレて、女子達からの質問責めで疲れ果てることになった。

？ そろそろ来賓の挨拶が始まる時間になり、僕もようやく女子のおしゃべりから解放された。

？ 魔法界の名士達が代わる代わる壇上へ現れる。顔を合わせたことのある人物も、映像でしか見たことのない人物も出てきた。

？ その中でも、僕が登場を心待ちにしている人物の一人に、九島烈が居る。「老師」と呼ばれる十師族の長老である。十師族を確立した人物で、約二十年前までは「世界最強の魔法師」と言われていた。

？ 現役を退いて人前にあまり出なくなった今でも、九校戦にだけは出てくることで有名だ。「最高」にして「最巧」と謳われているのは知っているが、所詮は噂や原作知識。凄さを目の当たりにする良い機会なので、楽しみにしていたのだ。

？ 司会者が九島烈を紹介した。会場にいる誰もが、息を呑む。しかし、現れたのは違う人物だった。パーティードレスを身に纏った金髪の女性。

？目立つものに意識を奪わせる、単純な視線誘導の精神干渉魔法。使われるのは分かっていた筈なのに、行使されたタイミングを知ることとは出来なかった。女性の後ろを見てやろうか、と一瞬思ったが、それは止めておく。

？急に九島烈は現れた、ように見える。実際には女性が横に退いたのだ。会場の多くの人間達が驚き、声を上げる。ざわめきがそれなりに収まってから、彼は話し始めた。

「まずは、悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する」

？思ったよりも、若々しい声だった。見た目からは全く想像もつかない。

「今のは一寸した余興。魔法というより手品の類だ。だが、手品のタネに気付いた者は、私の見たところ五人だけだった。……つまり」

？九島烈はそこで一度、言葉を切る。

「もし、私が君たちの塵殺を目論むテロリストで、来賓に紛れて毒ガスなり爆弾なりを仕掛けたとしたら。それを阻むべく行動を起こすことが出来たのは五人だけだ、ということだ」

？会場が一気にシン、と静まった。

？仮にそんな状況になったら、僕はどうするだろう。毒ガスは出所が分かっていたら、収束系統で何とかなる。爆弾は振動減速で熱量を下げることで解決できる。そう思うと、何だか気が楽になった。

「魔法を学ぶ若人諸君。魔法とは手段であって、それ自体が目的ではない。そのことを思い出して欲しくて、私はこのような悪戯を仕掛けた。私が今用いた魔法は、規模こそ大きいものの、強度は極めて低い。魔法力の面から見れば、低ランクの魔法でしかない」

？間違っではないが、正しくもなかった。精神干渉魔法は誰にでも使えるものではない。第四研にルーツを持つ四葉の魔法師でも、全員は使えないのだから。低ランクの魔法では決して無いのだ。

「だが、君たちはその弱い魔法に惑わされ、私がこの場に現れると分かっていたにも関わらず、私を認識できなかった。魔法を磨くことはもちろん大切だ。魔法力を向上させる為の努力は、決して怠ってはならない。しかし、それだけでは不十分だということを肝に銘じて欲し

い。使い方を誤った大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣るのだ」
？十師族の序列を自分で作っておきながら、現在の魔法師のあり方を否定したような発言をする九島烈。酷く無責任な発言だ。でも、彼の魔法に気づけなかった僕に、とやかく言う資格は無いのだろう。

？九島烈は、今の僕には倒せない。搦め手を使われれば、「ワルキューレ」でも歯が立たないだろう。世界は広く、優れた魔法師もまだまだいるのだと、改めて認識した。

「明後日からの九校戦は、魔法を競う場であり、それ以上に、魔法の使い方を競う場だということ覚えておいてもらいたい。魔法を学ぶ若人諸君。私は諸君の工夫を楽しみにしている」

？演説が終わり、まばらな拍手が起きる。少なかったのは、この話にどう応えればいいのか分からない者達もいたからだろう。それでも、だんだん拍手が起きて、最後には全員が手を叩いていた。

？急に、九島烈と目が合う。一瞬だったが、こちらを見て少し笑っていた。分家のことを知っていてもおかしくはないが、僕も知られているとは思わなかった。

？流石は「老師」である。悔りがたく、喰えない老人だ。



？懇親会も終わり、生徒達が部屋に引き上げた後のことだった。

？外の空気を吸いたい気分になって、僕は夜の散歩に出掛けた。万一のことを考えて、CADを持ち歩いてはいる。襲撃者がいたとしても、こんなところでは下手に殺せないのが厄介だが、それは仕方ない。

？ホテルの庭をのんびりと歩いていると、人の気配を感じた。それはあちらも同じだったようで、「誰だ！」という鋭い声が飛んできた。逃げるのもおかしいので、僕は相手の前に姿を現した。

「修行中だったのか。悪いことをしたな」

「いや……。誰もいないからって、結界を張っていなかった僕も悪かった」

「ここはお互い様ということで。ところで、君は？　僕はB組の武倉理澄だ」

「……僕は吉田幹比古。名前で呼んでくれ。苗字で呼ばれるのは好きじゃない」

「ああ、理論が三位だった……」

？名乗られる前から、僕は彼のことをよく知っている。入学前の魔法事故で魔法力を失った、と世間からは認識されている元神童。達也と一緒にモノリス・コードに代理出場したことで、自信と能力を取り戻すことになる男だ。

？残念ながら、そのイベントの布石となるモノリスの事故は起きない。僕が無頭竜を潰してしまったからだ。「破城槌」は得意魔法なので、事故を再現出来なくはないが、そんなことはやらない。何もしていないのに大怪我をした挙句、棄権まですることになったら、森崎が可哀想だ。

「実技三位の君に比べれば大したことは無いよ」

「卑下することは無いと思うけど。取ろうと思つて取れる点数じゃない。かなりの努力を必要とした筈だ」

「実力主義のこの学校では意味を為さないさ。……魔法の高速発動が出来なくなった僕には、何も残っていないんだ」

「……何かあったのか？」

？生垣のレンガ部分に腰を下ろして、幹比古はポツポツと話し始めた。僕は完全な他人なので、彼も話す気になったのかもしれない。

？内容は原作でも言及された「星降しの儀」についてだった。

「これは罰なのかもしれない……。自分の力を誇示しようとした、僕の醜い心を精霊も見抜いていたんだ」

？現代魔法学においては、精霊は単なる情報体でしかない。意思を持つことも無ければ、心を読み取ることもできない存在だ。その感覚には非常に懐疑的だが、古式の術者と議論をしたい訳ではない。だから、僕は違う言葉を掛けた。

「自分の力を見せつけることは悪いことではないよ。そもそも、その儀式もそういう性質を持つものだろうか？　精霊が君を否定する訳が

ない」

「そうだといいけど……」

「多分、魔法力を失ってしまったのではないんじゃないかな。巨大な情報体によって、魔法演算領域を限界以上に動かされた弊害だろう。これなら十分、治る余地はあると思うよ」

「？原作知識を、さも自分が考えついたかのように披露する。幹比古が自分の力を取り戻せなくなったとしたら、それは僕のせいになる。申し訳ないので、手助けくらいはしてやりたかった。」

「治る!? 僕は魔法を取り戻せる……?」

「きつとね。良い腕の魔工師にCADの調整をしてもらって、スピードの感覚を掴み直せれば。そこから先は精神的な問題だ」

「CADの調整かあ……。かなり勉強はしたはずんだけど、そこは盲点だった。やはり、古式魔法は現代魔法に劣るのか……」

「そんなことは無いと思うぞ」

「達也? いつから居たの?」

「? 闇の向こうから、急に達也が現れた。僕達の話の影で聞いていたのか、話へと自然に混ざってくる。」

「古式魔法と現代魔法に、優劣は無い。それぞれに長所と短所がある。単に正面からぶつかり合えば、発動速度が圧倒的に勝っている現代魔法に分があるというだけで、知覚外からの奇襲ならば古式魔法の威力と隠密性に軍配が上がるだろう」

「古式の術には、弱点を突かれないうよう、偽装を施してある。CADで発動するときは、それが無駄となつて発動スピードに関係してくるのか」

「? 幹比古が顔を綻ばせる。一人で抱え込んでいた問題に解決策が見えてきて、安心したのだろう。」

「そうだ、達也。幹比古のCADを見てやつてくれないか?」

「俺がか?」

「術式のアレンジは得意だろ? 新人戦で使う僕の魔法もアレンジしてくれたんだから」

「それはそうだが、古式の魔法は得てして秘匿されているものだ。幹

比古だつて困るんじや無いのか？」

「いや、秘密なのは呪符による発動までのプロセスで、魔法式そのものじゃない。力が取り戻せる可能性があるっていうのなら、是非君に頼みたい」

？達也は少しの間逡巡した後、頷いた。幹比古の人生を左右する役目を担った僕も、お陰で肩の荷が下りた。

？新人戦は四日目からの四日間で行われる。つまり、初日から三日目までは一年生にとっては退屈だ。勿論、上級生の応援はしている。だが、自分の出番が無いのに、いつまでも気を張ってはいられないのだ。

？僕は本戦の合間に会場近くのあるホテルを訪れていた。フロントを無視して、従業員入り口へと進んでいく。見咎める人間は誰もいない。それもそのはずで、ここは四葉の息がかかったホテルだった。？従業員用エレベーターに乗り込み、一般客用には存在しない階数ボタンを押す。ここには、四葉の人間以外は使えない部屋があるのだ。

「理澄兄さん！ 久しぶり！」

？部屋を開けてもらうと、嬉しそうに一人の少年が飛び出てきた。彼は黒羽文弥。僕と同じく、四葉家の次期当主候補である。

「文弥！ 元気になっていた？」

？僕は文弥の髪をグシャグシャとかき回す。昔から黒羽と武倉には付き合いがあり、双子と僕は仲が良い。親の思惑はまた違うところにあるのだろうが、それは現時点では子供に関係ないことだった。

「もう、文弥。そんな勢いよく出たら危ないじゃない……」

？文弥の後ろから、彼の双子の姉である亜夜子が現れた。文弥は姉に注意されたのが恥ずかしかったのか、口を尖らせて反論する。

「大丈夫だよ。理澄兄さんだって、いくらなんでも僕くらいは受け止められるよ」

「そりやそうだ。久しぶりだね、亜夜子ちゃん」

「理澄さん、お久しぶりです」

？黒羽の双子達は、毎年九校戦を観戦しに来てはいない。家の仕事に忙しいので、わざわざそんな時間を取ることは勿体ないのだ。自分が出場するまでは、僕だって会場へ来たことは無かった。

？例外は深雪で、彼女の父親が本家への機嫌取りの為にいつも連れて行っていたらしい。やることがみみっちいと思う。

？二人がここに来たのは、達也がエンジニアとして参加していることが理由だろう。彼らの父親は酷く渋ったに違いないが、結局は子供達が喜ぶならと受け入れたのだろう。達也のことが絡まなければ、いい父親であることは確かだ。

？文弥と亜夜子が滞在するのは、このホテルには置かれていない筈のロイヤルスイート。室内も、ベッドルームとは別にきちんと部屋がある。僕達はそこでお昼を兼ねたティータイムを始めた。

？メイドが手早くテーブルの上にお茶の用意をする。軽食を食べるので、簡単なアフターヌーンティーだ。

「菜子はちゃんと働いているかい？」

？開口一番に僕は彼らにそう尋ねた。実を言えば、先程のメイドは菜子だったのである。

？彼女が九校戦好きだと聞いてから、連れて行ってやりたいたとずつと考えていた。とはいえ、流石にホテルの部屋を一つ空けてやる訳にはいかなかった。そんなとき、黒羽の双子が観戦するという話を聞いたのだった。世話係という名目でなら、寝床を用意できる。彼らも快諾してくれたので、助かった。

「紅茶を飲む回数が増えたかな。姉さんが淹れるよりも美味しいから」

「ちよつ、ちよつと文弥？ その言い方だと、私が下手みたいに聞こえるじゃない！ 菜子ちゃんがとても上手なだけですからね、理澄さん！」

「分かってるよ」

？黒羽の家に遊びに行った時に、何度か亜夜子の淹れた紅茶を飲んでいる。特に腕前に問題はないと、よく知っていた。

「ああ、理澄兄さん。今から、菜子さんには暇を出すから。競技がある時間には、自由に観戦できるようにしています」

「ごめんね。複雑なことさせて」

「いえ、こちらは理澄さんの使用人をお借りしているだけです。当然のことです」

？しばらく、僕らは口を飲み食いに使った。皿を下げたり、ポット

を変えたりするのは、黒羽の黒服が代わりにしてくれた。

「そろそろ、本題に入ろうか」

「そうですね。……それにしても、よくこんな知ってたね。黒羽でもまだ掴めていなかったようなことなのに」

「顔だけは広いからね。でも、細かいことまで調べるのはやっぱり黒羽の仕事だ」

？黒羽を使って調べさせたのは、次のフラグである周公瑾しゅうこうきんのことだった。コイツが大亜連合の特殊部隊の手引きをしたせいで、横浜事変は起こったのだ。勿論、これだけが理由ではないが、大きな要因であるのは確かである。

？情報端末に映し出して、周公瑾のデータを読む。

「崑崙方院の生き残り……。まだ残っていたとはね」

？文弥が忌々しげに呟いた。四葉一族にとって、「崑崙方院」は憎しみの対象。直接体験していない世代にも、恨みは連綿と継がれていた。

「崩壊前に追放された古式魔法師らしいから、正確な生き残りでは無いんだらうけど……。どちらにせよ、のうのうと生きて貰っちゃ困る存在だ」

？これからの展開的にも困る。戦争が起こって、「質量爆散マテリアルバースト」を使われると、最悪な事態になるのは分かっているのだ。何とか均衡を保っている、この情勢を崩してはならない。

「この件は急ぎ本家へと報告されました。すぐ、御当主様から任務として、正式な通達が下ると思います」

「久しく無かった、分家同士を跨いだ任務になるんじゃないかな。理澄兄さんと一緒に仕事するの、何年振りだろう?」

「巳焼島で、脱走しようとしていた魔法師を殺して以来だね。あれを仕事と呼ぶならだけど」

「どちらかという訓練ですわね」

？巳焼島。四葉家の保有する島である。名義の上では都内の不動産会社のものとなっているが、様々な会社を挟んで、四葉が全株式を支配している。島の西端には、犯罪魔法師を収監する施設が置かれて

いて、脱走を防ぐ役割を四葉家が事実上担っている。

？そのため、戦闘訓練の最終段階で殺人の訓練を行うとき、ここを利用するのだ。僕は文弥達と一緒にあの島に滞在して、脱走囚を排除する訓練をしたのだった。

「だけど、理澄兄さんと達也兄さんにはハードスケジュールになると思う。九校戦のパーティーが終わってすぐ、中華街に向かわなくちゃいけないから」

「達也も任務に参加するの？」

「珍しく武力を大量投入する、大規模な作戦だからね。達也兄さんは絶対必要だよ」

「確かに達也がいるだけで、こちらはかなり優勢になるか。それにしても、大暴れできそうな作戦なのは助かるね。でも、四葉が動いたと判れば、他の十師族がうるさそうだし」

「崑崙方院の潜伏場所だったとだけ発表したら、一番面倒な七草や九島も黙る筈です。そこまで、心配する必要は無いと思います」

？その後も、任務についての擦り合わせを行ってから、僕は部屋を去った。



？九校戦も順調に日が過ぎて行き、とうとう新人戦がスタートした。午前に女子早撃ちが行われたが、一高が一位から三位までを独占する快挙となった。

？午後には、男子早撃ちがスタートする。それを見るために、関係者用の観客席には真由美、鈴音、摩利が揃って座っていた。

「達也くんが武倉くんの使う術式をアレンジしたらしいのよね？」

「ええ。武倉君の担当エンジニアは五十里君ですが、使用する起動式については司波君が用意したそうです」

「午前の早撃ちでもやってくれたからな……。武倉の試合はかなり楽しみだ」

？応援というよりは、達也の関わった試合を見たいという理由の方が強そうであった。現に、森崎やもう一人の代表のことは話題にも上っていない。

「あつ、始まるわよ」

？開始のシグナルが灯る。その瞬間、クレーが射出された。飛んできたクレーは、すぐに理澄の魔法によって破壊されていく。

「おお……！ 速いな」

「弾が見当たらないけれど……。一体何の魔法なのかしら。リンちゃん分かる？」

「インビジブル・ブリットですね。彼は加重系が得意なそうですから、妥当な選択ではありません」

「はっ？ インビジブル・ブリットって、あの!?!」

「ええ!?! それって、吉祥寺くんしか使えないんじゃないの!?!」

？冷静な鈴音の返答とは反対に、裏返ったような声を出す真由美と摩利。しかし、鈴音は淡々とその疑問に対して答えた。

「魔法式の記述が、開発者である吉祥寺真紅郎しか理解出来ないから使えない……。これはただの俗説で、用途が非常に限定されている為に、使用者がいらないだけなのです」

「そうだったの……。それでも、そんなの用意しちゃう達也くんも達也くんね」

「でも、何故そんな用途の限定されている魔法をわざわざ使っているんだ？」

？摩利の疑問は尤もなものだった。

「インビジブル・ブリットは、『視認したポイントに圧力を発生させる』という単純な効果。エリアが限定されている、スピード・シューティングではかなり有効でしょう。特に新人戦では死角を狙われることも少なく、クレーを見つけやすいですし」

「成る程な……」

「まあ、男子の方も上手く行きそうね。武倉くんもあの調子なら、優勝してもおかしくないし」

？彼女らが話している中、理澄が100個目のクレーを割る。彼の

予選突破は確実だった。

？一方、第三高校のテントではスピード・シューティングの様子を見て、大変な騒ぎになっていた。

「吉祥寺のインビジブル・ブリットを使ってくる奴がいるなんて！」

「またあの忌々しいエンジニアか!？」

？観戦していた三高の生徒達が口々に叫び出す。女子の部でのことは、まだ理解できた。新しい魔法を用意しても、特殊なCADを作成してきたとしても、けれども、インビジブル・ブリットを使ってくるのは、嫌がらせとしか彼らには思えなかった。

「一条！ お前はと思う!？」

？三年生が、黙ってモニターを見つめ続けている一条将輝に尋ねた。彼は一年生とはいえ、十師族、一条の跡取りだ。チームの精神的支柱になるのは当然と言えた。

「落ち着いて下さい、先輩。まだ、これは予選です。それに同じ魔法を使ってきたとしても、こっちにいるのは開発者です。ジョージが自分の魔法で負けるなんて、あり得ませんよ」

「そつ、そうだな……!？」

「そうよね！ 吉祥寺くんが負けるはずないわ!？」

？将輝の言葉はチームメンバーの不安を和らげた。しかし、彼らは失念していた。世の中には、開発者よりも高い精度で魔法を使いこなす魔法師の事例が沢山あるということ。



？決勝まで何とか無事に勝ち抜くことができた。

？僕の担当エンジニアは五十里先輩で、思ったより魔法は使いやすい。CADの調整は苦手と言っていたから少し不安だったが、それは杞憂だったようだ。

「大丈夫？ どこか気になるところは無い?？」

？決勝戦に備えて、先輩に最終確認をしてもらおう。

「特に違和感は無いです。これなら、本番も大丈夫だと思います」

「本当？ それにしても、インビジブル・ブリットを使うなんてね。司波君が提案したのかい？」

「いえ。僕から使いたいと言ったんです。それで、アレンジした式を貰って」

「アレンジねえ……。とんでもない特技だよ。少なくとも、僕にはちよつと無理かな」

？達也は「分解」と「再成」の為に、物体の構造を認識する異能を持っている。アレンジはその技能の副次的なものであり、それ自体が特技な訳ではない。だが、そんなことを言うのは憚られた。

「でも、五十里先輩にできるCADの調整は僕には上手く出来ません。そういうものじゃないですかね」

「後輩に慰められちゃ形無しだね。まあ、いいか。決勝、頑張っておいで」

「ええ。絶対優勝しますよ」

「頼もしい答えだね。花音を思い出すよ」

？急に惚気を混ぜられて、何だか気が抜ける。狙ってやったなら凄いが、多分そうではない。決勝会場のシューティングレンジに足を踏み出す。照準用のゴーグルを付け、特化型CADも構える。

？対戦相手の吉祥寺真紅郎も入場してきた。僕の時よりも数倍の歓声が場内に響いた。いくら同じ魔法を使っている、流石は「カーデナル・ジョージ」。その名前は伊達ではない。

？縦に並んだ五つのライトが、下から順に点灯していく。一番上のライトが光った瞬間、クレーがエリア内を舞う。

？僕が撃ち落とさないといけない標的のクレーは赤色だ。間違えてしまえば、それは失点になってしまう。

？インビジブル・ブリットの利点は、弾丸が存在しない点にある。対象そのものに魔法を行使するので、僕と吉祥寺の魔法行使領域が重なることは無い。だから、スピードと照準精度だけが勝負になる。

？そして、処理速度も正確さも、吉祥寺に負けない自信があった。
？結果は、僕がパーフェクト。吉祥寺が99個。恐らく、彼もパーフェクト出来たはずだが、制限時間に間に合わなかったのだ。

？一高側の観客席から大きな歓声上がる。嬉しくて、僕は思わず手を大きく振った。そのあと、

場内をぐるりと見回す。黒羽の双子達が、立ち上がって喜んでいるのが見えた。そちらにも手を振る。

？その近くで菜子も見つけた。こちらに小さく手を振りながら、笑顔を向けている。その姿を見ると僕はなんだか、優勝して良かったな、と思えてきたのだった。

?クラウド・ボールも特に問題なく、優勝することが出来た。こちらの方には吉祥寺のような歯ごたえのある相手が居なかったのは、少し残念だった。試合において大事なのは、良きライバルである。来年の本戦は上級生もいるので、今からそれを期待している。

?七日目の夕食の時間には、生徒達——特に一年女子は新人戦の結果ではしゃいでいた。達也を取り囲んで、お喋りに興じている。

?それに対し、男子側は微妙な空気だった。一応僕が二つ優勝しているのに、悪い結果では決して無い。けれども、森崎の機嫌がかなり悪いせいで、どうも盛り上がり欠けるのだった。

?彼はスピード・シューティングが三位、モノリス・コードが二位という結果に終わっている。早撃ち準決勝で吉祥寺に、モノリス決勝で三高に当たったにしては良い結果なのだが、悔しくて仕方ないらしい。夕食の時間まで引き摺るのはどうかと思わなくも無いが。

「なつ、なあ……? 森崎、元気出せよ。俺なんか予選落ちなんだからさ。お前はスゴイって」

?早撃ちで、僕や森崎と一緒に代表だった奴が慰めの言葉をかける。しかし、これは逆効果だった。

「そうだったら、武倉はどうなるんだよ! コイツは優勝! 俺は三位! 全然違うんだよ!」

「いや……。そんなキレなくても」

?ライバル心を持つてくれるのは結構だが、上しか見ていないのも大問題である。

?森崎の成長イベはちゃんと来てくれるのだろうか。孫美鈴スズメリンはまだ担ぎ上げられていないらしいから、ちょうど夏休み辺りに内調と追いかけてこする予定だとは思う。彼のこれからの為にも、是非出会って頂きたい。

?男子チームメンバー全員で森崎を宥めていた時に、僕の端末が鳴った。いつもは音が鳴らないようにしているのに、鳴ったということとは本家絡みの通知だ。内容を見て、僕は顔色を変えずには居られな

かった。慌ててトレイを戻しに行き、食堂を出ていく。後ろで誰かが何か言っていたが、無視をした。

？必要な物を部屋へ取りに戻り、ホテルのロビーへと急いだ。そこでは達也と深雪が言い争っていた。

「どうしても行かれるというのですか」

「叔母上の命令だ。今は拒否する訳にいかない」

「ですが、お兄様……！」

？シリアスな場面だが、空気を読んでいる場合ではない。さつさと兄妹の間へと入っていく。

「もう来てたんだ。早いね」

「来たか。じゃあ、そろそろ行くな？ 深雪」

？達也は深雪の髪を優しく撫でてやる。その時だけ、彼女は穏やかな表情になった。しかし、すぐに顔を険しくさせて、僕を見た。

「理澄君！ 貴方は何も思わないの？」

「何を？ 達也を戦わせること？ それとも、僕が命令に従っていること？」

「どちらもよ。私にはそれらが正しいことに思えないわ」

「……正しくなかったとしても、このやり方でしか生きていけないんだよ。きつと、文弥や亜夜子ちゃんもそう思っているはずだ」

？四葉から逃れて生きていくのは困難な道だ。普通の魔法師である僕には尚更である。

？転生した当初は、四葉家に生まれたことを幸運だと思った。魔法の才にも恵まれたからだ。でも、それは違った。才能に恵まれれば恵まれるほど、悲しい生き方をしなくちゃいけないのがこの世界だ。何が正しくて、何が間違っているのかなんて、僕には見分けが付かなくなっている。



？待たせていた車に、僕と達也は乗り込んだ。車内で待っていたのは、珍しく北斗ではなかった。

「計画が繰り上げになったから急いで来てくれ、としか書いてなかったけど、一体どういうこと?」

「こちらの動きを勘付かれたのです。偵察部隊が交戦に入ってから、なし崩しに戦闘になっていきます」

「周公瑾には逃げられていない?」

「黒羽の部隊が包囲しているので、今は何とか」

? 周公瑾に逃げられてしまえば、こちらの負けである。身を隠されてしまうと、最初から探し直さねばならなくなるからだ。

「飛ばすので、一時間程で横浜へは到着するでしょう」

「スピード違反で止められないか?」

「所々の道を工事中と偽装しています。警察も入っては来ませんよ」

? 本当に一時間と少しで中華街に着いた。かなり滅茶苦茶な運転だったが、僕も達也も酔ってしまふようなタイプでは無い。十分、戦闘に移行できる。

「兄さん達! やつと来た!」

? ボブカットの少女が、僕達に駆け寄ってくる。ハイネックのぴつたりとした服にジャンパースカートを合わせている。手袋とタイツも身につけ、肌の露出は殆ど無い。

「ヤミちゃんじゃないか。今日も可愛いね」

「からかわないでよ! 好きでしているんじゃないんだ! ……達也兄さん、久しぶり! 達也兄さんがエンジニアしてた試合は、全部見たよ!」

「その話は後にしよう、ヤミ。今話すべきじゃない」

「そうですね……。ごめんなさい」

? しょんぼりと肩を落とすヤミ——もとい文弥。その様子はとても可哀想だったが、達也の言うことにも一理あった。

「周公瑾は何処に?」

「自分の店の中に立て籠もっているんです。特殊な結界が張られていて、手出しが難しい状況で。それで、達也兄さんを待っていたんです」

? わざわざ立て籠もっているという事は、その方が彼にとって有利であるのは間違いない。店そのものを媒体にして、誰かが突入する

とそれを贅に発動する術式でも用意しているのだろう。しかし、それに乗ってやることは無い。

「分かった。すぐに『分解』してしまっているのか？」

「ううん、店の近くに行ってから。結界が消えてすぐ、突入して貰わないといけないから」

「？ 僕は周公瑾が立て籠もる店の前へと移動する。横浜は夜遅くになっても様々なところに光源がある為に、とても明るい。」

「？ 周がオーナーを務めるこの店は、ガイドブックにも掲載されている人気中華料理店だ。まさか、こんなことになるとは誰も思わなかっただろう。」

「達也、頼めるか？」

「？ その問いに、彼は頷くことで答える。達也は愛機のトライデントを構え、三連発の魔法を行使した。」

「？ 分解魔法「トライデント」。」

「？ 最初は、標的の領域干渉を分解。次に、情報強化を分解。最後に、標的そのものを分解する。」

「？ 店自体が「分解」され、結界が消滅したことが、僕にも知覚できた。」

「？ 地下に潜んでいる周を出て来させる為に、地面に向けて「破城槌」を発動する。これは確実に防がれるだろう。」

「？ その証拠に、奴は自分の足で僕達の前に立っていた。かなりの出力で放った「破城槌」は、普通なら全身骨折は免れない筈だということに。」

「周公瑾……！」

「私如きに、こんな多くの四葉の魔法師が相手をしてくれるとは光栄ですね」

「お前の手駒は皆死んだ。大人しく投降するなら、今のうちだぞ」

「？ だが、周の笑みは崩れない。」

「？ 今だって、何もしていない訳ではない。達也は奴の四肢の一部を「分解」して穴を空けているし、文弥は「ダイレクト・ペイン」を使っている。それらに何の反応も見せないということは、何らかの術を

使っているのだろう。

？急に、周の周りが揺らぐ。「鬼門遁甲」を使ったのだ。しかし、その対策を怠っている筈が無い。

「ごっちですー！」

？今この中で、彼女一人だけが、奴を捉えている。

？僕は、声のする方へ「ワルキューレ」を放った。魔法式は跳ね返り、周の胸へと吸い込まれていく。その瞬間、彼は体を反らせてゆっくりと地面に倒れていった。

「……殺した、か？」

？誰かが呟いた。

？確かに、周公瑾は死んだ。しかし、まだ終わりでは無かったのだ。

？古式魔法は効果を発揮する時間を遅らせることもできる。死ぬ間際に周は一つの魔法を発動していた。

「……、っー！」

？僕の影から勢いよく這い出てきた幻獣が、腹を食い破った。内臓や血の生温い感覚が口内に広がる。思わず体をくの字に折り畳んで、胃の中のを吐き出す。赤い何か飛び散り、それは小さな泡を作った。

「理澄様！」

？菜子が泣きそうな声を出して、僕の側にやってくる。顔を見ると、彼女は実際泣いていた。いくら作戦上必要とはいえ、ガーディアンどころか護衛でもない、普通の女の子を連れて来たことを、今更ながら申し訳なく思った。

？人を押し退けてこちらへ来る北斗の姿が、菜子の後ろで見えた。彼は責任感が強いので、きつと自分を責めるだろう。そうではない、と言ってやらないといけない。

？意識が朦朧とする。こんな感覚になるのは初めてだった。前世での死に際を覚えていないのもあるかもしれない。お前は中華街で死ぬんだ、と前世の僕に言えば、どう反応するだろうか。

？でも、僕が死ぬことは無かった。負った傷が、急に全て消滅した

からだ。

？起き上がって周りを見回すと、達也がCADを僕の方へ向けていた。その横に立っていた文弥が、僕の元へ走り寄って来る。

「理澄兄さん！ 即死じゃなくて良かった……！」

「死ぬかと思ったよ……。文弥は何も怪我は無い？」

「うん。手下と戦った時のかすり傷くらいだよ」

「それは良かった。それで、死体は黒羽が持っていくか？ こうなると吉見の出番だろう」

？東雲吉見。黒羽の縁戚に当たる人間で、サイコメトリーの能力を持っている。彼女は人体に残る想子情報体の痕跡を読み取ることが可能であるらしい。

「そうだね。持って帰らせて貰うよ」

「何か分かったら、情報だけ回して欲しい」
「了解」

？文弥が自分の部下の黒服に指示を出す。だが、女装をしているのでマイチ格好がつかず、つつい笑い笑ってしまった。それに気づいた彼は、僕を睨んだ。あまり怖くなかった。



？富士演習場の宿舎に帰り着いた時には、一時を回っていた。何だか今日は濃い一日であった。

？僕が五体満足で帰ってこれたのは、達也の「再成」があったからだ。けれど、彼は、何故助けてくれたのかという疑問は消えないままだった。

？達也は、深雪に対するもの以外の強い感情を取り去られている。彼は妹に関係することしか、衝動的に動くことが出来ない。そういう風に作られているのだ。

？帰りは、僕は部下達に囲まれていた為に尋ねることが出来なかった。部屋に帰るまでにこの質問をしないと、きっと答えは聞けないままになってしまうだろう。

「あのさ、達也」

？僕よりも先に進んでいた彼を呼び止める。彼は思ったよりも、すんなりと振り向いた。

「なんだ？」

「……どうして、僕を助けてくれたの？ 僕の生死は深雪とは直接的に関係ない。文弥が悲しむから？ だけど、それだけでわざわざ魔法を使うとは思えないんだ」

「そのことか。……俺は、確かに深雪以外のことは正直何も思うことが出来ない。例えば、文弥や亜夜子が居なくなっただとしても、作りかけのデータをデリートしてしまった時の残念な気持ちと同じくらいにしか思えないだろう」

？悲しみの感情すら、このようなくだらない気持ちと混同してしまうのだ。彼は人間の振りをして、残念さを悲しみだと思い込んで動くことしか出来ない。

「……だがな、理澄。お前もそれくらいのレベルには思っているんだ。文弥と亜夜子くらいにはな。この答えでは、不満か？」

？そう言つて、達也は前へと向き直り、歩いて行った。

？作りかけのデータにも一応愛着はあるということだ。どうも、僕はその中に入っていたらしい。人の気持ちが分からないのは一体どっちだ。

「いや。……ありがとう」

？彼はもう振り返らなかった。

？自分の部屋の前にようやく着いて、ドアを開ける。鍵はまだ掛かっていなかった。同室の人間は酷く不用心な奴である。実家が護衛業をやっているとは到底思えない。

「おい、武倉。何処に行っていたんだよ。もう一時過ぎてんぞ」

？寝転んだまま、端末で動画を見ていた森崎が僕に文句を言うてる。時間が経つて、機嫌は治っているらしい。

「野暮用だよ。野暮用」

「こんな夜中までうろつく用事なんか、何があるんだ」

「夜の闇に紛れて、悪人を倒して来たとか言ったらどうする?」

「そんな訳あるか。いつの時代の手描きアニメだよ」

? 何だかムカついたので、森崎の顔にクツションを投げつけてやる。なかなか上手くクリーンヒットした。

「何するんだよ! 帰ってきたと思っいたらいきなり!」

「常在戦場って言葉を知らないのかよ!」

「少なくとも、こんな状況では使わねえよ!」

? お互いに枕だの何だのを投げ合う。騒ぎを聞きつけたのか、近くの部屋のチームメイトが混ざり始めて大騒ぎになる。

? 騒音で目が覚めたらしい服部先輩が怒鳴り込んでくるまで、なし崩しにスタートした枕投げは続いた。

? 四葉に生まれてしまった以上、正義のヒーローみたいな生き方は出来ないし、するつもりも無い。

? これから僕はどうやって生きていけば良いのか、手探りの状態は続いている。達也を殺さなくてはならない日が来るのか、来ないのか、それも分からない。

? 少なくとも、平和な日々ができるだけ長くあってくれることを祈ることしか出来ないのだ。

ダブルセブン編

1

？夏休みの課題を免除されているので、最終日に泣きながら端末に向かう……という事態は避けられた。九校戦に出場したことは、思ったよりもプラスに転んだのかもしれない。

？とはいえ、母親には新人戦で大活躍したことに対して、苦言を呈された。津久葉や新発田の方は高校時代にきちんと魔法力を隠していたから、特に思う所があったのだと思う。

？逆に、御当主様からは何も言われなかった。それどころか、「一条の跡取りを倒してくれば良かったのに」とまで言われる始末。無論、それを真に受けている訳ではないが。それでも、僕の目論見は予想通り当たったとも言える。

？中華街の一件は、「人気中華料理店でガス爆発」という内容で報道された。かなりの大嘘なのだが、十師族の絡む案件をそのまま流そうとするようなマスメディアは居なかったようだ。

？しかし、火の無いところに煙は立たないという法則は、いつの時代でも通用するらしい。魔法師の仕業であるという話は、まことしやかに世間を流れていた。

「……確かに爆発くらいなら魔法で再現できるもんね。収束系で水素を分離したりしたらさ」

「振動魔法で発火点まで温度を上げる方法もあるね。けど、想子センサーがあるからなあ……。普通にバレるんじゃないかな」

「そうよね……。理澄くんはどう思う？」

？僕はと言えば、遊園地——コンセプト色の強いテーマパークへと来ていた。九校戦で仲良くなった同じクラスの英美に誘われたからだ。流石に二人きりでは無く、同じくB組の桜小路紅葉とD組の里美スバルも一緒である。外伝のエピソードに僕が混ざる形になったわけだが、普通に楽しい休日を過ごしている。

？英美が急に迷子になってしまおうというアクシデントがあったものの、何とか無事に再会できたので、今は遅めの昼食をしているところだった。

？まあ、クレープなんて食べても腹は膨れやしないのだが、ここは女性陣に合わせるのが吉だろう。

「想子センサーが反応しないなんてことはあり得ないからね。本当に事故だと思うけど？」

？実際はセンサーを切っていただけだ。それに、センサーに反応するような余剰想子なんて僕らは出していなかった。四葉の魔法師は意識的に魔法を使う際、そのようなヘマはしない。「魔法の兆候は隠せて当然」を基準として育てられているからだ。

「そうなのかな……？ それにしては、結構色んな説が流れてるよね。一番有力なのは、大亜連合のスパイを一掃する為に、公安か何かが事故に偽装したってやつ」

「あり得る話じゃない？ 昼間とはかく、夜の中華街は危なかったもの。でも、警察が入ったお陰で少しはマシになったらしいし」

？事実、中華街に官憲の手が入ったことで、違法入国者が一斉に入管へ收容されるといふ一幕はあった。今まで素知らぬふりをしていたのに、きつかけがあれば急に動き出すのだから、虫のいい話である。けれども、多くの人々にとっては安心へと繋がったことには間違いない。

「だよね。誰かの仕業だったとしても、戦争とかになる前に起こって良かったのかも。ガス抜きみたいになって」

「そう思っとくのが一番いいんじゃない？ 分からないことを追求するよりかはさ。ヤバいのが関わってるかもしれないしね」

？僕は内心ホツとしながら、スバルの言葉の後を継いだ。現に四葉はヤバいやつであり、もしも知られたら口封じは必要だろう。だから、真実と違う方向に話が向かったことは都合が良かった。

「確かにそうね。どうする？ 下手に踏み込んで、闇討ちとかされたりしたら？」

「急に襲われるなんて、ホント笑えない冗談よ……」

? 英美がゲツソリとした顔で言う。彼女は先程そのような目に遭っていたのだから、嫌になるのも無理は無い。

「……そういや、ここって『ワンダーランド』なのに、何でウサギじゃないのかな?」

? 話題を変えるように、英美が呟く。ちようど縦縞模様の服を着たスタッフが、僕達の前を通り過ぎて行った。

「あのね、それだと流石に版權に引っかかっちゃうでしょ」

「んっ? もしかしてエイミー、バニーボーイを侍らせたいとか」

「違います! もう……せつかく不思議の国だったらスタッフにも、もっとそれらしい格好させた方が良くないかなって思っただけよ」

? 不意打ちに、ちよつと慌てて言い訳をしている。

? さつき出会った筈の十三束のことも考えるんだろうな、と思いつつ彼女を見た。しかし、僕の視線は彼女と交差した。それどころか、紅葉もスバルもこちらを見ている。

「……なっ、なに?」

「理澄くん、意外といけるんじゃない?」

「そうよね! 結構女顔だし」

「それにゴツくないもの。鍛えています、って人も悪く無いけど、私あんまり好きじゃないのよね」

「分かる〜! 十文字会頭とか、司波くんとかね。筋肉! ってなるのがちよつと」

「それ、深雪に言ったら凍らされるわよ!」

? 姦しい話し声を横で聞きながら、僕は小さくため息をついた。体質なのか、身体を鍛えても筋肉が殆どつかないのだ。

? 今でこそ違うが、僕も元々は文弥と同じ女装仲間だったくらいである。昔のコードネームは「メロデイ」。リズムだからメロデイである。たまに津久葉家の夕歌さんなどは、「メロデイちゃん」とからかい混じりに呼ぶ。酷すぎる黒歴史。泣きたくなる。

? 現在進行形で黒歴史を生成している文弥のことは、意識から追いやった。

◆
?人の噂も七十五日。何なら、現代ではそれよりも早い。夏休みには話題になった事件の噂も、二学期には無くなっているだろうと踏んでいた。

?けれども、それはあまりにも楽観的な予測だったようだ。

?人間主義。

?キリストの教義から分岐した亜種キリスト教を骨子として生まれた思想だ。魔法を人間にとって不自然な力と認識し、自然な力、つまり魔法を使わないで生きようと主張しているらしい。

?考えてくれるのは結構なのだが、魔法師の存在そのものを否定する為に、過激な排斥運動も行なっていることが問題となっている。宗教柄、アメリカ西海岸で発展していたが、それが日本にも飛び火した。

「——いくらなんでも早すぎる。何でこうなった?」

?そもそも、西海岸ですら活発化したのは「吸血鬼事件」から。今、パラサイトは存在していないし、今の原作時間軸であれば人間主義が活発化することはなかった筈だ。

?とはいえ、周公瑾を殺されて警戒した顧傑が手を回したと考えれば、そこまでおかしくはない。問題は日本へと流れてきたスピードの速さだ。

?端末で反魔法的な書き込みを検索しながらも、僕は頭を抱えずにはいられなかった。

「最っ悪だ……!」

?以前よりもかなり悪化している。キリスト教と直接関係の無い独特の教義を持つ反魔法団体までもが、大騒ぎを始めていた。おまけに誰かがマスコミにまで手を回したのか、いくつかのめぼしいネットニュースのトップにも記事が掲載されている。

?でも、僕は一つ気になることがあった。このような展開を、見たことあるような気がするのだ。

「……そうか。ダブルセブン編だ……」

? 二年生の部、最初のエピソード。今までのレギュラーメンバーが進級して、二年生に上がる。それに伴い、新キャラが登場するのだ。七草の双子と、師補十八家の七宝琢磨。だから、「ダブルセブン」。

? 内容としては、七草がマスコミ工作を行い、反魔法師の風潮を煽るといふもの。それに対して、達也がいつも通りアクションを起こすのである。

? もしも、これが七草の仕業だったとすれば。異常に速い人間主義の広まりにも、説明が十分付く。目的は恐らく、四葉なのだろう。

? 八月上旬の中華街強襲は、秘密主義の四葉にしては派手なものだった。崑崙方院の他の生き残りに対する、見せしめの部分もあったからだ。

? しかし、その影響は他の部分にも出てきたらしい。原作から考えると、九島も一枚くらいは噛んでいるだろう。作戦前に懸念していたことではあったが、こうも直接的だとは思わなかった。

? 原作では十文字が七草に抗議をすることで、一時的に運動は止まる。多分、ここは同じように行く筈だ。十文字会頭は実質十文字家の当主であり、高校生ながら社会情勢にはかなりアンテナを広げている。決して、気づかないことは無いだろう。

? 七草が暗躍している証拠を掻き集めること。そして、一般人に対しての、魔法師に代わる脅威を作り出すこと。目下のところはそれしかあるまい。

? 本家は逆マスコミ工作に武倉を使うしかない。証拠探しは黒羽が担うことになるだろうが、分家でマスコミへのコネクションがあるのは武倉だけだ。上手く行けば、武倉は分家筆頭の家になれるかもしれない。そうなると、今は実力が上の黒羽などに対し、僕は発言力を持てるようになる。

「魔法師に代わる脅威か……」

? とはいえ、急にそんなことを思いつかない訳で。簡単に考えつくなら、苦労は無い。

? 一番早いのは戦争だろうが、それは悪手だろう。そのためにマテ

リアル・バーストを使用する展開を無理に逸らしたのだから。停戦中なだけで戦時中の括りには入るが、何も起こっていない風の状態なのは確かだ。あんまり大きな事件が起こると、どんな風に事態が転ぶか今以上に分からない。それは避けたかった。

？急にノックの音が、部屋に響いた。ドアを開けると、菜子が立っていた。

「よろしければ、お茶にしませんか？ 今日朝からずっとお部屋にいらつしやいましたから。少しは休まれないと」

「そうしようか。一人で考えるよりも、誰かのアイデアが必要な気がするし」

？端末を閉じて、僕はリビングに移動した。ソファに座って、用意がされるのを待つ。元から準備はしてあったのか、すぐにティーセットは置かれた。

？紅茶の良い香りが鼻腔をくすぐる。お菓子は手作りのチーズケーキ。昔から僕はチーズケーキが好きだった。そう話したのを、彼女は覚えていたらしい。

「……魔法師と非魔法師の違いって、何なんだろうね」

？お茶の時にする話でも無かったが、とにかく今は人の意見を聞きたかった。

「魔法を使えるか、使えないかなのでは？」

「それもあるよ。でも、非魔法師は魔法師を違う人種のように扱っている」

「単純に怖いからだと思います。魔法のメカニズムを知らないのです、すれ違うだけで殺されると勘違いしているかもしれない」

「機密に触れない程度なら、魔法関連の書籍はいくらでも存在しているのに。魔法師だって万能じゃないのは読めば分かる筈だよ」

「人は興味の無いものを知ろうとはしませんから……」

？ティータイムというよりは愚痴大会の様相を為してきていたが、話すことで情報を纏め易くはなった。

？非魔法師に対して、魔法に興味を持たせる。この指向性で間違い

ない。その上で、魔法が万能であるという幻想を打ち砕く。

? 元々力を隠している四葉には、そこまでダメージは無い。困るのは、他の魔法名家だ。

? お茶の時間も終わり、菜子は後片付けを始めた。そうは言ってもシンクに持っていけば、後はH A Rが片付けてくれる。

「ありがとう、菜子。おかげで何となく目処が付いたよ」

「お役に立てて、何よりです」

? 声を掛ける人物はもう決まっていた。ダブルセブンにはダブルセブン。12巻で物語を少しばかり引っ掻き回した人気女優——小和村真紀に手を貸してやろう。彼女の目標とする「新秩序」が何かは知らないが、今の情勢は彼女にとつて都合の悪いものだろう。利害が一致するなら、それで良かった。



? 反魔法主義が跋扈していても、魔法を使う機会は無くならない。今日も今日とて、僕は戦闘をする羽目になっていた。

「見境が無くなってきたな。工作がバレたのが相当痛かったに違いない」

「十師族内の大スキャンダル……。どの家も黙って隠蔽すると踏んでいた筈。マスコミからすっぱ抜かれたことは、予想外だったんだろうな」

? 小和村真紀は、思いの外使える駒だった。カル・ネットを通じて、魔法師擁護の報道をさせたのだ。それによって、過激な方向に走っていたマスコミを沈静化させた。おまけに、七草の工作までも公表した。参考程度に、と渡した情報なのだが、使うとは正直思っていなかった。一番過激なのは、彼女なのかもしれない。

? 僕も別の方向から手を回し、「カル・ネットこそが現代のマスコミの理想形」という風潮を生み出させた。所謂、a g e 記事である。こ

れには、亜夜子辺りが顔をしかめているだろう。彼女はマスコミ嫌いだからだ。

？反魔法系の団体は、スポンサーの正体が七草だと知り、混乱に陥っている。「非魔法師に味方する唯一の一族」と持ち上げている人間もいるが、あまり上手くいっていない。二枚舌を嫌うのはどこの業界でも同じだ。

「けど、魔法師に味方した奴を殺そうとするのはなあ……」

「七草なんてそんなものだ。昔から美味しい所だけを掠め取る。そういう奴らなんだ……」

？今、話している相手は、師補十八家の一つ、七宝家の一人息子――七宝琢磨だ。小和村に彼を紹介されたのだ。その時は、勘違いした琢磨によつて修羅場になりかけたが、適当におだててやったら大人しくなった。ついでに、七草の件について教えてやると、面白いくらい怒りに燃え出した。単純で与し易い奴なのはいい。

？七草の魔法師部隊の目的は、小和村真紀の暗殺にあった。そして、僕らはそれを阻止する為に小和村の住むマンション近くで待ち構えているのだ。

？大々的に表に出れない僕にとって、琢磨の存在はかなり便利だった。十師族ではないとはいえ、七宝にはネームバリューがある。七宝家当主は慎重派と聞くと、息子が暴れば表舞台に出ざるを得ない。七草に対して声明くらいは出すだろう。そうすれば、「七草」そのものに悪意を押し付けられる。

？これで十師族落ちしてくれば一番いいのだが、そう簡単に事は運ぶまい。「老師」が出てきて、全てを有耶無耶にしよう可能性が濃厚だ。そこに関しては、僕にはどうすることもできない。

「……そろそろだぞ。準備はいいか？」

「当たり前だ！ 俺を誰だと思ってるんだ」

「次期当主様だろうか？ 分かってるさ」

？軽口を叩きながら、敵の様子を探る。噛ませ犬ランキングで二、二を争ってそうな男と共闘するのは少々心配だが、そこは僕がサポートするしかないだろう。実戦経験はあって悪いものでもない。少な

くとも、2090年代では。

? 小和村がマンションから出てきた。これは打ち合わせ通りだ。とりあえず、一度は襲わせないと正当防衛が成り立たない。彼女が道を歩いていると、3人の男が音もなく現れた。その瞬間、彼女は顔を青ざめさせて、叫んで助けを求めようとする。演技だと分かっているが、上手いものだ。流石は名女優である。

? 男の一人が小和村の口を塞ぎ、首を絞める為にロープを巻き付けようとする。魔法を使わないのは余裕の表れなのだろうか。「どうしたんですか!」

? 最初から見ていたというのに、僕達はさも偶然居合わせたような顔をして、現場へと走った。ちなみに、僕は顔をマスクで隠し、大きなメガネまで掛けている。これでは、どちらか不審者か分からない。

「助けて! 急に襲いかかられたの!」

「なつ、何だつてく!?!」

? 僕の大根演技に、小和村は一瞬だけ眉をひそめた。そんなに酷かったのか。

? 琢磨が彼女の手を引き、自分の後ろに隠した。さながらナイト気取り。笑ってはいけけないが、笑ってしまいそうだ。

? CADを見せてつけるようにして、七草の魔法師達の前に立つ。彼らは咄嗟にCADを操作したが、僕の魔法の方が早かった。

? 無系統魔法「幻フアントム衝インプロウ」。想子の衝撃波をぶつけるだけだが、相手に痛みの錯覚を与えられる。この魔法は、次の魔法を使うまでの繋ぎとして多用される。僕もその為に利用をしていた。

? 続いて、相手の前にエリアを設定し、振動魔法「叫喚地獄」を発動。殺すのが目的ではないので、威力はかなり落としてある。

「今だ!」

「言われなくても!」

? 七宝家の切り札の一つである魔法「ミリオン・エッジ」によって、硬化された紙片が舞う。この魔法は条件発動型の遅延術式で、CAD

を使わずに使うことが出来るのだ。それ故に、魔法式の構築スピードとは関係がなくなる。しかし、相手を制圧するには心許ない為に遅れて発動させたのだ。もう既に布石は打ってある。

？ 琢磨によって操られている紙片が上昇した空気の中を通ることで、高熱を帯びる。熱せられた無数の刃が、敵の身体を切り裂いた。生きてはいるが、戦闘継続は不可能だろう。

「終わったか？」

「そんな訳無いだろ。そこにまだ残ってる」

？ そう言うやいなや、様子見で姿を隠していた奴らが飛び出してくる。彼らは拳銃を装備していて、こちらに向けてすぐさま発砲した。勿論、黙って撃たせる僕では無い。対物障壁を展開して防御する。障壁を維持したまま、もう一つ魔法を放った。

？ 放出系魔法「スパーク」は、物質から強制的に電子を取り出して、放電を起こす魔法。それは情報強化を破って敵魔法師自体に作用し、彼らは地に倒れ伏した。

「これで全員だね。全部で6人……。思ったより少ないな」

「非魔法師一人暗殺するには、多過ぎる数だろう……。それにしても、放出系が得意なのか？ 武倉だから、『六』に関係があると思っていたが」

「^{エクストラ}数字落ちかどうか訊くなんてマナー違反じゃない？」

？ 放出系は実の所、そんなに得意ではない。相手の身体に電流を流し込めたのは、干渉力の強さ故だ。琢磨と違い、素性を知られたくない僕は得意魔法を使うのを避けたかった。そうなる、ワルキューレは言うまでもなく、加速・加重系統も使えない。しかし、他の魔法も練習しておきたかったので、ちょうど良かった。

？ その為にこの作戦を考えたのだが、熱量に関係ある魔法にしたせいで、変な誤解を受けていたようだ。

「……悪かった。そんなつもりじゃなかったんだ」

「まあ、いいよ。昔の話だし」

？ 本当は「六倉」などではなく、ヨツバムグラだ。でも、話を合わせておく。コイツは一生僕のことを^{エクストラ}数字落ちと認識するのと思う

と複雑だが、四葉との関係を勘づかれるよりは余程マシである。

「それにしても……。真紀、大丈夫か？ 怪我とかはしていないな？」

？ 琢磨が振り返り、極めて紳士的な——イタリア的ではあったが——口調で小和村に尋ねた。

「ええ。貴方が助けてくれたから……。ほんと、怖かった……」

？ 胸のところぞわわぎ手を組んでいるところなど、何ともわざとらしい。しかし、琢磨は気づかないようで、「そう、良かった」などと斜に構えた返事をしていた。お前、そういうとこだぞ。そんなだから、原作でもいいように使われるんだ。今回は僕も彼を利用している訳なので、人のことは言えないけれども。



？ 僕の予想は半分当たり、半分外れることとなってしまった。

？ 七宝は確かに七草に抗議文を出した。けれども、七草がやったことについては、他の十師族に公表したりしなかった。

？ 僕は七宝家当主のことを甘く見過ぎていたようだ。彼はリスクを抑え、確実に元を取ることに長けている。十師族の地位を狙うことも出来るのに、敢えてやらない。それは、ある意味賢い生き方だろう。出る杭は打たれるのが、世の常なのだから。

？ 琢磨は父親に対し、腰抜けだの何だの散々に罵倒したらしいが、結局話は平行線を辿っただけらしい。

？ 四葉に並々ならぬ執念を持つ七草が、マスコミ工作如きで終わるとは思えない。ここで七草を潰し切れなかったことは、とても残念だった。

？ 数日後、僕は御当主様の呼び出しを受けて、本家へと行っていた。あまり気は進まなかったが、そんな訳にもいかない。

？ 四葉の本拠地がある村は、地図の上では存在しないことになっている。それに、認識障害の結果が張られており、視認できないのだ。村の入り口に行くにも、特定の場所で決められた想子パターンを照射

する必要があるので。

？その為に、大した内容でない限り、動画電話で話を済ませてしまう傾向にある。本家まで呼び出されるのは珍しいことだった。

「直接顔を合わせたのは、何時ぶりかしらね？」

「確か、高校の入学前だったかと……」

「そうだったわね。それで学校は楽しい？」

「はい。周りは皆魔法師ですし、友人も何人か出来ましたので……」

「理澄さんは、どこか人と壁を作る所があるもの。ちゃんと過ごせているようで良かったわ。安心しました」

？どうして、こんな普通の世間話をしているのだろうか。今までは直接会っても、用件だけで済まされる場合が多かった。御当主様と長い間話せるのは、一番可愛がられている亜夜子くらい。それも、次期当主の資格を持っていない部分が大きい筈だ。

？御当主様と僕はそこまで血が近くない。四葉に直系という概念は無いが、それでも武倉はかなり血が離れている。一般家庭であれば、完全に他人でもおかしくない。身内に執着する四葉だから、成り立つこと。

？だから、今置かれている状況は不思議でしか無かった。

「そういえば、理澄さん。マスコミ工作の件は上手くやりましたね。七宝の息子を味方に付けたのは予想外でしたが」

「ありがとうございます」

？七草を潰し切れなかったことで叱責を受けると思っていたので、僕は少し驚いた。

「アレを追い込めなかったのは仕方ないわ。そう簡単にいくなら、もう私がやっているもの。それに、それどころじゃ無くなってしまったし……」

「……何か、あったのですか？」

「大亜連合で反日運動が起こり始めているわ。中華街を襲ったことがきっかけになったみたいね」

？その言葉は僕を酷く憂鬱にさせた。結局、何をやっても大きな物語の流れは変わらない。海に一滴の水を垂らしても溢れる事が無い

ように、僕の行動は何も生み出していないのだ。

「中華街は大亜連合の圧政から逃れた華僑達の拠点で、大亜連合とは敵対関係にある筈なのですがね……」

「そんなの、建前だもの。どちらにせよ、戦争をする理由は探していたでしょうね。けれど、今開戦すれば、七草や九島に我々を糾弾する材料を与えてしまう。少しあの国に脅しをかける必要があるわ。……だから、理澄さん。貴方を表に出します」

？大漢が崩壊して大亜連合になったとはいえ、「四葉」の恐怖はあちらにまだ残っている。四葉の新しい世代を登場させることで、かなりの抑止力が見込めるだろう。御当主様の狙いもおかしいことではなかった。

？しかし、最初の話で僕の学校生活に触れたのは酷く趣味が悪い。心が歪みきっている。

「それは、四葉を名乗るということですか」

「そういうことになるわね。PDなんてどうにでもなりますから。いいですね？」

？全然良くなかったが、命令を拒否することも出来ない。僕は死ぬまで四葉と名乗らないで、過ごしていけると思っていたのに。マテリアル・バーストを避けた結果がこれである。達也が狙われない代わりに、僕が狙われそうだ。

「それと、今日からガーディアンを付けなさい。確か、ガーディアン候補の子が居たでしょう。そして、新しい家も用意します。マンションでは警備が心許ないですからね」

？トントン拍子に話が進んでいく。この調子だと、今日中に僕のことが発表されそうな勢いだ。

？その予感の間違いではなく、その日の夜には魔法協会を通じて十師族、師補十八家、百家を始めとする数字付きナンバーズなどの有力魔法師に四葉から通知が出されていた。

？僕が武倉理澄から四葉理澄になった日は、十月三十一日。奇しくも原作に於いて、「灼熱のハロウィン」が起きた日でもあった。

?

？七草邸や北山邸程ではないが、新居はそれなりに大きい。警備上の面もあるが、十師族としての体面を重視したのもあるかもしれない。

？本家から執事やメイド、護衛がこの家に送り込まれたので、菜子は彼らを総括する役割を担うことになった。普通の魔法が碌に使えない彼女は、本家にいた頃に同僚達から馬鹿にされていたらしい。それでも、これからは大逆転。ある意味「さすおに」的シンデレラストーリーと言えるだろう。

？ガーディアンは北斗が務めることになった。僕の魔法特性上、人前で「ワルキューレ」を使ってしまった場合、如何にバレずに死体を処理するかが一番の問題になってくる。そうなると、認識障害の魔法に適性のある彼が適任だった。勿論、逃走にも使えるという利点もある。

？しかし、彼は一高に籍を置いていない為に高校へは通えない。校内で何か起こると、介入できなくなってしまう。とはいえ、そんな事態になっていれば深雪も危ないので、達也が何かしら行動を起こす。敵も僕なんかには構っている暇が無くなってしまふ筈だ。それに、学校で襲うリスクは大き過ぎる。狙うなら、登下校中の方が良いだろう。敵にとっても。

？四葉であるということは、やはり人々に恐怖を思い起こさせるものらしい。僕がB組の教室に入ると、始業前の賑やかな雰囲気が一変した。端末のある自分の席に座れば、周辺にいた生徒がさりげなく距離を取る。普段は「おはよう」と声を掛けてくるクラスメイトも、今日は何も言おうとはしなかった。

？完全にハブられているのだが、決して向こうが悪い訳では無い。復讐の為に一国を滅ぼしたとか、悪名が轟く四葉一族に関わりたいたいと思う人間は居ないに決まっている。他の十師族に対しては関係を持ちたい者も多いだろうが、「アンタッチャブル接触禁忌」はやっぱり怖い筈だ。

？だから、僕は黙ってIDカードを端末に差し込むと、授業の予習を始めた。カードは今朝、苗字の変更されたものを再発行してもらったのだ。

？実技の授業中、教師は流石に挙動不審な者はいなかった。それでも、僕にはあまり話しかけてこない。計測器の用意くらいはしてくれただが、特にアドバイスなども無し。

？それは、僕が真面目に魔法を発動したのもあるだろう。263ms（ミリ秒）だった発動速度が211msにまでいきなり速くなったのだ。今まで手を抜いていたに違いない生徒へ、真摯に助言をしたくなる教師もいない。

？昼休みは食堂で食べる予定にしていたが、十文字先輩から急に呼び出しを食らった。食事は持つてきても構わないと言うので、購買でサンドイッチと瓶ジュースを買い、指定の場所へと向かう。

？十文字先輩が所属しているクラブであるクロスフィールド部の部室。ここは部活連の非公式な会合に使われることもある。そんなところに何故呼ばれたのか。その理由は、僕が十師族であったこと以外に考えられない。



？理澄を呼び出した張本人である克人は、クロスフィールド部の部室で一人の女子生徒と共に彼を待っていた。彼女は一高の元生徒会長であり、七草家の長女である、七草真由美だった。

「驚いたわね。まさか十師族、しかも四葉が入学していたなんて。入学式の時にも会っているけど、全然そんな感じがしなかったもの」

「実力を隠していたんだろう。秘密主義の四葉家らしい」

「なのに、どうして急に出てきたのかしら？」

「それこそ、本人に訊くしかないだろう。学生の今こそ、接触する最大のチャンスなのだからな」

？克人がそう言った時、ちょうど部室のドアが開いた。

「いらっしやい。武倉くん……じゃなかった、四葉くん」

「七草先輩もいらっしやったのですか？」

「ええ。十文字くん一人じゃ、貴方も不安でしょう？ 見た目が怖いものねえ……」

？ 克人の容姿をダシにして、場の雰囲気や和ませる真由美。実際、彼女は緩衝材の役割として、ここに来たつもりでもあった。

？ 部室の備え付けのテーブルにつき、3人は食事を始める。真由美は手作りの弁当だったが、克人は購買で弁当を購入していた。

「四葉くんは、九校戦でもかなり大活躍だったわよね。まさか、その時には十師族だったとは思わなかったけど」

「すみません。素性を悟られないようにと、当主から言い含められていたもので。それでも、十文字先輩は何となく気づいていると思っていたのですが」

？ 理澄の言葉に、真由美が頬を膨らませる。言外に「鈍そう」と言われていると思っただのだ。

「いや……。全く分からなかった」

？ どちらかと言うと、克人は達也を警戒していた。二科生であるのに、筆記試験ではほぼ満点を叩き出し、九校戦のエンジニアとして新技術を次々に発表。どう考えても、歪な存在なのだから。

？ それに比べて理澄は、普通に「優秀」のカテゴリに入るだけ。一科生の能力としては特におかしいところは何も無かった。

「しかし、これからは四葉、お前も十師族としての務めを果たさなくてはならない。今まで人前に出てこなかったのだから、不慣れな部分もあるだろう。その時は、俺や七草がサポートする」

「困ったら、気軽に相談してね。来年には、生徒会か部活連のどちらかに入って貰うことになるだろうし」

「風紀委員のままでは駄目なんでしょうか？」

「今後は魔法師社会を率いていく立場になる。学生のうちに、上の立場に立つ経験を積むべきだ」

？ 十師族の地位に誇りを持つと同時に、人一倍責任を感じているのが克人だ。それは若さ故の青臭さでもあるだろう。

「まあ、それは追い追い考えるところで。ところで、どうして急に四葉家

の血縁者だと発表されたの？ 何か理由があると思ったんだけど」

「理由は教えられていないんです。何か家に必要なことがあったからだとおもうんですが……」

「そっか。それじゃあ仕方ないわね。……そろそろ、昼休みも終わるし、お開きにしましょうか」

？ 端末を開き、真由美が言う。確かに、5時限目がスタートする時間だった。

？ 理澄が退室した後も真由美と克人はまだ部屋に残って、話をしていた。彼についての疑念はまだ晴れていなかったのだ。

「そういえば授業は大丈夫か、七草？」

「これを見越して、生徒会の公務ということにしてあるわ。気になるんでしよう？ 四葉くんのこと」

「ああ。さつき奴は理由を知らないと言ってはいたが……。まさか、知らないなんてあり得ない筈だ。企みが読めんな」

「ウチは狸親父のせいで痛い目に遭ってるからね……。その上、四葉まで動いたら流星にマズいわ」

？ 七草家はカル・ネットで報道されたスキャンダルによって、かなりの痛手を食らっていた。幸い火消しは間に合ったものの、情報通には知られているレベルのものになってしまっている。

「悪い。それについては、流星に俺も七草家を擁護出来ん」

「分かってる。十文字くんが抗議してくれたおかげで、父も手を引いた訳だもの。それにしても、どうする？ 直接訊いても教えてくれないんだし」

「とりあえずは、様子見しか無いか……。固有魔法だけでも知れたら良いんだが」

「ちよつと！ 人の魔法を詮索するのは駄目よ！」

？ 真由美が慌てたように叫ぶ。プライバシーの観点以前に、軍事力となり得る魔法は機密にされる場合が多い。他人の魔法を探るのは犯罪に近い行為であった。

「そうは言うが、気になるのは確かだろう？ 四葉に関しては殆ど情報が無い。流星群ミューティアラインのような魔法か、精神干渉魔法か……。分からない

ければ、後れを取ってしまう」

「まあ……。確かにね……。って、あれ？」

？何か違和感を感じた真由美は、知覚系魔法「マルチスコープ」を発動する。そして、あるものを見つけ出し、手に取った。

「これ……。盗聴器よー！」

「……。侮れない相手だな。こちらも心してかかるしかない」

？克人と真由美は互いに顔を見合わせ、理澄に対する警戒を強めた。



？僕は退室する前に、こっそり椅子の裏に盗聴器を仕掛けていた。最後にはバレてしまったが、これは許容範囲だ。

？四葉の名は大亜連合を退けられても、国内では近過ぎる脅威となつて危険視されやすい。僕は、特に十師族相手には油断出来ないと分かつていた。

？けれども、僕の魔法に探りを入れてくるつもりだったとは思わなかった。ワルキューレを多用しない為にも、武倉から常時護衛を出さないといけないだろう。

？うんざりして溜め息をついたら、近くの席の生徒が怯えたように震えた。息をするにも一苦労だ。

？放課後は、運悪く風紀委員の当番だった。本部で森崎と一瞬目が合ったが、すぐに逸らされた。向こうが話しかけてこないなら、こちらにも用は無い。黙って巡回へと向かった。しかし、僕を見ると誰も逃げたので、仕事にならなかった。

？肩を落として本部へと戻ると、達也が資料の作成をしていた。彼は入ってきた僕に気づいて、顔を上げた。

「理澄か。どうだ？ 四葉の縁者とバレた気分は」

「最悪だ……。今日、こんな気軽に話してきたのは達也だけ。こんな日がまだまだ続くと思つたら……」

？応接用のソファに腰掛け、頭を抱える。こんな生活は針のむしろ

である。胃に穴でも開きそうだ。

「暫くすれば、騒ぎも落ち着くだろう。近づく人間は居ないままかもしれんが」

「そうじゃなくて、変に怯えられてるのが嫌なんだよ……」

「それはどうしようもないな」

「だよな。……資料作成、手伝うよ」

「？単純な作業でも、何か現実逃避になりそうなものに打ち込みたかった。」

「いや……。残念ながらも終わった」

「ええ……!?! どうしよう、帰ろうかな」

「部活があるんじゃないのか?」

「この状況から考えて、僕が行くと練習どころじゃないでしょ」

「まあ、そうだろうな」

「？基礎トレーニングまでは一人だが、ラリー練習はペアでやらなければいけない。多分、誰も一緒にやってくれないだろう。」

「仕方ない。今日は帰ろう。外で北斗をずっと待たせるのも忍びないし」

「？校門の近くに一台の自走車が停まっていた。僕が乗ってきた車である。この車は武倉のものではなく、本家から支給されたもの。出所を調べられないようにする為らしい。」

「？僕は黙って車に乗り込み、後部座席に荷物を放り投げる。鞆には端末が入っていたが、これくらいの衝撃で壊れるものでもない。」

「学校はどうでしたか、理澄様?」

「……別に。普通かな」

「？僕の答えに北斗は特に何も返さず、車を発進させる。こういう時、下手な慰めみたいなものを言わないでいてくれるのは嬉しかった。」

「？十分程車を走らせると、途端に同じ景色が窓の外に映り続ける。同じところを何度も回り続けているのだ。」

「暗殺目的かな?」

「恐らくは。このまま離脱することも可能ですが、どうされますか？」
「ここで潰してしまおう。今、僕は機嫌が悪いんだ」

？車を停めて、魔法の使い手を探す。人避けの効果もあるのか、僕達以外には人は見当たらない。キャビネットが交通の主流とはいえ、誰も居ないことは無い筈なのだ。

？車外に出ると、いきなり情報強化の掛かった銃弾が飛んできた。咄嗟にベクトル反転を発動する。それに続き、北斗が敵のいる方向に魔法を発動した。

？精神干渉魔法「マンドレイク」。想子波によって恐怖の情動を生させ、相手の精神を衰弱させる魔法だ。

？敵が呻き声を上げながら、僕達の前に姿を見せた。精神に不調をきたし、光学迷彩の魔法が外れてしまったのだ。

「ありがとう。後は任せて」

？そう言っつて、僕はCADを操作する。その瞬間、敵は身体に穴が開き、そこから血を勢いよく吹き出した。

？使ったのは加重系魔法「グングニール」。指定した平面エリアの仮想的な重力分布を操作して、特定の幾つかのポイントに高重力を生させるもの。

？インデックスにも掲載されている魔法だが、あまり使う魔法師はいない。平面に作用する干渉力を必要とするのに、効果は狭い範囲に限定されるからだ。その上、工程の多い複雑な魔法式で、かなりのキャパシティが要求されるのだ。

「珍しいですね」

「十文字とかに目を付けられていて。それにしても……どうしようか？」

「これを辿っても雇い主は分からないでしょうね。とりあえず、脇に置いておきましょう」

「何でこんな面倒ごと巻き込まれるんだ……」

？発散系で地面の血を落とす。血に含まれる水分を飛ばしたのだ。そして、移動魔法を使って死体を人目につかない場所に移動させる。「じゃ、帰ろうか。菜子がチョコケーキ焼いてるって言ってたし。お

やっにしよう」

「そうですね」

？高校生にもなって、学校のことでも悩ませられるとは思わなかった。しかし、国際情勢に対応するには、これしかなかったのも分かっている。見かけ上は、平和なのが今。小さな社会と大きな社会。どちらを取るべきなのかは、誰にでも明白だ。

? 段々と話し掛けられない生活にも慣れてきてしまった。食堂で食事をするときも、最初はテーブルの端に座っていたが、最近は開き直って真ん中に陣取っている。僕の座ったテーブルに来る人が誰も居ないからである。

? 普通なら文句の一つでも言われるだろう。だが、そんなことは一度も起こらなかった。だから、今日もラーメンを食べようと、適当なテーブルにトレーを置いた。別に麺類が特別好きな訳では無いが、出来るだけ早く食べ終われるものを食べているのだ。

? しかし、今日はいつもと違った。僕のいるテーブルに人がやってきたからだ。

「理澄くん、ここに空いてる?」

「……エリカ?」

? トレーを持った彼女の後ろには、他の二科生達——美月、幹比古、レオが少し離れて立っていた。実のところ、エリカはともかく、彼らとは殆ど親交は無い。一度か二度、言葉を交わしただけの関係。僕に用事など無い筈だった。

「ねえ? どうなの?」

「うっ、うん……。空いてるけど……。?」

? 苛ついたようなエリカの声に、僕は慌てて返事をした。

「空いてるって。ほら、美月ここにね。アンタ達も早く座りなさいよ」

? エリカが僕の前に座る。その横には美月。その横に幹比古が座った。レオは少し戸惑った様子を見せたが、僕の隣に来た。

? 特に会話は無い。僕も黙って麺を啜る。何度かこちらの様子を伺われていたが、気を遣って目を合わせないようにした。

「ごちそうさまでした」

? 早々に食べ終えた僕は手を合わせた後、席を立った。僕がいるせいで会話が盛り上がらないのは、申し訳なく感じる。だから、早く帰りたかったのだ。

？それなのに、この不思議な状況は数日続いた。僕も流石に違和感を感じざるを得ない。四人で座れるテーブルが塞がってもいかなかった。僕のいる場所でわざわざ食べることは無いだろう。

「あの……。どうして僕とご飯食べてるの？ 他にも席はあるのに」「理澄くんは私達と食べるのは嫌？」

「そうじゃないけど……。僕、四葉だよ？ 怖いとか思わない訳？」
「そりゃあ、怖いわよ。あの『四葉』なんだから。何も思わなかったら、ただのバカ。……。けど、寂しそうにしてるヤツ、放つとけないでしょ」
？僕は驚いて、エリカの顔をまじまじと見た。自分はそんな風に見られていたのか。

？隣に座っていたレオが僕の方を見て、話し掛けてきた。

「改めて自己紹介するぜ。俺は西城レオンハルト。レオでいい。よろしくな、理澄」

「……。ああ。よろしくね、レオ」
？ようやく、会話らしい会話が始まった。エリカが幹比古に話を振る。

「そういや、ミキ。理澄くんにお礼を言いたいとか言っていなかったけ？」

「僕の名前は幹比古だ！」

？エリカに幹比古はいつもの台詞を返した。そして、僕の方へと顔を向けた。

「……。君のおかげで、僕は自信を取り戻せた。あのときは本当にありがとう」

「達也がCADを調整したからでしょ。僕は何もしてない」
「悩みを聞いてくれたらどう？ それに、達也に口添えしてくれたのも君だ」

「……。確か、論文コンペの警備チームに参加してたんだって？」
「お手伝い程度だけだね。でも、今までの僕じゃ、そんなことも叶わなかった」

？僕は論文コンペには全く関わっていない。マスコミ工作をしたり、琢磨と一緒に七草と戦ったりで忙しかったからだ。

?けれども、やはり一科生中心の警備チームに二科生が参加したとなると噂にもなる。僕もその情報は耳にしていた。

「だから、礼くらい言わせてくれ」

「そーよ。プライドの高かったあのミキがお礼を言うんだから、理澄くんの功績はすごいわよ。ねえ、美月?」

「ええっ!? いや、そんな。吉田くんには謙虚なところも……」

「いや、幹比古はめちやくちやトガってたぜ。九校戦前は特にな」

?レオの言葉に僕達は笑った。幹比古は必死になって、当時の行動を弁解していた。

?放課後になり、僕は待たせている車へと向かう。今日は鞆を放り投げず、膝の上に置いた。

「おかえりなさい。学校はどうでしたか?」

?毎日の同じ質問に僕は、「楽しかったよ」と答えた。

?その日を境に、エリカ達と行動を共にするようになった。今までは何も思っていなかったのに、話し相手が出来てようやく分かったことがある。

?僕は一人で居ることが、寂しかったのだ。



?風紀委員の巡回当番がまた回ってきた。本部で鉢合わせた森崎と、再び目が合う。だが、今回はこちらに近づいてきた。

「おい、武倉」

「え? いや、僕四葉……」

「うるさい」

?一体何なのだ。困惑する僕に、彼は人差し指を突きつけた。

「^{ナンバース}数字付きだとか、十師族だとかは関係ない。俺は必ずお前に勝つ。覚えておけ!」

?そう言い残すと、彼は外へと出ていった。

?思わず突っ立っていると、背後から声を掛けられた。新しく委員

長に就任した、千代田先輩だ。

「良かったじゃない。貴方、手を抜いていたんでしょ？ それでもライバルで居続けてくれるって、ありがたい事なんだから」

「そうなのでしょか？」

「当たり前よ。普通なら見放すわ、そんな奴。私なら絶対そうする。森崎には感謝することね」

？ 彼女はもう用は無い、という風に手を振る。雑な追い出しに苦笑を浮かべつつ、僕は本部を後にした。今日も人に避けられはしたが、不思議と悲しい気分にはならなかった。

？ 巡回を終え、帰りの準備をしている時に端末にメッセージが届いた。琢磨からのものだ。

？ 七宝の屋敷に来てくれないか、というものだった。何の用があるのかについては、細かく書かれていない。断る理由も無いので、誘いに応じることにした。

？ 手軽にメッセージで呼ばれたのもあり、当主によって正式に呼ばれたものではないようだった。琢磨の私室に案内されたからだ。彼は僕を見た瞬間、矢継ぎ早に文句を繰り出した。

「お前、何が数字^{エグストラ}落ちだ！ 適当言いやがって！」

「別にそうとは一度も言っていない。お前が勝手に勘違いしただけだろ」

「でも『昔のことだし』とかそれっぽい事言ってただろ！ 絶対確信犯だ！」

？ 意外に鋭い指摘をする琢磨。けれども、僕は素知らぬ顔をする。彼は諦めたのか、溜め息を一つついて追求の手を止めた。そして、応接用のソファに座るよう勧める。

「来てもらったのは他でも無い。真紀のことなんだ」

「えっ、恋愛相談？ 僕、彼女いた歴ゼロなんだけど」

「なんでそんなことお前に相談するんだよ。違うに決まってるだろ。……真紀が急に七草に接触したんだ」

？ 小和村が七草に近づき始めたのは、僕も知っていた。

？ 元々、武倉が彼女と交わした契約は「魔法師擁護報道の代わりに、

小和村に魔法師を仲介すること」である。僕は戦闘には向かないD・E級魔法師を小和村に紹介し終えた。つまり、契約は終了している。今後、彼女が誰と繋がっても、僕に口出しする権利は無い。

「自分を殺しにきた相手と取引か。肝が座ってるよね、あの人」

「そんな呑気なこと言ってる場合か！」

「？テールから身を乗り出して怒鳴る琢磨。そんなこと言われても、僕だって困る。」

「小和村さんの目的は魔法師の兵器利用をやめようという話だったよね？魔法による新たな雇用を生むビジネスなんだから、十師族の中でも強力な七草とコンタクトを取ってもおかしくはないと思うけど」
「？彼女が考えていることは嘘ではないが、勿論下心もある。それは有事の際、政府要人へ優先的に割り当てられる魔法師の護衛を、自分や自分の一派に付ける為の根回しなのだ。」

「？かなり頭の回る女性なのは確かだ。おかげで切り札は意味を為さなくなってしまった。瀕死だった七草も、カル・ネットと和解すれば息を吹き返す。とはいえ、建て直しが必要だろうし、捨て身の博打も打たなくなることだけが救いだらう。」

「七草が、七草よりも弱いからそんなことをされるんだ！親父は腑抜けでやる気が無いし！だから、七草に対抗できるお前に手伝って欲しい！」

「ええ……？四葉としてもう一度何かしろと？嫌だよ、そんなの」

「？向こうが喧嘩を売ってくるから買っているのである。どうして、こちらから相手をせねばならないのか。」

「？しかし、馬鹿正直に断つても逆ギレされそうさ。上手く丸め込むしかあるまい。」

「……というより、お前に遠慮したんじゃないの？」

「遠慮？何でだ？」

「いずれは七宝の次期当主となる訳だろ、お前も。きつと、複雑な芸能界の柵に巻き込まれなくなかったんだよ。だから、『敵』である七草を利用しようとしたんだらうね」

「？自分でも酷い理論立てたと思う。九校戦に行く時の車内で雫が

深雪を宥めた「なかでき」レベル。けれども、頭に血が上っていた琢磨が違和感を覚えることはなかった。

「そうだったのか……」

「覚悟を決めることだね。そうすれば、向こうも分かってくれる筈だ」
？その言葉を聞き、琢磨は乾いた笑いを零した。そのまま彼は項垂れて、小さな声で呟く。

「……腑抜けだったのは、俺自身だったんだな。真紀のことを全く分かってやれていなかった。もう一度、会って話してみる」

「それがいいと思うよ」

？尤もらしい顔で僕は頷いた。内心ガッツポーズをしていたけれども。

？この後、とても不思議なことが起こり、琢磨は銀幕デビューした。最初は魔法師の役者ということで反発も起こりはした。しかし、少しずつ世間に受け入れられていった。

？おかげで、人間主義の活動も想定以下に収まっている。実のところ、武倉と小和村の契約は切れていたが、僕自身と小和村の契約は切れていなかった。内容は「戦闘に使えるレベルの魔法師を芸能界にスカウトすること」である。師補十八家次期当主であれば、キャンペーンの十分な広告塔になる筈だ。

？まあ、魔法科高校に副業禁止の規定は無いので、来年度には彼も入学出来るだろう。七宝琢磨の双肩に魔法師の未来は懸かっている。是非、頑張つて頂きたい。



？ある日の夜、午後11時頃のことだった。急に自室のディスプレイへ、映像が映し出された。

？今では珍しい、金髪碧眼の典型的なアングロサクソン系の青年がこちらに向けて手を振っていた。

「誰だ！」

「ハロー。聞こえているかな？ はじめまして、リズム・ヨツバ。僕はレイモンド・S・クラーク。『七賢人』の一人だ」

？どうも録画映像のようで、僕の反応とは関係なく話してくる。このディスプレイはオンライン接続されているので、リアルタイムに映像を送れる筈だが、そうはしなかったようだ。

？そして、この人物を僕は原作知識で知っている。黒幕じみた真似をするのが趣味で、最終的にはパラサイトに身体を乗っ取られるという結果に終わる人物である。まとめると害はなさそうだが、彼は「フリズスキャルヴ」というハッキングシステムを所有している。危険人物ではなくても、僕にとつては脅威だ。何を知られているのか、こちらには分からないのだから。

「その名の通り、セイジは7人居る。そのうち、今日君に紹介したいのは『ジード・ヘイグ』という男だ。又の名を顧傑だね」

？昔のテレビショッピングのような口振りで話すレイモンド。前世紀に投稿された動画のアーカイブを見る趣味でもあるのかもしれない。

「彼は四葉の一族である君を狙って、色々手の込んだ策略を練っているみたいだよ。手下に情報を与えて、USNA軍の人間をゾンビにしてみました。僕は好きだな、こういう展開」

？彼の好みはどうでも良い。しかし、出てくるとは思ったが、顧傑の目的は僕なのか。

？頼むから、お兄様を狙ってくれ。でも、そのフラグを叩き折ったのは僕だ。何だか泣きたくなってきた。

「死んでいるとはいえUSNA軍が他の国で暴れたら、流石に隠蔽が必要だよ。日本に潜伏した死兵を処分する為に、もうスターズは動き始めている。ここまではいいかな？」

？見られている訳では無いが、一応相槌を打つ。つまり、来訪者編が——そういつていいのかわからないが——近日にもスタートする可能性があるのだろう。そういえば、期末テストの勉強会に僕も誘われていることを思い出した。

「だけど、君に全く情報が入ってこないのは、アンフェアだと僕は思

う。だから、これは僕からのプレゼントだ。どうぞ、受け取ってくれ
？そこでレイモンドは、わざとらしく一度話を切った。

「うーん、これを見てる時間から考えたら、そろそろかな。じゃあ、G
ood luck!」

？何だか嫌な予感がして、部屋の外に出る。廊下に出た瞬間、北斗
がこちらへ走ってきた。

「理澄様！ 何者かの襲撃です！」

「やっぱりそうか……」

「予測してたんですか!?!」

？その質問には答えず、僕は玄関へと走る。外では既に交戦が始
まっていた。敵は銃火器を装備していて、総勢15人。見た目はどう
見ても日本人ではない。

？対物障壁でマシンガンの連射を食い止めているが、こちらがいつ
まで保つかは分からない。一撃で決める為に、僕は「ワルキューレ」を
発動した。

「……効かない!?!」

？レイモンドは「ゾンビ」や「死兵」と言っていた。干渉できる精
神が無い相手には、精神干渉魔法は効かない。それ故に、殺せないの
だ。

「クソツタレ！」

？悪態をつきながらも、僕は次の魔法を構築する。15発の圧縮空
気弾を作り出し、敵の銃口に押し込んだ。それによって銃身内が異常
高圧になり、マシンガンは暴発した。

？暴発に巻き込まれた形のゾンビは原型を留めていない。つまり、
「人型のを動かす」という掛けられた術の定義が破綻してしまう。
動かなくなった死体を見て、僕はホッと息をついた。

「酷い目に合ったな……」

「一体、何処の手の者だったのでしょうか？ まさか、こんな堂々と襲
撃に来るとは……」

「……とりあえず、本家まで送ってくれる？ 御当主様に報告したい
ことがある」

？フリズスキャルヴについて報告すれば、御当主様も何かしら行動を起こすだろう。もしもアクセス権を剥奪されれば、四葉にとって大きな痛手となる。それは絶対に避ける筈だった。

？それにしても、パラサイトが無くてもスターズと事を構えることになるとは想定外だ。何とも、思い通りにいかない人生である。

来訪者編

1

? 二学期の期末試験が終わった。今まで微妙な順位をウロウロしていた僕は、急に学年一位になるという快挙を成し遂げた。干渉力の点数が、深雪よりも上だったことが功を奏したのだ。

? 問題は理論である。泣きながら勉強をする羽目になってしまった。それでも、三位だった。

? そんな僕は何故か黒羽の人間と潜水艦に乗り込んでいた——女装をして。顔と名前が売れてしまったので、素顔では派手な行動が出来なくなってしまったのだ。

? 文弥と亜夜子が僕の格好をみて、からかい半分で話しかけてくる。

「結構いいじゃん。僕も仲間が出来て良かったよ」

「そうですね。よくお似合いですもの」

「……人ごとだと思つて」

? USNAが誇る巨大航空母艦「エンタープライズ」を強襲するというのが、今回の任務だからだ。目的は、フリズスキャルヴの開発者であるエドワード・クラークの暗殺。

? 僕が適当に話を盛つて、御当主様に報告した情報が理由だ。四葉に端末を送り込んだことがスパイ目的だと判明したので、その報復なのである。

? しかし、僕達の方が先に来訪者になってしまった訳なのだ。日本にいるよりかは、安全ではあるのだろうか。これでは、来訪者編(向こうが来るとは言っていない)である。

「ていうか、金髪はやり過ぎだったんじゃない? そもそも、ヤミはいつもの格好だし」

「そうかしら? でも、ヤミちゃんも金髪にすべきだったわね。私も金髪なんだから」

? 僕はカツラを付けていたし、亜夜子はスプレーで髪を染めてい

た。おまけにゴシッククロリータを着込んでいたので、二人揃って何がしたいのかよく分からない人間になっていた。少なくとも、秘密作戦を遂行するようには見えない。

「僕が一番普通なの！ 姉さん達がおかしいんだよ」

「そうは言うけど、アメリカよ？ 金髪碧眼はマストじゃない」

「何だよそれ！ ファッション雑誌じゃないんだから！」

「ヤミ、ヨル。対象に接近してる。そろそろだよ」

？二人の顔が急に険しくなる。仕事の時の表情だ。

？潜水艦が海面へと浮上していく。ハッチを開けると、潮風の匂いがした。

？亜夜子の「極散」が働いているので、レーダーには映らない。だから、安心して外に出ることが出来た。少し先にエンタープライズが見える。600m級の空母は闇の中でも存在感を放っていた。

「あれか……。準備はいい？ ヤミちゃん、メロディさん」

「ええ、よろしくですよ」

「ふざけなくていいですから。じゃあ、飛ばすわね」

？亜夜子がCADを操作する。瞬間、僕達はエンタープライズの甲板に降り立った。これは亜夜子の得意魔法「擬似瞬間移動」によるものだ。そのまま、こっそりと内部に入り込む。僕と文弥だけでは出来ない芸当である。

「USNAの研究者、エドワード・クラークねえ。この船に乗ってくれているのは好都合だけど、なんかキナ臭いよね」

「罨を仕掛けてるってこと？ どう思う？ ヨル姉さん」

「まあ、その可能性も無くは無いけど……」

？僕達に気づくことのできない見張りの前を、呑気に話しながら進んでいく。そして、ある場所で足を止めた。

？壁越しであっても、霊子の感覚を掴めば魔法は使える。一人の間目掛けて、僕だけの固有魔法を発動した。

？続いて、壁を魔法で破壊し、中へと入り込む。

「何者だっ!？」

？エドワードと共にいた研究者らしき人物が誰何するが、僕は無視

をした。死体に重力制御魔法を掛けて浮かしながら、僕らは来た道を走って戻る。

？流石に見張りも事態に気づき、ハイパワーライフルを撃ってきたが、領域設置したベクトル反転で跳ね返す。文弥が前から飛び出してくる兵士に「ダイレクト・ペイン」を掛けて、床に転がしていく。

？甲板まで戻ったところで、上空からプラズマが打ち込まれた。慌てて散開行動を取る。

？見上げると、9人の人間が夜空をバックに浮かんでいた。中心には赤い髪をした女性。紛れもなく、アンジー・シリウスだ。

「ヨル！ 死体を回収して戻れ！」

？僕の言葉に彼女は頷き、自分と死体に擬似瞬間移動を掛けて潜水艦へと移動した。潜水艦にも魔法が撃ち込まれそうになったが、それは黒羽の誰かが阻止していた。

「あれ、スターズだよな？」

「ああ。やっぱり誘き寄せて、捕まえるつもりだったんだな」

？残念ながら、もうエドワードは死んでいるのだが、彼らはまだそれを知らない。

「飛ぶぞ。下にいれば、シリウスのいい的だ」

？コルセットに偽装した飛行デバイスのスイッチを入れる。当たり前だが、達也は夏に飛行魔法を実用化しているのだ。

「でも、どうする？」

「シリウスを狙え。残りは僕が片付ける」

「でも、ワルキューレはマズいよ！ 死体を回収し切れないかもしれない！」

「分かってる」

？僕は8人を視界に入れて、「インビジブル・ブリット」を発動した。目標は敵の装着しているヘルメットだ。

？彼らは一点に高い圧力を掛けられて、勢いよく脳味噌を飛び散らせた。死んでしまえば、飛行魔法を維持できなくなる。シリウスを残して、海へと落下していった。

「うわ……。グロ……」

「倒したんだからいいでしょ。ていうかさ、ヤミ。ちゃんとやってるの？ 反応してないじゃん、あれ」

「何度も撃ってるよ！ それなのに、手応えが全然無いんだ！」

？その言葉で大事なことに気づいた。シリウスの「パレード仮装行列」は姿だけでなく、座標をも変えてしまうのだ。これでは、魔法も当たる訳が無い。未だにプラズマ砲を彼女は撃ってくる。避けるのもそろそろ限界だ。

「逃げるぞ。拡散を使ってくれ」

「ええ!? 攻撃の対処は任せるからね！」

？文弥は拡散しか使えないが、それでも普通の戦闘魔法師よりは精度が高い。夜の暗さに紛れて、僕と文弥はシリウスから逃げ出した。三十六計逃げるに如かずというやつだ。

？何とか、潜水艦とも合流できた。その頃にはほぼ朝方だったが。



？時差ボケに悩まされながらも、次の日には学校へ登校した。授業は殆ど居眠りしてしまっただが、誰も起こしてはくれなかった。昼休み頃には感覚も戻ったから良かったものの、そうでなければ昼食を食べ損ねたかもしれない。

「USNAの空母が国籍不明のテロリストに襲われたっていうニュースがあったよね。雫もこれから行くっていうのに、怖い話ね」

？食堂でいつものメンバー＋僕で食事していると、エリカがそう話を切り出した。

「エンタープライズだよ？ あんな大きな空母を襲う相手なんて

……。雫、本当気をつけてね」

「大丈夫、鍛えてるから」

？ほのかの心配にずれた答えを返す雫。運が相当悪いでも無い限り、巻き込まれないだろうから分からなくもない。

「でも、理澄は何か掴んでないのか？ 俺たちの知らねえ情報も知ってそうだけど」

「いや……。何も入ってきてないかな」

？何か知っているどころか、僕はその現場にいた。そんなことは言わないけれども。

？エドワードを暗殺して、四葉はフリズスキャルヴのシステムを強奪することに成功した。久しぶりの大戦果である。今頃、レイモンドや顧傑は地団駄を踏んでいることだろう。

？とはいえ、エンタープライズを襲った本当の理由はUSNAにも分かってない筈だ。フリズスキャルヴの存在を彼らは知らないのだから。

「そうか……。達也には分かってないの？」

？幹比古が、黙って食事が続けていた達也に質問をする。彼は食事の手を止めて、その質問に答えた。

「俺も詳しいことは知らないな。だが、何となく予想はつく」

「えっ！ 分かるんですか、達也さん？」

？ほのかが驚いたように叫ぶ。それに彼は頷くことで返し、口を開いた。

「最近、スターズが特殊な作戦の為に動きだしているらしい。それに対する、何者かからの警告なんじゃないかな」

？雫との交換留学の件で御当主様から警告を受けた内容を、少しばかり大袈裟に話す達也。事情を知っている僕からすれば、滅茶苦茶な知ったかぶりである。まあ、スターズと交戦したことは間違いではないのだが。

「ええ！ それは本当なの、達也くん!？」

「ああ。あまり他言するような話では無いが」

「流石はお兄様です！ 理澄君も知らないようなことを知っていらっしやるなんて」

「そうよね。ホント、達也くんって底知れないところがあるわ」

「おいおい、化け物扱いはやめてくれよ」

？いや、司波達也はどうやっても化け物である。世界を焼き尽くし、人類を一人残らず殺すことが可能な本当の化け物。四葉が生み出した、復讐の象徴だ。

「?はしゃいでいる皆に気づかれないようにしながら、僕はそつと目を伏せた。

「……それにしても、送別会は全員参加出来そうで良かったわ。理澄くんも予定が空いていたみたいだし」

「ほぼクリスマスパーティーなんだけどね。でも、三学期には雫がいないくて寂しくなる訳だし、楽しい方がいいもの」

「?今日の放課後には、雫の送別会が「アイネブリーゼ」というカフェで開かれることになっていた。僕以外のメンバーは結構常連らしい。その為に貸し切りしてもらえるのだという。」

「北山さんは居ないけど、留学生は来るんだよね。一体どんな子なんだろう?」

「留学出来るくらいだし、相当凄いいんじゃない? 深雪レベルとか」

「それだと、嬉しいわね。ライバルが増える訳だもの」

「うわっ、余裕!」

「?話を聞き流しながら、僕はある事を考えていた。スターズが本当に、USNA軍のゾンビ回収だけで日本に来るのかという問題だ。」

「?もしかしたら、レイモンドはスターズにも何か情報を流していたのかも知れない。そうだとしたら、「シリウス」を第一高校に送り込む理由とは何なのか?」

「でもこんな時代に留学生だよ? スパイかもしれない」

「それはあり得る話だな。この学年には『四葉』もいる訳だし。探りを入れてきてもおかしくない」

「それもそうよね。殆ど知られていない、四葉の直系だもの。誰だつて知りたい筈よね」

「?成る程、USNAの狙いも僕である。いくら諜報に全く向いていないリーナ相手とはいえ、コソコソ監視されて楽しい訳がない。頼むから来ないで欲しい。」

「?何とも、嫌な三学期になりそうだった。」

？四葉本家では毎年、正月に慶春会が開かれる。？一族や四葉の関係者の殆どが集まる、とても賑やかな宴会で、僕はいつも参加している。勿論、今年も出席する為に本家に顔を出していた。

？住んでいる家にも留守番を置かねばならないので、本家へは菜子とガーディアン北斗だけを連れてきた。しかし、僕と北斗は武倉の使う離れに案内されたが、菜子は正月への準備に駆り出されてしまった。慶春会までには、まだ二日もある。少し悪いことをしたかもしれない。

？僕も早く来てしまったものの、特にすることが無いので、冬休みの宿題をやることで暇を潰していた。面倒な問題集は、北斗にも手伝わせている。彼は今、数学の積分に頭を悩まされていた。

「やけに多いですね。こんな宿題があるとは」

「高校教育のカリキュラムに専門分野を上乘せする形だから。アンバランスなんだよね」

「教えない訳にもいかないのかもしれないけど……。最悪わからなままでも、卒業は出来るってところが雑ですよね」

「そうなんだよ。まともな魔法師になれなかった卒業生の殆どが就職できない理由って、そこにあるんじゃないかな……」

？一介の高校生である僕が雇用問題について提起する必要もないのだが、「人間主義」はそういう社会の歪みが生み出してもいる。名家の人間はそれでもコネで仕事にありつけるが、一般人はそうはいかない。平均年収を中央値で取ると、かなり低くなってしまっているのだ。

「じゃあ、理澄様も自分で積分やって下さい。どうするんですか、もしも路頭に迷ったら」

「僕は迷いません！ お前、難しいから押し付けてるんだろ！」

「そうです！」

？開き直らないで欲しい。けれども、最初に押し付けたのは僕なので、渋々問題集を受け取った。

「そもそも、魔法理論もそんなに必要ですかね。無駄を減らせば、ちゃんと一般科目を網羅出来ると思うのですが」

「でも、こつちをやらないと卒業出来なくなるからね……。魔法大学にも入れないし」

？僕はそういつつ、解きかけの魔法史学の問題集を埋めていく。この世界では織田信長などの代わりに、安倍晴明を始めとする陰陽師が頻繁に歴史に登場する。こういう時に僕は「転生したんだな」と思うのだった。

？しばらく黙って宿題をしていると、部屋のインターホンが鳴った。北斗が立ち上がって、ドアを開ける。

「あれ、琴鳴さん？」

？来客は僕の再従兄弟である新発田勝成のガーディアン、堤琴鳴だった。ギャルっぽい見た目の女性で、勝成さんと恋仲なのは公然の秘密だ。

「理澄くん、こんにちは。今、いいかしら？」

「退屈していたところだから。何か用？」

「勝成さんが理澄くんと会いたがっていて。宜しければ、会って欲しいのだけれど」

？武倉と新発田は血の繋がりが近く、僕は結構、勝成さんを慕っていた。彼は物凄く良い人なのだ。四葉ではかなり珍しいタイプと言える。

「行く行く！ よし、北斗！ お前は魔法言語学やつといて！」

「一番面倒な教科じゃないですか！」

？何か文句を言っていたが、僕はさっさと部屋を後にした。

？新発田の離れへと、琴鳴に案内してもらう。一人で行けないことも無いが、好意を無下にする訳にもいかない。

？勝成さんの滞在する部屋の前に立つ。僕がドアを開けようとする、それよりも早くドアは開いた。

「久しぶりだね、理澄くん」

「うん。一年振りくらいかな？」

「そうだったな。まあ、中に入ると良い」

？室内には彼のもう一人のガーディアンである堤奏太も居た。彼は僕に一礼しただけで、話しかけはしなかった。奏太は僕のことをあまり好いてはいない。

？それは、新発田家当主が——つまり、勝成さんの父親だ——僕を次期当主に推している為だ。彼にしてみれば、面白いことでは無いのだろう。逆に姉である琴鳴さんは、四葉の柵に勝成さんが巻き込まれないということから、僕を好意的に見ている。

？勝成さん本人はガーディアン達の思いに気づいているのか、それとも気づいていないのかは分からない。しかし、僕のこととはとても可愛がってくれていた。

「高校生活は大変だろう。ただでさえ、一高に進学させられたというのに、四葉を名乗ることにまでなるなんて」

？実は、入試直前まで僕は第五高校に通う予定になっていた。それなのに、達也の監視目的で僕は、急に志望校を変えさせられたのだ。その案を強硬に押し進めたのは、彼の父親を始めとする分家当主達だった。

「二応上手くはやれてるはず……。なんか、スターズが潜り込むらしくて。それだけが気掛かりかな。バレてないとは思うけど」

「そういえば、エドワード・クラーク暗殺作戦に文弥くん達と参加していたんだっただか」

？フリズスキャルヴを駆使した調査では、USNA側は今回の事件を新ソ連の仕業だと予測しているらしい。それぐらいしか、動機のある相手は見つからないからだ。

「うん。でも、スターズも問題だけど、顧傑も問題なんだよね。死兵を使って爆弾テロでもされたら、僕の今までのお膳立てが台無しだ」

「芸能界に魔法師を送り込んでいる件だったかな？ あれは良いことだと俺も思う。奏太がセミプロじゃなくて、本格的にデビューする未来が来るかもしれないからね。そうだろう？」

？勝成さんが、壁際に立ったままの奏太に話し掛ける。彼は「滅相も無いです、マスター」と照れたような返答をした。

「謙遜しなくてもいい。俺は奏太に音楽の道で成功して欲しいとも

思っているんだ」

？これは勝成さんの鼻肩目だけでは無い。音に関連する調整体「楽師シリーズ」の第2世代である上に、生来の高い音楽センスが彼にはあるのだ。

「これからも魔法師が兵器であることは変わりないけど、『人間主義』対策には大々的なアピールが必要だ。魔法は人を殺さない、魔法は人に夢と希望を与える……。そんな風にね」

「理澄くんが言うのと、随分嘘らしく聞こえるな。現に、魔法は人を殺すのだから」

「まあね」

？僕の特異魔法は、使い方次第でどうとなるものでは無い。ある意味、四葉に相応しい力だった。



？一方その頃、司波家では兄妹水入らずのティータイムが行われていた。達也は、深雪が手挽きをして入れたコーヒーを愉しむ。彼の正面ではその様子を嬉しそうに眺める、妹の姿があった。

「あの、お兄様。お聞きしたいことがあるのですが」

「何だい、深雪？」

「理澄君のことなんですが……。私はずっとあの子のことを、お兄様に害を為す存在だと思っています。黒羽や新発田などのお兄様を見下す輩が、次期当主に推してもいますから」

？深雪と理澄は非常に立場が似通っている。次期当主の最大候補で、強力な精神干渉魔法を持ち、達也を止め得ることの出来る魔法師。違いは四葉に与しているかどうかということだけだと、深雪は考えている。

「しかし、お兄様はそのことをお気になさらないご様子。どうして、そのようにいられるのでしょうか？ 深雪は心配です。いつか……。お兄様が、世界から爪弾きにされてしまうのではないかと」

？最近、理澄が自分達と行動を共にするようになったことも、深雪

にとつては心配の種だ。貢や理に唆された彼が、達也を殺す機会を窺っているのではないか……。彼女は気が気では無かった。

？達也が急にソファから立ち上がる。あつ、と声を上げる間も無く、彼女の頭に彼の手が置かれた。そのまま、優しい手つきで撫でられる。

「なんだ、そんなことか」

「お兄様？」

「俺は何処へも行かない。いつまでも深雪、お前の側に居るよ」

？達也の言葉は、深雪には絶対だ。彼女は自らの心に巢食う不安がみるみる小さくなるのを感じた。

「本当ですか？ 死が二人を分かつ時まで、私の側に居て下さるのですね？」

「勿論だ。俺はお前のガーディアンだから」

？ガーディアン、という言葉聞き、彼女の胸はずきりと痛む。実の兄妹なのに、そんなおかしな関係でしか結ばれていないことが、深雪には哀しかった。思わず、達也の身体を抱き締める。

「深雪？」

「私は今も……。そして、いつまでもお兄様の味方です。もしも理澄君が四葉家の当主になってしまい、四葉が敵に回ることになったら……。お兄様と共に生きたいのです。ガーディアンという言葉で、ご自分をお縛りになるのはやめて下さい」

？実際、理澄が当主になってしまえば、彼の後ろの人間達の意向で、達也は四葉から離されるだろう。そうなれば、深雪だって四葉にはもう用は無い。魔法師社会から村八分にされたとしても、兄と一緒にならば幸せになれる気がした。

「ありがとう。俺のことをそんなに思ってくれる人間は、お前ただ一人だよ」

？達也の身体が深雪から離れる。それによって、深雪は自分の行動を思い出し、顔を赤くした。

「ティータイムの続きにしよう。まだ、深雪の作ってくれたお菓子を味わい尽くしていないからな」

「まあ！ お兄様だったら、お上手なんですから」

「本当だよ？ 嘘なら、もっとそれらしく言うさ」

？二人は声を出して笑う。こんな時間がいつまでも続けばいいのに、と深雪は思った。

？しかし、彼女の思いとは裏腹に、事態は進んでいくのであった。



「ハア……」

？USNA軍統合参謀本部直属の魔法師部隊スターズ。その総隊長である、アンジェリーナ・クドウ・シールズは通算15回目のため息をついた。それに対し、リーナのアシスタントとして同行していた惑星級魔法師のシルヴィア・マーキュリー・ファーストは、そろそろ口に出さずにはいられなかった。

「どうしたんですか、リーナ。行きの飛行機からそんなことでは、幸せが逃げて行きますよ」

「そんな訳無いじゃないですか、シルヴィ。息を吸ったり吐いたりするだけで、幸せに影響は出ません」

？上司の行儀をそれとなく窘めたかったシルヴィだが、居直ったリーナの正論には効かなかった。

「では、外国へ行くのが不安なのですか？ 正直、そのようなイメージはあまり無かったのですが」

「そうじゃなくて……。前の任務失敗が尾を引いていて。どうしても、このところ憂鬱になってしまってます」

「ああ、あのエンタープライズの件ですか……」

？シルヴィは報告書でしか、そのことを知らない。しかし、かなり多くの謎が残る事件だとは思っていた。

「エドワード・クラークを狙う何者かが空母に潜入する前に捕らえる筈だったのに、既に侵入を許してしまった上に、彼の生死は不明！

こんな屈辱はありません！」

？船内で、エドワードに同行していた護衛や研究者達に状況を尋ね

ても、要領の得ない証言しか得られなかった。生きているのか、死んでいるのかすら確認できないまま、侵入者に回収されてしまったのだ。「シリウス」に信頼を置きすぎたせいで、迎撃側の構成がスターダスト六体と衛星級二人のみだったのも、まずかった。

「エドワード・クラーク氏の狂言説まで出てくる始末ですからね……。でも、あの手際の良さならあり得なくも無いでしょう」

「死んでるなら死んでるで捜査を打ち切れるんです！ どっちつかずが一番困るんですから！」

？暗殺されたのか、彼の亡命目的だったのか分からない以上、USNA軍も捜索に人を割かねばならなかった。無駄骨を折る可能性もあるのだから、リーナも嫌になってしまおうだろう。

「でも、その……。今回の任務は名誉返上？のチャンスではないですか」

「名誉挽回、または汚名返上です。日本に行く以上、誤用で怪しまれてはいけませんよ」

？リーナこそ留学生扱いだが、シルヴィは観光客として日本に入国する。観光客の振りをするのであれば、日本語は不得手な方がそれらしいのではないか……。そう思ったが、彼女はそのような疑念を口にすることはなかった。

「とはいうものの、シルヴィの言う通りですね。気を取り直して、USNA軍の回収とヨツバに対する諜報活動をしなければ」

「そうですよ。前のような任務では無い筈ですから。学校に通えると思えばいいんです。リーナなら、きつと出来ると思いますよ」

？当主以外の情報が開示されていない四葉一族。それが、急に新たな血縁者が公開されたのだ。どのような魔法師か分からない為に、「シリウス」という最大戦力をぶつけての調査。本部は気合が入っているだろう。しかし、リーナにとっては少しでも学生生活らしさを味わえるものになればいい、とシルヴィは思っていた。

「貴女の言う通り、気楽に捉えましょう。……では、到着まで少し休みます」

？リーナはそう言うやいなや、即座に目を閉じた。既にもう寝息が

微かに聞こえる。シルヴィは、上司の為に毛布を取りに行った。

? 学食で皆と待ち合わせていると、やはり深雪がリーナを連れて僕らのテーブルへやって来た。ほのかも一緒だった。いつも彼女の隣にいる筈の雫が居ないので、何だか不思議な気分だ。

「リーナ、まずお皿を取って来ましょう」

「お皿……ああ、食べる物、という意味ね。分かったわ」

? 彼女達が配膳のカウンターへ向かっている間、留学生についてあれこれ言い合う。主に外見についてだ。

「あの二人が並ぶと迫力あるねえ」

? エリカの言う通り、深雪とリーナの美貌は並び立っていた。四葉の手で作り上げた人工的な最高傑作と対になる、自然が作り出した健康的で柔らかな美しさ。生まれに違いはあれど、人如きに優劣の付けられるものではなかった。

「随分、打ち解けているんですね……」

「向こうがフランクなだけじゃないかな。アメリカ人だろうか?」

「なあ、達也……。彼女、どっかで見たような気がすんだけど」

? 僕は慶春会に参加していたので直接見ではないが、達也達は初詣に一緒に行っていたのだろう。多分、その時にリーナと遭遇している筈だ。

「うわっ、古い手口」

「……そう言えばそうですね」

「あれっ、柴田さんも? 芸能人とかモデルさんってことは……無いよね?」

? 見覚えがあるけど思い出せない、というもどかしい状態の彼らを断ち切ったのは、深雪の兄を呼ぶ声だった。彼女はいつも通り、達也の隣に座った。他のメンバーもそれが分かっているの、最初から一つ席を空けてある。

「達也さん。こちらはアンジェリーナ・クドウ・シールズさん。もうお聞きのこととは思いますが、今日からA組のクラスメイトになった留学生の方です」

？達也の正面に座ったほのかが、リーナを紹介する。恋する乙女なのはいいが、如何にも露骨過ぎやしないか。そう思ったのは、僕だけではなかったらしい。

「ホノカ、こちらの方だけでなく、他の皆さんにも紹介して欲しいのだけど？」

「え、あつ、ご、ごめんなさい！」

？尤もな指摘に、ほのかは赤面した。代わりに深雪が、留学生の紹介を引き継いだ。

「じゃあ改めて。アメリカから来たアンジェリーナ・クドウ・シールズさんよ」

「リーナと呼んで下さいね」

？留学生——リーナは微笑みを浮かべて、こちらに会釈した。ここは僕の立場的に、先陣を切るべきだろう。

「四葉理澄です。僕のこととは理澄、と呼んで下さい」

「ええ、分かりました。よろしければ、敬語は無しにしましょう。同い年な訳ですし」

「分かった。よろしく、リーナ」

「ありがとう。よろしくね、リズム」

？名前の言い方が少々、”rhythm”に近かったが、僕は何も言わないことにした。他の面々も自己紹介を終えたので、食事を食べ始めることにした。

？そろそろ昼休みも終わるだろうという頃、達也がリーナにある質問をした。

「ところでリーナって、もしかして九島閣下のご血縁かい？ 確か、閣下の弟さんが渡米されて、そのまま家庭を築かれていたと記憶しているんだが」

「あら、良く知ってるわね、タツヤ。随分昔のことなのに。ええ、ワタシの母方の祖父が九島將軍の弟よ。……そういう縁もあって、今回の交換留学の話がワタシのところに来たみたい」

「じゃあリーナも自分から希望した訳じゃないんだ？」

？エリカがそう尋ねた途端、彼女は目を泳がせた。なんと答えるべ

きか、分からなくなってしまうたのかもしれない。母国語では無いことも、拍車を掛けているのだろう。

？ついでだから、ここであの質問をしてしまうことにした。彼女の名前についてのものだ。

「ところで、『アンジェリーナ』の愛称は『アンジー』だった気がするんだけど……。僕の勘違いかな？」

？僕の言葉に、彼女は明らかに動揺した。質問の内容自体は大したものではないが、シリウスとしての名前は「アンジー」だ。何かしら反応はしてしまうだろう。

「えっ、ええ……。確かに、『アンジー』が主流だけど、『リーナ』と略すのも珍しい程って訳では無いの。えっと、同じクラスに『アンジェラ』って子がいたものだから……」

「そうなんだ。名前が紛らわしくなってしまうからね」

「そうなのよ。それで慣れているのもあって、日本でも『リーナ』と呼んで欲しかったのよ」

「そうか。変な質問をして悪かった」

「いえ、気になるのも分かるわ」

？どうにか彼女は態勢を立て直したようだった。もう、先程までの動揺は見えない。とりあえず、表面上は。



？リーナが転校して来た日の夜。

？僕には彼女のことをどうでもよくなるような、厄介な問題が降りかかっていた。そのせいで、僕は部下を数人引き連れて、夜の繁華街を歩く羽目になっていた。しかも、今いる場所は神戸の南京町。東京からかなり離れている。

「こんな時に顧傑がお出ましとは……。どうするよ？」

「殺すしかないのでは？」

「そうなるよねえ……。知ってた」

？僕は葉山さんから、顧傑が日本へ密入国しているという情報を受

け取っていた。御当主様はフリーズスキャルヴを有効に活用しているようだ。

「自らが出向いてでも、一矢報いたってということなんだろうけど。迷惑な話だよ。そもそも、アイツ直接は関係ないのに」

「あんなガバガバ理論で八つ当たりされては、こちらでも迷惑である。老人というのは、どうも頭が固くていけない。」

「しかし、関西にまで足を運ぶことになるとは思いませんでした。やはり、横浜の方が縮小してしまったからでしょうか？」

「今の横浜中華街は、魔法師の台頭で有名無実と化した消防法を題目に区画整理が行われた。工事が終了すれば、元の面影はほぼ無くなる筈だ。それに、今後も輩が取り仕切ることに取り仕切るのだろうが、きつと昔のようにはならない。」

「そうだろうね。でも、南京町とはまたベタな」

「まだこちらには、大亜の作業員が大量にいますからね。それに、横浜から引き上げた輩も多いのでは？」

「これでは、二木も大変だろうな」

「二木家は阪神・中国地方を監視している。こんな場所が担当であれば、気が滅入るに違いない。」

「路地を何本が通った先の、ある雑居ビルの前で僕は立ち止まる。ハッキングした監視カメラの映像から、一時間前にこの建物に入ったことを確認しているからだ。」

「部下達が先にビルへ足を踏み入れようとする。だが、その際に僕は妙な違和感を覚えた。」

「待て、お前ら！ 止まれ！」

「咄嗟に彼らの前へ対物障壁を張った。精神への干渉が出来る為か、抽象的に得た何かを「匂い」で知覚することが僕には可能なのだ。」

「その予感はずしく、障壁に何かが当たる感覚がした。」

「……針？ いや、水か」

「？水の針を飛ばしてきたのは、きつちりとスーツを着込んだ男。年齢は50代くらいであろうか。顧傑が作り出した死兵だろう。それの相手は部下に任せ、僕はビルに向けて「破城槌」を発動。認識阻害

を使わせているから、少しの間なら周りも気づくことがないと判断したのだ。

？それと同時に僕達の周りを全方位無差別型の反射障壁で覆う。崩れたビルの瓦礫に巻き込まれないようにする為だ。鉄骨の間から、白髪で浅黒い肌をした人間の頭が覗いているのが見えた。

「死んでる筈だけど……。念のため、頭を潰しておくか」

？そう呟きつつ、「インビジブル・ブリット」を使う。この魔法は、戦闘ではあまり人気がないらしい。けれども、僕は非常に気に入っている。

？処理が楽な小さい魔法式だから、個人的にはかなり便利だと思う。吉祥寺真紅郎にはお礼を言いたいくらいだ。きつと、嫌がられるだろうが。振り返ると、部下も既に死兵を倒していた。

「これ、どうします？」

「持って帰るのも大変だし、置いて帰ろう。別に要らないし」

？早く東京へ戻らないと、リニア列車が最終になってしまう。僕達はそそくさと南京町を去った。

？この事件は明日、朝のニュースで報道されることになる。だが、僕はまだ知らなかった。この時に居た死兵が七草の手の者で、「名倉三郎」という名の男だったことを。



？森崎と僕は以前通りの関係に戻っている。会えば、それなりに話すくらいの仲だ。

？余談だが、昼食時にエリカから「理澄くんって一科に友達いるの？」と尋ねられたことがあった。その際に彼の名を出すと、その場にいた全員が微妙な顔をした。入学時のあのイメージが刷り込まれているらしい。

？僕らは、風紀委員会の本部にたむろって何故か将棋をしていた。今の僕は、完全に幽霊部員の為に暇を持て余す日も多い。それで彼が部活の無い日を捕まえて、何かしら暇つぶしをしているのだ。

「ていうか、森崎強過ぎじゃない？ 僕負け続きなんだけど」

「お前が弱過ぎるんだよ。他のゲームの方がいいんじゃないか？」

「そうだね……。オンラインで何かやってる？」

？僕は相当将棋の才が無いらしく、勝負はいつも向こうの勝ち越しだった。飛車角落ちでこれなのだから、酷い話だ。

？そこに、急に達也が本部へと入ってきた。彼は今日が当番だっただろうか、とシフト表を思い浮かべる。しかし、彼は備品のCADを手取ることなく、こちらへ近づいてきた。

「理澄、今話をしているか？」

？僕が返事をするよりも早く、森崎が達也に噛み付いた。これはもう条件反射レベルの速さだ。流石はクイックドロウの男である。

「ああ!? 何だ、司波達也!!! 今俺たちは忙しいんだよ！ 将棋界に残る一世一代の大勝負の最中だ。邪魔すんな！」

「……どう見ても、もう勝負はついてそうだが」

？盤上の駒を見て、呆れた様子を隠さない達也。僕としては、森崎のこの半ギレ芸は割と面白いと思う。

「何、達也？ 結構重要な話？」

「まあ、そうだ。七草先輩から聞いた話で」

「……じゃあ、そこで話すか」

？部屋の端にある、応接セットを指差す。本部内の片付けによつて日の目を見たものだ。今までは室内があまりにも汚かった為に、端に追いやられていた。

？僕は達也の話を聞くことに決めた。森崎には悪いが、また今度に埋め合わせをするということでも分かってもらった。射撃のオンラインゲームを始めるくらいなら、大したことでもない。

？ソファに僕らは腰掛ける。僕と達也を包む遮音フィールドを構築してやると、彼は単刀直入に用件を話しはじめた。

「朝のニュースは見たか？」

「南京町でビル倒壊？ あれは不幸な事故だったね」

「その現場で死亡した、50代の男二人。どうもその一人が七草先輩の護衛だったらしい」

？それを聞いて、昨日の光景が蘇った。水を針にして攻撃する魔法を使う魔法師を、原作知識で知っていた。あの時は気づかなかつたけれど。

？顧傑の敵は四葉。七草の敵も四葉。敵の敵は友達。簡単なことである。あまりにも良くできた展開だ。もしかしたら、御当主様も知っていて泳がせていたのかもしれない。

？しかし状況を鑑みると、スターズの行動に七草が混ざってくることもあり得る。彼らにしてみれば、僕が襲われた方が都合が良い。

？そうなれば、七草を片付ける仕事は僕に回ってくるだろう。考えるだけで憂鬱だ。

「へえ……。そうだったんだ」

？内心の様々な気持ちを押し隠し、僕はそう言うしかなかった。

「それで、休日に俺と深雪が七草先輩に同行して南京町に行くことになったんだが……」

「え？　なんで？」

「どうも護衛の死因を突き止めたらしい」

「そうじゃなくて。達也と深雪が一緒に行く理由だよ」

？彼らが七草先輩に気に入られているとはいえ、いくら何でも予想外だ。

「断れない状況まで追い込まれてしまった。俺だって不本意だ」

「そう、頑張つて。犯人が見つかるといいね」

？とはいえ、僕が殺した訳では無いので高みの見物と行こう。あの場でもう既に死んでいたのだから、僕は全く関係ない。

？しかし、話はそこでは終わらなかつた。

「それで、昨日何があったんだ？」

「……何だ、分かったの」

「そうじゃなきゃ、こんな話はしないさ。『破城槌』を使ったのか？」
？それもそうだ。納得した僕は、彼に昨日の顛末を話した。

「なるほど。先輩には上手く話しておく。そうでないと、叔母上に叱責されそうだ」

「どうだろう？　別にどっちでも良さそうだけどね、あの方は」

？御当主様は破滅型の快樂主義者なのではないか、僕はそう思う時がある。

？だから、四葉家がこの先も続いて行くのかどうか、時々不安に駆られる。心の底から四葉を信じ切れないけれども、ここ以外に僕は魔法師としての居場所を知らない。その不安すら、御当主様の掌の上なのかも知れなかった。

？二律背反な感情を、目の前にいる達也は感じているだろうか。いや、きっと彼には分からない。

? 国防軍防諜第3課。七草家の息がかかった部隊は案の定、スターズの行動に介入していた。このまま放っておいても、リーナは十分撃退できるだろう。しかし、七草の考えが分からない。

? それに、御当主様がUSNAの魔法師のサンプル回収を黒羽に命じたらしい。七草に取られる前にということだろう。それには、生きのまま拉致する必要がある。つまり、リーナと部下を分断し、彼女をそれなりに苦戦させる必要がある。そして、その役割が僕に回ってきた。

? 防諜第3課がスターズに攻撃を加えたところで、僕が暴れまわり、黒羽の幻術使いがリーナ以外を誘導するという寸法だ。そのまま、一生帰ることはないが。

? リーナが一高に転校してきて、数日経った夜。僕はスターズ達の交戦を、のんびりと上空から眺めていた。彼らも七草の妨害を受けつつも回収を進めており、今日で最後となる筈だった。それを狙って、こちらも御当主様の命を遂行することになっていた。

? タイミングを見計らって待つのも、正直暇だ。北斗も僕に付いてはいるが、こんなところでペラペラお喋りするのもよろしくない。

? 勝手に行動する訳にもいかず、僕は辛抱強く待ち続けるしかなかった。数十分後、ようやく精神干渉魔法が使われた気配がした。きつと、リーナも気づいているだろう。でも、行かせはしない。僕は彼女に向けて、閃光弾を投げつけた。そのまま、自分の飛行魔法を強制終了させる。勢いを殺さず、リーナ目掛けて着地しようとする。だが、僕は対物障壁によって飛ばされてしまった。慌てて、慣性軽減の魔法を掛けた。

? 一度リーナを放置し、僕は国防軍の方を片付けることにした。広域干渉魔法「叫喚地獄」を発動する。ここには情報強化を掛けた魔法師しか居ないはずなので、死にはしないだろう。とはいえ、火傷くらいはするかも知れない。

「一体、ヨツバが何の用だ？」

「？口調を意図的に変えているのだろう。ぶっきらぼうな話し方だ。「スターズも僕の事を知っているとは。何だか、有名人になっちゃったね」

「もう一度聞く。何の用だ？ 答えなければ、殺す」

「？魔法というのは、先に撃ったもの勝ちだ。だから、彼女の問いを無視して「叫喚地獄」を再び発動した。「仮装行列」で何処に居るのかは分からないが、少なくともこの近くにいるのは間違いない。」

「……答えは無しか」

「答えたよ？ 魔法でね」

「？余裕ぶった返しをしているが、内心冷や汗ものだった。僕の干渉力に打ち克てる情報強化。やはり、USNA最強の魔法師だけはある。」

「？リーナがCADを操作する。彼女の使う魔法を予測した僕は、「跳躍」で魔法の作用外へと離脱した。」

「？九島の血統は放出系魔法を得意としている。彼女の使った魔法は「ムスペルスヘイム」。気体分子をプラズマ分解し、更に陽イオンと電子を強制分離し、高エネルギーの電磁波を生み出す領域魔法である。」

「小癩な……！」

「黙って食らう馬鹿はいないでしょ」

「？情報強化と領域干渉をきつく掛ければ、耐え切れる可能性もある。しかし、そんな賭けに出る気にはなれなかった。」

「？魔法では時間が掛かると思ったのか、彼女は懐から銃を取り出した。流石にリーナが情報強化した銃弾は、僕にも跳ね返せない。だから、「インビジブル・ブリット」で銃身に圧力を掛けた。事象改変されたことを感じ取ったのか、彼女は銃を投げ捨てる。」

「？だが、僕はそろそろ離脱したかった。黒羽はもう仕事を終わっているだろう。大体、僕の仕事はリーナを殺すことではないのだから。その時、ポケットにもう一つ閃光弾を残していたのを思い出した。」

「？すぐさま僕はそれを投げつけ、空へ飛び立つ。もし明日、リーナ

に会ってしまったら、なんだか気まずいのだが、それは考えないことにした。



？ 次の日、幸運にも僕はリーナと遭遇することなく、放課後を迎えた。今日は風紀委員の当番だったので、本部へと向かう。

「おはようございます」

？ 謎ルールの挨拶にも、僕は既に適応してきていた。別に「こんにちは」だろうが構わない気はするが、これが伝統というものらしい。

？ 急に、千代田先輩と目が合った。正確には、向こうがこちらを見ていたのだ。目を逸らしたかったが、怒られそうなのでやめた。

「四葉くん、ちよつと頼みがあるんだけど」

「なんででしょうか」

？ 千代田先輩は一人の少女を連れていた。鮮やかな金髪が彼女の後ろから覗いている。紛れもなく、アンジェリーナ・クドウ・シールズである。

「シールズさん。貴方も知ってるでしょ。なんか、風紀委員の仕事を知りたいらしくて。案内してあげてくれない？ 当番だったよね？」

「え？ ……はい、分かりました」

？ 当番じゃないと言い張りたかったが、シフト表を見れば分かる話。さっさと諦めて、千代田先輩の頼みを引き受けた。

？ 僕が巡回をすると、毎回コソコソと逃げられてしまう。これはリーナを連れていても同様だった。

「……随分嫌われてるのね、貴方」

「アンタツチャブルとまで言われる、四葉だからね。仕方ない部分もあるよ」

？ 暫くの間、僕らは無言だった。巡回コースも終盤に近づき、人気がない階段に辿りついたところで、リーナがまた話し始めた。

「貴方、ステイツに来る気はない？」

「どうして？」

「ステイツは自由の国だわ。ワタシがクドウの血を引いていることも、あの地では大したことじゃない。ヨツバの貴方だってそうよ」

「……そりゃあいい」

「だったらー！」

？彼女は僕の返答に食いついた。しかし、彼女の言葉に応える気はなかった。

「でも、その先の僕の末路は？ 良くて軍の魔法師、悪くてモルモットだ」

「モツ、モルモットって……！ 我々は同胞にそんな扱いしないわよ！」

「本当に同胞とと思っているならね。そうとは言い切れないと思うけど」

？ぐつ、と言葉につまるリーナ。きつと、凶星だったのだ。

？普通の魔法師に比べ、四葉の魔法師は特殊な魔法を持つ。それくらい情報は流れているだろう。渡米したところで、研究者のいいオモチャになるのは見えていた。

「まず情報流出をするような真似をしたら、僕の口封じを兼ねてアメリカ大陸は火の海だよ。何なら、WW4でも起こるんじゃない？」

「一族一つにそんな力があるものですか、馬鹿馬鹿しいわ」

「それを実際にやるのが、四葉なんだ」

？僕はこの時、業火に包まれるステイツを幻視していた。その景色をそこまで悪くない、と思える辺り、結局僕も四葉なのだ。

「恐ろしい所ね。よくそんなところに居られるものだわ」

「……それで、何？ 僕をスカウトしたいだけで、こんなつまらない巡回に付いてきた訳じゃないだろう」

？そう言った途端、リーナが人差し指の先をこちらへ向けた。想子が爪先に集中していくのが見える。すぐさま彼女の手を握り上げた。

「危ないことするね」

「所詮は想子の塊。少々、銃弾に撃たれたレベルの幻痛が走る程度よ」

「銃弾に撃たれたレベルねえ……」

? 確かに大したことはなかった。痛いけれど、死ぬ訳じゃない。それくらい痛いのだ。

「手、離してくれない? 痛いんだけど」

「ああ……。ごめん」

「やっぱり痕になってる。乱暴ね」

? どうも僕は達也ほど力加減が上手くなかったらしい。

「多分、すぐに消えるよ」

「消えるとしても、レディにやることじゃないわ」

「リーナはレディと言うにはちよつと……」

「失礼ね! これでも、大統領のお茶会に呼ばれたこともあるんだから!」

? 僕は彼女の顔を見つめて、黙ったままだった。無論、わざとだ。この行動だけで、どれほどの失言だったのかは気付くだろう。

「……謀ったのね?」

「今のは、そっちの落ち度だろ」

? リーナは僕を睨みつけ、足先を踏んだ。容赦の無い勢いで、かなり痛かった。

「それを知って、ワタシをどうする気?」

「別に。ぶつちやけスターズなんてどうでもいいからね。こちらの庭先を荒らさない限り」

「……こっちはそんな訳にいかないのよっ! そうじゃなきゃ、どうしてワタシはここに居るの!」

? 返答に困り、僕はリーナの顔を再び見る。彼女の目尻が少し光っている気がした。それは見間違いでは無かったようで、彼女は手の甲で目を拭う。

「……スターズの総隊長はUSNA内で最強の魔法師が選ばれるのよ。ワタシも実際そうだし、それを誇りに思っている」

? 感情に任せて言葉を零すリーナ。僕は慌てて遮音フィールドを張った。校内の想子センサーには引つかかるが、後で職員室にでも手を回して消すしかない。

? そして、立ったままというのもおかしいので、階段に僕は腰を

下ろした。

「でも、最強の『魔法師』なだけなんだわ。ワタシは軍人としては最強じゃない。回収した兵士は奪われてしまいうし、連れてきた部下は失うばかり……」

？リーナの言葉に僕は驚いた。四葉が死兵も奪っていたことは知らなかったからだ。きつと、分家の何処かに命じていたのだろう。

「ワタシは魔法師として、自分の力を振るいたいだけだったのに……。どうして、こうなってしまったのかしら」

？彼女はもう泣いてはいなかった。けれども、話す声は悲しげだ。

？それを聞いた僕は思わず、彼女に救いの手を差し伸べたくなかった。

「……リーナ。君は軍人を辞めたい？ もし、君がそれを望むなら、僕は君の力になれると思う。四葉はきつと、優秀な魔法師を快く受け入れる」

「ワタシのスカウトは断った癖に？ ステイツと貴方の家の何が違うというの？」

「USNA軍全体から考えると、軍の魔法師の比率は少ない。けれども、四葉は違う。魔法が使える人間しか存在しないんだから。僕達は、君を『魔法師』として使える」

？衝動的な考えだったが、僕が彼女を戦力として迎え入れることは良いアイデアでもあった。

？リーナの存在は、僕が達也を殺す際の勝率をかなり上げるだろう。例えば、彼女が「ブリオネイク」で達也の身体を焼き、オートリレイズの瞬間に僕が「ワルキューレ」を使うのである。

？再成を使用した直後、達也は一瞬だけ魔法が使えなくなる。あの魔法は、彼自身の魔法演算領域を全て占有するからだ。

「……今のワタシには、『ヘヴィ・メタル・バースト』を使えない。使えるデバイスを持っていないから。その意味が分かる？」

「すぐに作らせるよ。四葉の本質は研究組織だ。君をもう一度、戦略級魔法師に仕立て上げるくらいは出来る」

？大口を叩いてしまったが、あまりそのことは確約出来ないもの

だった。しかし、FAE理論の再現程度であれば、四葉でも十分可能だろう。当分は、戦術級で我慢してもらおうしかない。

「どうする、リーナ？ 決めるのは君だ」

「……ただ単に、アンジー・シリウスを葬り去りたいだけなんじゃないか。そういう疑念を抱かずにはいられないの。貴方が裏切らないっていう保証は何処にある？」

「？もう半分以上こちらに心が揺れているだろうに、リーナはそんなことを言った。」

「確かにそれは無かったね。じゃあ、神にでも誓おうか」

「？そう言いつつ、僕はリーナの前に手を差し出す。彼女は躊躇いながらも、手を取った。」

星を呼ぶ少女編

1

? 2096年、2月下旬。USNAの小型艦艇が太平洋の真ん中で漂流しているのが発見された。

? この件は、実は四葉がやったものではない。今までコソコソと暗躍していた七草が僕の介入で焦り、強行したことだった。偶然の産物ではあるが、四葉に嫌疑が掛からなくなったので助かった。

? そして、USNA軍からしてみれば、リーナは行方不明な上に脱走兵扱いである。

? しかし、今回の一件でスターズが日本国内で動くのが限界であったこと。デバイスを持たないリーナは「ヘヴィ・メタル・バースト」を使えないこと。まだ16才の未成年で、そこまでの機密を持ち得なかったこと。

? これらの点から、一度リーナのことは放置する方向で話は進んだ。USNA国内では反魔法団体の活動も活発であり、そちらの対策に傾注する必要もあった。あとは多分、彼女を蹴落とした一派が何かしらの主張をしたのだろう。政治というのは厄介なものである。四葉が政治から距離を置く理由もここにあるのかもしれない。

? だから、今のUSNAは新しいシリウスの選定と、戦略級魔法に適性のある人材を探すことに躍起になっている。

? 一方、四葉に迎え入れられたリーナは、とりあえず巳焼島で生活を送ることになった。ブリオネイクこそ作らせている最中だが、脱走しようとする戦闘魔法師を倒すくらいは彼女なら造作でもない。案外、新しい生活を楽しんでいるようだった。

? 偶には島に顔を出していたが、僕は学校があるのでいつも行く訳にはいかない。だから、春休みには休暇の殆どをそこで過ごすことに決めていた。

? 巳焼島の研究施設に赴くと、そこには研究員達と談笑するリーナ

の姿があつた。彼女は僕を見て、こちらへと駆け寄ってきた。

「リズム、久しぶりね」

「久しぶり。気分はどう？」

「思ったより最高。何より食事が美味しいわ」

「？何もない島なので、モチベーションを保つ為に食事だけは高いクオリティを維持している。それは彼女のお眼鏡にも適つたようだ。」

「それは良かった。でも、いつも同じ所にいたら飽きてもくるでしょ。少し出掛けようか」

「いいわよ。でも、何処へ行くの？」

「旅行。深雪やほのか達にもう一度、会いたくない？」

「？僕の言葉に、リーナは目を丸くした。」

「えっ!? いいの?」

「いいよ。バカンスくらいしたって、誰も怒らない。四葉は身内に優しいんだから」

「？御当主様は、連れてきた張本人である僕にリーナの扱いを一任している。だから、別に問題は無い。それに待遇に不満を持たれても困るので、時には息抜きをさせた方が良かった。」

「？そもそも、「パレード」の術式を提供してくれたので、無碍には扱えないという理由もあつた。ただ、「パレード」は難度が非常に高い。今のところ、四葉の魔法師でも実戦レベルで使える者は居なかつた。しばらく、あの術式は研究材料として使われるだけになるだろう。」

「やった！ バカンスなんて、もしかしたら初めてかも」

「早く用意しておいで。待ってるから」

「？嬉しそうに駆け出したリーナが見えなくなると、僕は研究員達の方へ振り向いた。」

「どう？ リーナが来て何か変わった？」

「放出系の新魔法を開発中です。ブリオネイクの開発と同時進行で、新しいアプローチでのFAE理論の再現を考えようという話になりました」

「それは良い。データを纏めておいてくれる？ 御当主様にも報告しておくから。内容によれば、もう少し予算も増やしてあげられるか

も」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

？彼らが喜ぶのも無理はなかった。四葉の研究テーマは精神そのものの解明。その為、四系統魔法の研究は精神干渉魔法の研究よりは、多少予算が下りにくいのだ。けれども、これは軍事兵器となり得る魔法の開発なので、きちんと金を掛けるべき案件だろう。

「でも、簡単には聞いておこうか。一体どういうアプローチなの？」

「物理法則を離れる1ミリ秒以下のタイムラグで事象を改変する際、解決に結界ではなくタキオンを使おうというアイデアです」

？数人居る研究員のうち、一人が代表してそう答えた。

「タキオン？」

？何度か聞いたことのあるワードだが、詳しいことは知らなかった。空想科学の産物だと思っていたけれども、違うのだろうか。

「正確には、超光速で動く存在を仮想的に作成するというべきでしょうか。その意味では結界と近いですね。それによって、投射した魔法式を負の時間方向にずらすのです」

「現代魔法では時間逆行は不可能とされていた気がするけど……」

「確かに不可能です。けれども、それは質量体の問題で、量子情報体だけならば可能かもしれません。どの時間にも形を変えず存在している訳ですから」

？時間逆行こそ不可能だが、アイデアを介し過去の情報を読み取れる人間は存在している。彼の言い分は説得力のあるものだった。

「やり方次第では、擬似的に辻褄を合わせられる可能性が出てくるということか」

「はい。変数の一部に虚数を定義した仮想空間では、光速を超える物質も含まれるかもしれません。その中では、特殊相対性理論が崩壊しています。つまり、計算上は時間が逆行し、魔法式は過去に飛べるという訳です。……まだ仮説段階でしかありませんが」

？僕はこの仮説の全ては理解できない。けれど、感銘を受けたのは間違いなかった。これは魔法の転換点なのかもしれないのだ。

？もし、この方法が確立すれば、発動速度は評価基準として使えな

くなるだろう。フラッシュ・キャストよりも速く発動出来るどころか、「人間の認識限界」の壁を越えるものなのだから。

「……すごいじゃないか!! 何が何でも、予算を持ってこさせるよ! 武倉からも予算を幾らか出そう!」

「ええ!? よろしいんですか、理澄様! まだ実現するかも分からないんですよ!」

「結果はすぐ出なくてもいい。それは絶対に研究すべきテーマだ」

? ブリオネイクが作れそうな人間を四葉内から集めたつもりが、とんだ儲け物である。

? 何よりも速く魔法式を構築出来る方法を我々だけで独占出来れば、最悪十師族間で抗争が起きたとしても、イニシアチブを握ることが出来るだろう。魔法師の数では負ける七草に対しても、ほぼ心配は無くなる。僕は新しい魔法の可能性にワクワクしていた。

? ちようどその時、旅行の荷物を持ってリーナが戻ってきた。元々、今までの会話は彼女を待つ間の暇つぶしだ。偶然にも、それが有用であっただけである。

「リーナ、早かったね。じゃあ、行こうか」

「ええ。……ところで場所は?」

「媒島。北山家がプライベートビーチを持っているらしい」

「北山?」

「そっか、リーナは会ったことないもんね。北山雫、君と交換留学した子だよ」

? 研究所を出て、近くの港まで歩く。待たせていた船に乗り込み、媒島を目指す。彼女達にはリーナが来ることを言っていないので、良いサプライズになると思う。



? 媒島に到着すると、僕達以外のメンバーは全員揃っていた。彼らは家用ジェットに乗ってきたらしい。僕と共にリーナが現れたことで、彼らはかなり驚いていた。

?今は歓迎会を兼ねて、皆で軽食を食べながら話をしている。まだ昼を少し過ぎたぐらいだが、細かいことを言う人間はいなかった。「やっぱり数字付きナンバースって凄いのね……。リーナを連れて来れるなんて」

?ほのかがしみじみと呟く。

?リーナが四葉の身内となったとは言っていないので、僕がUSNAから連れてきたと思っっているのだ。本当のことを知っているのは、この中だと達也と深雪だけである。

?リーナにも彼らが四葉の直系、それどころか僕よりも御当主様と血が近いことは伝えてある。彼女は全く気付いていなかったらしく、シヨックを受けていた。

「だけど、千葉でもそんな真似はムリ。やっぱり十師族、それも四葉だからね」

「やっぱり魔法名家は伊達じゃない」

?エリカの言葉に雫も同意する。

「でも、一回来たことあったから上手くいっただけだよ。流石に面識の無い人は無理だろうね」

「いや、それは誘拐だよ」

?幹比古の何気ないツツコミに皆が笑う。

「でも、理澄くんは大丈夫だったんですか? 学校でもお迎えが来るぐらいですから、こうして参加するのも難しいと思っっていたんですけど」

「それもそうだよな。俺も何回か護衛の人見たことあるし」

?美月の疑問に、レオも言葉を重ねた。

?彼らがそう思うのも尤もだ。最初はガーディアンを連れては行きづらいと考え、参加するのを断る気でした。だが、リーナだけ島に行かせる訳にもいかないし、僕も同行することにしたのだ。

「多分、大丈夫。一応CADは待機モードにしてるけど」

?僕やリーナが死ぬような事態は深雪も危険なので、達也は絶対に何か行動を起こす。だから、ガーディアン無しでも数日滞在するのは支障はない筈だ。

「へえ……。私もCADは持ち歩いておこうかしら」

「何でオメーはそうも好戦的なんだよ」

「あら、何かあつてからじゃ遅いのよ。達也くんはどう思う？」

「別に理澄も常に監視されている訳じゃないからな。大したことは起こらないと思うぞ」

「お兄様の言う通りよ。そうじゃないと、七草先輩や十文字先輩も頻繁に襲われていることになるんだから」

「？ 勿論、彼らも襲撃に遭わないことは無いだろう。しかし、流石に日常生活も満足に送れない程では無い。それは、四葉である僕も同様だった。」

「それもそつか……。じゃあさ、そろそろ海行かない？ 泳ぎたい気分になってきたんだけど」

「いいね。最近は泳ぐこともなかったし。リーナも構わない？」

「もちろんよ！ ちゃんと水着だつて持ってきたんだから！」

「？ いきなり旅行に誘つたのに、何故か彼女はきちんと水着を用意していたらしい。巳焼島には泳ぐ為のビーチは無いが、勘違いして購入していたのかもしれない。」

「？ 僕は泳ぐ気にはなれなかったもので、バルコニーで休むことにした。達也と深雪も泳がないらしく、バルコニーに出てきた。」

「？ 하우스キーパーの黒沢さんが淹れてくれたアイステイーを飲みつつ、下で遊んでいる様子を僕らは眺めていた。リーナが大きな水鉄砲を抱えて、レオやエリカと水の掛け合いをしているのが見える。」

「何だか以前よりも、リーナは元気そうね」

「やつぱり、そう見える？ 軍人であることはリーナには合わなかったんだらうね」

「そうね……」

「？ 深雪はそう言いながらも複雑な顔をしている。軍人を辞めても四葉にいるのなら変わらない、と考えているのかもしれない。それは彼女の価値観であり、リーナはそう思わない筈だ。彼女は魔法師として、自分の望む生き方をしたいのだから。」

「達也はどう？ 前のリーナと結構立場が似てるでしょ。軍人として

生きるってどんな気持ち？」

「俺は完全な指揮系統に組み込まれている訳じゃないからな。精々助っ人程度だ」

「お兄様は助っ人などではないです！ 装備のアイデアも出していない、部隊の中心人物ではありませんか！」

「中心人物って……。深雪、大袈裟だな……」

？当時中学一年生の僕に、沖縄戦を回避する政治的な能力は無かった。大亜連合の艦隊を退けるために「マテリアル・バースト」を使用した達也は、独立魔装大隊に所属することになった。

？黒羽が開いたパーティには参加していたから、前日までは僕も沖繩に居た。しかし、それを止める術はやはり無かったのだ。

「達也も中心人物には違うと思うけど」

「あら、理澄君もそう思う？」

「思わない筈が無いでしょ。何を隠そう『14人目』なんだから」

「理澄。その話はやめよう」

？僕は肩をすくめる。近くに人はいなかったが、確かにこんなところである話でもない。気まずい雰囲気は漂い始めたところで、ほのかと雫がバルコニーに戻ってきた。

「達也さん！ 下でエリカ達がビーチバレーを始めるみたいですよ？」

「こちらに来ませんか？」

「深雪、それに理澄さんもおいでよ」

？せっかく招かれたのに、一緒に遊んだりしないのは人として問題がある。だから、僕達もビーチバレーに参加することにした。きな臭い話は、また今度でも良いのだ。折角の休みは、高校生らしく遊ぶべきだろう。

? 小笠原の海軍基地近くの南盾島には娯楽施設が存在する。媒島からもそこまで遠い訳ではないので、僕達はそこに遊びに行くことにした。島で泳ぐだけではつまらない、と雫が言い出したのだ。

? 女性陣が買物に興じている間は、残念ながらかなり暇である。待つだけというのも虚しいが、仕方ないことであつた。露店にジュースが売っていたので、何とは無しに僕達はそれを購入する。

「向こうの基地とは陸続きか。人工地盤続きじゃないんだな」

? 海を挟んで位置する基地を見て、レオが呟く。

「同じ軍の設備とはいえ、こっちは補給基地の余剰生産で作られているからね。同じようにはいかないよ」

「それもそうか」

? 幹比古とレオの会話を聞きながら、僕は思った。観光客も勿論来るだろうが、一番多いのは基地に詰めている人間だろう。彼らの為に娯楽施設を作っているとしたら、なかなか国防軍もホワイトなのかもしれない。

? そのことを達也に話すと、こんな答えが返ってきた。

「海軍は昔から船や潜水艦で長い間過ごすような作戦も多いからな。士気を落とさないようにするという考えは、陸軍よりも強いかもしれない」

「海軍のぐ飯は美味しいけど、陸軍は不味いって話はよく聞くもんね。あれは都市伝説なの? 実際どう?」

「一度だけ、陸軍系列の食堂で奢つて貰つたことがあるが……。そこまで旨くはなかった」

? 言葉を濁しているが、不味いのだろう。本当に美味しくないところは、カレーですら酷いのだ。陸軍の食堂はそういう感じに違いない。

「……あつ、呼んでるっぽい」

? 幹比古が遠くにいるリーナや深雪達に気づき、そう言った。端末を確認すると、時刻は12時。そろそろお昼時だ。

？皆が合流した後、島内のレストランで食事をすることになった。シヨツピングモールにありがちな雰囲気のお店だったが、料理は結構良くて満足だ。

？食後も会話を続けていると、急にエリカが「外の様子が変じやない？」と言い始めた。確かに街全体が殺気立っている。多分、「わたつみシリーズ」の一人が基地を脱走し始めたのだろう。

？劇場版である「星を呼ぶ少女」。原作そのものではないので、起くるかどうかは五分五分だと思っていた。でも、原作者が監修していたので、これも原作枠に入ったのかもしれない。

？僕としては、このまま島にいた方が厄介事に絡まなくて済むと知っている。しかし、折角の休みに事件には巻き込まれたくない、ということと皆の意見が一致した。それに対して、僕が反対するのもおかしい。そのため、飛行機に戻るようになってしまった。

？案の定、機内には脱走した少女が隠れていた。エリカが庇ってしまった以上、追い返す訳にもいかない。結局、彼女は別荘まで連れて帰ることになった。



？少女は「九亜」と名乗り、映画の内容通りの告発を僕らにした。漠然としていたが、海軍の研究所で行われている実験の内容だ。

？だが、僕には腑に落ちない点があった。横浜事変が起きていないので、国防陸軍は鎮海軍港に「マテリアル・バースト」を撃つてはいない。だから、海軍が焦る理由が無いのだ。一体何が、彼らを突き動かしたのだろう。「ミーティアライト・フォール」を使用したのでは無いことは、達也が呼び出されていないことから明らか。それなら、何故調整体の同期実験を行うのかが分からない。

「理澄くん、何とかしてココアちゃんを保護してあげられない？」

？ほのかが九亜を抱きしめ、僕にそう言う。彼女だけでない。雫やエリカ、美月も同じようなことを言った。

「……助けてあげたいのは山々だけど、御当主様が何と仰るか。それ

に、僕は最近無理を通したばかりだし」

「？別にリーナのことは関係無かったが、そう言ってさりげなく断る。」

「？彼女は元々、七草に助けを求めていた筈だ。今の時点で四葉が噛んでいると、ややこしいことになりかねない。去年の夏からずっと、四葉と七草は冷戦状態。僕の行動で事態を悪化させたくはなかった。『そうだよ。理澄くんもお家の全てを動かせる訳じゃない……。でも、ウチも無理だと思う。お父さんはそこまで魔法関連のツテを持っている訳じゃないから』」

「？雫はとても残念そうな口振りで言う。確かに北山家は最近こそ、魔法産業に力を入れている。だが、まだ足場を固めきってはいない筈だ。」

「リズムやシズクの家で助けるのが無理なら、ワタシ達の出来る範囲で助けてあげるっていうのはどうかしら。きっと、何かあるはずよ」

「？リーナがこれまでの話を踏まえて、新しい提案をする。」

「おつ、いいじゃねえか。どう思う、幹比古？」

「確かにいいかもね。例えば、魔法協会に連絡するとか。どれだけの効果があるのか分からないけど。達也には分かる？」

「魔法協会に伝えるのは良い手だろうな。建前上とはいえ、魔法師を使った非人道的な実験は禁止されている。もう研究所の外に出ている九亜なら、ちゃんと保護してくれる筈だ」

「それなら、良いじゃないの。……ココア、もう大丈夫だからね」

「？話が纏まりかけた矢先、九亜が蚊の鳴くような声で再び話し始めた。」

「あの……。わたし、だけじゃ、無いんです。わたし、と、わたしの、姉妹たちも……。助けて、ほしい」

「？僕達は顔を見合わせる。九亜の姉妹を助け出すには、研究所の中から出してやらねばならないからだ。」

「お兄様、彼女達を助けてあげられませんか？」

「……海軍の調整体魔法師を逃がすとなれば、海軍と直接事を構えることになってもおかしくない。それでもいいか？」

？達也が全員を見回して、そう言った。皆は口々に決意を述べた。
「皆がやるっていうなら、僕も乗るよ。僕に付いてるメイドにも調整
体の子がいる。他人事では無いからね」

「お家じゃなくて、個人に付いてるんだ……。すごいね」

？美月が驚いた顔をした。けれども、僕だけが特別というものでもない。深雪だって、一応達也が使用人のようなものだ。彼女自身があるような扱いをするのを拒否しているだけである。

？これからの道筋が何となくは整ったが、九亜をそのままにする訳にはいかない。彼女の身支度をしてやることになった。流石に病院服のようなものを着せたままでは、可哀想だからだ。

？夕食の時間になって食堂に行くと、先程からは見違える姿の九亜がいた。前髪を切って服を着替えた彼女は、会ったときよりもずっと可愛らしくなっていた。しかし、実際はこれが普通の筈だ。

「そういえば……。七草真由美さんは、何処にいらっしゃるのですしょう……？」

？服装をほのかや雫に褒められて照れていた九亜だったが、急に顔が初めて会った時のような不安げなものに戻った。

「七草真由美さん、ってあの七草先輩？ 十師族の……」

「はい、です……。盛永先生は、七草さんと、飛行機で会うように、と」
「そう言えば、あの滑走路で、オレらと同じ機体があったな。ひよつとして、それと間違えたんじゃないか？」

「このバカ！ それを早く言いなさいよ」

「無茶言うな!? 仕方ねえだろ、そんなときは気にも留めてなかったんだからよ！」

？エリカとレオがいつものように口論を始める。僕達は慣れたものだが、九亜は少し怯えた顔をする。彼らも九亜の変化に気づいたらしく、すぐに言い合いをやめた。

「達也、七草先輩と仲良かったよね？ 悪いけど、連絡してくれない？」

「分かった。……深雪、頼めるか？」

「かしこまりました」

? 深雪は端末を取り出し、部屋の端で通話を始めた。相手はすぐに出たようで、何か言葉を交わしている。数分で通話を終え、彼女は戻ってきた。

「明日には来て下さるようです。……ココアちゃん、もう心配しなくても大丈夫よ」

? 深雪の言葉に、九亜はようやく安心した表情を浮かべた。

? ちようどその時、僕の隣に立っていたリーナが小声で僕に話しかけた。

「……リズム、私がここに居るのがバレたらマズいわよね。明日は隠れておいた方がいいかしら」

「そうかもしれない。僕もそうするつもり」

「貴方も?」

「七草先輩はいいんだけど、家絡みで問題が起きそうだ。下手を打ちたくない」

? 七草先輩を經由して七草家にバレることが一番困る。リスクは回避しておきたかった。



? 次の日、七草先輩がこの別荘にやってきた。その間、僕とリーナは別の部屋で待つ。こういう事をしていると、別に悪いことをしている訳でもないのに何だか微妙な気持ちになる。

「それにしても……。調整体魔法師を9人も使って何を行う気だったのかしら。そんな大きな魔法って、まさか戦略級魔法とか?」

「直近の危機が迫ってる訳でもないのに、そんな無駄なことをするか……? わざわざ一つの魔法の為だけに、そんなたくさんの人間を使うのは勿体ないんだから」

「そうよね。魔法式を作るだけなら、大きなCADを使う必要なんてないもの。必要な時は作動実験の時よ」

「流石に戦略級魔法師は言うことが違う」

? そう言うと、彼女は僕を睨む。ちよつと失言だった。

「僕達が知らないだけで、もう魔法が使われてるとか? 戦略級魔法の実験だって、そのまま魔法を撃つ訳じゃないよね。魔法式を投射する前にキャンセルすればいいんじゃない」

「まあ、そうなんだけどね。でも魔法師の意識がはつきりしてないと無理よ。自我を失っているのなら、そのような細かい作業はできないわ」

「そうか……。つまり、単純作業ならそれでいい訳だ。彼女達を機械の一部として使うのなら」

「貴方、彼女達が何かの動力源になっているって言うの!?!」

? リーナの顔が分かりやすく青ざめた。僕の言葉の意味に気づいたのだろう。だから、僕はそれに対して頷いた。

「例えば、空母でも潜水艦でもいいんだけど。原子炉だと、核兵器を搭載してるって言われる可能性があるでしょ。だから、動力源に使えない。それなら、魔法師を使おうって発想になってもおかしくない」

? 僕の脳裏にはエンタープライズが映っていた。原作知識の限りでは、船内に調整体魔法師が幾人も詰められていた筈だ。リーナはそのことを知らないだろうが。

「画期的な新型船舶という訳ね。バレなければだけど」

「うん。きつと、国防軍内での海軍の発言力も上がるだろうね。予算だって増えるだろう」

? そう言いつつ、僕は島に行く前のことを思い出した。実際、魔法式の時間遡行研究は有用性が認められて、本家から予算が下りたのだ。

「でも、可能性でしょう?」

「そうなんだよね……。でも、戦略級魔法よりはあり得るよ。陸軍ならまだしも、海軍なんだから」

? そう話していると、急に部屋のドアが開いた。達也とエリカ、そしてレオが部屋に入ってきたのだ。

「ノックくらいしろよ」

「ああ……。悪い。それで、結局海軍基地に攻め込むことになったんだ

が。理澄、お前は どうする?」

「行くつもりにしていたよ。そうじゃなきゃ、想子センサーも監視力メラも切れないでしょ」

「とんでもないことするわね……。ま、助かるんだけど」

「エリカも行くの?」

「勿論。んで、このバカもね」

「バカってなんだよ、テメエ! バカって!」

「そうとしか形容のしようがないでしょ。バカ」

? 幹比古と深雪の姿は見当たらなかったが、二人は雫達の飛行機の護衛として付いて行ったらしい。九亜を乗せた七草先輩の機体とは別口とはいえ、狙われるのは間違いないからだ。

「基地までの足も僕が用意してる。多分、すぐ来るはずだ」

「ステルススーツも欲しいんだが、頼めるか?」

「用意させてる。いくらなんでも、エリカ達の分は無理だったけど」

「それは大丈夫だ。変装用の衣装がある」

? 大方、警備兵の服だろう。何処から手に入れてきたのかは分からないが、恐らくツテだ。

? 北斗に連絡を入れると、1時間もしないうちに船が来た。中に乗り込むと、エリカとレオが興味深そうに船内を見ていた。だが、特に面白いものはないと思う。

? 僕らは備え付けられた椅子に座ると、作戦会議らしきものを始めた。今から細かいことは考えられないので、簡単な役割分担を決めるだけだ。

「僕とリーナは入り口から正面突破する。達也達は どうする?」

「俺は適当なところから侵入する。エリカとレオは警備兵の振りをし、危険そうな奴を適当に排除してくれ」

「分かった。任せてくれ」

「任せて。やっぱり、ミヅチ丸を持ってきてよかったわ」

? レオとエリカはかなり頼もしい返事をする。武闘派だし、達也が連れてきたくらいだから心配する必要は無いだろう。

「ねえ、リズム。正面突破って……」

「僕に考えがあるから。ちよつとは騒ぎを起こさないと、目的がバレてしまうし」

？正面から堂々と入るのは、黒羽を始めとして四葉ではよく取られる作戦だ。精神干渉魔法に適性のある魔法師が多い故の方法ではあるのだが。

「じゃあ、それぞれの健闘を祈る。捕まると面倒だし、出来るだけ捕まらないようにしてくれ」

？達也が酷く無責任なことを言った。コイツが捕まることは無いだろうが、もし捕まったら絶対見捨ててやろうと、僕は決意した。

? 理澄達が島で船を待っていた頃、雫達を乗せた飛行機は海上を飛んでいた。追手を攪乱する為に、真由美と九亜の乗る飛行機とは違う航路を取っていたが、この飛行機も追跡をされていた。

「後ろから3機。恐らく戦闘機だ。武装を持たないプライベートジェット相手には、オーバーキル過ぎる編成だよ」

? 精霊を使った視覚同調で、周りに目を配っていた幹比古が言う。

「やっぱり付いてきたわね……」

「どうします、深雪さん?」

? 彼の問いに、深雪は頬に手を当て少し考える素振りをする。彼女は否定するであろうが、その仕草は真夜によく似ていた。否、深夜の取っていた仕草が二人に似ているのか。

「そうね……。吉田くん、お願いしてもいいかしら。私だと手加減が難しいので」

「分かりました。任せて」

? 深雪の物言いは、取り方によれば傲慢なもの。けれども、幹比古は特に気を悪くすることは無かった。

? 昔同様の才能を取り戻すどころか、今ではそれ以上の実力を手にした幹比古。それでも、彼は挫折があったからこそ、他人との力量差をきちんと測れるようになっていた。深雪と幹比古の間に能力の差はまだあることを、彼自身認識していた。

? とはいえ、微妙な力加減の調節は幹比古の得意とする所。面倒事を押し付けられた、という感覚は無い。

? ——逆に、深雪は彼に押し付けたのかもしれないが。

? 幹比古は呪符を取り出し、意識的に呼吸を整える。古式魔法は現代魔法よりも心理的な状況に左右されるからだ。

? 呪符に想子を流し、断片的な記述から自力で魔法式を構築する。自分を見失っていた頃には、このプロセスが非効率だと考えた日も彼にはあった。だが、現代魔法師と違ってCADに完全に依存しないのは強みだと、今の幹比古は思っている。

？幸い、下には海が広がっている。得意属性の水が大量にあるというのは、実力を存分に発揮できるということだ。

？魔法式が投射され、戦闘機に幾つもの氷礫が降り注いだ。現代魔法であれば、振動減速で気温を下げて水蒸気を氷の弾丸に変え、加速魔法で貫通力を増加させる術式。それが、「雹を降らせる」というフアジイな現象一つで定義させられるのだ。イメージが魔法を生む、ということが如実に現れるのが、古式魔法なのである。

？幹比古の攻撃を受けた敵機はすぐに旋回し、基地の方面へ戻っていった。

「……行つたみたい。戦闘機の割には、虚仮威しだったのかな」

？ホツと息を吐いて、幹比古はそう言った。もつと本格的な戦闘をする覚悟をしていたので、少々拍子抜けだったのだ。

？そんな彼に、美月が近づいてきた。極度の緊張状態から脱したからか、彼女は少し——いや、かなりエキサイトしていた。

「すごい、すごいです！ 吉田くん！ やっぱり、自分を信じて努力するって、素晴らしいことですよ。それがこういう素晴らしい結果に繋がったんですから！ あの、私ももつと頑張らなきゃって、思いましました！ すごく！」

「えっ、あの？ 柴田さん??？」

？幹比古の手を取って、ぶんぶんと振る。彼の顔が茹で蛸よりも真っ赤になっていることに、今の美月は気づけていない。それどころか、どんどんと幹比古に詰め寄るので、胸の辺りが危険なことになっていた。勿論、そのことにも気づいてはいない。

？その様子を見ながら、雫が深雪にそつと話しかけた。

「……美月の好感度ポイント、稼げてるね。吉田くん」

「というより、狙ってたんでしよう。深雪？」

「ほのかにはバレていたの。でも、よく分かったわね」

「そりゃあ、もう1年も一緒なんだから。深雪が悪戯好きってことも分かるもの。雫のこと程には分かる訳じゃないけど」

「……。なんかちよつと、照れる」

？そう言いながら、雫はほのかに勢いよく抱きついた。

「ちよつ、どこ触ってんの!? 深雪、たすけて!」

? ひとしきり騒いだ後に彼女達は、お互いに顔を赤くして微妙な距離を取る幹比古と美月の姿を確認する。予想通りの状況に、3人はクスクスと声を殺して笑った。



? 船は数分で南盾島の港に付けられた。事前に決めた通りに分かれ、僕達は行動を開始した。

? 南盾島と基地を繋ぐ橋を渡り、入り口の前に立つ。認識阻害の魔法のお陰で、僕とリーナの姿は見えていない。

「これ、ホントに見えていないのよね?」

? リーナが不安そうに周りを見回した。僕は北斗と長い付き合いなので信用しているが、彼女は気になるのも仕方ないかもしれない。とはいえ、ステルススーツに身を包んでいるので、姿を見られても身元が判明することはないのだが。

「大丈夫だよ。僕の部下で一番優秀だから」

? 彼は隠密能力だけで考えるならば、黒羽の魔法師をも凌ぐ。もしも敵に追い詰められた際、確実に僕を逃がすことが出来る能力こそが、北斗が僕のガーディアンである理由なのだ。

? しかし、魔法の効果もここまでだ。彼には手早く脱出する手筈する為の仕事任せないといけない。飛行デバイスを持っている筈の達也は、最悪置いて帰ればいい。でも、僕とリーナは速やかに逃げ出す必要があった。

「よし。北斗、やっちゃって」

「かしこまりました。では、理澄様とシールズ様はこのまま突入して下さい」

? 後ろをついて来ていた北斗が、CADに指を走らせた。その瞬間、門の向こう側にいる兵士の何人かが暴れ始める。それを止めようと人がだんだん集まり、騒ぎがどんどん大きくなっていく。

? これは、精神干渉魔法「ルナ・ストライク」による効果だ。幻影

によって意識を麻痺させ、感情を暴走させる魔法で、精神に直接ダメージを与えられる。今回は基地内に入りやすくする為に、この魔法を使わせたのだ。

「行くぞー！ 走れー！」

「ええっ!?!」

? 門を移動魔法で吹き飛ばす。自己加速術式を掛けて、暴れている兵士を突き飛ばしながら、基地の中へ入り込んだ。さらに混乱を招かせるべく、僕とリーナの魔法で敷地内を荒らしていく。僕が「破城槌」で道や倉庫を、リーナが「プラズマ・ブリット」で建物の上方を壊す。
? あらかた破壊し終えたので、僕達は研究棟へ急ぐ。建物内には、白衣を着た研究者が幾人も居た。侵入されたという状況が理解できないらしく、彼らはただ戸惑うだけ。倒したりしなくていいのは楽だ。だから、障壁を展開こそしていたが、散歩感覚で歩くことができた。

? エレベーターに乗り込み、加重魔法を使って無理に箱を動かす最上階まで上がる。途中でエレベーターが止められるのを防ぐ為だ。実験場に踏み込むと、達也は既にここにいた。その横には盛永医師もいる。思ったよりも早い。

「やつと来たか。遅かったな」

? 達也の後ろには、病院服を着た8人の少女。「わたつみシリーズ」の残りの姉妹達だ。

「えっと……。この子達を連れて行けばいいんだな？」

「ああ、頼めるか」

? 部外者の前で名前を出す訳にいけないので、何とも言葉足らずな会話になる。女装でもしてくれば良かったのだろうが、リーナの前であの格好をするのはちよつと嫌だった。

「多いわね……。どうやって連れて行くのがいいかしら」

「ここから屋上に出れるだろう? 慣性制御魔法を使って降りてしまおう。半分、頼んでいい?」

「それは無理よ! 四人なんて、制御したことが無いの!」

「じゃあ、僕が五人担当する。三人なら大丈夫?」

「任せなさい！ 絶対に着地も丁寧に制御してみせるわ！」

？この調子なら心配ないと判断し、リーナに三人任せることにした。

？その時、わたつみシリーズの内の一人が僕に話しかけてきた。

「……貴方を信用していいの？」

「君達次第だ。僕が助けたいと思っても、君達が拒むのなら仕方ない」

？彼女は一度、押し黙った。しかし、もう一度口を開き、自分の名を名乗った。彼女は「四亜」という名前らしい。

「四亜、僕達に付いてくる気はある？」

「信じてみることにする。そうじゃないと、なにも変わらないから」

？屋上に出て、下までの高さを確認する。そして、全員を飛び降りさせた。それに続いて、僕とリーナも飛び降りる。落ちながらも、分担して慣性制御魔法を掛けていく。数秒後、滑らかに地面に着地した。

「何とかなるものね……。それで、これからどうするの？」

「エリカ達と合流する。船もそろそろ着いてると思うし」

？僕は基地に行く前、エリカに船を呼ぶよう頼んでいた。千葉家はどちらかというと、七草陣営に属している。本当は、エリカも僕と連まない方が良さのだろうが、父親への嫌がらせになるから構わない、と彼女は言っていた。

？とにかく、わたつみシリーズを連れて行くには、僕の家より千葉の方が都合が良い。エリカとレオに連絡を入れて、僕達は千葉家の船の前で合流した。

「理澄くん、リーナ！ ちょうど良かったわ。いま、ウチの門下達が出来たところなのよ」

「助かった。本当にありがとう」

「良いのよ。こういうのはお互い様。気になるなら、また今度ケーキでも奢って頂戴」

「そうさせて貰うよ」

「それにしても……。レオは大丈夫なのかしら？ とても元気そうには見えないんだけど」

?リーナがエリカの側でへたり込んでいるレオに、そう問いかけた。確かに、彼はぐったりとしている。何か負傷でもしてしまったのだろうか。

「ああ……。別に怪我とかしてる訳じゃないのよ。なんか『腹減った』って言ったきり、ずっとこんな感じで」

「仕方ねえだろ……。さつき使った魔法、めちやくちや腹が減るんだ……」

?レオの声はかなり弱々しい。それを聞き、ようやく僕は合点がいった。

?硬化魔法「ジークフリート」。肉体を構成する分子の相対位置について外部からの変更を受け付けなくする魔法だ。ジークフリートの特性上、熱が遮られてしまう為に体温が恐ろしく低下する。それを身体から放出する熱で補うので、激しく体力を消耗してしまうのだ。

「レオ、お腹空いてるの? ビーフジャーキーならあるけど……」

?僕はスーツのポケットから、ジップロック式の袋を取り出した。

「貴方、何でそんなもん持つてるのよ」

「おやつ。食べようと思つて」

? ビーフジャーキーは軍用のもではなく、店でも売っている柔らかなめのもの。雫の別荘に行った時に持って行っていたのだが、食べる機会が無かったのだ。その為、今でも持ち歩いていた。

「頼む……。それを俺にくれ……」

?死にかけのレオに Beefジャーキーを渡す。彼はすぐさま、貪り食べ始める。余程、空腹だったのだろう。意図したことでは無かったものの、結果的に人助けになってしまった。

? エリカは、四亜達を確実に魔法協会に送り届けると約束してくれた。千葉道場の門下生も居るし、誰かが攻め込んできてもすぐに追い返せる筈だ。

? 船を見送りながら、追ってきた兵達が船に放つ攻撃を排除する。これも一緒に僕達が船に乗らなかつた理由だった。

「さて、そろそろ帰ろうか」

? そう言いながら、僕は飛行魔法を発動する。千葉家の船が見えなくなつたので、ここに居る必要はもう無いからだ。

「どこから帰る気?」

「とりあえず、飛んでくれる? そしたら、分かるから」

? リーナは半信半疑という顔をしつつも、黙って飛行デバイスを起動した。少し飛ぶと、地上にいる間には見えなかったヘリが視界に入る。武倉が所有する大型ヘリである。

「こんなのよく隠してたわね……」

「気づかなかつたろ? 僕のガーディアン魔法は一流なんだから」

? 僕がそう言うと、リーナは苦笑した。機内に入り、扉を閉める。それを待っていたかのように、ゆっくりとヘリは動き始めた。とりあえず、最初の行き先は巳焼島だ。

「てつきり、船だと思っていたわ。あの船はどうしたの?」

「あれは、基地の船を勝手に借りてきただけだよ。ウチの船に、エリカ達を乗せる訳にはいかないから」

? 僕の言葉に、彼女は「徹底してるわね」と言い、呆れた顔をする。「じゃあ、今タツヤを置いていったのもそうなの? でも、親戚なのよね?」

「いや、それはまた別の問題。大丈夫、達也は放っておいても死なないから」

「酷いことするわね……」

? 達也は放っておいても死なない。

? これは冗談でも無く、本当の話だ。だが、このことをまだ話すべきでは無い。話してしまったが最後、リーナは「お兄様」から逃げられなくなってしまう。

? 僕の運命に彼女を巻き込むという選択は正解なのか、僕は答えを決めかねていた。

? 実験場から「わたつみシリーズ」の少女達を理澄とリーナが連れて行くのを、達也は黙って見送った。ここに残っているのは、達也と盛永、そして、実験の統括者である兼丸孝夫のみだ。他の研究員はいない。達也が突入した際に、追い出してしまったからだ。

「積み上げてきた研究が、一夜にして崩れる気分はどうだ？」

? 彼は呆然と立ち尽くす兼丸に尋ねた。

「……まだ終わってはいない。『わたつみシリーズ』を攫われたただけだ。アイツらは再びここに帰ることになるだろう。何度やっても同じことだ！」

「……盛永さん。データのバックアップを取って貰えませんか。この記録カードに入れて頂ければ」

? 自分で尋ねたのに、兼丸の言葉を見捨てる達也。答えを期待してのものというよりは、雰囲気に合わせて質問だったからだ。悪役を演じるのも悪くない、と彼が思っていたかは、定かではない。

? 盛永がメインコンピュータを操作し始める。兼丸がそれを阻止しようとするが、達也によって特化型CADを突きつけられ、動きを止めた。

「……何をやる気だ？」

「調整体魔法師を使い潰すような研究は存在してはならない。この世から研究そのものを消してやるさ」

「調整体は遺伝子操作による、人工的に生み出されたモルモットだ！」

実験動物にして何が悪い！」

「生まれの経緯は別として、自我があるものは『人間』として扱うと決めておかねばならない。そうでないと、研究者は人の道を容易く踏み外してしまうのだから」

? 人間の定義とは何か。

? それは達也ですら、悩み続ける命題だった。正直なところ、彼も調整体がナチュラルな人間だとは言いが切れないと考えている。しかし、調整体が人間かどうか分からなくても、彼女は素晴らしい人だっ

たと達也は思う。

？彼の亡き母、司波深夜のガーディアンであった桜井穂波は調整体魔法師「桜シリーズ」の第一世代だった。そして、主人では無かった筈の達也を庇って死んだ。彼は、今でもそのことを後悔し続けている。自分に力が無かった故に、生み出された結果だからだ。

？けれども、彼女は自殺をしたかったのかもしれない。息を引き取る直前に彼女は、初めて自分の意思で決断出来たのだ、と達也に言った。深夜の道具としてでは無く、意思の持つものとしての死を選んだ。その事実を、否定することは出来ない。

？だからこそ、調整体魔法師を「人間」だと達也は信じるしかなかった。彼女の死を汚さない為にも。

「研究とはそういうものだ！ そうでないと、新たなものは生み出せまい！ 魔法の黎明期、この研究よりも更に非人道的な実験が多数行われていた！ 例えば、第四研のようになー！」

「ほう……。『第四研』か」

？達也は何だか笑ってしまいそうになった。人命を無視した実験を行う人物は、「第四研」という言葉を免罪符にしているのだ。それなのに、今この場で研究を否定している人物が第四研生まれだなんて、何という皮肉だろうか？

？彼は、兼丸の頭に突きつけたままだったCADの引き金を引いた。もう話すことは無いと判断したからだ。四肢に微小の穴を開けられ、その痛みで兼丸は意識を手放す。

「盛永さん、データは取れましたか」

「ええ……。こちらに入れておきました」

？記録カードを受け取り、それを達也はポケットにしまう。そして、実験場の殆どを占める巨大なCAD「計都」に右手を向け、跡形も無く分解してしまった。

「戻りましょう。この場所にはもう用は無い」

？研究棟を出た後、達也は出てきた建物にも「分解」を行使する。「計都」は消し去ったので、必要の無いことではあった。でも、悪役を演じ切った方がいいのでは、と柄にも無く考えてしまったのである。

？理澄とリーナは既に帰ってしまったらしい。だから、達也には南盾島から出ている交通機関を使って帰るしか方法は無い。ここをどうやって脱出するかを考えつつ、盛永を連れて基地内を歩き回る。その時、達也は見覚えのある人物を見つけ、足を止めた。

「……十文字先輩」

「司波か。どうしてここに？」

「観光に来ていたのですが、巻き込まれました」

「そんな格好をしているのにか？」

「これは借り物です」

？克人と出会った達也は、理澄が先に帰った理由を理解した。十文字が来る前に引き上げたかったのだろう、と。理澄は割とそういうことに頭が回る人間だと、達也は良く知っていた。

「そうか。それで、そちらは？」

「こちらは医師の盛永さんで、調整体のメデイカルチェックを行っていたそうです」

？盛永は丁寧に頭を下げた。それは仰々しいと言えなくも無かったが、普通の魔法師にとって十師族は敬意を持つべき存在だった。

「貴女が盛永さんですか。魔法協会から話は聞いております。十文字家当主代理として、私が貴女の身柄を保証しましょう。しかし、調整体魔法師の皆さんはどちらに？」

「千葉家のご厚意で先に島を出発しました。ここに居続けるのは危険だと判断しまして」

「なるほど。千葉もここに居たという訳か」

？克人は達也の装備の出所がエリカからだ、勘違いしてくれただろうだった。それは達也にとってプラスなので、そのまま黙っておく。

「家の船を待たせている。司波、お前も一緒に来ると良い。一般客用の交通機関では、なかなか帰るのが難しい筈だからな」

？達也はその言葉を聞いたことで、四葉と他の十師族の違いを認識できた。後輩とはいえ、他人の達也を自分の家の船に乗せる克人。逆に、友達にすら心を許してはいない理澄。

？四葉は身内だけを信用する。

？計算高く他人の信頼を上手く勝ち取る癖に、自分は毛ほども信頼しようとしてない理澄は、やはり四葉の人間なのだ。



？九亜と他の姉妹達は魔法協会で再会出来たらしい。行き場が決まるまで、彼女達は北山家で世話になっていると聞いた。下手にどこかに預けられるよりは、雫の家に住む方が人間らしい生活をさせて貰えるだろう。結果的には、飛行機を乗り間違えたことは良かったのかもしれない。

？一度は巳焼島に戻ったものの、僕はもう少しリーナに春休みを満喫させてあげたかった。なので彼女は今、僕の家滞在中だ。「パレード」を使えば、誰も正体は分からないからだ。しかし、買い物などに付いていく羽目に陥り、結構大変だった。それでも、リーナはとても楽しそうだったので、僕も嬉しかった。

？家のリビングで僕とリーナはティータイムをしていた。今は身内しかいないので、彼女は「パレード」を解除している。

？菓子が焼いたクッキーを食べながら、紅茶を飲む。彼女が用意してくれるものは、いつも美味しい。

？リーナはアメリカ人なのでコーヒー派かもしれないと思ったが、何も言わないので紅茶も嫌いではないのだろう。彼女は、はっきりと物をいうタイプなので助かる。

「……そういえば、あの子たちはどうなったのかしら」

「九亜達のこと？ 四葉が引き取ることになったらいいよ」

「そうなの？ 何だか、意外ね」

「僕も七草が面倒をみると思っていたんだけどね……。そこまで戦闘向きの魔法師じゃなかったから、敬遠されたみたい」

？それもそれで、可哀想な話だ。もちろん、四葉内でも一般的な基準に沿わない魔法師は、残念ながらコミュニティ内では居場所を獲得できないこともある。しかし、仕事になれば話は別だ。特定のものだ

けどとしても、魔法が使えれば「四葉の魔法師」としては生きられる。それが幸せかどうかは分からないが。

「ステイツも戦闘用魔法が主流だったわ。どこも同じなのね」
「まだ戦争が終わってる訳じゃないからね。殺す為の魔法の方が必要なんだろう」

？それに、実戦に使うものの方が工程が少なく使いやすい。魔法力の低い魔法師の使い道は、いずれ減っていく筈だ。だから、平和な時代は来ないのかもしれない。魔法師を魔法師のまままで維持したい、誰かの意思が介在——もしかしたら、スポンサー様の意向なのか。あり得る話だ。

「そう考えると、こっちは結構余裕あるの？」

「余裕がある訳じゃない。でも、画一的な技術ではなく、様々な分野に特化していききたいって考えはあるからね。——ところで、リーナ。一度、君を本家に連れて行きたいと思っているんだけど、どうかな？」
？そう言うと、リーナは目を見開いた。

？実は、まだ彼女は本家には行ったことが無い。僕を介して、巳焼島に行くことになったただけなのだ。

「……リズム、ワタシのこと好きなの？」

「何でそうなるの!?! いや、全然嫌いじゃないけどっ！」

「でっ、でも！ 日本で男性の実家に挨拶に行くって……。そういうことじゃないの」

「本家は実家じゃない！ 実家は別にあるの！」

？僕の実家は静岡にある武倉の屋敷だ。目立ってしまったせいで、最近は全く帰れていない。せつかくなので、春休み中に一回くらいは帰ろうと思った。

「……そうだったの。それならどうして？」

？彼女の顔は心なしか赤い。ずれた答えを返してしまったことが、恥ずかしかったのだろう。

「ブリオネイクが完成するまでは島にいくちゃいけないけど、ずっとあそこに居るのは嫌でしょ？ だから、好きな所で暮らせるよう許可を貰いに行きたいんだ」

「そこまで考えてくれたの？」

「リーナを日本に留まらせたのは僕だよ？ そりゃあ、生活に関しては責任を持たないと。どこか、住みたいなって考えてる場所とかある？」

「じゃあ、ここに住みたいわ」

「へえ、そうなの……。って、ええ!？」

「何も考えないで相槌をうってしまっただが、衝撃発言だった。

「何処でもいいんでしよう？」

「まあ、部屋は空いてるけど……」

「？リーナのしたいようにすればいいので、別に困りはしない。

「OKなのね！ それなら、早く許可を貰いにいきましよう！」

「今から!？」



「？旧長野県と旧山梨県の県境に四葉の村はある。人の姿は疎ら。それもその筈で、本当の本拠地はこの真下。そこには未だ密かに稼働している、魔法技能師開発第四研究所——通称、第四研があるからだ。」

「？僕達は離れではなく、本宅の方に案内された。そして、服を着替えさせられる。御当主様に普段着では会えないからだ。」

「ドレスコードがあるのね……。ワタシ、こんなタイプのドレスは着たことが無いのだけど」

「？リーナが着ているドレスは、肩を大胆に露出したデザインのもの。色は赤色で、上だけ見れば大人っぽかった。しかし、丈が膝辺りの長さで、しかもパニエで大きく膨らませている。その為、全体的にはどこか幼く見えなくもない。デザイナー的に、亜夜子の為に用意されていたドレスなのではないか。」

「大丈夫、似合ってるよ。着る人間が良いんだから」

「そうかしら……。ステイツでは殆ど長袖だし、もっと丈も長いよ。何だか、変な気分」

? 時間が時間だったので、御当主様と夕食を共にすることになってしまった。その為、食事のできる小さなホールに案内された。

「お待たせしてしまつて、ごめんなさいね。そろそろ、お食事をはじめましょうか」

? 僕達が入ってきた入り口とは違う扉から、御当主様が現れた。それに合わせて、椅子から立ち上がる。後ろに控えていた使用人が椅子を引いてくれた。

「格式張つたものではないので、遠慮せず楽しんでくれて構いませんからね」

? そう言われても、僕は緊張しか出来ない。リーナも少し顔がこわばっている。

? 料理はフレンチだった。味はとても美味しい。本家の料理人はやっぱり腕が良いのだろう。

? 食事の途中で、島以外に住んでも良いという許可を貰つたので、その後は気が楽になった。リーナも最後の方は慣れてきたようで、アメリカンジョークらしきものを飛ばしていた。僕はびつくりしたが、御当主様には意外に受けていた。最終的には、それなりに楽しい夕食を過ごせた気がする。こっちはヒヤヒヤして、非常に神経を使うものではあつたが。

「今日は楽しかつたわ。またいらしてね」

? 御当主様からこんな言葉を引き出したのだから、リーナは結構すごいかもしれない。口振りからして、お世辞では無きそうだった。

「来て良かったわね。ご飯も美味かつたし。来た時は、『HELLO』って感じで心配だつたけど。下が研究所だからなのね」

「見たらびつくりするよ。上の雰囲気とは全然違つて。近未来的な感じ」

「行つてみたいわ。軍の研究所は古かつたから」

「明日行こう。今日はもう遅いし」

? 夜遅くになったので、今日は泊まっていくことにした。武倉の離れには僕の部屋があるし、空き部屋はいくつかあるのでリーナも泊まれる。

？本宅から離れまでの道を歩く。外はもう真っ暗だった。

「……ワタシね、リズムに出会えてよかったわ」

「どうしたの、いきなり」

「今何となく、そう思ったのよ」

「……実は、僕もそう思ってるんだ」

「お揃いね」

「似た者同士なのかも」

？お互いの小指が触れる。手を繋ぐまで、そう時間は掛からなかった。

追憶編

1

? 達也と深雪は、真夜に呼び出されて本家を訪れた。内容は、新学期が始まる前の挨拶と四月に行われる花見の誘い。勿論、行く気は全く無い二人は失礼のない程度に言葉を尽くし、丁重に断る。真夜の方も、来ないことが分かっていたのか「残念ね」という一言で終わった。?
? 彼らは挨拶が終われば真っ直ぐ帰る気だった。しかし、帰り際に黒羽の双子達と出会ってしまい、黒羽家の離れにも顔を出すことになった。四葉本家がある村には、司波を除く各分家の離れがあるのだ。

? 文弥と亜夜子との話を切り上げて離れを出た時、本宅の方へ歩いて行く人影に達也は気づいた。

「理澄とリーナだな」

「あら、本当ですね。二人もご挨拶でしょうか?」

? 二人は達也と深雪に気づくことなく、本宅の中に入っていく。

「恐らくそうだろうな。時期的に考えても」

「……彼はお花見に参加しそうですね」

「四葉のイベントは殆ど行っているらしい。慶春会然り」

「分家当主達のお気に入りですもの。理澄君は」

? 深雪は自分の言葉がキーンになり、急に過去の記憶を思い起こした。

? 達也を兄ではなく、使用人として扱っていた頃。あの沖縄戦よりも前のことが、彼女の記憶領域から引き出された。



? 四葉一族の魔法師の中で、一番優秀なものが次期当主に選ばれる。

? わたしはこの先、自分がその地位に選ばれると思っているし、そ

れは自惚れでも何でもない。主観的にも客観的にも、わたしが優秀な魔法師であることは自明のことだった。使用人達は、貴女こそが次期当主だ、と無邪気に褒めそやす。

?でも、みんなが同じことを思っている訳じゃない。四葉の八つの分家。お母様を除いた、各分家の当主達は他の魔法師を推している。

?武倉理澄。

?わたしは、彼——理澄くんのが嫌いだ。別に何かされたって訳ではない。それでも、嫌いなのだ。普段からお母様が、わたしとよく比べる相手であることも理由にはあると思う。わたしが3月25日生まれで、彼が2月29日生まれ。産まれた時期が近いのだ。

?おまけに、理澄くんも「コキユートス」に似た、特殊な精神干渉魔法を持っている。魔法の実力は拮抗しているのだ。使用人達がわたしを持ち上げる理由は、現当主の姪という血の濃さ故なのだから。

「はあ……」

?窓の外を見ながら、ため息をつく。今日は黒羽家でホームパーティーが開かれるのだ。理澄くんは分家当主のうち、特に黒羽と新発田のお気に入り。きつと、今日のパーティーにも出席しているはず。考えただけでとても憂鬱だった。

「どうされましたか、お嬢様?」

?その上、こんな時に限って「あの人」は話しかけてくる。本当に、気分が悪い。

「わたし個人の問題です! 口を出さないで頂戴!」

?いつも、自分の言動が八つ当たりってことくらいは分かっている。だけど、謝ることはできない。だって、あの子は顔色一つ変えないでこう返すから。

「申し訳ありません」

?無表情のまま、そう言うだけ。わたしはそれすらも気に入らなくて、また怒ってしまう。何もかも最悪。どうして、こうなってしまったのかしら?

「あらあら、どうしたの。深雪ちゃん?」

?険悪な雰囲気を見兼ねたのか、穂波さんがこちらに近づいてき

た。彼女はお母様のガーディアン。普通は、女性には女性のガーディアンを付けるものよね。わたしのも変えてくれたらいいのに。

「少し、体調が良くなって……」

「まあー。じゃあ、ベッドの用意をしましょうか？ 黒羽様のパーティーまでは、まだ時間がありますから」

「ええ。そうしようかしら」

？パーティーを欠席させてはくれないらしい。まあ、穂波さんの一存で決められるものでもないのかも。

？短い時間でも眠ったら、ちよつと気分は楽になった。相変わらず、パーティーは行きたくないけれど。でも、さつきお母様がわたしに必ず出席するよう言ったので、どうしようもなかった。

？車に乗せられて、愛知県まで移動する。黒羽の本拠地はそこにあつて、息のかかったホテルもいくつかあるらしい。きつと、隠し部屋とかを作つてあるんだわ。そういうの、好きそつだもの。

？ホテルに到着すると、黒羽の使用人が会場ホールまで案内してくれた。わたしの後ろにはぴったりと兄がくっついていて。さつき怒つてやったからか、今はもう何も言わない。そういう態度も気に食わなかった。

「挨拶をしてくるわ。貴方はその辺にいなさい」

？そう言い放つと、彼は一礼をして壁の近くに立つ。卑屈な感じで、やつぱり嫌だ。

？ホールの中央に足を進めると、叔父様がこちらに向かつてきた。黒羽家当主の黒羽貢さんだ。

「やあ、深雪ちゃん。元氣そうで何よりだよ。深夜さんの具合はどう？ 今日も出席はできないと連絡があつたけれど」

「そこまで深刻に、体調を崩している訳では無いのですが……。やはり人の多いところは、とドクターストップがかかつてしまい……」

「お元氣な姿を一目見たかつたのだが……。それなら仕方ないね。深夜さんには、気にしないように言っておいてくれ」

？ここで話が終わつてくれればいいんだけど、そうはいかなかつ

た。私達に気づいて、三人がやってきたからだ。叔父様の子供である、文弥さんと亜夜子ちゃん。彼らは二卵性の双子なのだ。そして――武倉家の理澄くん。

？文弥さんと理澄くんはお揃いのゴシック調の上着。中世の人がいかにも着てそうなデザイン。足にはガーターベルトまで。身長が近いから、こっちの方が双子に見える。

？亜夜子ちゃんが着ているのは、レースやリボンがふんだんに使われた繊細な作りのドレス。だけど、ゴシック風なのは一緒。これを好んで着るのだから、わたしには黒羽のセンスがよく分からない。

？叔父様は奥様を早くに亡くしたからか、子供へ愛情をやり過ぎなほど注いでいる。それに、理澄くんのことでも自分の子供同然だと言って憚らない。そのことは、今から始まる自慢話が分かりやすく示してくれる。これがもう、うんざりする程に鬱陶しいのだ。

「亜夜子はピアノのコンクールでも優勝したけど、絵だってとっても上手くてね。大きな油絵を家に飾っているんだが、見る人が皆プロの作品と勘違いするくらい。娘が描いた、と言ったら目を剥いていたよ」

？それはお世辞ではないかしら？ 気づかないんだったら、別にいいだろうけど。

「文弥も凄いいんだ。バイオリンを弾いてもらうと、いつも聞き惚れてしまう。才能の片鱗を感じるよ。それに馬も乗れるしな。何でも出来るから、我が息子ながら空恐ろしい」

「そうですか……。素晴らしいですね……」

「そうなんだ！ 理澄も素晴らしくてね。箏曲の発表会に招待して貰ったんだが、会場の誰よりも輝いていた。あとは、弓道大会でも優勝していたよ。他の人が外してしまうような、難しい的でも難なく当ててしまうのだから天才だね」

？一応、ここでは家の違いを感じる。黒羽は何となく、洋風な習い事が多い。けれど、武倉は完全に和。習い事にお箏なんて、結構珍しい気がする。

？このまま放っておけば、いつまでも自慢話は続く。けど、多分そ

うならないとは思う。

「あの……。深雪姉さん、達也兄さんは何処にいらっしやるんですか？」

「来た。言い出した文弥くんは、そわそわした顔でこちらを見ている。一体、あの人の何が良いのかしら。」

「あれなら、あそこで待たせているわ」

「指差した場所へと嬉しそうに駆けていく文弥くん。その後を、亜夜子ちゃんと理澄くんが追いかける。」

「理澄くんは嫌いだし、文弥くんは何処か頼りない。亜夜子ちゃんはライバル心を剥き出しにしてくるから疲れてしまう。でも、三人揃って仲が良いのだけは、少し羨ましい。わたしには、何を考えているのかちつとも分からない兄しかいないからだ。」



「深雪は、横を歩く達也の姿を見上げる。今では、兄妹の仲は良好。これはとても幸せなことなのだ、と彼女は思えた。」

「どうしたんだ、深雪？」

「お兄様は、昔から亜夜子ちゃん達には優しかったんですね。文弥君も理澄君も小さい頃から、お兄様と仲良しでしたから。どんな経緯で距離が縮まったのですか？」

「亜夜子に魔法の使い方を教えてあげてからだよ。言わなかったかな？」

「それは教えて頂きました。ですが、友情というのは段階を踏んで形成されるものでしょう？」

「その言葉に、達也は「敵わない」と言っつて、深雪の頭を撫でた。」

「じゃあ、帰ったらその話をしようか」

「はい！ お兄様！」

「二人は軽やかな足取りで、四葉本家を去っていった。」



？戦闘訓練がある日だけは、達也は深雪の元を離れる。本家の地下に広がる第四研へと、彼は足を運んでいた。開始時間までは、まだ少し時間があった。その為、端末に落としておいた書籍データを読みながら待つ。

「えー！ 絶対姉さん騙されてるよ」

「そんなことないわよ！ あの人の人、わたしに魔法を教えてくださいましたから！ 理澄くんは信じてくれるわよね？」

「わかんないよ。僕が見たわけじゃないんだから」

？近くで話し声が聞こえる。同じように待っている人間がいるようだった。深雪と同じ、本家筋の人間達だ。

「だから！ わたしの魔法特性なら、こう使えば良いって言ってきたのよ。慣らすのもバラすのも同じだって」

「確かに姉さんは『極致拡散』を使えるけど……」

？文字を読むのをやめ、話し声に耳を傾ける。自分の話をされていると気づいたからだだった。

？以前、黒羽家の長女が魔法の使い方に悩んでいるところを、達也は見かけた。エレメンタル・サイトを持つ彼には、彼女の魔法が黒羽の家で活躍できる魔法だとすぐに理解できた。

？それを教えてあげたのは、親切心からでは無かった。疎まれてばかりの四葉内にも、一人くらい自分の理解者が欲しかったのだ。感情の一部が欠落した達也は、悲しむことも、悔しいこともない。それでも、誰かに肯定されたいという欲求はあるのだ。

「でも、深雪姉さんの為に姉さんを倒そうとしてるかもしれないじゃないか！」

「それは飛躍しすぎでしょ。いくらなんでも、亜夜子と戦ったりは絶対ないよ。もしそんなことになったら、僕が仇を討ってあげる。叔父様がいつも『大きくなったら、理澄がアイツを倒すんだぞ』って言うし」

「あれ不思議だよね。どういう意味なのかな？ 聞いても、はぐらかされちゃうし」

？黒羽の双子の他にもう一人、人物がいることに彼は気が付いた。「理澄」と呼ばれていることからして、武倉家の長男である武倉理澄だろう。

？理澄は深雪と同じ、ユニークで強力な精神干渉魔法を持つタイプの魔法師だ。詳細は知らないが、「ワルキューレ」という魔法名だということとは、達也も耳にしたことがあった。

「とにかく！ 悪い人じゃないのは確かよ」

「良い人かどうかも分からないけどね。深雪が深雪だし。あの子ヒステリックじゃん」

「深雪姉さんは、僕達のことあんまり好きじゃなさそうだもんね。それなら、尚更危ないよ。命を狙われてるかもしれない。訓練に託けて、殺しに来るかも」

「妹に問題があっても、兄は立派な人かもしれないわ。勝手な憶測で物を言うのはやめましょうよ」

？随分とあげすけな物言いをする、と達也は内心驚いた。深雪に対する、四葉の同世代の印象がそこまで良くなかったのも意外だった。小学校では深雪の容姿を褒めて、側に居たがる子供達が多い。校内にいる間は、取り巻きが四六時中引っ付いている。

？それなのに、彼らは深雪に阿るところか、対等な立場から見ている。そのことは、達也にとっては不思議な感覚だった。

？戦闘訓練はつつがなく終了した。

？達也は文弥達を殺そうと画策したりはしなかったし、別に手加減をすることもなかった。いつも通り、普通に動いただけだ。シャワーを浴び、汗と傷口の汚れを落とした達也は、帰る支度を始めた。その時、背後から声を掛けられた。そこには、亜夜子が緊張した顔で立っていた。その後ろには、文弥と理澄。

「何ででしょうか？」

「あの、前に魔法の使い方を教えてくれたでしょう？ 『極散』の使い方は父だけでなく、御当主様にも褒められたんです。わたしが黒羽の魔法師で居られるのは、貴方のおかげです。本当にありがとうございます」

？ 亜夜子に見えない角度で、文弥と理澄が顔を見合わせていた。彼女の行動は、予定外のものだったのだ。

「礼を言われる程のことでは」

？ そう言つて、達也はそそくさと立ち去ろうとする。亜夜子は行く方向を先回りして、彼の動きを止める。

「でも、文弥と理澄くんは貴方のことを信用できないみたいなの。だから、交流を深めたいんです。一緒にお茶でも飲みましょう」

「いえ……。ガーディアンの任務があるので」

「そちらには話を付けますから」

？ しばらく達也は言い訳を繰り返していたが、全て説き伏せられてしまう。最終的に、彼は帰ることを諦めた。

？ 亜夜子達に連れていかれたのは、黒羽が仕事用に使うホテルのラウンジだった。ケーキを食べながら、ポツポツと話を交わす。最初は亜夜子だけしか話していなかったものの、数十分もすれば打ち解け出した。

「すごいよ、達也兄さん！ そんなことまで分かっちゃうなんて！

最初、疑つててごめん」

「ほら、言ったじゃない。達也さんは凄い人なのよ。理澄くんも分かった？」

「確かに。起動式の内容を一瞬で読めるなんて、なかなかできることじゃないよ」

「知覚的なスキルの応用だからな。大したことじゃない」

？ 魔法の話でも謙遜を使う場面がある。あまり褒められたことなかった達也は、今日初めてそう知った。

？ 黒羽の双子と、武倉理澄。彼らは深雪とは違う。だから、彼らが達也の感情を引き出すことは決して無い。

？ それでも、この日が彼の思い出の一つになったことは確かだった。

入学編Ⅱ

1

? 春休みも終わり、新学期が始まった。

? それに伴い、リーナは巳焼島に帰ってしまった。けれども、数週間後にはブリオネイクを持って戻ってくるらしい。相当、研究者達を急かしたのだろう。彼らの苦悩が偲ばれる。

? 僕はといえば、風紀委員会から部活連に移籍していた。十文字先輩が僕の枠を作って、卒業していったのだ。「十文字」が抜けた後の秩序維持の為に、「四葉」を使おうという魂胆らしい。現部活連会頭の服部先輩は、僕のことを快く受け入れてくれたので良かった。

? 適当に人を引き抜いていいと言われていたので、森崎と一緒に連れていくことにした。風紀委員は、僕と達也が抜けた穴に幹比古と雫が入る筈だからだ。原作では辞めるに辞められず、苦勞をしていたに違いない。彼は射撃部だし、部活連ではのびのび活動できるだろう。

? 今年の総代は原作通り、七宝琢磨だった。彼は僕の言葉に乗せられて、少し前に芸能界デビューをしていた。しかし、受験勉強はちやんとしていたようだ。まあ、馬鹿にされたら嫌だからかもしれない。結構、努力家なのではないか。

? そして、生徒会の誘いを蹴った彼は部活連に入った。調子に乗ってそうなので鍛え直したい、と服部会頭が言い出したので、勧誘したのだ。

? 確かに琢磨は、魔法科高校で早くもスター扱いだ。師補十八家な上に、新入生総代。その上、芸能活動をしてもらえるのだから。

? 早いうちに鼻をへし折っておかないと、碌な大人にならないだろう。なので、彼の提案には幹部は皆賛成した。

? だが、今年度で一番特筆すべきことはクラス替えだ。何でも、僕と同じクラスの生徒達の親からクレームが来たらしく、大幅なクラス改編が行われた。「四葉」が怖くて嫌だということである。今年からは魔工科も出来たので、口実を作りやすかったのかもしれない。

? B組のメンバーは殆ど入れ替わり、森崎を始めとして一科と二科の区別をハッキリさせたがるタイプの人間ばかりが集まった。そういうタイプであれば、僕のことについて文句は言わないだろうと、職員室は判断したようだ。

? 達也を持ち上げて深雪の機嫌を取る派閥に対して、なし崩しに僕は選民思想を持つ者達の派閥を率いることになってしまった訳である。端的に僕の派閥は「四葉派」と呼ばれていた。深雪達の方も安易に「司波派」だ。

? 半年後の生徒会選挙では、僕と深雪が死闘を繰り広げるというのが専らの噂だ。お家騒動みたいだな、と少し思ってしまった。実際、間違ってもいない。

? 一番可哀想なのは、運悪くB組に編入してしまった幹比古。彼は「司波達也が送り込んだスパイ」という、あらぬ疑いを掛けられていた。

「達也くんがミキを送りこんだ、だなんて。バカバカし過ぎ。一体、何処の誰が言い出したのかしら」

? いち早く噂を耳にしたエリカが、昼食時にその話題を持ち出した。かなり怒っているようで、鋭い眦がいつも以上に吊り上がっている。

「でも、達也さんがそう言われるのは分かるかも。出来ないことは無さそう」

「雫! ……そんなことないですよ、達也さん!」

「やっていないよ。それに、理澄は今も同じテーブルに居るんだぞ。どうしてそんなことを考える奴が現れるんだ?」

「リーダーが敵の中枢に乗り込んで、と思っっているみたい。僕は深雪の弱点を堂々と探っているんだって」

? 物凄く僕のことを好意的に見てくれている、という点では、派閥というのも悪いものではないのかもしれない。

「じゃあ、深雪も向こうに乗り込んで。威嚇ついでに凍らせてきたら?」

「いやね、エリカ。私はそんなことしないわよ。何の得にもならないじゃない。お兄様が傷つけられているならまだしも」

？達也そのものがターゲットになることはこの先、まず無いだろう。クラスメイト達が犠牲になる未来は、一応回避されたようだ。

「だがよ、それよりも幹比古、お前が心配だぜ。苛められたりしてるんじゃないねえか？」

「確かにそうです！ 吉田くん、大丈夫なんですか？」

「それがね、完全に逆で……。とてもチャホヤされるんだ……。なんか怖くてさ……」

？それを聞き、僕を除く皆が不思議そうな顔をした。

「ああ、それ。僕が丸め込んだんだ。今必要なのは二科生からの支持基盤だから、実力のある奴は褒め称えておくべきだって」

「君のせいかな！ 何なんだよ！」

？幹比古は、逆に恐怖を感じていたらしい。とはいえ、迫害されるよりはずっといい筈だ。彼には忍耐の時なのだろうが、頑張つて欲しいものである。



？新歓期間も無事に過ぎ、穏やかに日常は流れてゆく。

？僕の家にはリーナがやってきたので、家具を一緒に買いに行ったりもした。御当主様は平日の昼間に動ける四葉の魔法師として、彼女を使っているようだ。リーナはブリオネイクを振り回しつつ、仕事をこなしていた。楽しそうではある。

？しかし、学校内では問題が起こっていた。琢磨のことである。彼は七草への執着が無くなった訳ではない。恒星炉実験が行われていなくても、琢磨と香澄の衝突は起こるべくして起こったのだ。

？やはりと言うべきか、話し合いは平行線を辿った。しかも、話はかなり飛躍してしまったのだ。

？七草と七宝の二家が雌雄を決すというよりは、四葉派と司波派の戦いという、よく分からないものになっている。姉が所謂司波派だっ

たと言う理由で、そちら側に組み込まれてしまった香澄は大迷惑だろう。泉美は深雪の派閥に入れて喜んでいたが。

？結局、模擬戦によつて決着を付けることになった。立会人は、部活連から僕と森崎。風紀委員会からは幹比古と雫。生徒会は深雪とほのか。審判は達也である。

「人数では僕達が圧倒的に不利だよね……。別にいいけどさ」

「確かに司波は卑怯だな。中立の奴も出せよ。風紀委員の方にはいるだろ」

「教職員推薦の奴？ アイツも困るでしょ。ここに来てアウエーじゃん」

？僕達の会話を小耳に挟んだ深雪が、こちらを睨みつける。目を逸らすのも変なので、手を振っておいた。そもそも僕は達也やエリ力達と仲が良いのであつて、深雪とは折り合いがそんなに良くない。このことも、派閥の存在に説得力を持たせているのだ。

？模擬戦の結果はやっぱり引き分け。達也が「術式解散」を発動して、試合を止めたのだ。

？だが、琢磨は納得がいかないようで、達也に詰め寄っていた。深雪が苛つき始めているのが、何となく分かる。演習室の温度が少しずつ低下しているからだ。このままでは、收拾が付かない。僕はため息をつき、前へと踏み出した。

「琢磨、僕と模擬戦をしよう。それなら良いんだろう？」

「ですが、それじゃ……！」

「僕に勝てたら、お前を次の選挙に出馬させるよ。達也のジャッジが気に入らなかつたんだつたら、森崎に審判をして貰う。それで文句は無い筈だ」

「……分かりました」

？不承不承という風ではあつたが、彼は頷いた。

「達也、演習室取れる？」

「可能だが、別日の方がいいんじゃないか？ ミリオン・エッジはCADを必要としない代わりに、媒体に魔法式を留めておかないといけない。事前準備が要る筈だ」

「そっか。じゃあ、明後日でいいよ。今日はもうお開きにしよう」

？本人達の与り知らぬ所から始まった派閥争いは、僕が巻き込まれるに行く形で収束した。元はと言えば、僕が琢磨を調子に乗らせまくったのもある。落とし前はつけなくてはならなかった。



？二日後、演習室には理澄と琢磨に審判の森崎、そして幾人かのギャラリーが集まっていた。ほのかや雫、エリカといった、いつものメンバーだ。深雪と達也の従姉妹ということになっている水波に、服部や桐原といった上級生の姿も見える。

「エリカ達も来たのか。それに先輩方も」

？不本意ながら、再び立会人を務めている達也がエリカに声を掛ける。身内ばかりだとおかしいからと引き受けさせられた方がいいが、見物人が多過ぎて存在意義を為していないのだった。

「理澄くん、強いんでしょ？ 見てみたいじゃない」

「こういう時でないと、四葉の戦いは見られないからな。戦い方が良ければ、今年のモノリスメンバーに推薦しようと考えてもいる」

「ぶつちやけた話、四葉が目当てで見にきたんだ。七宝には悪いが」

「一応、模擬戦ですからね……？」

「固いこと言うなや、司波兄。模擬戦なんざ部外者からすりゃあ、ちよつとしたショーに過ぎねえ。それはお前も分かってんじやねえの？」

「それはそうですが」

？特に接点の無かった筈の桐原と達也がこうして気安く話しているのには訳がある。

？一年前、桐原は片思い相手の壬生紗耶香に告白をした。だが、予想もしなかった相手からのアプローチに混乱した紗耶香はあろうことか、以前連絡先を交換しただけの関係でしかない達也に相談したのである。そして、話を聞き付けたエリカに場を引つ掻き回された挙句、達也と桐原は模擬戦をすることになった。

？彼女曰く、「戦いを見て、格好良かった方と付き合えばいいじゃん」ということだった。深雪が聞けば怒りそうな発言だが、最終的に紗耶香は桐原を選んだ。彼は達也に負けてしまったのだが、きつと彼女の琴線の何処かには触れたのだ。

「幹比古もか？」

「折角だからね。戦い方とか、何か参考にさせて貰いたくて」

？幹比古の言葉に、他のメンバーも頷く。水波も部活を休んでまで来たのだから、気になったのだろう。深雪だけが、達也が居るから付いてきたのだ。彼女は、理澄も琢磨もどうだって良かった。

？森崎が審判らしく、注意事項などを読み上げる。それを見たエリカが、小さな声で「ホントに理澄さんと仲良いのね、アイツ」と呟いていた。達也も内心、それに同意していた。

「それでは、模擬戦を開始する。……3・2・1。始め！」

？そう告げられた瞬間、理澄の姿が消える——その刹那、彼は琢磨の背後に回って蹴りを入れていた。

「自己加速術式……じゃないな」

「今のは擬似瞬間移動でしょう。得意だとは知りませんでした」

？理澄のそれは、亜夜子の魔法ほど完成度は高くない。それでも、琢磨の意表を突くには十分だった。

？そう言っている間にも、彼はCADを操作している。すぐさま圧縮空気弾が作り出され、転がったままの琢磨に襲いかかった。咄嗟に彼は障壁を張って防御する。それなのに、琢磨の身体には痛みが走っていた。

『エア・ブリット』と併用して、『ファントム・ブロウ幻衝』を使っているな。圧縮空気弾を防がれることは予測していた、ということか……」

「理澄は手を抜いているんでしょね。彼の干渉力なら障壁を突き抜けられた筈ですから」

「そんなに干渉力が強いのか？」

「作用範囲は深雪よりもずっと狭いです。でも、その分干渉力は化け物じみていますからね」

？形成不利と見たか、琢磨は早くも「ミリオン・エッジ」を出して

きた。本の半分を飛ばしてきたのだから、余程倒せる自信があったのだ。しかし――

「――領域干渉!？」

? 理澄の作用フィールドに入った瞬間、硬化していた紙片は元の紙に戻っていく。

「司波兄、お前の言った通りだな。七宝の切り札がまるで効いていない」

「様子見をすべきでしたね。とはいえ、彼はベクトル反転術式も得意ですから、群体制御系の魔法は効果が薄いんですが」

? 足元に溜まった紙片を一気に発火点まで温度を上げて、理澄は燃やしてしまった。一見、無駄な工程だ。そんなことをせずに、琢磨へ攻撃魔法を仕掛けても良いのだから。

「あれ、燃やさなくても良かったんじゃないの?」

? 実際、桐原が尤もな疑問を呈していた。

「いや……。それは違うぞ、桐原。四葉は『ドライ・ブリザード』を使う気なんだ!」

「鋭いですね、服部先輩。アイツは紙片を燃やす前に、収束魔法で酸素を集めていましたから」

「完全燃焼させて、大気中には少ない二酸化炭素を効率よく得る為か……」

? ドライアイス弾は琢磨の足元に着弾し、気化した二酸化炭素が周辺に霧を生む。

「コンビネーション魔法……」

? 霧を見た幹比古が、思わずそう呟く。勿論、服部も頷いている。

? 戦闘中の琢磨も同じことを考えていた。それくらい、服部の使用するコンビネーション魔法は魔法科高校生には有名なのだ。その為、琢磨は「ミリオン・エッジ」をもう一度放った後、次の攻撃に備えて「避雷針」を発動する。以前に理澄が「スパーク」を使っていた所を見たのも、その判断に正当性を与えた。

「そう簡単な話でも無いと思いますが」

? 達也だけは、そう考えていなかった。理澄は、そんな単純な作戦

を立てないと分かっていたからだ。

？その言葉通り、琢磨の身体に無数の紙片が取り付く。

？加重系魔法「フエザー・ラッシュ」。擬似瞬間移動で羽や紙片などの柔らかいものを飛ばし、対象に衝突する瞬間に慣性軽減を解除する魔法だ。飛翔物は柔らかさを保ったまま鞭のようにしなり、相手にダメージを与える。

？予想に入れていなかった攻撃によって、琢磨の魔法制御が崩れた。

？そこへ、理澄が「スパーク」を発動。ドライアイスの霧で湿った衣服を伝って、電流が流された琢磨はそのショックで床へと倒れ込んだ。

「勝者、四葉理澄」

？琢磨が戦闘不能になったのを確認し、森崎が淡々と結果を述べる。

？エリカや幹比古達が理澄の側に集まってきていた。勝利を称えているのか。もしかしたら、何か聞きたいことがあったのかもしれない。

「四葉の奴、なんか意外だな。司波兄とはまた違う、性格の悪さっていうか……。もつと、高等魔法を使って圧倒するタイプだと思っていたぜ」

「確かにな。擬似瞬間移動も工程こそ多いが、魔法としての難度はそこまででもない。他に使った魔法も基本のものだった。手の内を隠しているのか？」

「それもあるんでしょうが……。そもそも、理澄は裏をかくような戦術が持ち味ですから。服部先輩とは方向性は違いますが、策士ではありませんよ」

？これをきつかけとして、理澄は今年のモノリス代表に選ばれることになった。普通は魔法戦闘を行うクラブに入っていないと、選手選考の際に外されてしまうのだが、模擬戦をした為にリストに入れられてしまったのだ。これは、彼にも想定外のことであった。

「理澄くんの勝利を祝って……。乾杯！」

？ 放課後、僕の戦勝会という名目で皆が「アイネブリーゼ」に集った。ジューズの入ったグラスが当たる音が、店内に響く。模擬戦を観に来ていなかった、泉美と香澄も同席していた、

「模擬戦で勝ったって言っても、上級生が下級生を甚振っただけだからね。なんだか、後ろめたい気はするけど……」

「そんなことはいいいじゃない。なんか新歓の時も調子に乗ってる感じで、鼻についたもの。ガツンと先輩がシメてやるのも大事よ」

「前から面識はあるからこそ、僕もそこは気になっていて。少しでも変わろうという思いがあれば、彼も伸びると思うんだ」

？ そうでないと、彼を七草潰しに利用するには心許なさ過ぎて怖い。あと少しくらいは、思慮深さが欲しいのだ。

？ 深雪と泉美が顔をそっつと見合わせていた。琢磨が成長するとは思えない、と考えているのか。何だか悔しいので、絶対に彼を使える人材に育て上げてみせると決意した。

「でも、模擬戦を見れて良かったです。あまり強い魔法を使わなくても、あんな風に圧倒出来るんですね。私の魔法は戦闘向きじゃないんですけど、希望が見えてきたっていうか……」

？ 僕の斜め前に座っているほのかが、そう言った。光波振動系が得意な彼女は、不意打ちには滅法強いが、完全な戦闘となると厳しい部分があるからだろう。

「逆にどうして高等魔法を使わなかったんだい？ それなら一発だったと思うんだけど」

「私もそう思う。理澄くんは、わざと戦闘を長引かせている感じがした」

？ 幹比古が僕にそう尋ねる。雫も同じことを思っているらしかった。でも、僕は自分で自分の戦闘を声高々に自慢するのは苦手だ。何と答えようかと迷っていたら、達也が助け舟を出してくれた。

「実は、理澄も高等魔法を使っていたんだぞ。気づいていなかったの

か？」

「えっ、そうなの？」

？その問いかけに頷いた達也は、模擬戦についての解説を始めた。
「紙片を燃やす前に酸素を集めていたが、あれは『酸素空洞』オキシゲン・チェンバーという高等魔法だ。しかも、あの時は紙の発火点まで瞬時に上げる為に振動系魔法も併用していた」

「でもよ、達也。服部会頭は基本的な魔法しか使っていない、って言うてなかったか？」

「あれは俺の言い方が少し悪かった。『収束魔法で酸素を集めた』と言ってしまったからな。勘違いをされたんだろう」

？単に収束魔法で酸素を集めるのと、『酸素空洞』オキシゲン・チェンバーで酸素を集めるのは少し違うのだ。達也が気づいていたのなら、嬉々として説明を続けてくれるだろう。正直な話、とても助かった。

「指定したエリア内の気体を選び分けて、酸素のみ濃縮して高濃度の酸素エリアを作成するのが『酸素空洞』オキシゲン・チェンバーなんだ。出来た空間はどうしても狭くなってしまうから、それなりの空間を作るには最初にかなしのエリアを指定しないといけない。その為に、高難易度の魔法と なっている」

「それって、普通の収束魔法とはどう違うの？」

「収束魔法で適当な空間に周りの酸素を集めるだけなら、窒素などはそのままの組成で残る。だから、その魔法で下手に燃やすのは危険だ。完全燃焼しないし、有毒ガスが生まれる可能性もあるからね。難易度が跳ね上がったって、酸素だけを分離した方が安全なんだ」

「それなら、ドライ・ブリザードは温度変化によって容易に二酸化炭素だけに分けられるから、比較的簡単な魔法なんですか？」

「そうなるね。あとは、場所によって濃度の割合がそこまで変わらな いことも理由にはあるよ」

？少しでも魔法について知っていることがあれば、積極的に達也へとアピールするほのか。流星は恋する乙女である。しかし、深雪はその可愛らしい小賢しさを嗅ぎ取ったらしい。テーブルの下で自分の左手の指を達也の右手の指に絡め、勝手に顔を赤らめていた。

？思わず、僕は隣の席の雫とアイコンタクトを交わす。「あれ、どうなのよ？」という僕の問いに、雫は「ほのか、気づいていないから」と返した、という感じだ。

「達也さんの説明、とっても分かりやすかった。でも、だからこそ不思議。理澄くんはその高等魔法を使わなくても、普通に『ドライ・ブリザード』を使えば良かったと思うんだ」

？そう言っただけはこちらに向き直る。ここは多分、僕が答えなくちゃいけないのだ。

「……予備動作無しで『ドライ・ブリザード』を使えば、よく分からないまま琢磨は負けちゃうし。こちらの手がよく分かるように、少し大袈裟にしたんだ」

？とにかく、一片の言い訳の余地も無いように負けさせないといけなかった。そうでないと、琢磨は反省しないと思っただからだ。彼がこれからどうしていくかは分からない。ただ、この悔しさをバネに努力を重ねて貰えると有り難い。

？七草を倒す際の旗印候補は今のところ、彼しかないのだから。



？リーナと一緒に生活もそろそろ慣れてきた。時々、しょうもないトラブルで揉めたりもしたが、殆どは平穩に過ごしていた。僕は特に細かいこだわりを持つ訳でもないし、それは彼女も同様だ。そもそも、生活の世話はこの家に居るメイドや執事がやるので問題は無い。

？模擬戦から数日が経った日の夕食時に、リーナが僕に仕事の話をはじめた。人身売買の瞬間を差し押さえた、というものだ。そう言えば、黒羽が財務省から仕事を引き受けたという話を前に聞いた。恐らくは、その件だろう。

「今日の任務でフミヤに言われたのよ、そろそろ大きな仕事があるかもって」

「文弥と一緒にだったの？ 珍しいね、平日なのに」

「タツヤが狙われてる案件だったのよ」

「ああ……。そりゃあ、学校もサボるね」

？双子達は第四高校に進学していた。特に文弥は一高に通いたかったらしく、それが叶わなかったことにショックを受けていた。あまりの嘆きっぷりに、僕が代わってあげたいと思ったほどだ。

？だからこそ、まだ一学期も終わっていないのに、そんな不真面目な態度で良いのか心配だった。だが、僕が口出すことでもないのだから。

？そもそも、問題は達也である。あれだけフラグを折りまくっても、厄介ごとを呼び寄せてくれる。

？バーチャルアイドルの中の人が攫われる場面に遭遇し、結果的に彼は人身売買のブローカーに命を狙われることになったのだ。何処かで一度、知り合っていたらしい。僕は放置しておけば良いと思うのだが、文弥はそうは思わなかったようだ。財務省の何処かに働きかけて、仕事を取ってきた。「達也兄さんが気づく前に片付ける！」と意気込んでいたに違いない。

「この後、文弥に会う予定なんだ。多分、リーナが聞いた話の詳細なんだろうね」

「今から？ もう随分遅いわよ？」

「僕も文弥も明日は学校を休む気でいたから。どうせ、これから黒羽の助っ人に行くし」

「学生は大変ね。義務教育じゃないんだから、やめちゃったら？ ワタシが軍人やめっちゃつたみたいに」

「とんだブラックジョークだね……」

？こういったアメリカ人特有の謎感性が、僕達を偶に喧嘩へと持ち込むのだ。しかし、僕も段々と適応してきたので、それに対して苦笑いに留めた。

「環境を一変させた後に、分かるものがあるのよ」

「経験者は語るってやつ？」

「そういうこと。リズムには、まだ早かったかしら？」

「子供扱い？ 同い年なのに」

「ええ！ ワタシの方が精神的に大人だと思うもの」

「大統領のお茶会に呼ばれたんだっけ？」

「それはもういいでしょ!？」

？ 軽口の応酬はいつものことだ。どちらが勝つかはその日次第。今日は僕が彼女を言い負かした。とはいえ、言い過ぎればやはり揉めるので、加減が難しい。理詰めではなく折れることも必要だ、という先人の教訓はきつと正しいのだろう。

？ 食事を終えた僕は、近くに停めた車で待っている筈の文弥の所へと向かう。黒塗りのリムジンの中には、彼と彼の部下が乗っていた。

「やあ、待ってたよ」

「遅くなってごめんね。文弥……じゃなかった、ヤミちゃん」

「……理澄兄さんも今からするんだよ」

？ そうなのだ。僕も素性がバレないようにする為、極秘の仕事は女装が必須になってしまったのだ。御当主様は狙って、僕を四葉だと公表したのではないか。どうも、そんな疑惑が頭の中でちらつく。

？ 滑らかに走り出した車の中で、僕は化粧道具を広げる。黒羽の仕事用だから、文弥と亜夜子の為に鏡が取り付けてあるのだ。それを使って、嫌々変装用のメイクを始めた。

「ファンデーションを塗りながらいいからさ。ちよつと聞いてくれる？」

「女子高生みたいな会話だね。話してるのは、男二人っていう地獄だけだ」

「それを言っただって仕方ないよ。……それでね、最近九島が動き始めてるんだ。何をしているかは、まだ探らせている最中だけだ」

「九島って言ったって、先代か当代かで変わってくるんだけど。どっち？」

「それくらいは、分かってるよ。今の当主の方。勿論、老師も黙認してるかもしれないけどね」

？ 七草の次は九島。どうせ四葉の行く手を阻む気なのだ。よく次から次へと、邪魔ばかり出来るものである。余程、十師族の秩序というものが大切らしい。

？ 仮に四葉が権力の全てを掌握しても、僕らは表舞台へは絶対に現

れない。マキャベリズムの骨頂は、影に隠れてこそである。全てが白日の下であれば、どんな策略も意味を為さないのだから。

？この国には存在し続けて貰わないと困る。だから、非魔法師を排除したくないと僕は考えているのだ。そうでなければ、魔法師と非魔法師の融和策なんて考える訳が無い。

「今日は何で呼ばれた訳？ 九島を探るの？」

「それは姉さんがやってる。そもそも、それなら理澄兄さんと呼ばないよ」

「確かに。じゃあ、別口なのか」

「うん。十山が護衛してる人間を襲うのが今回の仕事」

？十山家は二十八家の一つだ。十師族にならない代わりに、国防軍との結びつきが恐ろしく強い。国民を守るのではなく、国そのものを守る。近いもので例えれば、まるで公安のようだ。

「誰だよそれ。全然九島と関係くない？」

「それが、関係がすごくある。防衛省のさ、次の事務次官に内定してる人で、九島に近い派閥なんだよ」

「そういや、勝成さんが防衛省に入省したって言ってたな。出所はそこ？」

「どうなんだろう。とにかく、このままだとマズいからね」

？パラサイトが生まれていなくても、九島は何か企む気だ。それも、軍が一枚噛んでいような。酒井大佐を始めとする対大亜連合強硬派に接触しなかったのは、横浜事変が起きていないからだろう。

？話しているうちに、僕は女装を終えた。仲間が戻ってきて文弥は喜んでいるが、僕の気分は最悪だ。

「料亭での会食を終えて、帰るところを狙うつもり。あとは、ちよっとお話を返すだけ」

「二重スパイに仕立て上げるんだね。PD見せてよ？」

「これ。目を通して貰えるかな」

？渡された端末をスクロールして、パーソナルデータを読む。

「子供が三人。全員、非魔法師か……。殺すって脅すくらいじゃ、九島に助けを求められそうだな。一番上の子供のデータある？ 非行歴

があれば一番いいんだけど」

「隠してるのをバラすつて言う訳か。PDなんて誰でも探れるくらい単純だから、九島も止めにくいもんね。いいよ、それにしよう」

「弱みがあるならPDの改竄はやっているだろうが、そんなことはどっちだって良いのだ。根も葉もない噂でも、流れれば痛手になる。」

「その時、料亭の近くに張っている文弥の部下から、連絡が届いた。ターゲットが動き始めたらしい。」

「あつ、出て来たみたいだね。行こうか、メロディ姉さん」

「……達也にヤミちゃんの画像送りつけようかな」

「やめてくれる!？」

「緊張感に欠ける会話をしながらも、僕達は任務を遂行する為に動き始めた。」

「料亭からターゲットが現れる。十山家の護衛も付いていた。文弥が護衛に向けて「ダイレクト・ペイン」を放つ。距離があるので、威力は調節できていなかった。それなのに、彼らの様子は変わらない。訓練によって、痛みへの耐性があるのだろう。」

「最初から、ショック死しない程度には威力を絞っていたけど……。残念だな、これだけで終わっての方が良かったのに」

「長引くと良くないよ。さっさと決めちゃおう」

「僕はCADを操作する。選んだ魔法は「ワルキューレ」。一瞬で、護衛の人間達は地に伏せた。文弥の魔法で気絶していれば、彼らは死ななくて済んだのだが。」

「死体の回収、頼んでいい?」

「部下にやらせとく。どうせ、ターゲットも持っていないかなきやダメだから。僕達は先に戻ろう。早く姉さんと合流したいし」

「ヨルはもう調べ上げたの? 早いね」

「亜夜子の諜報能力は非常に高い。けれども、ここまで早いとは思わなかった。僕達は車に戻り、彼女の待つホテルのラウンジへと急いだ。」

？ホテルのラウンジで亜夜子は優雅に紅茶を飲んでいた。眠気覚ましも兼ねているのかもしれない。僕と文弥も甘いミルクティーを作って貰って飲んだ。僕達は女装したままなので、多分さまになっている。

「九島については調べ終えましたわ、理澄さん。こちらがそのデータになります」

「ありがとうございます、亜夜子ちゃん」

？亜夜子が手渡してきたメモリーカードを端末に差し込み、端末に映し出す。ざっと画面をスクロールして、内容を流し読む。

「……クローン人間計画ねえ。条約なんかで、製造は禁止されていなかったっけ」

「だから問題なんですの。しかも、オリジナルがオリジナルですし……」

「九島烈のクローン、か。あの人、いくつだっけ？ 折角作っても、テロメア的に早逝しそう。そんなの使える？」

？クローンは調整体よりも作製費が安価である。しかし、受精したばかりの生殖細胞から作っても寿命は短い。遺伝子異常が起きやすく、まともに育たないのだ。成長した人間から作れば、もっと短くなる。だから、クローン技術には誰も見向きもしなかった。条約を破つてまで作るほどの旨みが無いからだ。

「老師は確か87歳だったよね。理澄兄さんの言う通り、使い物にならないさうだけど。数ヶ月でも細胞分裂に耐えられないでしょ」

「だから、使い捨てなの。何体もストックを作っておいて、必要な分だけ使うって感じかしら」

「それ意味あるかなあ……？」

？昔のSFチックな話ではある。しかし、あまり効率的とは言えないのではないか。

「使い勝手というよりは、『人間ではない』ということを強調しているような使い方の気がします。それは最近の老師のお心変わりと一致

「しませんか？」

「動いてるのは現当主だけれど、やっぱり老師の発案かもしれないってことね」

「でも、どうしよう？　今でこそ、意味の無い実験的なものだよ。けど、いずれは魔法師の存在が形骸化するかもしれない。そうなったら、僕達どうやって生きればいいのか？」

？文弥が半泣きで頭を抱える。彼の言う通り、魔法師が完全に要らなくなれば、生活のアテが無い。パラダイムシフトが起こる可能性を考えれば、不安になるのも分からなくもなかった。

「その時は、四葉の暴露本を出して印税で食べていこう。出版前に口封じで殺されるかもしれないけど」

「生きていけてないよ！　それ死んでるじゃないか！」

「落ち着いて。絶対、そんな状況にスポンサーの方々はさせないわ。

……理澄さんも、文弥を怖がらせないでくださいな」

？こういつた時の亜夜子はとても姉らしい。彼女に窘められた僕は、文弥の頭を撫でつつ謝った。

「魔法の需要がある状態を維持し続けないと、きっと非魔法師から僕は排除される。だからこそ、魔法師は兵器で居ないといけない。それは分かりきったことの筈なのに」

？文弥がそう言いながら、目を伏せた。彼だつて僕だつて、己を兵器だと言い聞かせることに一抹の哀しさを感じなくも無い。だが、それを拒否することは出来ないのだ。

？強大な力は、矛先を向ける相手が居てこそ。仮想敵が無ければ、魔法師へのヘイトが溜まってしまう。

「お年を召されて、考えが甘くなってしまったのかもしれないね。代替わりってというのが必要な訳だ」

「そのことで、私は御当主様とお話する機会がありました。理澄さんが連れてきた『シリウス』。いらっしやるでしょう？　確か、第九研の血が流れているとか」

「リーナを九島の当主に据える気？」

「彼女はUSNAと切れていますよね？　取引は武倉が主導したとお

聞きしましたが」

「僕がやったよ。もう完全にUSNAの人間ではなくなってる」

？確かに僕は、USNA軍上層部と取引している。USNAの旧シリウス派閥のスキャンダルを流し、多くの幹部を更迭していた。ミッドウエー監獄に放り込まれた魔法師もいるだろう。極め付けには、適当に使えそうな魔法師を数人送り込み、リーナとの交換という形で彼女の身柄をもぎ取った。その為、彼女はUSNAから追いかけることは無くなったのである。

「それでも、元シリウスなのです。四葉の庇護下に留め置くには立場が大きすぎますわ」

「それなりの地位を用意する必要があるってことね。九島なら血を引いてるから、ちようど良い訳だ」

？御当主様はリーナを連れ帰った僕を咎めなかった。それは、ここまで見越していたからかもしれない。

「でもさ、姉さん、元の九島の人間をどうやって追い出すの？ 老師は20年もしないうちに死にそうだけど、残りは中々死なないよ。若いんだし」

「だから、今回の件で泳がせておくのよ。ボロが出たら糾弾するの。来年には師族会議もあるし」

「要求を呑むなら十師族から落とさない、とか持ち掛けるのか……」

？師補十八家から十師族に昇格するのは良くても、逆はプライドをいたく傷つけられる。名前だけでも、十師族でいられる方が幸せな筈だった。

「けど、そんな上手くいくもの？ 九島がヘマをしないかもしれないし、まずリーナさんを当主とするとなれば九島家は大騒ぎだよ。四葉が家乗っ取るようなものなんだから」

？文弥が慎重な意見を述べた。それには、僕も同意見だった。しかし、亜夜子はその疑問を見越したようで、新しいメモリーカードを取り出す。

「これをご覧なさい。九校戦は従来より期間を一日延長して、新競技を一つ導入することになっているの。まだ協議中だけど、ほぼ確定で

しようね」

「ステイプルチエース・クロスカントリー……。これって、軍事教練に使われるようなものじゃん！」

「この競技を差し込んだのが九島……ってことでいいの？」

「ええ、そういうことです。クローンの戦闘データを取っているのではないかと推察されています」

「魔法科高校生を使って実験するってこと!？」

「そうなるわね。九校戦での事故に見せかければ、怪我人が多く出ても誤魔化せるからかしら」

？怪我人どころか、魔法技能を失う生徒も出てくるかもしれない。人工林のフィールドを走破する競技だと思っていたのに、襲い掛からればパニックになるのは間違い無いからだ。

「露見すれば、普通に悪いことだよ。一般の魔法師を巻き込んでるし」

「去年も九校戦を狙って、犯罪シンジケートが裏で動いていたよね……。毎年毎年、どうしてこんなに治安が悪いんだ？」

「仕方ないんじゃない？ 大きな事件は起こらないで欲しいけど、小さな事件は起こってくれた方が僕らにとってもいいんだから。それは、何処かの誰かも一緒なんだよ」

？確かに、文弥の言うことには一理あった。

？僕は誰かの不幸を踏み台にして、甘い汁だけを啜っている。同じことをしている相手に、文句を言える訳が無いのだ。

？ステイプルチエース編が起こってしまうのも、仕方のないことなのかもしれない。



？次の日、僕は学校をサボった。どうせ土曜で半日だったし、眠たかったからだ。昼くらいまで寝倒しても、起きる気にはなれなかった。布団にくるまりながら、研究所から送られて来たデータを見る。

？魔法式時間遡行のメカニズムは一部頓挫したらしい。虚数を定

義した為に、エイドス改変ができなかったのだ。虚数はイマジナリー・ナンバー。存在しない数である。つまり、アイデア内などでしか所在がわからない。

？だが、精神の場所を決める定数には使えそうらしく、その方向で研究を進めていくようだ。精神干渉魔法が早く展開できれば、大きなアドバンテージを得られるので妥当な判断であろう。

？そこまで読んだところで、新たな疑問が生み出された。僕は気になる点をメールに纏め、研究所へ送る。返事はすぐに返ってきた。質問は、「量子体は遡行できる可能性が高いのか？」というもの。その答えは「極めて高いだろう」であった。

？これなら、リーナを九島家当主にする際に、九島側に大きな貸しを作ることが出来る。九島烈のご乱心の理由は、末孫の病弱体質故だ。その上、孫も一年の四分の一を病床に過ごす生活で、どこか性格が捻れていた。この世を憐んで、テロリストになられても困る。どうか、原作では実際になる。それは回避せねばならない。

？ちようどその時、部屋のドアが勝手に開けられた。リーナがこちらを覗いている。

「リズム、いつまで寝ているの？ もうそろそろ起きた方がいいわよ」

「うん……。今起きるよ」

「早くしなさいよね」

？彼女はそう言い残して、戻っていく。もぞもぞと僕は起き上がった。時刻を確認すると、既に二時だった。服を着替えて、リビングに出る。リーナはソファに座り、動画を観ていた。僕はその横に座り、彼女に話しかける。

「……リーナ。話したいことがあるんだけど」

「何かしら？」

？僕は昨夜に亜夜子達と話した件について、彼女に伝えた。

「……そうなっちゃったら、ワタシはリズムと道が別れてしまうわね」

？リーナはそう言葉を返す。僕は彼女の手にも自分の手を重ね、彼女の碧い目を真っ直ぐ見つめた。

「それはさせないよ。僕は四葉家次期当主候補の地位を返上する。だ

から、四葉の当主にはならないし、道が違えることもない。」

「その保証は？ 神には前に誓っちゃったじゃない」

「リーナが好きだから……じゃ、ダメ？」

？ 僕の言葉に、彼女は目をまたたかせる。そして、表情を悪戯っぽいものに変えた。

「まあ、70点くらいね」

「意地悪。精一杯の告白だったのに」

「もつと、ロマンチックなら良かったんだけど。こんな場所で愛の告白なんてするものかしら？」

？ 予定には無かったのだ。リーナに対する感情は曖昧なままで、答えを出していなかったのだから。思わず口からついて出た思いだったし、僕自身驚いていた。

「返事はくれないの？」

「拗ねないで。ワタシがリズムのこと、好きじゃない訳ないでしょう？」

「僕の家に住みたがるくらいだからね」

「分かっくて、今まで何も言わなかった貴方の方が意地悪だわ」

？ そうかもしれない。もう僕は一生、難聴系ラノベ主人公を馬鹿に出来ないだろう。彼らと僕は同類だ。だけど、今日からは違う。

？ リーナがとても上手なウイंकをして、目を閉じた。何を返せばいいか、僕には分かっていた。

ステイプルチェース編

1

？九校戦の競技が発表された日から、数日経った放課後のことだった。僕は達也に呼び出されて、生徒会室に訪れていた。部屋には達也と深雪、水波しかいない。上手く言いくるめて、他の人達は帰したのだろう。

？達也は僕が部屋に入るとすぐ、用件を話し始めた。

「九校戦の件なんだが……」

「新競技のこと？ ステイプルチェース・クロスカントリーだよね？」

「その競技、どこか異質な気がしないか？ 最終日まで選手の士気を落とさないという理由以外にも、何か企みがある気がする」

「するね。どうも、亜夜子ちゃんが調べてるみたいだよ」

？亜夜子、と聞いた途端に深雪の身体が少し揺らいだ。ライバル感情を抱いているからだろう。

「亜夜子も調べているのか……。いや、実は昨日、差出人不明のメールが届いてな」

「差出人不明って……。そんなこと出来るの？」

「このメールだ。ちよつと見てくれ」

？達也に端末を押し付けられる。文面を読むと、「九島家は新兵器のデータ収集に九校戦を使おうとしている」といった内容が書かれていた。亜夜子の調べた通りだ。

「急な捻じ込みの理由はこれか……」

「俺は週末に師匠と旧第九研に赴いてみようと思う。理澄はどうする？」

「良くも悪くも九島への脅しになっちゃいそうだな……。事態がどう転ぶか分からないし、今回は遠慮するよ」

？九島烈が今更四葉くらいでビビるとも思えないが、慎重に動いた方が良い。

「それなら、頼まれて欲しいことがあるんだが」

「内容によるね」

「国防軍に情報を流してくれないか」

「自前のルートがあるでしょ。それじゃダメなの？」

「上層部から直接、一〇一旅団に話が回るようにして欲しいんだ」

？僕は今回の策略がどういったストーリーを辿るかを知っている。だからこそ、自分から渦中に飛び込むのはやめて欲しかった。

「僕はおすすめしないね。やめておいた方が良いと思うよ」

「何故、そんなことを言うのかしら？」

？深雪が僕に鋭く問いかける。

「任務にしていれば、動きやすいのは確かだ。でも、他人の事まで責任を背負い込む必要は無いだろ。深雪だけを守るように動けばいいんだから」

？このまま放っておけば、達也は介入してしまうだろう。ちょっと調べるくらいならいいが、変に暴れられたら全て台無しだ。

「それでは、貴方はお兄様に非情な選択をさせるといふの？」

「非情って言われても……。悪いのは九島なのに、達也を巻き込む方が可哀想だよ」

「深雪。俺は大丈夫だ。俺はお前だけが居ればいいし、お前だけを守ればいい。それ以外の選択肢は無くたっていいんだ」

「お兄様……！」

？僕の前で固く抱きしめ合う二人。白けた顔にならないように、顔面の筋肉を引き締めねばならなかった。ふと見ると、水波も瞬きで目を瞑る時間が異様に長い。あまり直視したくないのだろう。

「水波ちゃん。困ったことがあったら、いつでも言っただけいいからね」

「いえ……。良くして頂いてますから……」

？僕は思わず、彼女にそう小声で言ってしまった。きつと、大変な思いをしている筈だ。二人だけの世界に入ってしまった達也と深雪から、気を紛らわす為に少し話すことにする。

「九校戦、何の競技に出るの？」

「クラウド・ボール新人戦です。あまり目立つのは良くないと分かっ

てはいるのですが……」

「大丈夫。優勝しても、全部エンジニアの仕業になるから」

「そうでしょうか……？」

？ 去年、達也が担当した選手は他の学校の選手には誰も負けていない。負けてしまったら、逆に深雪の機嫌が悪くなってしまう。水波が安心してこれからを過ごすには、優勝した方が絶対に良い。

「そうだ、理澄。お前のエンジニアは五十里先輩が続投ということになったが、それで良かったか？」

？ 深雪を抱きしめたまま、達也が僕に問う。恥ずかしさとか、そういうものは無いのだろうか。僕はそこが非常に気になるが、その疑問は頭から追いやった。

「うん。タイムスケジュールを考えるとそうだろうね」

「モノリス本戦は空いているんだが、そこだけ俺が調整するのもおかしいからな。五十里先輩も上手いから、理澄なら問題無いだろう」

？ 今年早撃ちとモノリスに出場することになっていた。早撃ちは女子と時間が被るし、モノリスは予選がミラージュと被るのだ。別に僕は誰がやっても構わなかったのですが、達也への拘りは全く無い。強いて言えば、調整時間が速いことくらいだろうか。

「本人が言ってたけど、幹比古は担当するんでしょう？ 大丈夫なの？」

「どうしても、と頼み込まれてな。何とかするさ」

？ 僕はモノリスで幹比古とチームメイトだった。もう一人は服部会頭だ。原作ではチーム入りしていた三七上先輩は、僕の入ったせいで出場出来なかった。何だか、申し訳ない気もする。この罪悪感を払拭する為には、優勝するしか無いだろう。



？ 裏で動いている人々の企みを余所に、九校戦は華々しくスタートした。懇親会が始まってすぐに沢木先輩に話しかけられ、僕はそこに居ることになった。先輩達は、部活や委員会などの後輩を殆ど呼び出していた。僕と森崎は去年風紀委員だから、という理由だ。「パー

ティーをチャラチャラした出会いの場にはさせん！」という先輩の硬派な意思が感じられる。

「去年は三高の一条にビビらなくも無かったが、今年は四葉が居るからな！ 去年言ってくれたら良かったのに」

？ 沢木先輩が強引に僕と肩を組む。勢いがあつて、結構痛かった。

「言っちゃつたら意味ないでしょう。僕が怒られます」

「良いんだよ。だが、モノリスで一条を倒すのを期待してるぞー！」

「沢木先輩の仰る通りだぞー！ 絶対、俺の仇取れよ！ 一条を倒せー！」

？ 森崎も僕に言う。彼はスピード・シユーティングには出場するの
で、吉祥寺には雪辱の機会がある。だが、モノリスは代表落ちしたの
で、一条とは戦えないのだった。

「任された。まあ、僕だけじゃないし。服部先輩と幹比古も居るから。
安心して戦える気がする」

「そうだね。服部先輩、よろしくお願いします」

「ああ、絶対優勝するぞ。そうじゃなきゃ、歴代の先輩方に顔向け出来
ん」

「勝つぞ！ 優勝は俺たち一高のものだ！」

「誰にもやらねえぞー！」

？ 男しか居ないからか、話が段々とヒートアップしていく。ソフト
ドリンクしか飲んでいないので、酔いはしない筈だ。それなのに、三
年と二年の男子生徒の殆どは円陣を組み出し、訳の分からない雄叫び
を上げまくる。所謂、シユプレヒコールというやつだ。テンションが
上がった僕も参加していた。

？ 周りの女子や、他校の生徒はその様子にドン引いていたらしい。
そのことを、後で達也から聞いた。彼だけは女子に囲まれていたの
だ。

「四葉、ちよつといいか」

？ シユプレヒコールがようやく落ち着いてきた時、僕に話しかけて
きたのは一条と吉祥寺だった。僕は一高生の輪から離れ、彼らに近づ
いていく。

「何、宣戦布告？ それなら受けて立つよ」

「それもあります。去年、同じ『インビジブル・ブリット』を使ってきた選手。まさか、あの『四葉』だとは思いませんでした。今回は、負けません」

「いや、今回も僕が勝つき。……ああ、今年はモノリスにも出るよ。一条、君と戦うのが楽しみだ」

「悪役ムーブの返しをしておく。折角だから、彼らが持つてそうなの『四葉』のパブリックイメージを大事にしたかったのだ。」

「俺とジョージが組めば無敵だ。お前一人に負けることは無い」

「僕以外のチームメンバーを甘く見ないことだね。『四葉』だけを意識していたら、足元を掬われるよ」

「そうですか。御忠告、感謝します。——ところで、貴方も気になりますか？ 新競技のこと」

「吉祥寺が先程より声を潜める。こんな時に大声で話す話でも無いからだろう。」

「ステイプルチェース・クロスカントリー。追加の理由付けはともかく、何処か異質な気がする。そもそも、フィールドの殆どが見学出来ないようになっていっているというのは妙だ。まるで、競技を見せる気が無いみたいじゃないか？」

「その言い方だと、何かが隠されている……ってこと？」

「そう取って貰って構わない。四葉、お前は何か知らないか？」

「十師族が何の違和感も抱いていないのは変だ。だから、情報を出しておくことにした。」

「知ってるよ。国防軍が圧力を掛けたらしい。そして、圧力を掛けるよう軍に指示したのは『老師』だ」

「ろっ、老師!? 嘘だろ、そんな……」

「今日の開会式に老師は来ない。賭けてもいいよ」

「……将輝。このこと、剛毅さんに調べて貰えるようお願いしたら？」

四葉君の話が本当なら問題だ。早く調査した方がいい」

「一条も証人になって貰えれば、九島の行動が正当なもので無いことを立証出来る。他の十師族の目の存在は四葉側にとっても重要だった。」

「ジョージの言う通りかもしれない……。四葉、情報提供に感謝する」
「必要なことだから。——じゃあ、次は試合で会おう」

「分かった。必ず、決勝に進んでこいよ」

「そつちこそね。吉祥寺も」

「ええ、勿論です」

？ 最後は二人と固い握手をして別れた。きな臭い会話をしていた割には、青春感が溢れていたのではないか。



？ 残念なことに、一日目のスピード・シューティングは下馬評通りには進まなかった。

？ 吉祥寺と理澄は準決勝で衝突してしまったのだ。去年を鑑みて、大会委員会が分け方を変えたのかもしれない。

？ 準決勝で勝ったのは理澄。一年前からの伸び代がどちらにも有った為に、差が埋まらなかったのである。とはいえ、今回はどちらもパーフェクト。やはり、今回もスピードのみが勝敗を分けたのだ。

「四葉くん、それに森崎くん。決勝進出おめでとうございませー」

？ 理澄と森崎が一高のテントに戻ると、生徒会長であるあずさが嬉しそうに手を振っていた。珍しく、達也が関与していない競技での快挙。その為に彼女は浮かれており、「四葉」への恐怖感も薄れているようだ。

「ありがとうございます」

「それで、どうします？ ウチだけなので、どちらも棄権という形でも構いませんが——」

「——戦わせて下さい。四葉と」

？ 森崎は、あずさの言葉を遮った。

？ そう言った後、彼は理澄の方に身体を向ける。

「前に言ったよな、俺はお前に勝つと。今がその時だ」

？ 理澄は一度目を見開いたが、すぐに不敵な笑みに変える。

「いいよ。全力で叩き潰してやるよ」

「大口叩けるのも、今のうちだぞ。数字付きに膝を突かせる。それだけを考えて、俺は生きてきた」

？森崎は理澄のことを友人兼ライバルだとは思っている。しかし、彼が実力を隠していた過去を忘れていなかったし、そのことについてはまだ蟠りがあった。

「……楽しみ。実力の差を見せてあげるから」

？二人の間に火花が散っているように感じ、あずさはつい泣きそうになってしまう。やっぱり四葉は怖い、と彼女は思った。だが、他のスタッフは女子早撃ちなどに出払っていて、ここには自分しか残っていない。その責任感から、必死に己を奮い立たせる。

「えっと、二人とも出場ということが良いんですね……？ 分かりました、それでは大会委員の方に報告してきますから！」

？あずさは逃げるようにテントを去った。彼女にしては、かなり耐えた方だろう。

？数十分のインターバルを経て、男子スピード・シューティングの決勝戦が開始された。

？一般客用の観客席には、リーナと菜子が並んで座っていた。リーナが九校戦に出場する理澄を観たがっていたので、菜子も世話係として着いて行くことが出来たのである。

「決勝が始まったわね。楽しみだわ」

「一高が一位と二位を独占したのに、理澄様は決勝戦に出られるんですね」

「じゃあ、リズムと戦うのは同じ学校の人ってこと？」

「そうなりますね。何か理由があったのでしょうか……」

？その時、横から彼女達に話し掛ける人物がいた。

「ここ、よろしいかしら？」

「亜夜子様、文弥様……！」

？菜子が慌てて席を立つ。それもそのはずで、現れたのは黒羽家の長女、黒羽亜夜子。その後ろには弟の文弥も居た。

「楽になさって。私達も理澄さんを応援しに来ただけですの。失礼しますわね」

「リーナさんもこんにちは。お久しぶりですね」

「フミヤ、アヤコ。久しぶりね」

？黒羽の双子達には、リーナも面識があった。非合法な仕事は黒羽が請け負う率が高い。その為、彼女も任務に混ざることが多かったのだ。

？リーナの隣に二人は座る。菜子の隣に座らなかったのは、彼女が緊張してしまわないよう気を遣ったのだ。

「理澄さんの対戦相手は、森崎駿。百家傍流の家で、ボディガード業でそこそこ有名ね。同じクラスで、ご友人らしいわよ」

？何処から調べてきたのか、森崎のデータを話す亜夜子。

「へえ……。普通の友達居るんだね」

「貴方ね、理澄さんに失礼よ」

「でも、フミヤの言うことも分かるわ。リズム、他人に無関心じゃない。来る者拒まず、去る者追わずっていうか」

？勝手なことを言われているとも知らず、シユートレンジで理澄が特化型CADを構えている。縦型のライトが、下から順に点いている。全てが光った瞬間、クレーが飛び出して行った。そして、それは瞬時に割れる。

「早いなあ。『インビシブル・ブリット』は理澄兄さんの得意魔法だから、当たり前か」

「去年に使い始めた筈なのに、使い熟してるわよね」

「覚えてるわ。ワタシ、あの魔法で拳銃壊されたのよ」

？しかし、十個程壊したところで、異変が起きた。理澄がクレーを一つ、得点有効エリア外に逃してしまったのだ。

「リズムがクレーを視認し辛くするような場所に、自分のクレーを移動させてる……？」

「相手は単一加速でクレー同士を破壊する、単純な戦法。だから、少し余裕があるんだろうね。それでも、魔法の構築速度が今までの兄さんの対戦相手よりも速いからこそその芸当だ」

？森崎の妨害を受けて、理澄は領域干渉を少し広げる。それによって、森崎のクレーは衝突しないまま、エリア外に出た。

「でも、あまり気を取られていたら自分のクレーを見落としてしまうわよね……。早く撃たなくちゃいけないんだから」

「もうパーフェクトじゃないし、自殺点を考慮に入れて勝負する気なんじゃないかな」

「今まで無失点だったことを考えたら、相手は奮闘している方ね……」

？どちらも時折外してはいるが、着実にクレーを破壊している。そして、制限時間の五分が経過し、終了のブザーが鳴った。

「何とか、リズムが勝ったわね……」

「92対88……。結構落としてるね。やっぱり、『インビシブル・ブリット』は視認しなくちゃいけない点が、大きなデメリットなのか……」

「そうよね。去年みたいに知覚系魔法を持つてる選手が居ないから、何とかなっている部分もあると思うわ」

？下のフィールドでは、理澄と森崎の二人が何か話している。互いの健闘を称え合っているのかもしれない。

? スピード・シユーツイングが終われば、僕に残っているのはモノリスとステイプルチェースだけだ。残りが最後に固まっているので、真ん中の期間はそれなりに余裕がある。なので僕は、亜夜子と文弥の試合をリーナ達と観戦した。

? そして、その結果について僕達は夕食を食べながら話していた。去年、黒羽の双子に会いに行った時のホテルにあるレストランである。僕は部屋で寝ると言って、抜け出してきたのだ。どうせ、達也と違って男ばかりで食事を囲むのだから、一回くらいはリーナとご飯を食べたかった。

「残念よね。目立つちやダメだから、途中で負けちやわないといけないなんて」

「まあ、それでも最下位争いばかりの四高が勝ち上がっただけで珍しいんだけどね」

? 文弥の出場したモノリス新人戦は準決勝に進出。亜夜子のミラージは四位だった。「目立とうミッション」が無いのだから、こんなものだろう。適当にこなしたに違いないが、普通はこのやり方が正しいのだ。そもそも勝成さんや夕歌さんは、最初から出ていかなかったくらいなのだから。

「それで、今起こってる問題はどようするの?」

「放置。ステイプルチェースは女子が先だからね。深雪に害が及ぶ前に、勝手に達也が潰しに行くよ。まあ最悪、男子の時に残ってたら頼んでもいい?」

「仕方ないわね。やっておくわ」

? ちなみに、女子が先なのは先に手を回しておいたからである。文弥の部下が話を付けた二重スパイを使って、出場順に手を加えたのだ。

「それにしても、思ったより楽に終わりそうだ。どうせ、ウチが優勝するだろうし」

「女子がかなり強いものね。殆ど独占してるじゃない」

？今年も一高女子は快進撃を続けていた。どの種目も一高生が優勝している。残るはミラーズ本戦くらいだが、それもどうせ優勝するだろう。

「達也がエンジニアをしてるからなあ……。幼稚園児の徒競走にプロの陸上選手が混ざるようなものだよ」

「リズムのエンジニアは違う人なんですよ？」

「同じ土俵で勝負しないと、面白くないだろ。五十里先輩はとても上手いけど、他の学校にも同じレベルの人はいるからさ」

？それに、自分がCADを使う状況に達也がいつもいるとは限らない。勿論、魔工技師を選ぶことも重要だ。しかし、実戦の際は悠長に調整なんかしてられないのだ。

？少々使い辛くても、普段通りのパフォーマンスが出来るようにしておかなくてはならない。これは個人的な持論だった。

「でも、起動式はそのまま移したんじゃないの？　そこで差が出ちゃうことは無い？」

「起動式に無駄をかなり増やしてる。例えば、『インビジブル・ブリック』の術式は達也が組んだんだけど、それにウチの魔工師がノイズを足してるんだ。普段ならもう少し速い」

「それ、ミュキが聞いたら怒り狂いそうね……」

「心配しなくても、女子と試合が被ってるから観てないよ」

？去年も今年も、雫と時間帯が被っているから出来たことだ。深雪は達也のことを敬愛している。その「愛する兄」が用意した起動式をダウングレードして使う人間の存在なんて、彼女にとっては人でなしに違いない。

「貴方、ミュキに嫌われてるって言ってたけど……。リズムも嫌われるようなこと沢山やってるのね」

「他の女の子に好かれてるよりいいんじゃないの？」

「まあね。もっと嫌われときなさい」

？ただ、あまり険悪になり過ぎると、今後困ることもある。もし深雪が四葉の当主になれば、武倉は酷く冷遇されるかもしれない。僕が九島に行く際、自分の家の人間や派閥の人間は一緒に連れて行った方

が良いだろう。

「ああ、何処に行っても派閥争いだよ……。何でだろ、普通に生きてるだけなのにね」

「生まれの問題じゃないかしら」

？リーナの言うことも正しかった。とはいえ、四葉と全く関係の無いところに生まれていても、苦労していただろう。灼熱のハロウィンだって、回避できなかった筈だ。

？全ての問題は「お兄様」から始まる。

？それならば、彼を止められるポジションに居られることは幸運なのかもしれない。迷惑なことには、変わり無いけれども。



？九校戦9日目には、モノリス・コード本戦の予選が始まる。それを受けて、前日の夜は服部先輩の部屋にメンバーが集まり、作戦の最終確認が行われた。

「予選は俺が前衛。四葉がモノリスの守備、吉田は遊撃だ。基本はこれで行く」

？三高を警戒して、出来る限り僕の動きを見せないことになっていく。でも、観客の望むような十師族らしい戦いは、残念だが僕には出来ない。精神干渉魔法の使用は禁止だし、まず「ワルキューレ」など使った日には大事件だ。変死体が大量発生してしまう。

「だが、溪谷ステージになった場合は話が変わる。吉田、その時はお前が主役だ。期待してるぞ」

「はい！…ご期待に沿えるように頑張ります……！」

？幹比古が背筋を伸ばして、硬い声で返事をする。精霊魔法で霧を作り、フィールドを覆う作戦を達也が提案していた。それが今回採用されたのだ。

「とはいえ、一番の懸念は一条将輝ですね。『爆裂』が殺傷ランクAで使用禁止になることだけは幸いですけれども」

「しかし、四葉なら十分戦える筈だ。何としてでも、一条を抑え込んで

くれ」

？十師族直系相手なら、今までよりも齒応えのある勝負が出来るだろう。最初はあまり乗り気にはなれなかったが、代表に選ばれたのはラッキーだったかもしれない。

「一条君の相手は理澄がやるとしても、吉祥寺君が居ますし……。『インビジブル・ブリット』対策はやっているけど、正直不安は残ります」
？モノリス・コードの練習の際、吉祥寺の魔法を想定して彼らは訓練を積んだ。それでも、情報強化で防御出来ない「インビジブル・ブリット」から逃れるのは困難なことだった。

「領域干渉か、相手の視野に入らないようにするしかないというのがな。開けた場所なら逃げられても、市街地フィールドなら難しい」
「やられる前にやるしか無いですね。攻撃は最大の防御と言いますから」

「もし森林や草原フィールドであれば、僕が土の精霊を操って土壁を作ります。常に視覚同調を使っていますから、少々距離があっても大丈夫です。去年の『ファランクス』レベルの効果はありませんが、ちよつとした防御は可能でしょう」

？幹比古は、はつきりと自分の意見を口にした。去年の同じ時期の彼とは大違いだ。魔法力を取り戻すように手助けした人間の一人としては、喜ばしいことだった。

「……やはり、フィールド次第か。運が良ければ、楽に戦える。しかし、そうでなければ苦戦しそうだ」

「それは何処の学校も同じでは？」

「確かにそうだな……。とにかく、明日は勝とう。今日は早く休むことだ。それでは、解散！」

？服部先輩のその言葉で、今日の話は終わりとなった。あまり長々と話しても、不安を煽るだけになってしまうからだ。廊下に出た時、幹比古が呟く。

「僕が九校戦に出てるってこと、今でも信じられないよ……。まだ、実感が湧かないっていうか」

「それ大丈夫？ 明日本番だよ？」

？とんでもない発言に、つい僕は心配になってしまった。緊張で魔法が上手く使えません、とかいうことになると思う。

「精神面は大丈夫。なんていうか、今までと立場があまりにも違うから……。去年、不貞腐れた態度を取っていた僕が、俯瞰して今の僕を見てる気分で」

「自信持てよ。もし負けたら、美月もがっかりするぞ。いいのか？」

「しっ、柴田さんは関係ないだろうっ！」

「関係あるって。好きなんだろ、美月のこと？」

？面白いくらいに慌てだした幹比古に、僕はからかいの言葉をかける。

「ちよつと、それ何処で聞いたんだよ!？」

「エリカに決まってるだろ。……じゃあ、お先に失礼」

「おい、逃げるなよ！」

？言いたいことだけ言って、僕は走り去る。幹比古とは部屋が違う。戻ってしまえば、彼はやってこない。別に来たって構わないのだが、僕のルームメイトが森崎なので、彼は部屋に入りたがらない。美月が未だ森崎に悪印象があるらしく、それを受けて幹比古もあまり彼とは交流を持たないのだ。

？廊下を全力で走っていると、当直兵の人に「廊下は走らないで！」と言われてしまった。僕は少し、はしゃぎ過ぎたようだ。



？モノリス・コード決勝戦には、一高と三高が駒を進めた。十師族同士の戦い見たさに大勢の観客が集まり、客席を埋め尽くしている。その中には、達也や深雪、エリカ達も居た。

「市街地フィールドとは災難だな……」

？エンジンニアとして多くの選手を受け持っていた達也だが、今日は幹比古しか担当していない。昨日までは忙しかった彼も、今は腰を落ち着けて観戦出来る。そのことが嬉しくて、深雪は思わず隣に座る達也の腕を抱えた。

「普段の倍は居るんじゃない？ 後ろまで詰まってるし、立ち見してる人もいるじゃない」

？達也の後ろに座るエリカがそう返す。その横に座る美月も彼女の言葉に頷いた。

「やっぱり、十師族は別格なんですね……」

「それだけじゃない。『四』ということもあると思う。今まで表舞台に出たことない一族だから」

「そうだ、達也さん！ 理澄くんはどんな魔法を持ってるんでしょうね？」

？深雪と反対の位置に座るほのかがそう尋ねる。

「多分、皆が望むような展開にはならないんじゃないか？ 四葉には一族固有の魔法というのは存在しない。全員、持つ魔法が違うらしい」

「なんか、当主の人が持つてる魔法みたいなのを持つてる可能性はねえか？」

『流星群』ミステイアライズか。あれは珍しいタイプだろうな。四葉の血族の殆どは第四研の性質上、精神干渉魔法を持つている筈だ」

「うわあ……。接触禁忌アンタツチャブルって感じ……」

？達也は遠回しに彼らの期待値が上がり過ぎないようにした。理澄の精神干渉魔法は、試合では意味が全くない。それに、相手も「爆裂」を使えない。派手な固有魔法の撃ち合いは起こらないだろう。

「まあ、分からないけどね。少なくとも、アイツは手の内を全て明かさないただろう」

？そう話を締めくくった時、決勝戦がスタートした。

？モニターに大きく、理澄の様子が映し出される。彼がCADを操作するやいなや、彼は服部と共に窓から飛び出した。そのまま、彼らは地面に軽やかに着地する。

「擬似瞬間移動で移動をショートカットしたのか。まだ、三高選手は近づいてきてないからな。少々、風が出来ても大丈夫と判断したようだ」

？達也が解説を始める。それに周りは興味深げに耳を傾けた。

？その頃、フィールドを走り回りつつ、理澄と服部は次の行動について話していた。

「先輩、どうします？」

「一条が来たなら、お前が足止めしろ。そうじゃなければ、俺が食い止めるから先に行け」

「分かりました」

？ビルが乱立する路地裏のような市街地フィールドは、敵の姿が視認し辛い。なかなか、相手に遭遇出来ないのだった。

？しかし、急に圧縮空気弾がこちらに飛んでくる。咄嗟に理澄はそれをベクトル反転させた。

「来ましたね」

「吉祥寺か……！ よし。四葉、突破しろ！」

「了解です！」

？疑似瞬間移動を使って、吉祥寺の頭上を越える。

「待て！」

？彼は振り向いて叫んだが、それは悪手だった。その際に服部が「ドライ・ブリザード」を使ったからである。魔法の発動兆候に反応し、急いで吉祥寺も「インビジブル・ブリット」を発動しようとする。

？しかし、それは不発に終わった。服部が少し速く目潰しの魔法を発動していたからだ。彼はこの魔法の為に、瞼に遮光性顔料を塗っている。一瞬目を瞑れば、自分がダメージを受けることは無い。

？続けざまに、「這い寄る雷蛇スリザリン・サンダーズ」によって電流が発生する。本家本元のコンビネーション魔法。それによって、吉祥寺は意識を刈り取られた。

「えっ、『カーディナル・ジョージ』がやられた……!？」

？雫が驚いたように、声を上げる。いくら服部が実力者といっても、こうも容易く吉祥寺が倒されるとは思わなかったのだ。

？既に服部は敵のモノリスを探す為、迷いなく走り出している。予定外の出来事ではなさそうだった。

「理澄が『インビジブル・ブリット』を使えるからな。練習で吉祥寺対策は何度もやっていた。シミュレーションを重ねていれば、服部先輩

はすぐに対応出来るさ」

？そこで、達也は一度言葉を止めた。大型モニターに映る映像が切り替わったからだ。

「——どうやら、幹比古の方へ一条が来たみたいだ。奴は不確定要素の理澄を避ける方向で行ったらしい。三高は、とにかく勝つことを選んだようだ。つまり、吉祥寺は陽動。服部先輩だけでなく、理澄にも時間稼ぎを本当はしたかったのだろうが……」

「ミキ、結構危なくない？ 理澄くんが急いで戻っても、それまで持ち堪えなくちゃならないのよ？」

「心配ない。今の幹比古は昔の実力以上の力がある。一条相手にも、ちゃんと立ち向かえる筈だ」

？幹比古はモノリスのある建物の周辺を、精霊によって掌握している。だから、自分の領域に人が立ち入ったことに気づいた。しかも、それが一条将輝だということも。

「どうしようか……」

？彼はそう呟きつつ、魔法を組み上げた。

？精霊魔法「木霊迷路」。超高周波と超低周波を交互に発信する精霊によって、対象の三半規管を狂わせる魔法だ。相手が一条将輝では、気休め程度。とはいえ、時間は稼げる。その間に、認識阻害の境界をきつく掛け直した。

？全て、長くは保たないだろう。だが、理澄が戻ってくるまで耐えればいいのだ。幹比古は呼吸を整え、一条がいつ突入してきてもいいように心の準備をした。

？暫くして、階段を駆け上る音が聞こえてきた。堂々と足音を立てているのは、自信の故か。一条がドアに手を掛けた時の無防備な状態を狙い、幹比古は新たに魔法を発動した。

？風で出来た透明な式鬼を呼び出し、風の塊を大鎚にして振り回す魔法「荒風法師」によって、ドアごと吹き飛ばされる一条。しかし、咄嗟に加重軽減の魔法を掛けたのか、すぐに態勢を立て直す。

？その為、追撃として放った「雷童子」は領域干渉に阻まれ、不発

に終わる。逆に圧縮空気弾を放たれ、幹比古は絶体絶命のピンチに陥ってしまった。モノリスを明け渡しそうになる寸前、窓ガラスが急に割れた。

「理澄が外から転がり込んできたのだ。すぐに一条は理澄の方へと圧縮空気弾を放つが、彼の領域干渉によって空気は拡散した。」

「今移動してきたのも、擬似瞬間移動でしょうか？」

「いや、あの魔法は遮蔽物がある場合使えない。あれは重力制御魔法だ」

「そうは言うが、飛行魔法はルールで禁止されてなかったか？」

「？レオが不思議そうな声で言った。去年のミラージュ・バットで使われた、常駐型重力制御魔法——通称、飛行魔法。それは競技のバランスを破壊してしまうということで、使用が制限されていた筈だった。「飛行魔法ではないんだ。そもそも、アイツが一番得意な魔法は加速・加重系統の重力操作。直接外から侵入するくらい、簡単に出来るだろうさ」

「？重ねて一条は「鎌鼬」を使ったが、それも領域干渉により魔法式が投射されなかった。負けじと理澄も「スパーク」を放ったが、情報強化を破れずに終わる。何度か魔法の撃ち合いが続くが、どちらも拮抗していた。」

「？痺れを切らし、理澄が収束系魔法「窒息乱流」ナイトロゲン・ストームを発動する。酸素の分布が偏ったことに気づき、慌てて一条は障壁を張る。けれども、理澄が空気塊を移動させる方が速く、酸素濃度が低下した気流を吸い込んでしまう。それによって彼は低酸素状態に陥り、気を失った。」

「？幹比古がしゃがみこみ、一条のヘルメットを取る。戦闘不能状態という目印を付ける為だった。」

「助かったよ、理澄。ありがとう」

「もつと早くに、気付いていれば良かったんだけど……」

「？そう言葉を交わしているうちに、服部が最後の敵を倒したらしい。フィールド全体で、終了の合図が鳴った。」

「……終わったみたいだね。早く服部先輩と合流しなくちゃ」

「えっと、これは僕達が優勝ってこと……?」

「そりやそうだよ。決勝戦だったんだから」

? 理澄に言われても、幹比古はじっと固まったままであった。少し経って、ようやく彼は言葉を発す。

「そうか。——僕、勝ったんだ……!」

? スティールプルチェース・クロスカントリーは、極秘裏に達也がクローン兵を一掃したことで、特に事件は起こらず無事に終わった。もしも、達也が動かなければ、リーナや四葉の人員を割かねばならなかった。勝手に暴れてくれて助かった。独立魔装大隊で彼と同僚の藤林少尉が、ムーバルスーツを提供したようだ。

? 彼女を初めとして藤林家は、九島家の実験に内心反対していた。その為、達也を上手く使って片付けようと考えたのだろう。大概、何処も同じような発想をするらしい。

? 男子スティールプルチェース自体の結果としては、僕は5位になってしまった。ただ単に、足が遅かったのだ。普通なら戦力外扱いにされそうだが、全員がポイントが貰える為に出場は必須。本音を言えば、出たくは無かった。

? ただ、2位が幹比古で3位が服部先輩なので、総合優勝が揺らぐということはない。もしそうでなかったら、僕はチーム内で大バッシングを受けていたかもしれない。

? 十師族は何でも完璧でなければならない、という風潮はやめて欲しいものだ。50mを8秒でしか走れない十師族だっているのだ。

「——って思うんだけど」

? 九校戦も終わり、夏休みも半分以上が過ぎている。

? 僕は珍しくガーディアン北斗と二人だけで出掛けていた。正確には、仕事で奈良県に来ているのだ。今は昼時なので、僕達は食事をしていた。適当に入ったが、豆腐料理で有名な店らしい。

? 奈良県の生駒には、九島の本拠地がある。僕は御当主様から、九島に脅しを掛けるメツセンジャーの役割を与えられた。その為、ここまでやって来たのである。

「結果的なイメージ戦略としては、良かったのではありませんか? 完璧超人は居ないという理屈から、魔法師も万能でないというものに繋がられますし」

「実際、ネットには十師族陰謀論とかよく書かれているけど、大体は何

処も完全にクロ。ギャップによる親しみやすさは必要か」

「？個室な上に遮音フィールドを使っているで、こういった話も可能だ。個室の分、座席代が値段に上乘せさせられるようだが。まあ、大した出費でも無い。」

「三流雑誌の書き散らした記事が、結構的を射ていたりもしますからね」

「前に見たのだと、『四葉理澄は影武者説』というのがあったよ。強ち間違ってもないけど」

「深雪様のカモフラージュということでしょうか？」

「それもあるけど、一番は達也。黒羽の叔父様がね、前に言ってたんだよ。アレを魔法も満足に使えないガーディアン風情だと思わせておかないと、四葉は苦難の道を歩むことになるだろう、ってね」

「？叔父様らしい回りくどい話し方だが、言いたいことは分かる。達也の力は、敵も味方も消し去ってしまう。でも、世界そのものを滅ぼす力なんていらぬ。相手がいない立ち回りほど、虚しいものは無いのだから。」

「黒羽様の御懸念は非常に理解できます。確か、新発田様も同じことを仰っておられたのではないかと」

「叔父様達は足並み揃えて、同じ意見を持つてるからね。——達也の再成と分解は確かに驚異的だよ。この世界の概念を根底から覆す、まさに本物の『魔法』だ。だからこそ、彼に地位を与えちゃいけない。自由に彼が『マテリアル・バースト』を撃てるようになった時、一体誰が責任を取れる？」

「？誰だつて、戦略級魔法についての責任なんか取りたくない。しかし、責任の所在を有耶無耶にすれば、原作並みの悲劇が起こる。」

「でも、達也を助けることを感情論抜きで実現できる人がいれば、その人の意見を支持するつもりではいる。僕だつて、好き好んで彼を迫害したい訳じゃないんだ」

「そんな人物が現れるかどうかですね。いらつしやらないのでは？」

「そうなんだよなあ……。僕には荷が重過ぎるし、絶対やりたくない」

「？僕はリーナと武倉の人間の生活さえ保証出来れば、それで特に問

題は無い。変に自ら火の粉を被りに行くような真似はしたくなかった。

「それでは、現状維持ということになりますね」

「ぶつちやけ、考えたって仕方ないからね。下手に警戒されたら、分解一つでお終いだ」

？ 僕は揃って、ため息をつく。話題が微妙なものに転がったせいで、折角の食事が不味くなりそうだった。



？ 食事を終えた僕らは、九島邸へと向かった。これが今日の目的なのだから、行かなくてはならない。たとえば、気が進まなかったとしても。

？ 気を取り直して、インターホンを押す。対応してくれたのは使用人ではなかった。

「理澄くん、よね？ 達也くんから聞いているわ。遠いところからありがとう」

「はじめまして。藤林さん」

？ 藤林響子。「電子の魔女」エレクトロン・ソーサリスとして有名な九島烈の孫娘。お互いに初対面だったが、共通の知人のお陰で特に気まづくはならなかった。

？ 入った先の庭には、生垣が迷路のように入り組んでいる。キヨロキヨロと見回していると、藤林さんが言った。

「少しずつ、ここに守りを固めていったのよ。九島家は、ここに本拠地を置くことが決まっていましたから。どうしてかは、わかる？」

？ 知っていたが、ホストに恥をかかせる訳にもいくまい。それは、ゲストとして礼を失する態度だ。

「いえ……。教えて頂けますか？」

「大阪の監視が理由よ。本当はもっと向こうに置く方がいいんですけどね……。そういう訳にもいかなかったらしいの」

？ 取り込まれても困る、というのが当時の政府の考えだったのだ。

「エレメンツ」の開発事情にしても、同じことである。

？藤林さんの案内で屋敷に招き入れて貰った僕は、書齋で待っていた老師こと九島烈と面会した。別に約束の時間に遅れた訳でもないので、僕が気後れすることはない。

？とはいえ、目下の僕は挨拶には気を遣わねばならなかった。相手は生きた伝説に近い人間なのだ。

「お初にお目に掛かります、老師。私は四葉家当主、四葉真夜の名代として参りました、四葉理澄と申します。この度はお目見えすることが叶いまして、光栄に思っております」

「そう硬くならなくても良い。気にせず、お座りなさい」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせて頂きます」

？そう返して、僕はソファに座った。後ろには北斗が立ったまま控えている。

「早速だが、本題に入ろうか。数日前に真夜——いや、四葉殿から送られてきた書状についてだ。……いやはや、破り捨てたくなるような内容だったね」

「おや、破り捨てになられましたか」

「そういう訳にもいくまい。我々が非人道的な実験を行ったのも事実だし、それを四葉殿に止められたことも事実だ」

「我々は富士演習場の人工林で行われたことには一切介入しておりません。全て、後に知ったことです。それは、事情を知らない第三者の仕業では？」

？達也は四葉の命を受けて、動いたのではない。勝手に動いて、勝手に暴れた。それだけだ。

「とぼけなくても良い。彼——司波達也君は深夜の息子だろうか？」

「彼は軍の協力で動いていたようです。入手した証拠映像に映っていた装備品は、国防軍のものでしたから。残念ながら、装備の回収は出来ませんでした」

？達也をけしかけたのは、藤林響子だと暗に伝える。四葉は実際、何もしていない。逆に、僕は達也を止めたくらいなのだから。

「口が達者だな。まだ若いというのに」

「恐れ入ります」

「一体、四葉は何を望む？ 権力などでないのは確かだろう。真夜の目的は、何なのだ？」

「呼び方が「四葉殿」から「真夜」に戻っている。純粹な疑問なのだろう。」

「目的という程のものではございません。我々十師族は相互に牽制し合い、魔法師の暴走を防ぐ役割があります。確か、一条家からも抗議文は届いていたではありませんか？」

「情報を流したのは、君だったのかね？」

「子供同士の噂話です。老師も、身に覚えがあられるかと」

「もう随分と昔だからな……」

「？一瞬だけ、老師は昔を懐かしむ表情をした。」

「……このままでは、来年の師族会議で九島家は糾弾されることになります。十師族の枠から『九島』が外れたとしても、おかしいことではありません」

「仕方のないことだ。我々はそれだけのことをした。真摯に罪と向き合うべきだろう」

「しかし、真言様はそのことに納得されるでしょうか？」

「？九島家現当主、九島真言。彼は自身や自身の子供の魔法力が九島烈に到底及ばないことに、劣等感を抱いている。故に、彼は九島を強くすることに必死になっていた。十師族の座から落ちることは、彼の人生を否定されることに等しい。」

「真言には、私から言い聞かせる。分かって貰えなければ、実力行使もやむを得ん」

「九島家内で争いの火種が起これば、我々も心が痛みます。身内同士が争うことは悲しいことですから。我が当主は、昔の恩師への感謝を忘れてはおりません。その為、何かお手伝いをさせて頂ければと」

「……話を聞こうか」

「？僕は北斗に目配せをする。彼はすぐに書類を手渡してきた。交渉用に用意してきたものだ。」

「まずは、こちらをご覧下さい。彼女はアンジェリーナ・クドウ・シー

ルズ。老師の弟様の孫に当たる者です。彼女は日本への帰化を望み、現在は四葉家で保護しております」

「……アンジー・シリウスが失踪したと思えば、四葉の庇護下に居たとは。灯台下暗し、とはこのことだな」

「彼女の意思を汲み取り、四葉が代理人として直接USNA側と交渉しました。紆余曲折はあったものの、一応の話は付きました。しかし、日本への帰化は出来ておりません。そのことで、ぜひ老師に口添えをお願いしたいのです」

「僕は、未だリーナに帰化の申請をさせていなかった。彼女であれば、簡単に認可されるだろう。でも、九島家の一員にさせなければ、意味が無かった。」

「アンジェリーナを一族の者と認知すれば良いのかね？　それで、彼女を九島の当主にする。そんな辺りか」

「お話が早くて、幸いです。心機一転、再スタートと銘打てば、他家も文句は言えないでしょうからね」

「そんなこと、断る以外の選択肢があるかね？　第一、それでは玄明はどうなる？」

「残念ですが、当主の座は諦めて頂くしか無いでしょう。いいお年ですのに、父親の奇行を止められなかった時点で同罪なのですからね」

「その言葉に、老師は僕を鋭い目で睨んだ。」

「貴様……！」

「取り繕っても仕方ありません。九島には新しい風を取り入れ、再編し直すべきでしょう。お断りになられるのなら、それでも結構。空いた枠には別の家を入れるだけです」

「？　そう言いつつ、僕は新しい書状を取り出した。御当主様がしたためた手紙をこんな時に出すのも変だが、今こそジョーカーを出す時なのだ。手紙を差し出すと、彼はひったくるように手に取った。黙ってそれを読み進める老師。だが、急に顔色を変えて、こちらを見た。」

「……光宣にある欠陥は治るものなのか？」

「最初は一時的な治療になります。ですが、最終的には完治を目指し、研究を進めることになるでしょう。彼を治癒するということは、回り

「回って魔法師全体の利益に繋がる筈ですから」

「？四葉にとつても、九島光宣を研究出来ることは大きい。司波深雪は「完全調整体」の成功例ではあるが、それはほぼ偶然の産物。調整体の不安定さについての研究によって、深雪のような魔法師を安定して生み出せるようになるかもしれないのだ。その為にも、取りたいデータは幾らでもあった。」

「……今回のことは持ち帰り、九島家内で協議する。それで構わないか？」

「勿論です。——あの、個人的な質問があるのですが、宜しいでしょうか？」

「良いだろう。言ってみなさい」

「？僕が立場を変えたことが分かったのか、老師はまるで教師のような話し方で返す。昔の、御当主様と深夜様に魔法を教えていた頃を思い出したのかもしれないかった。」

「ありがとうございます。……何故、光宣さんの体質に問題があると分かった時点で、九島家はそれへの研究をしなかったのでしょうか？正直な話、今回のようなことを起こすよりは、彼の為になったと思うのですが」

「？彼は目を瞑り、かなりの時間を無言のままだった。」

「……そうだな。我々はそうすべきだったのかもしれない。父親も母親も、兄弟達も、何の罪も無い彼を疎むことしかしなかった。私だって、同じだ。憐れむだけ憐れんで、何も動かなかった。誰も本当の意味で、光宣を愛してはいない……」

「？目の前に居るのは、「世界最巧」でも「トリックスター」でもない、ただの哀れな老人だった。僕は黙って、席を立った。その時、老師が僕に言った。」

「四葉理澄君、頼みがある。どうか、光宣に会ってやつてはくれないか。もしかしたら、君であれば……、友人になれるかもしれない」

「？人に丸投げとはどうなのか、と思わなくもなかった。とはいえ、本人の信を得れねば、四葉の研究には参加して貰えない。彼とは会って話をしておきたかったのも、事実だった。」

? 九島烈との話し合い——実質は脅しだ——を終え、書齋を出る。廊下には藤林さんが待っていた。もしかしたら、話の内容を聞いていたのかもしれない。

「祖父との対談はどうでした?」

「有意義なお話が出来たように思います。多くの経験を重ねられた老師からは、学べることも沢山ありました」

? 主に反面教師としてだが。その返答に、藤林さんは声を出して笑った。この様子だと、やっぱり盗み聞きしていたらしい。別に文句を言ったりはしなかったが。

「そう、良かったわ。……とところで。理澄くんさ、まだ時間はあるかしら? 一緒に軽く食事でもどうか、と思ってるんだけど。勿論、ご同行の方も一緒に」

「では、折角なのでご相伴に預らせて頂きます。北斗もいいよね?」
「理澄様がそう仰るのならば」

? 通されたのは、カジュアルな用途で使っているという食堂。家同士での交流の際に、若い年代の人間が集まる為に用意している、と彼女は語った。

? 食堂に入ると、一人の少年が座っていた。そして、僕らを見るやいなや、立ち上がってこちらに走ってきた。少年は、かなり整った容姿の持ち主だった。人間として完璧に近い造形なのに、不気味の谷現象を感じさせない。哲学としてのアイデアが示す「人間」を見せられたような気分だ。

「光宣君。お部屋にいるように言っていたでしょう? 会ってくれるかは聞いて見なくちゃ分からないからって」

「ごめんなさい、響子姉さん。つい、待ちきれなくなっちゃって」

? 見た目的に予想はしていたが、彼がかの「九島光宣」のようだった。彼を窘めた藤林さんだったが、彼女の顔には笑みが浮かんでいる。本気で怒っているのでは無いのだろう。下手に期待を大きくして彼を悲しませないように、と考えていたのかもしれない。

「はじめまして、四葉理澄です。こっちは、僕の護衛の名瀬北斗。北斗って気軽に呼んであげて」

？自己紹介のついでに、北斗の紹介も済ませてしまう。彼は僕の後ろで丁寧に一礼した。光宣も、そちらに軽く頭を下げた。そして、彼は僕を見て、緊張した面持ちになる。

「はっ、はじめまして！ 九島光宣です。理澄さん、とお呼びしても良いですか？」

「理澄、でいいよ。敬語も無しで。僕二月生まれだし。そんなに変わらないから」

「いえ、そんな……。それでも、年上には変わりありません」

「そんなこと気にしなくていいのに」

？彼の緊張は食事が始まった後も続いた。会話をしよう、とは考えている筈だ。しかし、彼は何を話せばいいのかわからないのである。仕方なく、僕は話題を提供した。

「CADは、何を使ってるの？」

「僕ですか？ えっと、汎用型を二つ使ってます。99個じゃ入りきらなくて……。今まで片方は使いにくかったんですけど、完全思考操作型が出てからはとても楽です」

「ローゼン？ FLT？」

「FLTです。ローゼンの方もあるんですけど、こっちが一番使いやすくて」

「僕も使ってるよ、そのデバイス。最近買ったんだ」

？話を合わせた訳ではない。本当に使っているのだ。

？元々、僕は端末型CADにリング付きのカバーを付けて使っていた。しかし、FLTが完全思考操作型CADを発表してからは、それに乗換えている。魔法は速度が命。変な拘りを持ったせいで死にたくはなかった為に、発売初日に即購入した。そのことを達也に言うと、気を良くした彼は「シルバー・ホーン」を僕の家を送ってきた。使い所が無くて、そのまま放置しているが。

？勿体ないので、森崎にCADの速い取り出し方でも教えて貰おうと考えてはいる。

「そうなんですか！　すごい偶然ですね。嬉しいです。僕、あまり友達がいらないから……」

「ちよつと。初対面の人にそんな暗いこと言っちゃあ良くないわよ」

「あつ……。すみません、変なこと言っちゃって」

「気にしないで。僕も『四葉』つて公表された時は、人がどんどん離れていって……。今は何人か友達がいるけどね。だから、大丈夫だと思うよ。だって、友達の一人目は僕になるからね」

「良いんですか……？」

？友達というのは宣言してなるものでは無いらしいが、彼にそれを要求するのは酷だろう。

「敬語は無し。友達だろ？」

「うつ、うん……。よろしく、理澄」

「こちらこそ、光宣」

？友達にくらい、幾らでもなる。頼むからテロリストにはならないでくれ。九島光宣と敵対することになれば、非常に面倒なのだ。



？老師の行動は驚く程に早かった。リーナを九島の人間だと認知したし、日本に帰化することへの認可もすぐに出た。

？ただ、争いは避けられなかったようだ。現当主と光宣以外の子供達と、老師は完全に決裂。恐らく、普通に十師族から落ちていた方が、まだ平和だっただろう。完全なるお家騒動である。

？だが、九島烈は魔法の黎明期を生きた、海千山千の男。九鬼と九頭見の前当主を巻き込み、旧第九研の成果のデータを掻き集めてロツクを掛けてしまったのだ。これは、藤林家も関与している為に出来たことである。光宣の遺伝上の母は、実際に産んだ訳でない彼を、心の何処かで愛しているのかもしれない。

？そんな推測は置いておいたとしても、「エレクトロン・ソーサリス電子の魔女」が組んだシステムを他の人間に破れる訳がない。現当主は、お飾りへと成り下がってしまった。かなり気の毒である。最初の原因は僕とはいえ、同

情を禁じ得ない。

？九島真言は、父親を「末孫を可愛がり過ぎて、とうとう耄碌したのか」と糾弾した。しかも、それを光宣の目の前で言ったらしい。何とも、酷い話である。

？一ヶ月後に結局、彼は妻と子供、そして自分に付いている部下を連れて、家を出ていった。老師が死ぬまで待つ、という選択をしたようだ。知らないというのは、本当に素晴らしいことだと思う。彼が死んだら、四葉が出てくるというのに。

？現在、九島邸にいる九島の人間は、老師と光宣、そしてリーナだ。他にいるのは、先代が当主の頃から仕えている使用人達だけである。

？僕の家からリーナが、引っ越してしまうことになったのは残念だ。しかし、このままでは彼女は何をするのか分からないまま、当主になってしまう。そうならないように、彼女には早く仕事を覚えて貰わねばならなかった。

？光宣の想子体を治療する為の研究は、老師の強い後押しもあり、規模は大きなものになった。ダミー会社を通じて、資金を出して貰えたのも大きい。それは、光宣の人権を保証させる意味合いもあったと思う。彼を実験動物扱いしないことを元から確約しているが、心配なのは分かる。一応、僕からも御当主様に口添えはしておいた。

？最初の時間遡行こそ困難であったが、「変数に虚数を定義する」というアイデアは画期的なものだった。

？存在があやふやなものへの干渉を可能にする。

？これは、第四研が掲げている「精神干渉魔法による魔法演算領域の向上」に近いもの。依然として変化が見え辛かった研究が、急に進んだのだ。

？今は想子体の管に干渉し、硬化させるといふ魔法を開発している。飛行魔法用の想子吸引スキームを応用すれば、光宣の想子量なら一日中使っても苦にはならない筈だからだ。

？そうは言っても、九島家の事情は四葉家に全く関係が無かった。つまり、僕は四葉の仕事をしなくてはならない。しかも、今回は勝成

さんとの任務だった。新発田と武倉は深い交流があるとはいえ、この組み合わせは非常に珍しい。

「作戦上必要なのは確かだよ。でも、議員の演説をわざわざ聞きに行かなくちゃいけない、ってのも嫌だよな」

「変に突入するよりは目立たないからな。つまらないだろうが、これからも機会はあるよ。慣れておいた方がいいんじゃないか？」

「慣れたくないなあ……」

？ 僕達はキャビネットの中で、今日のことについて話し合っていた。今日の僕も「メロディ」の格好をしている。ブラウスに長めのフレアスカート、そしてヒールが高めのパンプス。髪はダークブラウンのストレートヘアだ。TPOに合わせたとはいえ、恥ずかし過ぎる。「人間主義が下火になったのはいいけど、逆に突き抜けてくる奴が出るとは……。だって、すごいよ。この人曰く、非魔法師は二等国民なんだって。大丈夫なのかな……。この議員、魔法師じゃないんでしょ？」

？ 過激思想を掲げる議員の集会で、ひと暴れするのが仕事だった。要はそんな思想を持つ人間達に、警告を出す訳である。

「BS魔法師だよ。意識誘導の先天性スキルがある」

「それは魔法師扱いなのか……」

「その方が良いと思うが。例えば、達也君だって実質BSだが、彼は魔法師だろうか？」

「後付けだけどね」

？ キャビネットは目的地の駅に到着した。そこからコンピューターに乗って、会場まで移動。伝で手に入れた招待状で中に入る。身体検査は無かったので、CADはバレなかった。もしもこの時点でバレていたら、開き直って暴れていたかもしれない。

？ そこから30分くらいして、演説が始まった。本職なので語り口はそれなりに面白かったが、ちよつと宗教っぽかった。

「そろそろだね。やって良い？」

「構わない。頼む」

？ 新しいCADを早く使いたかったのもある。意気揚々と僕は舞

台の中央のスポットライトに向けて、「インビジブル・ブリット」を放った。照明が壊れたことにより、舞台上は一気に暗くなる。

？人々の意識がそこに集中した瞬間、勝成さんの魔法が発動する。室内の気体分子密度を操作して、酸素の量を減らす魔法だ。それによって、僕ら以外の人間は全て意識を失った。

「急ぐぞ。警備の人間が来る」

「分かっている。すぐに破っちゃうから」

？天井の一部を狙って、「破城槌」を使う。落ちた瓦礫に何人か下敷きになっていたが、構ってはいられない。加重軽減の魔法は掛けていたので、それで許して貰おう。僕は自分と勝成さんを空気の繭で覆い、「擬似瞬間移動」で外に飛び出した。

？僕の家へのヘリが待機していたので、飛び上がった勢いで機内に転がり込んだ。

「僕達、すごい迷惑だったろうね」

「迷惑を掛けに行ったからな。目的は達成できた筈だ」

？真顔で勝成さんはそう返す。そして、薄い笑みを浮かべ、僕に言う。

「御当主様に報告をしなくてはならないな。急ぎだから、理澄くんはそのままの格好でいいだろう？」

「それ、本気で言ってるの!?!」

？彼は常識人で無かったのか。僕はとても泣きたくなった。



？今日の御当主様はかなり機嫌が良かった。まさか、僕が女装をしているから——という理由ではないと思いたい。

「理澄さん、それに勝成さんも。きちんと任務をこなしてくれて、本当に助かりました」

「滅相ありません、叔母様」

「いえ、四葉の魔法師である以上、当然のことですから」

？文弥や僕が、女装をしている状態で御当主様と会う時は「叔母様」

と呼ぶように言われている。そちらの方が可愛いかららしい。女装男子を侍らす趣味でもあるのだろうか。

「勝成さんは就職したみたいだけれど、お仕事はどうかしら？」

「家の仕事とは勝手が違うこともあり、戸惑うことも多いです。ですが、そろそろ慣れてきましたね」

「それは良かったわ。……理澄さんは確か、部活連の会頭になったのだったわね？」

「はい。代替わりがありました。皆に推薦して貰い、無事に就任できました」

？一高生が期待するような、僕と深雪の殺し合いには勿論ならなかった。深雪は生徒会長になったし、達也は書記長になっている。きつと、深雪は昔の文献を漁り、書記が一番偉い国の例を探し出したのだろう。とはいえ、名前だけ変えたって、何の意味も無い気はする。

？僕が生徒会長の立候補を辞退したのは、「生徒会役員は魔法大学の推薦を断らなくてはならない」という不文律があるからだ。

？何の為にあるのか、本当によく分からないシステムである。折角推薦が取れるのに、受験勉強なんてしたくない。

「理澄さんが楽しく学校に通えているみたいで、私も嬉しいわ。一時はどうなることかと思いましたが」

「ご心配をお掛けしてしまい、申し訳ありません。叔母様」

？貴女のせいなのですが、と言いたくなかったが、そんなことは口に出さない。とりあえず、頭を下げておいた。

「いいのよ。ところで、来年の慶春会があるでしょう？二人は毎年参加してくれているけれど、今回はね、ちよつと特別なの。——今年の慶春会は、四葉の次期当主を発表しようと思っています」

？僕は思わず、息を呑む。勝成さんも同じような反応をしていた。

「まだ、誰とは言えませんけどね。ですが、心の準備はしておいて下さい」

？その言葉を最後に、話は切り上げられた。その後も葉山さんとは言葉を交わしたが、特に新しい情報は得られなかった。

？とうとう、「四葉継承編」と原作で呼ばれた時間軸までやってきて

しまった。もう物語は何もかも違う。

？僕は、四葉の中樞から達也を引き剥がせるのか。そもそも、達也に勝てるのか。ただただ不安が、心にのしかかるばかりだった。

四葉継承編

1

？冬休み初日である12月26日。僕の家には、黒羽の叔父様がやってきていた。何を言いに来たのか、大方予想はつく。案の定、彼は「深雪が本家に行けないよう、妨害して欲しい」と言ってきた。

？御当主様は深雪を次期当主にしようと考えているらしい。まあ、それは見ていれば大体分かることだ。僕を推している一派も、彼女が当主になること自体に問題があると考えている訳ではない。横にしている達也が邪魔なのだ。僕が当主になれば、他の策を考えるのは妥当ではあった。

？この提案に賛同しているのは、椎葉、真柴、新発田、静、武倉の五家。武倉がこちら側なのには、もちろん理由がある。数日前、僕は一度実家に帰った。母親に会いに行ったのだ。そこで、達也の危険性について述べた。以前から武倉家は、僕の次期当主候補の座を返上しようとしている。つまり、間接的に深雪を推しているのだ。

？深雪が次期当主になるのであれば、達也を存在しない魔法師にする以外に道は無い。御当主様に叛逆の意思があると思われても、一気に分家の半分以上を処分は出来ない筈。他の家に合わせて賭けに出るべきだ、と説得したのだ。

「元よりそのつもりでしたので。他の分家の後押しがあるなら、心強い限りです」

「良いのかい？ 理澄も達也くんには懐いているみたいだったから、断られると思っていたよ」

「友情があるから殺せない、はフィクションの中しか存在しない綺麗事です。——第一次世界大戦の頃、クリスマスの日に塹壕で睨み合っていた敵同士が酒を酌み交わし、友となったといいます。しかし、次の日になれば、互いに殺し合いました。世の中はそういうものでしょう」

？その言葉に叔父様は苦笑した。

「文弥と亜夜子も、君くらい割り切ってくれたら良いんだけどねえ……」

「僕は二人の優しいところがとても好きです。それは、変わらなくていいものだと思います」

「ありがとうございます。……そういうこともあつて、黒羽家は残念ながら中立だ。けれど、君個人には出来るだけ協力するよ」

「では、もし津久葉が動いた際に抑えるのをお願いしたいのですが。中立なのであれば、彼に肩入れする行動を諫めることができます」

「それなら、君達を抑えないのが変に思われないかい？」

「今更でしょう。とりあえず建前があるのなら、理由はどうとでもなります」

？ 黒羽が津久葉を止めてくれるなら、もう少し勝算は上がりそうだ。母親にも、津久葉の叔母様を説得して貰うように頼んでいる。僕の口がよく回ることは前世からではあるが、母親も結構口が上手いのだ。津久葉に翻意を促すことも、もしかしたら出来る可能性もある。

？ 少しも遺伝ではない筈なのに、僕の性格は母譲りと色々な人言われていた。「交渉」の武倉に生まれたことは、決まるべくして決まっていたのかもしれない。

「分かった。津久葉については任せなさい」

「ありがとうございます」

「私は今からFLTに行くよ。あつちは言つて分かつてくれるような男でないが、一応話だけはしておかないとね」

？ 困ったものだよ、と叔父様は笑う。彼は立ち上がり、洒落たソフト帽をひよいと被る。僕は一つ言い忘れたことを思い出し、彼を引き留めた。

「あの、待って下さい！」

「ん？ どうしたんだい？」

「言質だけは取られないようにお気をつけて。我々が達也を世界から抹消せねばならない理由を、彼自身に言うことは許されません。しかし、彼を通して、深雪に伝わることは避けねばなりません」

「そうだな。聞かれても、上手く誤魔化しておくよ」

「お願いします」

？彼は軽く手を挙げ、僕の家を去っていった。普段の叔父様は聡い方だ。達也を目の前にして頭に血が上っても、事前に釘を刺しておけば失敗はしないだろう。



？慶春会の為に、僕は今年も本家に行った。菜子と北斗を連れて、29日の早朝には家を出ている。深雪への妨害工作に自分が巻き込まれていたなら、世話は無いからだ。

？本当はリーナとも一緒に行きたかったのだが、こんなゴタゴタした所はちよつと見せられない。光宣や老師と共に正月を過ごし、貫うことになるだろう。

？魔法協会には既に九島烈の名で、次期当主の声明は出している。挨拶に来る人間もいるだろうし、そっちの方が都合は良いのか。

？彼女は結構、九島家に馴染めているようだった。光宣と模擬戦をしたという話を前に聞いた。経験の差で何とかリーナが勝ったが、そうでなければ危なかったらしい。老師にも魔法の手ほどきを受けているというから、次に会ったときには驚く程強くなっているかもしれない。なかった。

？今のところ、僕に仕事は無い。暴動を誘発したり、警察を回して検問を行わせたりするのは、他の分家がやっている。気がかりなのは夕歌さんの動きだったが、彼女は既に津久葉の離れに来ている。原作と行動がまるで違うのが気になったので、会いに行ってみることにした。

？津久葉とは、黒羽や新発田程に近い関係という訳ではない。とはいえ、僕と夕歌さんは普通に仲は良いのだ。突然の来訪に居留守を使われることもなく、お茶の席に招かれた。

「去年に会って以来だったわね。理澄くん」

「ええ、お久しぶりです。夕歌さん」

「？お茶を飲みつつ、僕は津久葉家が達也達を支援しなかった訳を尋ねた。」

「ああ、それはね。貴方のお母様に説得されたからよ。理澄くんも知ってるんじゃないの？」

「お母様に頼んだのは僕ですし、それは分かります。分からないのは、叔母様がその説得に応じたことです。正直、話が平行線を辿って終わると思っていました」

「？母親の能力は信用しているが、身内相手に仕事並みのクオリティが出せるかは別問題。それに夕歌さんの母親は、達也と深雪に「誓約^{オース}」を行使している。心理的に向こうに寄り添っていても、おかしくは無かった。」

「最初は渋っていたわよ。でも、『どうせ恨まれてるんだから、今から取り繕っても無駄よ』っていう言葉が決定打になって。まあ、完全に居直れなかったみたいだけど。だから、うちは中立なのよ」

「それで十分です。津久葉が手助けしなくても、どうせアイツはここに来ますよ。確か、自動運転車を持つた筈なので、最後はそれを使うでしょう」

「あれって、私道は走れなかったんじゃないの？」

「緊急時対応モードにすれば、運転操作は可能です。無免許運転でしようけど、法律なんて破りまくってる訳ですし……」

「私達にとっては今更よねえ」

「？僕らはずい、声を上げて笑ってしまった。こういうところが、四葉の人間らしさなのかもしれない。」

「でも、どうするの？ 話が通じる相手でも無いでしょ。敵対していれば、尚更に」

「本家がどうであれ、分家は達也を排除したがっているということだけアピールするのが目的ですから。これに嫌気が差して、深雪のガーディアンを辞めて貰えるのが、最良のルートなんですけどね。穏便な終わり方ですから」

「問題は、深雪さんがそうするかよね……。何ていったって、『お兄様』だもの。そうでしょ？」

「彼を人間兵器にしない為には、前線から遠ざけるのが一番だというのに……」

？全てが矛盾している。何かを犠牲にしなければ、大切なものは手に入らないというのに。どうして、彼女は気づいてくれないのだろうか？

？でも、その実思うのだ。物理法則を捻じ曲げる魔法が存在する世界に、正しい理屈は存在するのかということ。



？31日の朝、達也は自動運転車に深雪と水波を乗せて、四葉本家へと続く道を走ってきた。彼らはもう既に、勝成さん達との戦闘を終えた後だろう。疲労困憊しているかもしれないが、気を遣ってやる必要は無い。

？僕は北斗と一緒に彼らを待ち伏せしていた。雪道でかなり寒かったが、文句は言ってられない。

「理澄様、来ましたよ」

「北斗が見えてたらね、僕にだって見えてるよ」

？そう返しつつ、道路に向けて「破城槌」を放つ。道に大穴が空き、車はその先を進めなくなった。「再成」で戻される前に、僕達は彼らの前に向かった。

「やっぱり、貴方だったのね」

？深雪が冷え切った声で僕に言う。機嫌は最悪なようで、周囲の気温が恐ろしく低下していた。

「僕が出てこなくて、誰が出てくるのさ。分家全体が敵に回ったら、そりゃあ僕も居るよ」

「理澄。俺達は叔母上の命を受けて、本家に向かってるんだ。その行動は、武倉家が本家に反抗していると認識して良いんだな？」

？勝成さんにも同じ脅しをしたのだろうか。けれども、僕がそんなちやちな脅しに屈する訳が無い。

「そういうことになるね。全体主義なんて、今時流行らないよ。革命

だよ、革命。時代を変えなくちゃ」

「洗脳されている……という訳では無さそうだな」

「正気だよ。ここから先を進むなら、僕は達也をここで殺す」

「お前が負ける確率の方が高いんだぞ!」

? 僕だって、本気でこれを言ってる訳では無い。こう言えば、深雪が出てくるのは確実だからだ。

「待って下さい、お兄様! 私有理澄君と戦います。お兄様には傷一つ付けさせません!」

? ボディーガードの意味はあるのかと問い詰めたいが、今は予想通りの展開に内心小躍りする。もしも、達也と戦うことになっていたら、恥ずかしい終わり方になってしまうからだ。

「僕は、深雪が相手でも全然構わないよ」

「やらせて下さい! お兄様!」

? 深雪の願いに、達也は少し悩んでから答えた。

「……分かった。深雪が勝てば、俺達は先へ進む。理澄が勝てば、俺達は帰ろう。だけど、条件がある。模擬戦形式で、命に関わるような攻撃はナシ。理澄もそれで良いか?」

「いいよ。深雪一人くらい、捻り潰してやるよ」

「後で恥をかくのは、貴方の方よ!」

? そう叫んで、深雪はCADを操作する。発動した魔法は「ニブルヘイム」。ダイヤモンドダストにドライアイス粒子、液体窒素の霧を含んだ、大規模冷却塊がこちらに襲い掛かる。

? だが、僕はこの魔法を予測していた。彼女と同じタイミングで使った「下降旋風」は、思考操作型のアドバンテージもあり、「ニブルヘイム」の効果が現れる前に発動した。

? 大きめの範囲を指定している「下降旋風」は、一瞬で周りの空気を散らす。冷却された領域の空気が、そのまま深雪の方へと戻っていく。

? 彼女は咄嗟に半球シールドを張る。対物反射と、真空被膜の二重構造のシールドだ。かなり丈夫に張っており、簡単には破れないだろう——正攻法では。しかし、僕は「重力操作」が得意な魔法師なのだ。

「深雪！ 下だっ！」

？ 達也が叫ぶが、もう遅い。その時には、立っていた筈の深雪の身体がひっくり返っていた。彼女の足元の重力が遮断されたからだ。勿論、僕の魔法によるものである。

？ ところが、僕は自分の体温が急激に低下していることを知覚した。体内に干渉し、体温を下げる魔法を使われたのだ。情報強化と領域干渉をきつく掛けて、何とか耐え切る。それと同時に、僕は魔法を放つ。

？ 重力操作によって、体内の血液のみを下に集中させる魔法。その魔法は、ブラックアウト現象と同様の効果を現す。僕の方が、深雪よりも干渉力は強い。得意魔法であれば、彼女の強固な情報強化を破り、体内へと干渉することも可能だ。

？ 半秒のうちに、深雪の身体は地面に崩れ落ちる。誰が見ても、僕の勝ちだった。

「残念、深雪の負けだよ。……って、聞こえてないか」

？ 達也が深雪に駆け寄り、手を翳す。恐らく、「再成」を使ったのだ。その証拠に、すぐに彼女は目を覚ました。

「で、達也は帰ってくれるの？」

「何の話だったかな。口約束なんで、忘れてしまったよ」

？ 舌先三寸で、達也は約束を反故にした。不安要素はこれだったのだ。勝つとか、勝てないという次元の問題では無い。人間性に問題があるのか、彼は碌に話し合いをしようとはしないのだ。せめて、交渉のテーブルについてくれれば、まだ勝てる方法はあるというのに。まともに意思疎通が出来るなら、僕達だってここまで苦労はしなかった。

？ 食い下がることも出来るが、そうしてしまうと、達也は飛行魔法で飛んで行き、境界を「分解」してしまう筈。そうなれば、御当主様は流石にお怒りになる。そろそろ、引き際なのは確かだ。戦いをしただけ、大損という訳である。気分が悪い。

「じゃあさ、僕達も車に乗せてってよ。歩いて帰るのは嫌だし」

「襲いに来たのに、凶々しい奴だな……」

「深雪に勝ったんだよ？ それくらい良いでしょ」

？ 試合に勝って勝負に負けるといふのは、こういう意味なのだろう。僕は表面上は笑顔を作っていたが、噛み締めた唇からは血が滲んでいた。

「理澄様、大丈夫なんですか？ 流石にまずい気がするのですが」

？ 離れに戻ってくると、北斗が心配そうな声で言う。彼には、「深雪を襲う」ということだけしか教えていなかったの、そう言いたくない気持ちも分かった。

？ 原作のガバガバ作戦よりはマシな状態に持って行っていただけ、世の中そんな容易に事は終わらない。「お兄様」に楽に勝てるのは、僕だって考えてなかった。普通に悔しかったのは、悔しかったけれども。

「勝てる可能性がもつと高ければこれで終われたけど、実際はそうじゃない。どうせ、御当主様が当てにならないのだから、他に話を回してるに決まってるでしょ」

「もしかして、老師でしようか？」

「違う。……スポンサー様だよ」

？ 黒羽の叔父様が訪ねてきた後、僕はある人物にアポイントメントを取った。四葉家のスポンサーの一人、東道青波に話を持ちかける為に。

？ 原作でも、彼は達也を高く買っている。だから、勝手に彼を売り込みに行った——とはいえ、別に渡すとは一言も言っていない。ただ、相談しに行ったという体裁を整え、達也に興味を向けさせただけだ。

？ そもそも、原作であれだけ「マテリアル・バースト」を撃ちまくった達也を、彼は庇えるのである。四葉の手に余るものは、平気で使える人物に渡した方が有効活用出来るだろう。

？ そうなれば、本家と分家の対立は終わる。いずれ四葉の当主になった深雪が、スポンサーと争うのを、僕は高みの見物しておけば良い。達也が暴れても、矢面に立つのはスポンサーなのだから。

？ もし四葉がボイコットをした際は、四葉に回していた仕事を僕が請け負うことを、彼と契約している。

「……他に策を用意していたのなら、わざわざ理澄様が深雪様を襲う必要なんて無かったのでは？」

「こんなの奥の手に決まってるでしょ。一身上の都合で使う方法じゃないんだよ、普通は」

？それでも、何もしない訳にいかないのだ。放置しておいたら、目立ちたがりの彼は絶対に人前で恐ろしいことをしでかす。そのことを、沖繩戦のことで痛感した。誰かが手綱を握らねばならないが、そんな貧乏くじは誰も引きたくない。それなら、物好きにプレゼントするに限る。

「まあ、今は慶春会のことだけ考えていればいいよ。もつと先のことだから」

「分かりました。……まず、理澄様は冬休みの宿題をした方がいいです。まだ終わってないでしょう？」

「お願い、宿題手伝って……！」

？無言で僕達は問題集や一般教科のレポートに向き合った。一番近い課題は宿題なのだ。人生とはままたまらないものである。

？しばらく課題を片付けていると、部屋に菜子が入ってきた。今日の夜に会食があるということを、彼女は伝えにきたのだ。

「僕達にだけ、次期当主を先に教えておくんだろうね。まあ、皆が分かりきってることだけど……」

？あれだけ妨害しておいて、御当主様の前に平然と現れるのは問題しかない気もする。だが、僕一人じゃなく勝成さんもいるので、一応大丈夫な筈である。道連れの間がいるとき程、心強いものは無い。

「時間になりましたら、ご案内しますので」

「ありがとう、菜子。よろしくね」

？彼女は忙しそうに、部屋を去って行った。明日の用意で大変なのだろう。

「本当に理澄様、問題は無いんですか？ 困りますよ、四葉から放逐されたりしたら」

？北斗が再び同じような質問をしてきた。僕が呼び出されて、御当主様から怒られるかと思っっているに違いない。

「もしそうになったら、暴露本を出して売るしかないね」

「……いつも言ってますよね、それ。本気で言ってたんですか？」

「いや、冗談だけど」

？彼の心配も尤もなので、スイス銀行辺りに預金を移しておいてもいいかもしれない。最悪、いつでも夜逃げできるようにである。しかし、世界が滅んでしまったら、どこにも逃げ場は無くなってしまいうのだが。



？会食は、前にリーナと一緒に行った時の食堂で行われた。僕が来た頃には、文弥と亜夜子が既に居た。

「理澄さん！ 聞きましたわよ、深雪さんと戦ったんですって!」

「父さんに何か言われたの!」

「もしそうなら、早く仰って下さい！ その時は、私達からも御当主様にお願ひしますから！ 一体、何があつたんです?」

？会った瞬間に、二人から今日のことについて質問責めに合う。僕は何とか、それを落ち着かせる。

「いや……。叔父様が強要した訳じゃないよ」

「でも、それならどうして……?」

「分家の中心にいるのは僕だから。バラバラに動くより徒党を組んでおいた方が、本家から分家へのペナルティが少なく済む筈だからね。誰かがまとめなきやいけないなら、僕がやるべきだった」

？この言葉は全てが嘘という訳では無かった。

？原作では、夕歌さんが達也を庇うことで、津久葉だけが一人勝ちする。そうなるよりは、分家全体が損害を被った方がマシなのだ。武倉が分家の中で勢力を伸ばすのは構わないが、他の家に美味しい思いはさせない。全員、泥沼に引きずり込んでやる。どうせ、僕は四葉から出て行く予定なのだ。これくらいの置き土産は残してやってもいい。

「そっか……。ごめん、父さん達のせいだ……」

「気にしないでよ、文弥」

？そう話しているうちに、他の人達も部屋に入ってきた。すぐに、

御当主様以外は全員揃った。一番上座の席の横は深雪だ。座席で大体のことは分かかってしまう。マナーというのは、こういう時に不便だと思ってしまう。

「皆さん、お待たせしましたね」

？最後に、御当主様が現れた。僕達はそれに合わせて、席を立つ。僕の椅子を引いたのは、今回は菜子だった。深雪が水波であることから考えても、それぞれに仕えている使用人が担当しているかもしれない。

「明日の会が和風のおせちですので、この席は洋風のコース料理にしてみました」

？前菜のテリーヌから始まって、順に食事が運ばれてくる。途中の口直しであるグラニテが出てきた時に、御当主様はさも今思い出しました、という風に微笑んだ。そして、居住まいを正す。空気が変わったのを感じ取り、僕達も背筋を伸ばした。

「さて、そろそろ本題に入らせて貰うわね——勝成さん、夕歌さん、理澄さん、深雪さん、文弥さん。貴方達は最後まで残った次期当主候補の五人。そして、いよいよ明日の慶春会では次期当主を指名します」

？御当主様の口元に、僕達の視線が集中する。気づけば、使用人は居なくなっていた。

「ですが、皆さんのいる前でいきなり告げられても、気持ちの整理が付かないかもしれません。そう思いました、皆さんにだけ予め次期当主に誰が選ばれたのかお伝えしようと思ったのですよ」

「御当主様、発言をお許し頂けますでしょうか？」

「あら、文弥さん。何かしら？」

？文弥は御当主様の言葉を遮り、立ち上がってこう言った。

「失礼します——お許しにより、申し上げます。黒羽家は私、黒羽文弥の次期当主候補の地位を返上し、司波深雪さんを次期当主に推薦致します」

？彼は緊張した面持ちのまま言い切り、一礼して席に再び座った。これに便乗して、僕も言ってしまうおう。

「御当主様、私も発言をお許し頂いてもよろしいでしょうか？」

「あら、理澄さんも？　言ってみなさいな」

「この度の次期当主決定に先駆け、武倉家は私、武倉理澄の次期当主候補の座を返上させて頂きます。そして、次期当主には司波深雪さんを推薦したく思います」

？四葉家内で「四葉」の苗字を名乗っているのは、当主の地位にある者だけだ。外では「四葉」を名乗る僕も、ここでは「武倉」に戻る。とはいえ、こっちの名を使うのは久しぶりだった。

？僕の言葉に、御当主様は唇を三日月型に歪めた。

「ふーん……。文弥さんに、理澄さんもねえ。面白いわね」

「御当主様、私にも発言をご許可願えますか」

「夕歌さん、もしかして貴方も？」

「はい——津久葉家も次期当主候補の立場を返上し、尚且つ司波深雪さんを次期当主に推薦します」

？僕達が揃って似たようなことを言ったことで、御当主様は愉しげな笑い声を上げた。

「貴方達、もしかして『本家の一存で次期当主を決めさせてはならない』とか入れ知恵されて来たの？」

？笑い過ぎて、御当主様の目には少し涙が出てきていた。文弥が慌てて「そうではない」といったような返事をし、それに亜夜子が補足を入れていた。

？分家は皆、本家への叛逆的行動をしている。それを誤魔化す為に、揃って返上を言い出したのだ。どうせ、処分なんて出来やしないのだから、とりあえずポーズだけ取っておけば良い。だから、双子達に合わせて僕や夕歌さんもそれらしい言い訳をしておいた。

「さて、勝成さん。私が結論を告げる前に、多数決で決まりのような状況になってしまったけど……。貴方はどう考えているのかしら」

？勝成さんだけは何も言わなかったからだろう。彼はとても律儀な人だと、僕から見ても思った。

「御当主様。次期当主を抱えていた、黒羽家、武倉家、津久葉家が深雪さんの支持で固まったというのであれば、新発田家としても異存はありません。このことは既に当主、理にも確認を取っております」

「成る程、大勢に従うということね」

「はい」

？そして、彼は琴鳴さんとの結婚についてのお願いをした。「楽師シリーズ」はあまり遺伝子が安定しておらず分家当主の正妻には向かない、と一度は窘めた。しかし、その後にも言葉を続ける。

「そうね……。愛する者同士を引き裂く真似はしたくないし。調整体だからといって、早死にするとは限らないものね……」

？そこで言葉を切り、御当主様は深雪の方をちらりと見た。彼女も調整体だからだろう。

「良いでしょう。本家の当主ともなれば、自分の意思だけで配偶者を決めることはできないけど。分家の当主なら、そこまで深く考えることはないわ。勝成さんが次期当主の座を降りるというのなら、私から理さんに口添えしましょう」

？勝成さんは深々と頭を下げた。彼が頭を上げた瞬間を見計らい、僕は口を挟む。

「……御当主様。私も一つ、お願いがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「貴方も恋愛相談かしら？ 皆気づけば、ませた年頃になっちゃって。いいわよ、言いなさい」

？僕は立ち上がり、御当主様の目をしっかりと見る。怖くないといえは嘘になるが、言わねばならなかった。

「私、武倉理澄と九島家次期当主、アンジェリーナ・クドウ・シールズとの結婚のお許しを頂戴したく思っております」

？僕の言葉に、深雪が咳き込む。相手の予想がついていなかったのかもかもしれない。

「私も一回だけ会ったことがあるわね……。つまり、貴方は四葉を出て、九島に行きたいということでもいいのかしら？」

「そういうことになりますね」

「……自分のことを過小評価しているのかもしれないから、この際ハッキリ言います。貴方は第四研生まれの魔法師でも、五つの指に入るレベルの成功例なのよ。それを簡単に外へ出せると思う？」

？確かに「ワルキューレ」は「コキュートス」に次ぐ、使い勝手の良い魔法だ。御当主様の言うことも、間違いでは無かった。

「勿論、そのことは承知しております。ですが、私は九島烈殿と、ある約束を交わしておりました。それは、『四葉家の縁者が九島家次期当主の配偶者となった際には、旧第九研の研究データを四葉家に譲渡する』というものです。そして、師族会議において多数決を取る時には、九島家は如何なる場合も四葉家を支持するとも」

？老師の懸念は、自分の死後に光宣の治療がストップしてしまわないか、ということ。「完全調整体」の研究なんて知ってはいないのだから、不安に思うのも当たり前だ。それ故、彼は末孫の為に四葉と運命を共にする覚悟を固めたのだった。九島と四葉に縁戚関係が出来れば、光宣も無下にはされないと考えたのだろう。最初から彼を見捨てることはしないのだが、無論僕は教えていなかった。

「武倉が無くなる代わりに、九島が実質分家になると言いたいよね……。古式魔法の研究成果も、交換材料としては悪くないか。——良いわ。結婚を認めましょう」

「ありがとうございます」

？僕は深く一礼して、席に戻る。御当主様は小さくため息をつき、深雪の方へと向き直った。

「何だか、私がこれを言う必要は無くなってしまったようだけど……。深雪さん、貴女を次の当主とします」

「……はい」

「幸い、ここにいる皆さんは快く支持してくださいようだから、それに恥ずかしくないようお励みなさい」

「はい、叔母様。精進致します」

？深雪は当主となることを受け入れた。最初は御当主様へ、次にテーブルを囲む全員に向けて、丁寧に腰を折る。

「では、お食事を再開しましょうか」

？葉山さんがその言葉を聞いて、二度手を叩く。すると、メインの肉料理が運ばれてきた。食事をしつつ、他愛もない話が食卓を賑わす。何も事情を知らない他人が見れば、これは素敵な家族の会食に見

えたのだろうか？

? 会食後、真夜は次期当主となった深雪についての秘密を達也に明かしていた。彼との話を終えた彼女は、ソファに身体を預けていた。その様子を見て、葉山が彼女を労う。

「奥様、お疲れさまでございました」

「何だか、予定よりも感情的になってしまったわ」

「あのお話では、それも致し方のないことかと」

? 葉山の慰めで余計に恥ずかしくなったのか、真夜は顔を背けた。話を交える為に、その背中に声を再び掛ける。

「奥様の暖められていた秘策とは、これだったのですね。今回は私もただただ感服致しました」

「予想していたよりも沢山の横槍が入ったけど、お陰で思ったよりも盛り上がったわ。後は深雪さんがどれだけ素直になってくれるかね」

「大丈夫かと存じます——深雪様は達也様よりもしつかり、ご自分の想いと向き合っておられます。向かうところ敵無しの達也様ではございますが、深雪様のまつすぐな想いには敵いますまい」

「恋は素直になった方が負け、というけど」

「この場合は、素直になった方の勝ちでございますな」

? ニコニコと好々爺の笑みを浮かべる葉山に、真夜はため息を一つ吐いた。何だか、毒気を抜かれてしまったのだ。

「まあ、そのことはいいのよ。——それにしても今回は、まんまとあの子にしてやられたわ」

? 背けていた顔を戻し、真夜がぼやくように言う。

「しかし、理澄様が四葉を出て行ってしまふことになるとは……。何とも、惜しいですな。もしも、達也様のことが無ければ、深雪様を押しつけて当主になっていたかもしれないのに」

「貢さん達が、あれだけ推した理由も普通に分かるのよ。理澄さんは四葉の血に愛されている。……おかしいわよね、姉さんの腹から生まれなかった癖に」

「運命とは不思議なものです。生まれるまでは誰にも期待されていなかった理澄様が、分家をまとめ上げるまでに成長されるのですから」
？真夜はその言葉を聞きながら紅茶を飲み、唇を湿らせる。そして、口を開いた。

「理澄さんの魔法が分かった時は、本当に想定外だったわ。青天の霹靂、って言葉の意味が良く分かったもの……」

「奥様にとっての理澄様は、達也様の覇道を阻む邪魔者、という訳ですか」

「どうなのかしら……。達也は私の息子。私の復讐心を満たしてくれ、愛しい私の息子なのは確か……。だけど、きつと私の掌の上から逃げられない。それはそれで、何だかつまらないのよ」

？達也は深雪を護り続けるしかない。彼女が死ねば、彼は狂う。そういう風に出て来ているからだ。このままでは、あまりにも簡単に復讐は成し遂げられる。それでは、少しも溜飲は下がらないと、真夜自身も分かっていた。

「——だから、私は理澄さんだつて愛してる。救いも何もない世界で、運命に抗おうとする姿を散々嗤つてやりたいわ。良いアイデアでしょう？」

「最後には、達也様と理澄様が衝突することになったとしてもですか？」

「そうになったら、とても素敵ね」

？真夜は四葉そのものを憐れみ、蔑んでいる。彼女にとって、第四研は蠱毒なのだ。生まれた者達が淘汰され、強い者だけが残るシステム。最後の生き残りは、「四」の全ての憎悪を背負った最悪の存在となる。そんな風に、彼女は確信していた。



？早起きが苦手なので、元旦の朝は酷く辛かった。この日ばかりは、使用人達も遠慮をしない。無理やり布団から引き出され、着せ替え人形のようにされてしまう。着物を着付けさせられ、白粉を塗った

くられる。毎年のごとだが、始まる前から疲れてしまうのだ。控えの間の椅子で休んでいると、達也と深雪が入ってきた。

「あつ、二人ともおはよう。それに、あけましておめでとう」

「……あけましておめでとうございます」

「あけましておめでとう、理澄も支度が終わったのか」

「うん、慣れてるからね。あれ、達也は化粧されてないの？」

「拒否した。白粉も紅もごめんだからな」

「何だか羨ましい。僕の慶春会の支度は、いつも行事に慣れた年配の女性が担当している。毎回、それがえらく強引だ。何か拒否しようものなら、すごい剣幕で叱られてしまう。それどころか、何も言わなかったとしても「理澄様、じつとしてなさい！」と怒られるのだ。

「へえ……。誰が担当なんだろう。楽そう」

「楽では無かったぞ。一時間以上、いじくり回された」

「それはマシな方だよ。僕なんかもつと長い」

「？そう話していると、文弥と亜夜子もここに現れた。文弥は僕と同じ羽織り袴で、亜夜子は綺麗な赤色の振袖を着ていた。

「理澄兄さん！ あけましておめでとう！ 達也兄さんと深雪さんも、おめでとうございます」

「理澄さん、達也さん、深雪お姉さま。あけましておめでとうございます」

「あけましておめでとう。文弥と亜夜子ちゃん、今年もよろしくね」
「？僕は文弥と亜夜子に駆け寄る。本当は、一年の一番最初に会いたかったくらいだ。

「ええ、よろしくおねがいます」

「よろしく！ ねえ、今年はどれくらいお年玉貰えると思う？ 次期当主も発表されるから、皆の羽振りも良いと思うんだけど」

「去年の倍は、絶対に貰えそうな気がするよ。一緒に挨拶回りしようね」

「うん、勿論姉さんも一緒だよー！」

「あの、ちよつといいかしら？ お年玉が貰えるの？ 慶春会で？」

「？僕と文弥の話が気になったのか、深雪が口を挟む。

「深雪さんも、お客様に挨拶したら貰えますよ。最初は袋に入れたものを貰うんです。それで、その人が酔っ払ってきたら、もう一回行く。すると、次は抜き身で貰えますから」

「毎年、濡れ手に粟って感じだよ。だから、かき入れ時なんだ。ね、文弥？」

「うん。あとで数えたら、札束作れちゃうもんね」

「そつ、そうなの……」

？深雪は何処か、引いたような顔をしていた。

「文弥も理澄さんも、この時期になるとお金の話ばかりして……。はしたないですわよ。昨日も同じこと話していたでしょう？」

「そういう姉さんも、昨日話に混ぜたってたじやないか」

「……どうして、今言うのよ!? あのね、それはそれ！ これはこれよ！」

？僕が四葉のイベントにやたらと参加するのは、お小遣いが貰えるからというのも大きい。その中でも、正月は別格。比較的謙虚な文弥や亜夜子ですら、今日だけは目の色を変える。

「——そつ、それにしても！ 本当に見事な引き振袖ですわね、深雪お姉さま。まるで、花嫁衣装のようですわ」

？あからさまに亜夜子は話を逸らしたが、それについて揶揄うような人間はここには居なかった。

「わたしも大袈裟だと申し上げただけど……。今日はこれを着ることになっている、の一点張りで」

「あらあら」

？そこに、これまた振袖を着た夕歌さんがやって来た。彼女は、亜夜子と深雪の間にさりげなく入り込む。

「次期当主の指名の席でもあるのだから、最も格式の高い正装を、と白川夫人は考えたのでないかしら。よくお似合いよ、深雪さん」

？夕歌さんの言葉に、深雪は軽く頭を下げた。

？座っていた僕も立ち上がり、新年の挨拶をする。

「あけましておめでとうございます、夕歌さん。先日はどうも」

「あら、理澄くんじやない。あけましておめでとうございます。今年

もまた、お茶を飲みにもいらつしやいね」

「はい、ありがとうございます」

「?とりあえず全員が、控え室の椅子に座り直す。壁掛け時計を見ながら、呼ばれる時間まで待つ。」

「新発田さんは、こちらにいらつしやないのでしょうか?」

「あつ、僕知ってるよ。ご両親と会場に入るって言ってた。ここに来るのが、気まづかったのかもね」

「その割に、理澄は平気そうだが。面の皮が厚いのか?」

「負けたか、負けてないかの違いじゃない?」

「襖が急に開く。そこには、控えめな振袖を着た水波が居た。彼女が案内役なのだろう。」

「失礼致します。皆様のご案内役を仰せつかった桜井水波と申します。至らぬところ多々あるかと存じますが、精一杯務めますのでよろしくお願い致します。では、まずは文弥様、亜夜子様。ご案内致します」

「?文弥と亜夜子が立ち上がり、水波の後に続く。客に見られる訳でもないのに、ペースの遅い歩き方だ。」

「?少しして、彼女は戻ってきた。次は僕の番である筈なので、さつさと立ち上がった。そして、水波について、部屋の外へと出る。広間の入り口で、僕達は立ち止まる。」

「次期当主候補、武倉理澄様、おなーりー」

「?相変わらず、面白すぎる口上だ。水波も無表情だが、内心恥ずかしいに違いない。使用人が一斉に平伏すのも、まるで時代劇みたいだと思う。畳に座り、一礼する。「お席に案内します」と小声で囁かれ、僕は顔を上げた。」

「?席に移動すると、一座がざわめいた。僕の席は母親の隣だったが、それはいつもの場所とは違う。今まで僕は、御当主様の隣だったからだ。様々な囁き声が聞こえるが、無理もないことである。しかし、それも他の候補者達が案内されたことで静まった。——別の理由での、喧騒はあったが。」

「皆様。改めて、新年おめでとうございます」

？金糸をふんだんに使った黒留袖に身を包んだ、御当主様の挨拶により参加者全員が一斉に「おめでとうございます」と唱和する。

「本日はおめでたい新年に加えて、あと四つ、皆様に良い報せを伝えることができそうです。私はこれを、心より喜ばしく思います」

？御当主様は勝成さんの方へと目を向ける。

「この度、新発田家ご長男の勝成さんが、堤琴鳴さんと婚約されました」

？どよめきが広間中に広がる。二人の関係は四葉に出入りする人間なら、大体は知っている。その為か、「やはり」とか「ようやく」とかそんな反応が一番多かった。

「これから先、楽しいことばかりではなく色々苦労もあるでしょうが、今は若い二人の前途に盛大な祝福をお願いします」

？一斉に拍手が沸き起こる。僕も手を叩いた。

「そして、武倉家のご長男にも素敵なお縁がありましたことをお伝えします。理澄さんは、九島家次期当主であるアンジェリーナ・クドウ・シールズさんと婚約されました」

？一瞬、場が静まった。少しずつ話し声が聞こえ始めたが、誰もが驚きを隠せない様子だ。

「まだ数年あるとはいえ、いずれ理澄さんは四葉を去ることになるでしょう。寂しくもありますし残念ですが、一生の別れという訳ではありません。彼の門出を共に喜んで頂けますと、幸いです」

？まばらに起こった拍手が、段々と大きくなる。次期当主の争いで僕が四葉を追い出された、と勘繰っているのかもしれない。北斗辺りは今頃、胃を痛めていてもおかしくはない。後で、お酒を注ぎに行つてあげよう。

「次に、皆様が最も関心を寄せていらつしやることを、ここで発表させていただきます。——ふふっ。皆様、お分かりの様ですね」

？誰も、物音一つ立てない。固唾を飲んで、御当主様の顔を見つめている。

「私の次の当主は、ここにいる司波深雪さんにお任せしたいと思いません」

？わっ、と大きな歓声が上がリ、拍手の音も盛大に鳴らされる。僕の時とは、あまりにも大違いではないか。少し不満だ。

「ご挨拶などは、また別の機会に。この慶春会は、そういう固いお話を
する場ではありませんので。——そして、最後のお知らせです。次期
当主の深雪さんは、この度、私の息子、司波達也を婚約者として迎え
ました」

？場が大きくだよめいた。節度を保ってはいるが、話し声は囁きレ
ベルで無くなっていた。その様子を見て、僕はそつと肩をすくめた。
そして、母親と目を合わせる。母は御当主様の方を一度見て、口を開
いた。

「貴方、こうなることを知っていたの？」

「いえ……。知りませんでしたよ。でも、深雪が次期当主なのだから、
それなりの地位を与えられるとは思っていました」

「理さんや貢さん辺りは、これから大変でしょうね」

？御当主様に抗議する他の分家当主達を見ながら、母は呟く。

「……理澄、良くやったわ」

「ありがとうございます」

？この先、四葉家内が混乱に陥る中で武倉だけは抜け出すことが出
来た。それは、母にとつても幸運だと思えたようである。

？それぞれの四葉の分家は、能力的に他の十師族に匹敵するのだ。
九島家でも、十分にやっつけていける。何なら、「交渉」には十師族の肩書
きがあった方が便利だろう。

？体調を急に崩した亜夜子が、文弥と水波に付き添われ、宴席から
去って行くのが見えた。彼女は大丈夫だろうか。

「あの、お母様」

「何かしら？」

「今年、皆さんはお年玉をくれるのでしょうか？」

「こんな時に、くだらないこと考えてるのね。今誰もそんなこと考え
てないわよ。きつと、貴方だけだわ」

「所詮、他人事ですし……」

？客の気分が下がってしまったら、僕はとても困る。四葉から去る

までの間に、搾り取れるものとはとにかく搾り取りたいのだから。それが、お年玉だったとしても。

? 亜夜子は何とか持ち直したようで、文弥と共に広間に戻ってきた。無理をしているのではないか、と心配だったが、彼女は気丈に振る舞おうとしているらしく「お年玉を貰いにいきましよう」と言った。

?なので、三人で連れ立って挨拶回りに出る。参加者は、「達也は御当主様の息子」と発表されるアクシデントによって動揺はしていた。しかし、逆に吹っ切れたらしく、開き直って楽しく過ごそうと思つたようだ。その為、かなり気前が良い。亜夜子への体調不良に対する心配もあつたのかもしれない。

?とにかく、去年の倍どころの話ではなさそうである。僕らは顔を見合わせ、ほくそ笑んだ。

「色々あつたけど、今年はかなり良かったわね。最高記録、更新したんじゃない?」

「流石に来年は超えなさそうだけど……。でも、真柴の叔父様なんかすごいよ。あの人、十五万もくれた」

「それは理澄兄さんが三回も、行こうって言ったからじゃん。酔つて誰か分かってないからって、やり過ぎだったんじゃない?」

?慶春会も無事に終わり、僕達はお年玉を部屋で数えていた。達也に対して怒つてそうな分家当主達を狙つて、僕は何度もせびりに行った。怒りを酒で誤魔化しているので、渡したことをすぐに忘れてくれそうだからだ。

「大丈夫だつて。毎年やつてるんだし、どうせ皆気づいてるよ。それでも、怒られないんだから」

「そんな心配しなくても良いわ、文弥。叔父様方はあげるのが楽しみで仕方ないんだから。こういうのは、持ちつ持たれつなのよ」

「それもそつか。じゃあいいや」

?文弥はそう言つて、万札を数えることを再開した。

「父さんも結構くれたね。静や椎葉も良かった。うーん……。達也兄さんを見下してる家の方が、沢山くれるっていうのも複雑だね」

「使えるものは使わないと。達也を見下してようが、僕達には親切な

んだ。そこは割り切らないと」

「うん。だけどさ、こういう風に差があるってのもね……」

「文弥の言う通りね。同じ親戚なのに……と思ってしまうすわ」

？ 文弥と亜夜子が引け目を感じてしまう気持ちも分かる。達也は誰からお年玉を貰えていないからだ。とはいえ、FLTでの稼ぎがあるのも、彼は別に欲しく無いと思うが。

「親戚といえば、理澄兄さんはこの先、本当に四葉を出て行っちゃうんだね……。御当主様の言葉で、ようやく理解できたというか……。でも、行かないで欲しいよ。このまま、四葉に居てよ！」

「私も同じ気持ちです！ ずっと一緒だったのに……。置いて行っちゃうなんて、ずるい！」

？ 双子達と僕は、昔から何をする時も三人一緒だった。遊ぶ時も、訓練の時も。勿論、大喧嘩をしたこともある。怒った文弥に「ダイレクト・ペイン」を掛けられて、昏倒したことだってあった。

？ 最初、僕の彼らに対する認識は、「原作のキャラクター」でしかなかった。けれども、辛いことも嬉しいことも共有して、いつしか大切な家族へと変わっていったのだ。

？ この世界に生きる人間が血の通った生身なのだということは、彼らが教えてくれた。転生者だということで悩まなくて済んだのは、そのお陰かもしれない。

「……引き止めないですよ。決心が揺らいじゃうから。僕はリーナが好きだし、この決断は最善だと思ってる。だけど、二人と別れちゃうのは寂しい」

「本当に……？」

「うん。僕が四葉じゃなくなっても、文弥と亜夜子ちゃんはずっと家族だ。約束するよ。……ほら」

？ 僕は小指を差し出した。文弥と亜夜子もそれに指を絡める。おまじないのような、効力も何も無い約束。でも、僕はこの約束だけは絶対に破りたくなかった。

「……けどさ、まだ数年はあるよ。ちょっと気が早かったんじゃない」「それもそうね……。文弥があまりにも悲痛な顔で言うものだから、

つい流されちゃったわ」

「べつ、別にいいじゃないか！」

？文弥が顔を赤くする。亜夜子は、そんな彼の姿を見て微笑む。僕も照れ隠しに、文弥の髪を思いつきりかき回す。そのせいで、久しぶりに「ダイレクト・ペイン」を食らってしまった。



？元旦の夜には魔法協会を通じて、数字付きを始めとする有力魔法師達に、四葉家は通達を出した。

??? 四葉理澄が九島家次期当主、アンジェリーナ・クドウ・シールズと婚約をしたこと。

??? 司波深雪が四葉家次期当主に決定したこと。

??? 司波深雪の婚約者は、「従兄弟」の司波達也であること。

？この三つの決定に対して、その日のうちに各家から祝言が四葉に送られた。しかし、全ての家が手放して祝福をすることは無かった。

？三つ目の、深雪の婚約者決定に対し異議申し立てが起こされた。それは十師族、一条家当主の一条剛毅からのもの。彼は倫理的観点から、二人の婚約解消を要求。そして、新たな婚約者候補として自身の息子である一条将輝を提案した。

？それは波乱の幕開けであったのだろうが、僕には一切関係無いことだ。自分の用事で精一杯だし、今は兄妹に構っている暇は無かった。

？武倉の人間達は、なし崩しに九島家へ行くことが決定してしまった訳だが、本家に残留すると言った使用人は居なかった。

？僕は、それをとても嬉しく思った。彼らが四葉では無く、武倉に従ってくれていたと分かったからだ。忠誠心を確かめる機会なんて、中々無い。調べようと思えば、精神的に追い詰めるくらいしか出来ないからである。

？慶春会から、数日経った日のこと。僕は北斗を部屋に呼び出し

て、二人で話していた。彼には他にも言っておきたいことがあったからだ。

「慶春会での発表には驚かされましたよ。先に言っておいてくれても、いいじゃないですか。四葉を放逐されたら……って言う話が現実になったのかと、目を剥きました」

「会食での内容は一応秘密だからね。ごめんごめん、そんなに驚くと思わなくって」

「ですが、一番の驚きは達也様のことでしたから……。理澄様は二番目ですね」

「そこは一番驚いてよ……」

？あの発表は使用人達も半分パニックだっただろうから、仕方がないのかもしれない。深雪が次期当主となった為に喜んでいた本家の使用人など、あれのせいで魂が抜けたようになっていた。

「それでさ、もう四葉じゃなくなる訳。もしお前が望むなら、ガーディアンを解任してやってもいい。転職したいなら、何処か職場を斡旋しよう。どうする？」

「……理澄様を放っておくと心配ですからねえ。宿題は一人で終わらせられないし、深雪様に決闘は持ちかけるし。部下の人生を振り回して、平気な顔ですし」

「……言いたい放題だね」

「ちゃんと見張っておかないと、駄目だと言うことです！ めちゃくちゃなんですから、理澄様は。一昨年の中華街のようなことがあっても、困りますし……」

？そういえば、僕は一度死にかけているのだった。前のことで、すっかり忘れていたが。

「……ありがとう。じゃあ、早速仕事の話でもしようか。九島の掃除をしてしまわないと。伝統派の掃除も兼ねられるから」

「ああ……。あっちの九島は、伝統派と組むかもしれないんですけど。なんか、落ちぶれましたね」

？敵の敵は味方という言葉がある。九島真言はどうやら、とうとう伝統派と手を組もうとしているらしい。九島の秘術を向こうに提供

したとしても、四葉と組んだ老師を倒さねばならない、と思ったのだろう。その考えは間違っていない。ただ、簡単に倒される気は毛頭なかった。

「伝統派と正面切って戦うのは、えらく馬鹿らしい。古式魔法師を引つ張り出して、代理戦争をさせよう。きっと、昔のSF映画みたいなのが観れるよ」

「本当に、前世紀カルチャーが好きですよね……」

「もつと前のも好きだよ。150年前の文書データとか読むし」

？原作は1995年から分岐した世界線という設定なので、割とその辺は前世と変化が無い。魔法が台頭してくるにつれて、文化に変動が生じてきたのである。

「しかし、都合良く古式魔法師が転がっていますかね？」

「一人良いのを知ってる。吉田幹比古——吉田家の次男なんだ」

「確か、理澄様とモノリス・コードでチームを組んでいましたよね？」

名前に聞き覚えがあります」

「正解。今回の作戦に、彼はとても使えそうだからね」

？古式魔法師の争いになるとはいえ、一帯の地域の責任者は九島。その九島の現当主が伝統派と組んでいたとなれば、それは大問題である。だから、彼には責任を全部背負いこんで退場して貰う。その焼け跡には、僕達が乗り込むと言う訳だ。

「まず、伝統派の一掃という名目を立てるんだ。僕は九島に婿入りするんだから、違和感は無いだろう。それで、僕が幹比古個人に協闘を持ち掛ける。見た目の割に好戦的だから、きつと乗ってくれるよ」

「では、あとは伝統派と九島真言が動くのを待つだけですか」

「そうなるね」

？タイミングを見計らって、幹比古には声を掛けよう。友達でも何でも、使えるものは使わなければ。



？伝統派の片付けについて北斗に話した後、僕は九島邸に赴いてい

た。リーナと光宣に会いに行つたのだ。それと、老師に新年の挨拶をするという用事もあつた。

？九島の家は以前に訪問した時よりも、がらんとしていた。使用人の三分の二が去つたらしいから、広々としているのも当たり前だ。だからなのか、老師自ら案内をしてくれた。前にも訪れた書齋で挨拶を交わす。

「新年あけましておめでとうございます、老師。昨年は色々とうご迷惑をお掛けしましたが、今年も良い関係を保てることを切に願つております」

？僕の白々しい物言いに、老師は哄笑した。

「ははは、確かにそうだ。とはいえ、理澄君は九島の人間になる訳だしな。光宣はアンジェリーナの他にも、家族が増えることを喜んでゐる。私も勿論、君を歓迎するよ。去年のことなどは、水に流してしまおう」

「ありがとうございます。よろしくお願いしますね」

「こちらこそ、よろしく頼む」

？僕と老師はがっちり握手をする。和解の印である。四葉と九島は、運命共同体になる以外に道はない。これぞ、平和的解決というものだ。

「——ああ、そういえば。二人は食堂にいる筈だ。君も会つていくだろう？」

「はい。それを楽しみにしていましたから。リーナもそうですし、光宣だつて友達ですから」

「それは嬉しいことだ。……理澄君。光宣と友人になつてくれて、本当にありがとうございます」

「そのような事を仰らないで下さい。頼まれたから、友達になつた訳ではないのです」

？老師に一礼し、書齋を去る。食堂では、光宣とリーナが何か話していた。再従兄弟同士だが、意外とウマが合うのかもしれない。

？部屋に足を踏み入れると、リーナが嬉しそうな顔でこちらに大きく手を振つた。光宣も小さく手を振っている。

「リズム！ 久しぶりね！」

「理澄、久しぶりだね」

？表現に差はあれど、僕が来たことを喜んでくれているのは分かる。

「直接会ったのは、久々だもんね。元気だった？ あつ、そうそう。遅くなっちゃったけど、論文コンペの優勝おめでとう、光宣」

「ありがとう。でも、あれは理澄が助言をくれたのもあるよ。良かったの？ 敵に塩を送る形になっちゃったけど」

「いいよ。僕は警備スタッフだっただけだし」

？以前に、二高の研究発表が精神干渉魔法についてなのだと光宣から聞いた。その為、僕は彼を家に呼んで精神干渉魔法の話をし少ししたのだ。

「……リズムが『ルーナ・マジック』を使えるってことを、あの時初めて知ったわ。もっと早くに、教えてくれても良かったんじゃない？」

？リーナが僕をじろりと見る。未だに彼女は、そのことを根に持っているようだった。

「だって、言い出しにくかったから……。あんまり、喧伝することでもないし……。精神干渉魔法を使える人間は、魔法師コミュニティでも危険人物扱いされるんだから」

「外で言え、って言ってるんじゃないのよ。私に教えて欲しかったの」「まっ、まあ！ リーナも落ち着いて！」

？光宣が慌てたように、僕らの間に割って入る。失言だった、と思っただろう。

「……そうだ！ 聞いてよ、リーナは三学期から二高に編入するんだ。ね、そうでしょ？」

「ええ。日本の高校と大学は出ておいた方が良く、ってお祖父様がね。リズムの居る一高じゃないのが残念だけど……」

？教師へのリーナの呼び方は、「九島將軍」から「お祖父様」に変わったらしい。前の呼び方はおかしいだろうから、無難な変化だろう。

「僕もリーナは一高に来て欲しかったけど、ここからじゃ遠いもんね

……。だけど、それなら今年の九校戦は楽しくなりそう。リーナは深雪と戦うだろうし、光宣も本戦に出れるし。絶対、僕と戦おうね」

「でも、代表になれるかな……」

？光宣は不安そうに俯いた。治療はまだ不完全な段階であり、まだ体調を崩す時があるのだ。それでも、体調不良の回数は今までよりもずっと減ったらしい。

「うちの研究員には発破をかけておくよ。必ず、光宣が選手として出られるようにしてみせる。だから、本番のことだけ考えていれば良い」

？基本的に九校戦では、一高と三高以外は蚊帳の外だ。四高に文弥と亜夜子はあるが、二人は本気を出せない。そうになると、もう一校くらいライバルが欲しくなる。

「そうだね。その時はよろしくね、理澄！」

？そう言つて、彼は笑った。それは顔がくしゃつとなるような、作り物めいていない、人間らしい笑い方だった。

師族会議編

1

？新学期になってすぐ、僕はクラスメイトに詰め寄られる羽目になった。勿論、深雪と達也のことだ。四葉の一族である僕は、当然彼らの素性について知っていたのだから。

？とはいえ、僕の派閥の人間は一応四葉に慣れている。気の毒なのは司波派の面子だろう。四葉から逃れたと思ったら、深雪の方も四葉だった訳だ。もはや、ホラーである。怖くて仕方ないに違いない。

「当主になるんじゃないかな。九島に行くっていうのも意外だ。四葉姓だったのに」

「僕よりも深雪の方が、御当主様と血が近いんだよ。深雪は深夜様の娘だからね」

？クラスメイトの追求から逃れる為に、僕は射撃部の部室で森崎と昼食を食べていた。彼をパシリにしてサンドイッチを買わせてくる代わりに、事情を少しばかり話してあげることにしたのだ。

「司波さんの母親は、『忘却レテ・ミストの川の支配者』だったのか!？」

「うん、そうなんだよ。逆に、僕は遠縁。まあ、血の濃さは次期当主の決定に、そこまで影響する訳じゃないんだけど。現に、僕は筆頭候補だった」

「家の派閥争いが、校内にまでも波紋を広げていたということか……。それにしても、お前が負けるとは。殆ど負け無しかったのに」

「殴り合いで勝つのと、政治力で勝つのは違うということだね。——森崎は親友だから、もう一個教えてあげる。今回の次期当主決定の、キーパーソンは達也だ」

？僕の言葉に、森崎は苦虫を噛み潰したような顔をした。その話には、触れないようにしていたのだろう。

「アイツ……。本当は現当主の息子だったんだよな……」

「僕も知らなかったんだけど。一応深雪の兄だったけど、一族扱いされてなかったし。御当主様は、彼の為に深雪を当主に立てた訳だ。」

流石に達也を当主には出来ないから、結婚という形で似たような立場に置いたんだろう」

「嘘と真実を混ぜて、彼に伝える。僕は原作知識を踏まえているし、全ての事情を知っている。しかし、普通ならこれくらいの認識しか出来ない筈だ。」

「へえ……。お前ん家も大変なんだな」

「けど、九島に行ってしまったら、とりあえず関係ないから。こればかりは、ラッキーだったかもね」

「俺は百家傍流で良かったのかも……。地位にはそれ相応の責任が付いて回る、ということが良く分かる」

「別に、ボディガード業も大変だとは思うけど……」

「？食事を終えて戻ってきてても、教室にはまだ結構な人数が残っていた。彼らは僕の顔を見て、口を開こうとする。それを手で制し、「森崎から聞きな」と僕は言った。」

「？クラスメイトに揉みくちやにされる森崎に親指を立て、僕は教室を去った。もう、今日は早退しようと思ったからだ。記者にマイクを向けられた時に、「事務所を通してくれ」と言う芸能人の気持ちがあった気がする。」

「？だが、校門を出て車に向かおうとしたところで、異変が起きた。何らかの術の気配がしたのだ。つまり、古式魔法によるものということ。領域干渉を広げると、ひらりと紙が落ちてきた。恐らく、式神の媒体だ。拾うのが怖かったので、とりあえず燃やしておく。」

「校門で見張っていたのか……」

「？十中八九、伝統派の仕業。きつと襲撃も増えてくる筈だ。これからのことを考え、思わずため息を零した。」

「さつき、そこで式神を見つけたよ。気持ち悪いから、処分したけど」

「おや、向こうの動きも早かったですね」

「？車に乗り込み、先程のことを話す。北斗は運転をしながらも、言葉を返してくる。」

「しばらくは襲撃をあしらう感じになるかな。二月になったら、こっちも動こう。幹比古に声を掛けるのは、その後で良い」

「随分と悠長ですね」

「作戦というのはね、普通は長期戦なんだよ。この前がバタバタし過ぎていただけで。叔父様もギリギリに話を持ってきたものだから……」

？ 本当なら、もう少し前から準備をしておくべきだろう。結婚式の準備でも、平均8、9ヶ月と聞く。通行の妨害以外にも、もつと他にやるべきことはあった筈だ。郵便システムに介入して、御当主様の手紙を抜き取るとか。

？ そもそも、事前の警告なんてものは不要だった。達也の警戒レベルを上げてどうするのだ、という話である。特に何もしないように見せかけ、彼らを31日に本家に行かせるべきだった。そして、もつと人が沢山いる場所で襲撃を行う。先に他の場所でも騒動を起こしておいて、魔法師の警察官は全員応援に行かせた状態にすることも必要だ。達也達の事情聴取には、非魔法師で魔法師嫌疑の刑事を当てねばならない。その方が、長引かせることが出来るからだ。

「そういえば、26日でしたよね？ 黒羽様がいらつしやつたのは」「遅過ぎるよ。一ヶ月前から僕に話を回していたとしたら、勝率は10%くらいになったんじゃない。あれじゃあ、1%でもあったら良い方」

？ 原作なら0.00001%だった。SSR排出率を操作していると噂されているガチャでも、もう少しマシだろう。

？ 石橋を叩き過ぎなくらいに叩かないと、「お兄様」とは渡り合えない。そのことは、いつだって肝に銘じなければならぬのだ。



？ 伝統派との小競り合いを続け、ようやく二月に入った。つまり、師族会議の季節。しかも、四年に一度の十師族選定会議だ。

？ そして、僕の仕事は九島真言の会議出席を妨害すること。その代わりに、老師に会議へ代理出席をさせる訳だ。慶春会の時と同じようなことをしているが、作戦立案にはかなり時間を掛けた。

「光宣、本当にこっちに来て良かったの？ 自分の父親や兄と戦うことになるのに」

「？九島真言の妨害に参加しているのは、僕と僕の部下。そして、光宣である。」

「？リーナは老師の警護に回っているし、文弥と亜夜子は襲撃するかもしれない九島の使用人達を警戒している。彼もそのどちらかを担当すると思っていた。それなのに、僕に同行することを選んだのだ。」「いずれは、覚悟を決めなきや駄目なことだから。それに、僕は理澄と一緒に戦いたいんだ」

「そっか。ところで、光宣は源義朝って知ってる？」

「知らないなあ……。それ誰？」

「？やはり、知らなかったようだ。魔法史学の教科書に載っている「源」姓の人間は、土蜘蛛を倒した源頼光くらい。普通科高校の教科書には記載があるかもしれないが、魔法科高校生は知らなくてもおかしくはなかった。」

「平安時代末期の人物でね、光宣みたいに父親や兄と戦った人だよ」
「昔にも、僕と同じような人が居たんだ。それで、その人は勝ったの？」

「勿論。つまり、僕達も官軍ってこと。だから、きつと大丈夫だよ」

「ありがとう。……でも、そんな人を良く知ってたね？ 理澄って歴史マニアなの？」

「割とね。流行りに乗れない性質なんだ」

「？僕は前世紀カルチャーも好きだが、前世との歴史との差異を見つけるのも好きなのだ。魔法史学の教科書も読み物としては悪くない。テストの為の暗記は苦手で、全然出来ないのだが。」

「？そう話しながらも、僕は加重系魔法で走ってくる車を軽く浮かせ、すぐに降ろす。九島真言の乗る車に、ジャブを仕掛けたのだ。」

「来たね。僕も何かやるよ」

「？光宣が選んだ魔法は、クラウドレス・サンダー「青天霹靂」。空気をプラズマ化させて、電子のシャワーを対象に浴びせるもの。しかし、その魔法は車全体を覆う障壁でシャットアウトされた。」

「……手ぬるい攻撃だな。光宣」

「? そう言いつつ、車から出てきたのは光宣の兄である九島玄明。その後にもう一人の兄、九島蒼司も続く。」

「? 九島真言はまだ車の中だ。会議の出席を控えてる中、戦線に立たせる訳にはいかなかったのかもしれない。」

「手加減しましたからね。一発で倒すのは面白くないでしょう?」

「光宣、ふざけてるのか……!? 四葉の配下にまでなって、何がしたいんだ!」

「配下なんかじゃない! それに、理澄は僕の友達だつ!」

「? 空間に電流が走る。光宣の「スパーク」によるものだ。それは、見当違いの場所に発生したようにも見えた。だが、それは違った。」

「仮装行列」の偽装を彼は見抜き、正しい場所に魔法を放つたのだ。

「精度が悪過ぎますよ、兄さん。それでは、何の為の『仮装行列』なのかわかりませんね」

「クソツ……!」

「残念ながら、ここから先へは行かせません」

「? 光宣は無慈悲に宣言する。とりあえず、僕も横で領いておいた。」

「そうは行くかつ!」

「? 玄明が僕に向けて「ルナ・ストライク」を発動する。得意魔法なだけあって、うちの北斗並みの構築速度だ。けれども、僕の領域干渉によってそれは阻まれ、形になる前に崩れた。」

「? その瞬間を見逃さず、光宣が「ルナ・ストライク」を玄明に行使。彼は精神に極度のダメージを負い、戦闘不能になってしまった。」

「まさか兄さんが!」

「? 蒼司が悲鳴を上げる。それでも、彼は平常心を失わずにCADを操作した。選んだ魔法は「被雷針」。移動魔法によって、僕に小さな針を幾つも飛ばしてきた。」

「光宣に攻撃が当たらないと分かっているからって、僕だけ狙うのはカッコ悪くないの?」

「? その針を全てベクトル反転で返してやる。ついでに攻撃魔法を仕掛けてやろうとした時、後ろの車がいきなり発進した。息子達に分

が悪くなったので、先に逃げ出したのだ。

？僕は、道に向けての「破城槌」と、車の前輪を停止させる魔法を行使した。加速エネルギーだけを残した車が、「破城槌」で生成された地面の穴に落下する。それでも勢いは止まらず、車体は反転。これでは、中にいる人間は大怪我は免れない筈だ。

「……………」

？蒼司が車を見て、声にならない声で叫んだ。

「大丈夫ですって。精々、魔法治療を併用して全治一ヶ月つてところでしょう。会議には出られないでしょうが、生きてはいますよ」

「理澄の言う通りだね。……だから、蒼司兄さんは倒さないことにするよ。玄明兄さんと父さんの為にも、早く助けを呼んだ方がいいからね。じゃあ、僕達は帰るね。——また、会おう」

？僕と光宣は蒼司に背を向けた。彼に背後から襲われても、倒せる自信があるからだ。でも、彼はそれどころではないようで、僕達に攻撃は加えなかった。

「久しぶりに兄さん達と戦った気がする。すごい昔に、一度だけあつたんだよ」

「その時も光宣が勝ったんでしょ？」

「うん。それで、兄さん達は僕に関わるのをやめちゃった。プライドが傷つけられたんだらうね」

？光宣の魔法力は非常に高い。彼の兄では太刀打ち出来なかったのも分かる。彼が疎まれたのは、身体が弱かったという理由だけでは無かったのだ。家庭内で出る杭が打たれてしまう、というのも悲しい話だ。

「だけど、今はとても楽しいよ。リーナと戦ったりとか。いずれは、理澄とも戦ってみたいな。勿論、『仮装行列』は使わせて貰うよ」

「えー!? そんなの光宣が無敵じゃん！ 僕の魔法が当たらないよ」
「でも、使わなかったら圧倒的に僕が不利だよ。だから、絶対使うからね」

？彼はとても機嫌良さげな声で話し続ける。同年代の友達がいるということが、嬉しくてたまらないのだろう。

？僕は、広域干渉魔法の練習をしておこうと思った。いつでも戦えるように、「仮装行列」対策をしておかないと。危機感を持たせてくれる相手が居ることは、こちらにとっても良いことだ。光宣がライバルになれば、きっと僕の実力も上がるだろうから。

？九島烈が代わりに出席しようが、師族会議は恙無く進む。九島家内の問題は誰もが知るところになっていくのに誰も気にしない辺り、十師族というのは誰も皆なかなかの狸である。

？メインの議題である達也と深雪の婚約事情は、多分膠着している筈だ。御当主様しか、二人を結婚させる意味が理解出来ない。それに「完全調整体」の件をバラせないのだから、遺伝的な問題を盾にされれば、どうしようもないのだ。

？ここは原作通り、一条が深雪にアプローチを掛けることを認めざるを得ないだろう。しかし、それに託けてきつと七草も娘を達也に近づける。

？別に僕だって、恋愛模様にも口を挟みたくはない。四葉崩しに余念のない七草なんぞを、四葉の親戚にはしたくなかった。舌戦で僕が七草弘一に負けるつもりはないが、喧嘩を買うのは面倒なのだ。

「一条は置いておいても、七草が嫌だよねえ。四葉のことなんか放つてくれたらいいのに。どう思う？」

「四葉を出て行く筈の理澄くんが一番、四葉の未来について憂いているというのも面白いね」

？光宣と共に九島真言を襲った後、僕は勝成さんと合流して遊んでいた。正確には、師族会議を狙うかもしれない伝統派に備えて、箱根で待機をしているのである。しかし、その為に僕はまた女装をせねばならなかった。一緒に居る勝成さんが四葉の人間だと、バレてはいけないからである。

？とにかく、待機ついでにホテル近くの喫茶店で僕達はお喋りをしていた。その店には、個室があるのだ。話題は師族会議について。殆どは、七草の悪口で盛り上がった。

「九島に行くからといって、四葉が他人になる訳じゃないからね。それに、僕は四葉がとても好きだよ」

「そうだな。一族で誰よりも四葉らしいのが、理澄くんだ。ところで、本当に伝統派は来るのかい？」

「絶対に来るよ。僕と光宣で、きつき九島の現当主をボコってきたから、会議を台無しにする以外にもう後は無い筈だ」

「追い込み方がえげつないな……」

？勝成さんが顔をひくつかせた。僕はその言葉には何も返さなかった。この世の中、甘さを見せては命取りだ。清濁合わせ飲まないで、ここでは生きていけない。

「——まあ、誘き寄せるにはこれが早いからね。とはいえ、厳戒態勢のここ一带に入ってこれるのは少数。僕と勝成さんで片付けられる筈だ」

「警備を押し切る数の伝統派が来る……ということはないのかい？」

「それは無い。後が無いのは、九島真言だけだから。伝統派にしてみれば、こんなところで手駒を全部削る訳にはいかないからね」

？僕は勝成さんの懸念を軽く弾き飛ばす。

「まあ、待ってたら大丈夫なんじゃない？ 狙うなら夜だろう。侵入しやすいからね」

「そうか。それなら理澄くん、まずは食事でもしないか？ 戦いには身体が資本。しっかり食べておこう」

「いいね。奢ってくれる？」

「構わない。何が食べたい？」

「鉄板焼きがいいな。ホテルの最上階にあったよ」

？ホテルに戻り、鉄板焼きの店へと行く。官僚の初任給では打撃が来そうな値段だった。とはいえ、彼はかなり金を持っている筈。僕は遠慮せず、一番高いコースを頼んだ。

？料理は値段に見合う味だった。その中でも、伊勢海老が一番美味しかった。十師族が滞在するに相応しいホテルといえば、それ相応のレベルが求められるのかもしれない。

「ご馳走さまでした、勝成さん。——さて、食べた分働くとしましょう！」

？勝成さんを引き連れ、僕はホテル近くの雑木林の中をザクザク進む。すると、途中で十数人の人間が飛び出してきた。柿渋色のジャージに身を包んだ、現代版忍者のような代物だ。

「箱根特有のエンタメ……なんてことは無いか。手裏剣とか要素としては最高なのになあ」

？飛んできた手裏剣をベクトル反転で返しながら、僕は呟く。

「今そんな呑気なことを言えるのは、君くらいだよ」

「いや、焦る必要がないからね。……ほら」

？僕は忍者もどきに向けて「ワルキューレ」を放つ。彼らに精神防御の能力は無かったようで、あっけなく死んでいった。

「なるほど。後は片付けか……って、理澄くん!!」

？勝成さんが僕を押し退け、遺体を蹴り飛ばす。地面に転がされた僕は文句を言いつつ、もぞもぞと起き上がる。

「いたた……。一体、何するのさ……」

「あれを見ろ！」

？彼の指差す先では、殺した筈の死体が燃え上がっていた。ジャージは可燃性の素材なのか、すぐに燃え広がり、揺らめく炎は人の形を取る。

「そういう術を用意してたのか……」

「自爆作戦だな。本当はホテルに侵入する気だったんだろう」

「客を装えばいいだけだからね。侵入して殺されたら、燃え始める……。すごい作戦だ」

？原作の人間爆弾よりは賢い作戦かもしれない。好き好んで特攻するとも思えないので、恐らく彼らは騙されていたのだ。死してなお、道具として使われるとも知らずに。

「燃え広がる前に消してしまおう。大火事になったら、話がややこしくなる」

？勝成さんが燃える人間の周りの酸素を操作して、火を消し止める。後に残ったのは、黒焦げの死体だけだ。

「これなら、片付けなくても良さそうだね。帰ろうか」

「ああ。後で報告をしないと。葉山さんに言ったら良いらしいから」

「僕、帰ってもいい？」

「ダメに決まってるだろう。まあ、着替えてきたらどうだ？ 御当主様に直接会う訳では無いし」

「やつさしい！ほんと、人間が出来てるよ。ご飯も奢ってくれたし！」

「まあ、喜んでくれてるなら嬉しいが……」

？確か、一人四万のコースだった筈である。まあ、ホテルのレストランならそんなものだろう。これで不味かつたら最悪だが、味は良かったのだ。

「ほら、あれだよ。琴鳴さんをエスコートする練習だと思ってさ。これからは多くなるでしょ、デートも」

「間違っちゃない……。でも、君も練習をすべきだろうね。琴鳴が前に言っていたぞ。理澄くんはサイコパスっぽくて心配だ、って」

「ええー!? それもう悪口じゃん！」

「愛情だけで突っ走れる間は良い。けど、それが終わった時にモノを言うのは、互いに敬意を持っているかどうかだ。それを忘れないようにね。策略だけじゃあ、愛は手に入らないかもしれない」

？その言葉に、僕は結構感動してしまった。本当に勝成さんは立派な人だ。原作でも噛ませながらに、唯一愛に生きた人間だけある。

？何だか、リーナに会いたくなってしまう。後で電話をしてみよう。全ての電話に用事が必要な訳じゃない。「声が聞きたかった」という理由が最適解の電話だって、きつとあるのだ。



？師族会議が終了して一週間後、僕は幹比古を部活連本部に呼び出していた。彼はまだ達也に隔意があるようだが、僕への対応はごく普通だ。しかし、呼ばれるような心当たりは無かったようで、彼は戸惑った表情をしていた。

「実は幹比古に頼みがあつて。吉田家で神童と呼ばれていた君の力を借りたいんだ」

「よしてくれよ。僕は神童でも何でもない。しがない古式魔法師だよ」

「でも、古式魔法には詳しいだろ？ ……実は伝統派の件で相談が

あつて」

「伝統派？」

？僕は伝統派の事情を簡単に話した。幹比古は腕を組み、目を瞑って考え始める。

「つまり、理澄は僕に伝統派潰しに協力して欲しいと」

「古式魔法師との戦闘には、かなり不安が残るんだ。幹比古が居たら、僕も安心出来るから」

？その道に詳しい人材が欲しいのは、嘘では無かった。最近はフリーの古式魔法師にも幾つか声を掛けている。だが、名家の人間の視点からも情報を得たいのだ。

「……吉田家として協力できるかは確約出来ない。だけど、僕個人としてなら協力するよ。折角の頼みを無下にしたくないし」

「ありがとう。本当に助かるよ」

？とりあえず、第一段階はクリア。このまま上手くやれば、かなりの古式魔法師を引き出せる筈だ。目論見通りに話が進み、気分は爽快だった。

？幹比古が本部を去ったあと、僕は各部活の予算案に目を通していった。活躍に即して予算を確保してやらないといけないので、調整はかなり困難だ。四苦八苦してデータを纏めていると、急に背後から声が出た。

「いやあ、君も大変そうだね」

「九重八雲殿……！」

？藍の作務衣を着た僧形がそこには立っていた。古拙の笑みとも言わべき表情は、真意をこちらに掴ませない。僕は固まることしか出来なかった。

「はじめまして……だったね？ いやはや、達也くんから何度か話を聞いたから、初対面の気がしなくてね」

「何度かお調べになった……の間違いでは？」

「ははは。痛いところを突くねえ……！」

？カラツとした笑い声を上げる彼だが、僕は全く笑えない。何が狙

われているのだ。

「ここで、吉田の次男坊との話を聴かせて貰ったよ。最近、君は古式魔法師と良く接触しているね？ 伝統派の掃除の為だとか」

「よくご存知ですね。九島への婿入り前に、一つ手柄を立てようと思っていました」

「……単純な功名心であれば、与し易かっただろうね。でも、君の本当の狙いは違う筈。古式魔法師達に大きな借りを作ってまで、君は何がしたいんだい？」

？そこまで見抜かれているとは思わなかった。自分の心臓の拍動が速くなっているのも感じられる。

「……伝統派の掃討は『あの方』の願いです。手段なんか選んでいる場合では無かった。この答えでは満足出来ないでしょうか？」

？九重氏は顎を撫で、何度か首肯した。

「いやあ……。なるほどねえ。君も繋がっているとは知らなんだ。個人的な取引かな？」

「ええ。何度か人を通しての交流がありました。その際に、仕事の紹介を」

「そりゃあ、すごい。そんな簡単に話が進むなんて珍しいからね。しかも、17とかそこらでとは」

『四葉』だからでしょう。僕個人の価値というよりは、バックボーンに価値があります」

「過ぎた謙遜は醜いよ。四葉本家にはなく、一個人に仕事を回したという意味は、君にもよく分かっている筈だからね」

？僕は何も言わなかった。沈黙は肯定と捉えられただろうか。

「まあ、いいや。聞きたいことは聞けたし。変に探って悪かったね。世捨て人なのに、どうも『忍び』であろうとしてしまう。これはいけないね」

「お気持ちは良く分かります。どうか、お気になさらず」

？そう言って、一礼する。すると、彼は再び表情を隠した笑みを浮かべる。そして、部屋から消えていった。ぐるりと見渡し、気配が無くなったことを確認する。

「はあ……」

? 思わずため息をついてしまう。まさか、あんなのに目を付けられているとは。

? 今回の一件は、スポンサー様が僕だけに回してきた依頼だった。はつきり言ってしまえば、これは四葉の仕事を潰す行為。

? わざわざ、そんな仕事を受けた意味とは何か。それは、僕が分家の立場に甘んじる気は無いということ。九島を使って、四葉以上の立ち位置になってみせる。このことが、今の僕の目標だった。

? いずれ、達也を巡ってスポンサーと深雪は争う。その隙に四葉を蹴落とし、最後には四葉そのものを吸収するのだ。そうすれば、必然的に僕の四葉だけが残る。四葉家の当主にならなかつたとはいえず、ずっと当主にならないつもりでは無かつた。深雪を当主の座から引き摺り下ろし、達也の地位を剥奪する。そうしないと、この世界に安寧は訪れないのだから。

?

? そうだ 京都、行こう。

? 80年後の時間軸では、もうこんなキャッチコピーは存在しない。それでも京都に行けば、つい思い出してしまうものだ。

「いやあ。やっぱりいい感じだね、京都は」

「まだ駅だけど……?」

? 僕は幹比古と春休みに京都へとやってきていた。背後には僕のガーディアンや護衛を引き連れているが、一応友人同士の旅行と言っている。いい。

? 今回の用事は伝統派に喧嘩を売りに行くことだ。向こうも僕のことを知っている筈だし、京都にノコノコと僕が現れたなら襲ってくるだろう。その時に、「偶然」同行していた幹比古が巻き込まれたら。それはもう、吉田家と伝統派の喧嘩だ。

「僕、京都って好きなんだよね。雰囲気が良い。魔法師嫌が多いのが残念だけど」

「昔から『一見さんお断り』とか、排他的な街ではあるからね。それが文化を形成してもいるんだけど。理澄は京都、初めてなんだっけ?」
「まあね。知識はあるけど」

? 前世では、高校時代に京都へよく遊びに行っていた。多くの同級生は大阪の方に行っていたが、僕は古都の街並みの方が好きだったのだ。寺にも行ったし、神社にも行った。

「……で、どうなんだい? 伝統派はすぐに襲ってくる感じかな」

「すぐってことは無い。向こうが痺れを切らすまでが勝負。だから、当分は遊んでいられるんじゃない?」

「探査用の式を打てたら楽なだけど……。大義名分が無いからなあ。こればかりは、仕方ないか」

「観光と称して伝統派の拠点を見て回るだけで、十分向こうを逆撫で出来るよ」

? 大体は名所、と呼ばれる場所の近くに拠点がある。少々無理がある気もするが、一応観光で誤魔化しきれる筈だ。

「まあ、そうだろうね。もし、戦闘になったら任せて。古式魔法師には古式魔法師だからね」

「頼むよ。勿論、僕も援護するからさ」

？この日は八坂神社周辺を見回ったが、特に何も起こらなかった。その為、最後には四条河原町に戻って遊んでいた。高校生らしいっちゃ、らしいかもしれない。二日目は伏見稲荷に行ったが、そこでも問題は無かった。

？変化があつたのは、三日目の清水寺でのことだった。有名な清水の舞台に訪れた時、僕の方へ男が近づいて来た。冴えない中年の男だった。

？そして、男は僕を舞台の外へ突き飛ばそうとした。しかし、咄嗟に僕と男の間に北斗が入り込む。その為に、彼が突き飛ばされてしまった。僕は重力制御魔法を使用して、すぐに彼を引き上げる。

「大丈夫？」

「ええ……。ありがとうございます、理澄様」

？付いて来ていた護衛が男を取り押さえている。周りの観光客達も事態に気づき、ざわめき始めた。カメラを構え始めた人間も現れ、僕と幹比古を隠すように部下達が手を広げて立つ。北斗に精神干渉魔法を使わせているので、大袈裟な対応もそこまで違和感を持たせない筈。カメラを気にしておけば、恐らく大丈夫だ。

「あの男、非魔法師じゃないかな」

？幹比古が小さな声で僕に言う。

「そうだろうね。向こうも考えて来たってことだ」

「もう少し粘らなくちゃいけない……。って感じかな。警察の事情聴取が終わったら、別の拠点も探ってみよう」

「何処が良いかな？」

「教王護国寺が良いと思うよ。密教系の道場の権威を勝手に借りてさうだからね」

？事情聴取はすぐに解放された。古式系で十師族嫌いに見えたが、流石に「四葉」は怖かったのかもしれない。

？そして、捕まった男は金を握らされて、仕事を請け負っただけらしい。雇い主の身元は、多分分からないままだろう。伝統派であることだけは、間違いない。

「伝統派は場所の権威を利用して、協力者を得ている。だからこそ、本物の伝統とはかなり仲が悪い。ほんとは排除したいんだろうけど……。流石に、宗教施設だからね。こつちから手は出せないんだろう」

「その為の罠が僕だよ。幹比古も巻き込んだじゃうけど」

「分かった上で来てるから。気にしなくても良いよ」

？参拝を終え、適当に境内を僕達は歩き回る。御影供でも無いからか、今日は敷地内に居る人の数が疎らだった。諦めて外に出たところで、幹比古が急に足を止めた。

「術の気配がする。これ、人避けの結界だよ。だから、人がやけに少なかったんだな。……多分、来るね」

？そう彼が言った途端、矢のようなものがこちらへ飛んで来た。障壁を張り、それを下に落とす。

「今のは破魔矢だね。呪文を書いた紙を丸めたものを使って、貫通力を高めているんだ」

？破魔矢を拾って見ていると、急に妙な格好の人物が現れた。笠を被り、袈裟を付けている。宝具も手にしていた。多分金剛杵だが、本物の行者ではなさそうだ。

？相手がアクションを起こす前に、幹比古が手にしていた呪符に想子を流す。古式魔法「雷童子」だった。雷鳴が轟くと同時に、電撃が男へと降り注いだ。

「宗派が混ぜこぜだ。伝統派の特徴で間違いないね。どうする、理澄？　これは持って帰る？」

「……待って。何か、水の音がしない？」

？僕と幹比古は同時に、側溝の近くから飛び退いた。すると、金網をすり抜けて水が吹き出す。それは、水を素体にしたゴーレムであった。

「金網が溶けてる。腐食の術が掛けられてるのか……。厄介だな」

「破壊したら、術は解ける感じ?」

「恐らく、そうだと思う」

「了解。じゃあ、任せといて」

? 振動減速魔法を発動する。気体分子の減速はそこまで上手くないが、液体の水くらいなら瞬時に凍らせられる。それに加えて「破城槌」。すぐさま氷の彫像は砕け散った。

「こういう術を使う人間は、死のリスクがあるんだっけ、幹比古?」

「……知ってるんだ。どう、見に行ってみる?」

「やめておこう。放っておいても、変死体扱いで処理されるから——
……待てよ、今から魔法協会の方に向かうぞ!」

「えっ、何で!?!」

「説明は後だ! ——北斗! 10分で車を用意しろ! 今すぐだ!」

? 伝統派というより九島真言が、狙っているのは九島家内での復権だ。それなら、マッチポンプくらい仕掛けてもおかしくはない。呑気に僕を狙っている場合ではないのだ。つまり、これは陽動なのだ。伝統派の一部を暴れさせ、現当主派の九島家がそれを鎮圧する。それにより、一般人——非魔法師の世論で、事態を一変させたいのだ。

? 魔法協会がある地域一帯は強力な宗派の施設が存在しない。他の場所とは違い、名刹の介入は完全に防げるだろう。

? こちらの手勢は僕と幹比古、そして武倉の人員10名。戦力としては、伝統派を上回っている筈だ。しかし、少々心許ないのも確か。僕は端末を取り出し、とりあえず電話を掛けてみた。



? 戦力調達として呼んだのは、リーナと光宣。突然の誘いだつたが、彼らのスケジュールは空いていたようだ。

「リズム! 急に呼び出すなんて! びっくりだわ! 身だしなみの時間も無かったのよ!?!」

? 車に乗るやいなや、彼女は僕に文句を言った。

「ごめんね、リーナ。——光宣も来てくれてありがとう」

「構わないよ。こういう場に呼び出されるのが、一番嬉しいんだ。それで、そちらの方は？」

「？光宣は幹比古とは面識が無い。気になるのも、当たり前だった。」

「彼は吉田幹比古。吉田家の次男だよ」

「よろしく。えっと……」

「光宣で良いですよ。そちらはどうお呼びすれば？」

「ミキ、って呼んであげればいいわよ、ミノル。ね、そうでしょ？」

「？幹比古は、助けを求める顔を僕にした。仕方なく、僕はフオローを入れる。」

「普通に幹比古って呼んであげたらいいんじゃない？」

「それが良いね。今日はよろしくお願いします、幹比古さん」

「うっ、うん。よろしくね」

「？魔法協会近くには僕ら以外に人は見えなかった。近くで伝統派連中は気配を殺しているのかもしれないが、何とか先に来ることが出来たようだ。」

「これ、本当に来るのかしら？」

「来なかったら、僕の空回りってことだね。その時は、二人で出掛けようか。振り回したお詫びを兼ねて」

「お詫びじゃなくても、連れて行ってくれる？ 簪が欲しいのよ」

「いいよ。買ってあげる」

「？そんなことを話していると、僕らの足元の土が急に盛り上がり始める。土が波打っている、というのが正しい表現だろう。跳躍の術式を使い、全員が地面から足を放す。そして、幹比古がこう呟いた。「随分、前から準備していたみたいだね……。これだと、ひと月前くらいかな？」」

「そんなに期間が必要なものですか？」

「隠密の方向へ完全に振り切れればね。時間が掛かる分、魔法の兆候は殆ど分からない」

「確かに……。九島にも古式由来の術式は多いですが、それでも現代魔法用に作られていますから。スピード重視とはまた、違う視点です」

ね」

「？光宣と幹比古は初対面の割に、普通に会話が出来ているようだった。」

「皆、ここは僕に任せて。土の精霊にアクセスして、止めてしまうから」

「？幹比古が呪符を取り出しつつ、そう言った。僕達も異存は無かったので、その言葉に頷いた。」

「？土の精霊——想子情報体が地面のエイドスを改変する。うねる地面が、それによつて停止した。地面の異変が収まり、僕達も下に降りる。すると、こちらへ化成体の大群が飛んで来た。それと共に、一斉に式神も飛来する。」

「分担した方がいいね。一塊だと、不利そうだから。幹比古、こういう時の対処法はある？」

「じゃあ、僕はここに結界を張って、式神や化成体の排除をするよ。他は三手に分かれて、術者を潰してきて貰えると助かる」

「分かったー」

「？僕は雑木林に足を踏み入れた。リーナと光宣も何処かへ向かったようだ。」

「？半球の質量フィルターを自身の周りに張り、僕は適当なエリアに「破城槌」を仕掛けた。完全な自然破壊だが、視界が悪かったので仕方がない。敵を視界に捉え、「インビジブル・ブリット」を放つ。術者の頭が潰れて、血が飛び散る。殺した後に死体が燃えたりしないか心配だったが、そんなことにはならなかった。」

「？式神が再び飛んできたが、領域干渉で全て無効化する。だが、これを飛ばしてきた術者の場所が分からない。なので、やむなく「ノックス・アウト」を発動した。窒素と酸素を強制的に結合させ、窒素酸化物を生成する吸収系魔法だ。「ノックアウト」とのダブルミーニングで名付けられたらしい。」

「？リーナや光宣もこの雑木林の中に居るだろうが、二人なら自分の身は守れる筈だ。他力本願も良いところだが、早めに伝統派を片付けねばならないのも確か。自分の周りのセーフゾーンだけ設定し、最大

出力で一酸化窒素を合成した。

「?しばらくすると、リーナと光宣が僕の方へとやってきた。二人とも、自分の周りに質量フィルターを張っていた。」

「まさか、味方の攻撃とは思わなかったわ」

「これが一番早いと思つて」

「まあ、気持ちは分かるけどね。視界は悪いし、魔法を辿つても使用者が分からないし」

「全員倒し切つたと思う? 今見つけたので二十五人目だけど、元の人数が分からないからさ……」

「?死体を確認しながら戻る道中、僕は二人にそう尋ねた。」

「それは分からないけど、残つたのも逃げてる筈よ。統制はそれなりに取れていた集団だろうけど、流石に一酸化窒素を撒き散らされたら勝手に退却もするわよ」

「でも、これで父さんが戦力を出す理由も無くなったから。早く片付かなかつたら、あつちとも争う羽目になって面倒だったかも」

「通りすがりの僕達が倒しちゃつたから。十師族として魔法の不正利用は見逃せない……という訳だ」

「?本当は狙つて来たのだが、そこはどっちでも良いのだ。世間の人には細かい事情を知らない。普段の戦闘は揉み消して終わるが、今回は臨時師族会議を通して世の中に大々的なアピールをする。魔法師の力は人々を守る力。そう人々に認識させることは、今後を見据えても悪くないことだ。」

「?雑木林から、元居た私道へと出る。野次馬が少しずつ現れ始め、視線に晒される形となつた幹比古は小さくなつていた。」

「あつ、どうだった? 大丈夫だった?」

「?彼は僕達に気づき、ホツとした顔で大きく手を振る。」

「幹比古こそ。あれだけの式を全部返したの? 結構あつたよ?」

「あれ以上増えなかつたからね。何とかなつたよ——それにしても、また警察呼ばなきゃいけないなあ……」

「そうなんだよね……」

「あれ? リズム、朝にも何かあつたの?」

？リーナが不思議そうな顔をする。僕は清水寺の一件を簡単に説明した。

「……大変だったのね。朝から」

？彼女の後ろでは、端末で警察に連絡する光宣の姿があった。仕事及早くて、とても有り難い。後で礼を言っておこう。

？これだけ、大騒ぎになったのだから様子を窺って居た筈の古式系の名家も動き始める。伝統派の拠点にガサ入れもするだろう。ドタバタはしてしまったが、最終的には上手く望む方向へ転がった。今回ばかりは、自分の幸運に感謝するしかない。

？伝統派の掃除も粗方終わり、僕の仕事はとりあえず終わった。今は古式魔法の名家とコンタクトを幾つか取っている最中である。そのコネを使つて、利を得るのが目的だからだ。

？魔法科高校内では新年度に変わり、所謂「三年生の部」も始動した。新入生が入つて来たが、あまり僕とは関わりのない人間ばかりだろう。しかし、実は一人だけ気になつている原作キャラがいた。

？その人物の名は、矢車侍郎。三矢家に代々仕えている家の子供だ。彼は、魔法演算領域の一部が直接制御型念動力で占有されている為に、魔法の才能がからきし無い。分かりやすく言えば、達也を大幅にダウングレードした人間ということだ。

？そして、三年生の部で登場する新キャラクターはもう一人いる。三矢家の末娘である、三矢詩奈だ。三矢家が四葉の脅威になるとは思えないが、どこから足を掬われるかは分からない。警戒はしておくべきで、その為には矢車侍郎に接触する必要があつた。

？故に、僕はわざわざ入学式の日に登校し、体育館近くを歩き回つていた。目的の人物はすぐに見つけることが出来た。彼は古式の知覚系魔法「順風耳」を発動しようとしているところだった。

「……魔法の不正利用は校則違反だよ。まあ、未遂だから見なかつたことにするけど」

「アンタ、もしかして四葉の……」

「そう。僕は四葉理澄。一高では部活連会頭をしているよ。よろしくお見知りおきを、矢車くん」

「……よろしくすることは無いと思いますが、どうぞよろしく」
？彼は足早に僕の元から去ろうとする。その背中に僕は声を掛ける。

「部活連に入る気はないかい？」

？すると彼は立ち止まり、首だけをこちらに向けた。

「人違いじゃないですか？ ホラ、俺は紋無しです」

「いや、君だよ。……矢車くん、君をスカウトしているんだ」

「何故……?」

「君は護衛としての能力を三矢に疑われ、護衛の任を解かれているね?」

「だから何だ——」しかし」

?彼の言葉を、僕は遮る。そして、矢継ぎ早に話を続けた。

「君はその現状を受け入れられていない。だから、自分の力をアピール出来る場を僕は君に提供したいと思う」

「それに何の意味が……?」

「メリットもあると思うよ。護衛対象と帰宅時間を合わせられるし、二科生で部活連幹部になれるというのは、君にとっても悪くない筈だ」

「三矢本家に自分の能力が認められるかもしれない……ということか!」

「三矢が正しいのか、君が正しいのか。ここでハッキリさせようじゃないか。——今すぐ、結論を出さなくてもいいけど」

「いや、やらせて下さい!」

?彼が勢いよく頭を下げる。あまりにも上手い話は裏がある、というのが定石。勿論、僕も三矢の内部情報を聞きたいが為の行為だ。だが、人生経験の少ない状況で、それに気づけというのは酷だろう。

「部活連は、きつと君を歓迎するよ」

?幹部には何も言っていないので、今から説得して回らなければならぬ。でも、そんなことはおくびにも出さず、僕は微笑んで手を叩いた。



?侍郎が部活連に加入するまでに、紆余曲折があるにはあった。しかし、僕の誠意の込めた話し合いで皆分かってくれた。良いことである。ほぼ脅しと同じような意味だったが。

?意外だったのは、琢磨が彼の部活連入りを支持したこと。僕との模擬戦の後から、雰囲気が変わり出していたのは分かっていたが、こ

ここまで変わるとは予想外。嬉しい誤算だった。

？新学期には新歓に向けての準備が行われる。部活連、生徒会、風紀委員会で連帯しなくてはならず、対策会議が放課後に生徒会室で持たれた。といっても、大したことは話していない。協力してこの期間を乗り越えましょう、みたいな内容だ。話し合いを終えて、部活連本部に戻る途中の廊下で僕は足を止めた。いや、止めざるを得なかったのだ。

？僕の後頭部に「トライデント」が突きつけられていたからである。それはひんやりとしていて、現実味がなかった。

「……なに？」

「師匠から聞いた。お前が深雪を蹴落とそうと企んでいるとな」

「……やっぱ、先を急ぎ過ぎたね。あの御仁に目を付けられて、生き残れる訳なかった。理由は古式魔法師の縄張りを荒らしたから……辺りかな。」

「冷静だな。俺を殺せると思ってるのか？」

「まさか。もう自分が死ぬと分かっているからだよ。今を狙ったのも、僕のガーディアンが居ないからだろ？」

？九重八雲も達也を見事に焚きつけたものだ。僕の狙いが達也であることくらい分かっている筈だろうに、深雪の問題に話をすり替えてある。彼がそうしないと動かないのを、理解しているからだ。

「九重八雲に声を掛けられた時点で、いずれはこうなるって分かっていたよ。この事態が、そろそろだっということね。それで——僕が何の対策もしてないと思う？」

？僕の言葉と同時に、達也のCADが弾き飛ばされた。

「四葉先輩！」

？侍郎が僕の名を叫ぶ。僕は生徒会室を出た時に、彼に連絡を入れていた。すぐに帰ってこなかったら、探しに来るようにと。彼の才能は念動力だけに限定するなら、原作のパラサイト並の速さ。一度ならば、達也を驚かすことも可能だ。恐らく、侍郎は他の人間を呼びに行くが、それまでに勝負はついでしてしまうだろう。

？僕は達也に「ワルク्यूレ」を放つと同時に、彼から距離を取る。

どうせ負けるにしても、最後まで抵抗してやろうと思った。死ぬのは怖い。だが、それを隠してでも、悪役らしく死んでやろう。ここまでは、直接的には敵対しないようにしていたが、道の途中でバレてしまったのだから。

？こちらに魔法式が飛んでくるのを僕は知覚する。この魔法は達也のものでは無い。深雪の「コキユートス」だった。

？しかし、僕の魔法も深雪の魔法も霧散した。達也の「術式解体」グラム・メモリッションによる効果だと、すぐに分かった。彼が、自分の右掌を広げていたからだ。

『コキユートス』は無効化しないと思ってた」

「簡単なことだ。深雪に人を殺させたく無かった」

「優しい兄だね」

「お兄様！ ご無事ですか!?!」

？血相を変えた深雪がこちらに駆けてくる。

「理澄君！ 貴方はどれだけ私達を愚弄すれば気が済むの!?! どうして、お兄様の価値が、能力が、才能が、一つも貴方には分からないの!?!」

「分かっているに決まってるだろ！ 分からない奴が飛行魔法を使うかよ！ 思考操作型CADを買うかよ！ 誰よりも僕は達也の力を理解してる!」

？深雪よりももっと前から、それこそ前世から「お兄様はすごい」ということを僕は知っていた。

「それはお兄様の力を横取りしてるだけじゃないの！ 他のお兄様を見下す人々と、何も変わりはないわ!」

「達也は神でも、伝説でも無いんだよ！ 太陽の代わりに、世界の中心となつて回る訳でも無い！ コイツはただの人間だ！ 罪の産物だとか、超越者だとか、全部馬鹿馬鹿しい!」

？達也はトライデントを拾い直していた。僕はトライデントの銃身を無理やり掴み、自分の胸に押し付けた。

「僕を殺してみろよ！ 断言するぞ。僕という邪魔者が消えたら、お前を中心に世界はきつと回る。全ての人間がお前を兵器として認め、

誰もがその力を褒め称えるんだ。そして、お前は自分を否定する人間を力で振じ伏せるようになるだろう。それだけの能力があるんだから」

？話している途中で、「分解」される可能性もあった。けれども、彼はそうしなかった。

「けど、その代わりに一生を兵器として生きるんだ。魔法の平和利用も、重力制御型熱核融合炉も夢のまた夢。四葉の技術者として生きて、在野での技術者としては方向が違うに決まってる……。結局は工廠で働くようなものだ」

「……だからと言って、叔母上と無理に敵対しろと言うのか？ そうなれば、深雪はどうなる？」

？達也は無表情で、淡々と僕に言葉を返す。

「僕が四葉を乗っ取ってみせる。それで、達也と深雪を四葉の一員と認めない。僕はお前を戦力として考えないから。四葉は、『司波達也』という技術者の研究に金を落とす、ただのスポンサーになるだろうさ」

「……」

「世界を滅ぼせるから、すごいんじゃない。魔法の常識を覆せるから、僕の認識でお前は凄いな。——どうする？ 達也は……魔法師は、兵器か？ それとも、人間か？ 誰の言葉でも無い！ お前が選んでみるよ！ 自分の意思で！ 『お兄様』の決めたことなら、僕は信じるしかない！」

？ここまで言っただけなら、もうどちらでも良かった。死人に口なし、とも言う。そうなれば、世界が滅んでも知った事では無い。「やれよー」

？僕の叫びに達也は呼応しなかった。ただ黙って、トライデントを下ろした。

「……魔法師は、人間と考えなくてはならない。そうじゃなきゃ、俺は深雪まで否定することになる」

「つまり、僕を殺さないことにするってこと？ 珍しく、話し合いに乗ってきたね」

「四葉当主の地位は、そんなに固執するものでも無い。逆に、何でお前はそこまでして四葉を愛せるんだ？」

「僕だってね、魔法師社会を変えたいんだよ。達也とはまた違う方向で。それには当主の座が必要だし、何より僕には天職だ。魔法を使う数よりも、口数の方が多いからね」

？僕は端末を取り出し、ある連絡先を達也に送った。

「スポンサー様の一人と連絡が付く。達也達が四葉を離れる時に、使い道が出来る筈だ。僕が向こうに借りを作ることになるけど、まあ仕方ない」

？僕は四葉と直接戦わず、タイミングを見計らい掠め取るつもりで居た。しかし、この作戦に限っては失敗だ。新しい方法を考えなくてはならないだろう。達也が人間兵器に変わらないよう、僕が一生邪魔し続けることも必要だ。他の国と戦争だって起こしちゃいけない。

「……貰って構わないのか」

「いいよ。……深雪はどう？ 僕を殺したい？」

「私は理澄君がとても嫌いです。好き勝手引つ掻き回して、自分の得になることだけ手に入れて帰る。それでいて、悪いとは少しも思っていない。でも、お兄様に害が及ばないなら、私にも理由は無いわ。貴方とは価値観が違うけれど、貴方もお兄様を認めていると分かりましたし」

「そっか。……だからさ、達也——」

？ここで言葉を切る。そして、息を目一杯吸って、こう叫んだ。

「——出て行っちゃまえ！ こんな家！」

？僕はこの日、お兄様の全てを否定した。彼が戦略級魔法師であることも、軍人であることも。だけど、彼は僕を殺さなかった。僕も彼を殺さなかった。

？だから、今日も世界は太陽を中心に回っている。

番外編

アంతツチャブルは止まらない

？魔法科高校を卒業した僕は、自動的とでもいうべきなスムーズさで魔法大学へと進学した。クラスメイトの殆どは同じ進学先だったのもあり、特に何かが変わるといふこともない。キャンパスライフはそれなりに楽しく、僕は九校戦で因縁のあった一条や吉祥寺とも親交を深めた。彼らは意外と感じの良い男で、話もかなり面白い。特に吉祥寺とは得意系統が似通っているのもあり、意気投合できた。彼と共に研究室で「加重系プラスチック」を使った実験をし、徹夜で計器と睨みあったことは一生の思い出になるだろう。

？そんな生活の裏で僕は、結構危ない橋も渡つてもいた。人脈を広げるだけでは、四葉には到底勝てない。どうしても、金策が必要だった。それで、僕は政治の世界に足を踏み入れた。当時の僕は次期当主の婚約者、という中途半端な立ち位置。ぎりぎり、政治参画が許される立場だったからだ。官僚達と組み、日々金脈作りに勤しんだ。露見すれば、全てが台無し。幼少期の四葉での暮らしとは、また別の緊張感があった。

？しかし、四葉本家はあまりにも政治と距離を置いてる為に、逆に政治にはとんと疎い。僕の行動は、本家には意味が分からなかっただろう。黒羽辺りは気づいていただろうが、僕の行動には口を出さなかった。

？一度だけ、僕の元に黒羽の黒服が現れて、あるデータを渡してきたことがある。それは、「毒蜂」の起動式であった。この魔法は痛みを増幅させて、対象を最終的にショック死させるもの。しかも、発動プロセスが明確で、精神干渉系魔法への適性があれば誰でも発動出来る。つまり、武倉の魔法師にも使えるということだ。これは、黒羽の叔父様なりの僕へのエールだったのかもしれない。

？それが本当だと分かったのは、数年後のこと。一世一代を賭けた僕のクーデターは、スポンサーの後押しもあったが、全ての四葉分家

が支持をしたこともあつて成功した。恐らく、魔法史上におけるセンセーショナルな出来事の一つになった筈だ。僕は十師族を二度も破壊したのである。

？アンタツチャブルの再来。世間は「四葉」に対して、またしても畏れた。僕は昔から四葉の血族と公表されており、それなりに認知度が高い。その為、あの「夜の女王」を追い出し、その椅子に座った僕に恐怖を抱くのもおかしくなかった。

？しかし、そんな僕は繁華街にある大衆の焼き鳥屋で、旧友との再会を果たしていた。

「久しぶり、森崎」

「久しぶりだな。……良かったのか？　こんな所で」

「こんな場所だからこそ、バレないんだよ」

？生中二つ、とお冷やを置きにきた店員に注文する。割り箸を割つて、突き出しを掴む。ビールが来たので、とりあえず乾杯をした。

「……驚いたぞ。急にお前が当主になっているんだから」

「僕は転んでもただでは起きないんだよ」

？その言葉に、彼は苦笑する。

「その結果が、実家乗っ取りか……」

「本家は実家じゃないよ。僕は傍系の家生まれなんだ」

「その辺りの事情は分からないが。……九島の当主も変わったけど、確か三年のモノリスで戦った奴だよな？」

「そうだよ。光宣は僕の友達だから、リーナの後釜を任せられた。アイツは顔の割に、喰えない男なんだよ。僕ほどじゃないけど」

「自分で言うことか……？　ところで、奥さんは元気にしてるのか？」
「とても元気だよ。それに、もう少ししたら二人目が生まれるんだ。上の子に妹が出来るって訳だ。頼むから、達也と深雪みたいにはならないで欲しいなあ……」

「あれは特殊な例だろ。それにしても……。老獪な策略家が家庭を語るっていうのも、不思議なもんだな」

？失礼なことを言う奴である。この世界に生きる人間は、皆人の子なのだ。家族についての一つや二つ、語るだろう。

？家族といえ、文弥と亜夜子も僕が四葉に返り咲いたことを喜んでくれた。クーデターの成功は、黒羽と新発田の働きが一番大きかったのだ。勿論、二人も動いてくれていた筈である。

「恋破れた一条にも、家庭はあるんだ。僕にもあるよ」

「そうかもな。お前や一条とか、学生時代の知り合いが十師族当主つていうのも、何だか感慨深いものがあるな……」

？僕が一条や吉祥寺と連むようになったので、森崎も必然的に彼らと仲良くなった。三人で一条の恋路を一応応援してみたりもした。まあ、絶対に上手く行かないのは分かっていたが。グループ内で僕が唯一の彼女持ちだったので、マウントを取りまくったのももう昔の話だ。とはいえ、マンションに二人暮らししていた一条と吉祥寺だって悪いのだ。男二人なんて、あまりにも非生産的ではないか。これには見兼ねて、「僕はリーナと同棲してるぞ！」と言いたくもなる。ちなみに、森崎は実家暮らしだった。

「森崎はボディガード業を継いだんだっけ？ 偶に噂を聞くよ」

「ああ。責任も多いが、ボディガードは重要な仕事だ。こんな時代だから、人は簡単に傷つく。それを少しでも食い止められたら、と思うんだ」

？森崎はビール片手に、熱い夢を語る。何だが、少し羨ましい。

「それは良いね。僕の方は……そうだね、直近の仕事は師族会議になるかな。ちやうど選定会議の時期だ。当主になって早々、降ろされたくは無いから頑張らないと」

「良くも悪くも、今まで四葉は一度も落ちた事の無い名門だろ。誰が心配するかよ」

「まあね。他の家の心配でもしとこうかな」

？その後も、思いついた話に花を咲かせた。大学卒業以来会っていなかったが、僕達は普通りの関係のままだった。もう少ししたら、彼も結婚をするという。友人代表のスピーチを引き受けようか、と尋ねると、参加者が怯えるから止めてくれと言われた。だから、スピーチは吉祥寺に頼むそうだ。「カーディナル・ジョージ」の彼なら人前に立つのも慣れてるし、見事に仕事をやり切ってくれるだろう。

「——結婚式には呼ぶ。お前のテーブル近くは、元B組出身者で固めておくから」

「ありがとう。是非、参加させて貰うよ。楽しみにしてる」

？恋愛結婚らしいから、僕も心から祝えそうだ。一条の時はあからさまに政略結婚で、こちらの方が心配になった。今でこそ良い夫婦関係が出来ているが、当時は皆も気が気でなかったのだ。そのことを思い出し、僕はくつくつと笑った。

？今の時間は、もう原作には掠りもしない。あの「魔法科」時代は足早に過ぎていった。それでも、キャラクター達は——人間達は生きている。



？店を出ると、北斗が車を付けて待っていた。僕は助手席側のドアを開けて乗り込む。シートベルトを締めると同時に車は発進した。

「どうでした？ 理澄様」

「楽しかったよ。もう少ししたら、彼らも撤収させといて」

「かしこまりました」

？先程の店の客は、全員僕の部下だった。実は、今日だけは貸し切りになっていたのだ。下手にウロウロして殺されたくないのです、その辺りは手を打っている。

「じゃあ、次の場所に行こうか。アイツも奥さんのおかげで規則正しい生活を送ってるけど、流石にまだ起きてる筈だ」

？行き先はエネルギー開発をしている研究所だった。僕も個人的に幾つかの会社を通じて出資している。研究所から、近くに建っている寮へと向かう。インターホンを押すと、すぐに相手は出てきた。

「あら、理澄君。こんばんは」

「こんばんは、深雪。達也はいる？」

「ええ。どうぞ、上がって下さい」

？昔、彼らが住んでいた家よりもずっと狭い部屋。それでも、二人はとても幸せそうだ。

「やあ、達也。元気？」

「深雪が俺の健康に気を遣ってくれてるからな。体を壊すことは絶対に無いさ」

「お兄様も少しはご自分の健康を気にして頂けると、私も安心出来るんですけどね」

「？お茶を持ってきた深雪が達也の横に座り、彼にぴったりと身体をくっつけた。

「まいったな……」

「？達也は困ったように笑い、深雪の頭を撫でた。

「？深雪は家の中や身内の前では、今でも達也を「お兄様」と呼んでいた。その事実は、非常に倒錯した愛を意味している。でも、それで構わないと僕は思う。二人だけの世界で生きるしか、彼らに救われる術は無いからだ。

「それで、何の用だ？」

「七草が達也に接触を持つようとしている。深雪の身辺警護は僕に任せろ。黒羽から人を出す。亜夜子が適任だろう」

「？達也と深雪はもう四葉の人間ではない。とはいえ、僕は彼らを守る義務があった。

「それにしても……。何故、七草家が？」

「あの男は、代替わりした四葉すらも荒らしたいようだね。どうも、達也を表舞台に戻したいらしい。昔にお前が国防軍に所属したことを掴んでいたみたいだね」

「お兄様は今でも十分表舞台で活躍していらつしやるのに……！ 研究をしているという事実は、蔑ろにされてるといふの？」

「？部屋の温度が少し下がった。まだ「誓約」^{オース}の効果は続いており、時折彼女は魔法を暴走させる。

「達也が重力制御型熱核融合炉を実用化したら、この問題も落ち着く筈だ。魔法師を兵器から解放する、というプロジェクトの意義が分かれば、下手なことは言えない。仮にも十師族だからね」

「そうか……。最近、研究所を嗅ぎ回る人間が増えたと思っていた。発表を控えているからと考えていたが」

？その時、玄関で控えていた筈の北斗が部屋に駆け込んで来た。何か非常事態があったのだ。

「どうしたの？」

「何者かの侵入です！ 研究所内のデータを狙っていると推測されま
す！」

？本当なら真柴辺りを回したいが、ここには四葉から警備を直接
持ってこれない。四葉の持ち物ではなく、国立の研究所だからだ。そ
の為、この研究所の警備レベルは四葉の基準では低めなのである。

「僕が片付けてくるよ。今なら、僕狙いの人間が襲ったことで収束さ
せられるからね」

？僕は挨拶もそこそこに、北斗と現場へ向かった。擬似瞬間移動で
研究所の前まで飛び、廊下を駆け抜ける。

？侵入者は六人で、全員魔法師だ。だが、僕には全く問題が無かつ
た。対象を認識した瞬間に、彼らは糸が切れたように崩れ落ちる。
「ワルキューレ」が発動したからだ。すぐさま、僕は六体の死体を浮か
せる。

「認識障害は掛けてるか？ 逃げるぞ！」

「了解しました！」

？死体を途中で処分し、僕達は四葉の村へと戻る。出入りはかなり
面倒だが、場所としては一番安全だ。昔から僕も秘密基地みたいで好
きだった。

「研究所の周りには人を送った方が良いな……。とりあえず、新発田
を回そうか。後で、勝成さんに電話を繋いでくれ」

「はい。ところで、理澄様。達也様の功績をそのまま、彼に全て渡して
しまつてよろしいのでしょうか？ いくら、深雪様が昔以上のリソー
スを割いて『誓約』^{オース}を使つていらつしやるとはいえ」

「ああ……。そりゃあ、危険だよ。達也の素性は殆どの人間が知つて
いる。いくら平和利用と言つたつて、ややこしいことが起こるのは目
に見えてる」

「それでしたら！」

「でも、人の功績を奪い取つて知らん顔する訳にはいかないだろ。そ

れをどう対処するかは、僕の仕事。そこからは、決して逃げちゃいけないんだ。これからの為にもね」

？達也と深雪を幸せな世界に居続けさせる必要がある。その為にも、魔法師社会を変えていかなくてはならない。

？それは、お兄様をお兄様であることを壊してしまった、僕への罰なのかもしれない。

G I V E ! M E ! L O V E !

?大学の昼休み。学校近くの店で、僕とリーナはランチをしていた。ちよつと洒落た感じのイタリアンの店で、味の方も悪くない。今度は夜に行こうか、と約束した。

?帰り道に、よく見知った相手とすれ違う。一条と吉祥寺、そして森崎だった。僕は彼らと友人だし、リーナも知らない相手ではない。

「ああ、四葉。探してたんだ。今時間あるか?」

「えっ? 午後はまあ、空いてるけど……」

?僕はリーナの方をちらりと見た。すると、彼女は僕の背中をぐいと押す。そして、後ろから少し顔を出して話し始める。

「リズムに用があるの? それなら、お貸しするわ。ワタシ、午後には授業が入ってるのよ」

「ありがとう。悪いが、借りてくぞ」

「気にしないで」

?本人の同意無しに、会話が進む。これは少しおかしいのではないか。文句を言う間もなく、リーナはヒラヒラと手を振って、僕達の元をさっさと去る。ノートくらい幾らでも書くから、僕も連れて行って欲しかった。嫌な予感しかしない。

?彼らに連行された先は、これまた大学近くのカラオケボックス。歌いたかったのかと思いきや、一条が神妙な顔で話を切り出した。

「お前達に集まって貰ったのは、他でもない。司波さんに関することなんだ」

「はあ……?」

「第73回、一条将輝の人生について考える会の会合なんだ……。これは」

?吉祥寺が非常に不本意そうな表情で言う。

「何なのさ。そのラジオタイトルみたいなもの」

「50回目までは、俺の脳内会議。72回までは俺とジョージの間で。

今回からは、森崎と四葉もレギュラーだ! 喜べ!」

「喜べるかよ……」

？森崎がげんなりとした顔をした。そもそも、こんな会議を開かなくても、一条は口を開けば恋愛相談なのだから。嫌にもなる。

「ていうかき、一条は深雪に嫌われても文句言えないでしょ。完全に寝取る宣言だったよ、あの一条家の抗議は。そりゃあ、嫌がられるよ」

「ぐっ……。それを言われると、どうしようもない……。だが！可能性が少しでもある限り、俺は諦めない！」

「無理だと思うけどなあ……」

？拳を握りしめる一条に、彼以外の面々がため息をつく。深雪の前では「ヘタレ」としか言いようがないのに、こういう所では強気なのだ。

「俺と四葉を呼んだのは、高校時代の司波さんを知ってるからか？」

それなら、四葉の方がよく知ってるだろう。親戚なんだから」

「まあ、昔から顔見知りだけどさ……」

？一条が「幼馴染……！」と叫んで、ソファの上に転がる。別に僕は深雪との間に、幼馴染と呼ぶほどの関係性はない。僕の幼馴染は、文弥と亜夜子だ。

「僕は将輝の恋を応援したいけど、負け戦が確定してるでしょ……。二人とも、頼むから何とかしてあげて。新しい女子を紹介するとかさ……」

「いや、無理。もし俺に出会いが会っても、絶対に一条には紹介しないぞ。根こそぎ奪われるに決まってるのに。四葉が誰か紹介してやれ」

？一条将輝という男は、とにかく顔だけは良いのである。あと、家柄も素晴らしく良い。付き合いたがっている女子は選り取りみどりにも関わらず、理想だけは矢鱈と高いのだ。このままだと、独身貴族になってもおかしくなかった。

「やだよ。他の女子は殆ど近づいてこないし……。まず、めちゃくちゃ怖がられてるから。それにさ、僕は婚約してるから、変に誤解を招きそうな行動をしたくないんだけど」

「大体、女に避けられてる四葉に彼女がいて、一条にいないのがおかしいんだよな……。あんなにキヤーキヤー言われてて」

「選り好みしてるからだよ。流石に深雪は難攻不落過ぎるでしょ。『お兄様』が居るのに」

「俺は司波さんの幼馴染になりたかった……。気安く『深雪』と呼んでも許される……」

「言ってる事が支離滅裂だよ、将輝……？」

「全くといって、会話が成り立っていない。今のコイツは「司波さん大好きbro」でしかなかった。」

「……とはいえ、このままもマズいだろ。今の一条は犯罪者予備軍だ」「そうだよ。どうすんの、吉祥寺？ お前、参謀でしょ」

「こんなくだらないことに、策を練りたく無いんだけどなあ……」

「頭を抱える僕らを他所に、マイクを握った一条が熱い恋の歌を歌い始める。それが、また上手いのだ。ある意味、司波深雪を好き過ぎることが、「愛すべき欠点」なのかもしれない。」

「ちなみに、この後10回も同じ曲を聞かされた。」



「——っていうことがあったんだよね」

「どうして、男の子ってそんなに馬鹿なのかしら？」

「僕は家で、今日のことをリーナに話していた。それに対して、彼女は呆れ顔だ。」

「一条の気持ち、分からない訳じゃないんだけど。魔法師は早婚を推奨されてる。次世代に子を残り、魔法師の数を増やす為にね。どうせ結婚するなら、好きな人の方が良い。でも、深雪の好きな人は違うんだよ」

「彼女の幸せを願って、身を引くのが紳士ではないかしら？」

「そんな簡単に諦めが付かないのかも。それか、諦めてる為に変になってるのか……？」

「原作の一条も日記では年相応な一面を出していたが、あそこまででは無かった。今の彼の行動は、まるでアイドルオタクのよう。しかも、古き良きという接頭語が付きそうだ。「純潔を守る会」とかそんな

感じの勢いを感じる。

「それで、結局どうなったの？」

「カラオケ大会かな。その後も遊びまくったけど」

「残念過ぎるわね……。ねえ、リズム。貴方はもし、ワタシが居なかったらどうしていたの？」

「誰と結婚していたかってこと？ どうだろ……。十師族、それも四葉である時点で、まともな恋愛は無理だっただろうね。適当に見合いをさせられて、結婚していたんじゃないかな」

？急にリーナが僕に抱きついてきた。僕は恐る恐る彼女の身体に腕を回した。

「……あの時の貴方が、100%の善意でワタシを呼んだ訳じゃないことは分かってるわ」

「ごめん……。打算的な行動だったよ」

「いいの。許してあげる。——でも、リズム！ その髪型はどうしたの!? そもそも、それが一番聞きたかったのよ！ 話を逸らして良い雰囲気にしても、ワタシは誤魔化されませんかからね！」

？彼女は僕の身体に回していた腕を外し、人差し指を僕の鼻先に突きつけた。

？今の僕の髪型は、どちらかといえば奇抜な部類に入る。どこから見ても、完全な青髪。

「一条がさ、『イメチェンしたら、司波さんに話しかけられるかもしれない！ 俺は髪の毛を赤く染める！ クリムゾンだ！』って言い出して。面白いから僕達も便乗して、美容院に行った」

「馬鹿なの？ 誰も止めなかったの？」

「吉祥寺は止めてたよ？ でも、燃えてるアイツは突っ走っていった。だけどさ、一番かっこ悪いのは森崎。美容院までの道では『俺は紫にするぞ！』って言うってたのに、ブリーチで日和って茶髪で終わったからね。全然、変化なし」

「変な色に染めたのが、リズムとマサキだけで良かったわね……。まだ、顔で何とかなるから」

「これ色落ちしたら、ミントグリーンになるんだって。楽しみにして

るんだ」

？僕は髪の毛を摘み上げ、呑気にそう返す。リーナは掌で頭を抑え、深々とため息をついた。

「大学生になってハジけすぎじゃないかしら……？　付き合う友達が悪いのかしらね？」

「そう？　一条、マジで面白いよ。吉祥寺曰く『将輝は大学生になって、確実におかしくなったよ。付き合う友達のせいかな……』らしいけど」

「お互いに悪影響を及ぼしてるのね」

？彼女はにべもない。だが、高校時代には校則があったのだ。それから解放されたのだから、少々好きな格好をしても許されると思う。何なら、僕は卒業式の後、すぐにピアス穴を開けている。帰りの車の中だったので、運転中だった北斗が目を剥いてしまった。あの時は悪いことをした。

「じゃあ、今の僕は嫌い？」

「……ずるいわ」

「そんな生き方しか、してこなかったんだ」

？リーナが僕の唇に人差し指の先を押し付けた。

「そうじゃないでしょ。そんな貴方だから、好きなのよ」

「……ね、リーナ。お願いがあるんだけど——」

？僕の提案を聞いたリーナは、困った顔をする。しかし、最後には承諾してくれた。

？次の日、僕の家で簡単なホームパーティーを開いた。メンバーはいつもの3人と、僕とリーナ。流石に女子が混ざってる時に、深雪への想いを一条も語らなかった。故に、穏やかな雰囲気では話弾む。しかし、僕はそんな平和な終わり方をさせる予定は無い。

？僕とリーナは、吉祥寺を隣の部屋へそつと呼び出した。事前に告げておいたのである。

「これ、本当にやるのかい？」

「ガス抜きをさせないと、ホントに一条はやばいよ。彼を助けると思っ。参謀だろ？」

「まあ、そうだけども……」

？僕は彼にカンニングペーパーを渡す。今日、一条達をこの家に呼んだのには理由があった。リーナの「パレード」を吉祥寺に掛け、彼を深雪に変化させるという目論見だ。それに一条が反応すれば、とても面白い。主に僕が。

「それじゃあ、いくわよ？ 3、2、1！」

？リーナがCADを操作した。すると、みるみるうちに吉祥寺の姿が変化する。

？鳥の濡れ羽色のロングヘアに、吸い込まれるような藍色の目。陶器のように滑らかな肌に、形の良い鼻や唇。紛れもなく、司波深雪がそこに存在していた。

？完全に姿を変えた吉祥寺を連れて、部屋へと戻った。深雪（吉祥寺）の姿を見た一条は、手にしていたグラスを落としそうになる。

「しっ、司波さん!？」

？吉祥寺はちらりと僕を見て、アイコンタクトを取ろうとする。僕は軽く頷き、一条に見えないように親指を立てた。

『お久しぶりです、一条さん。その……。髪型をお変えになったのですね。とてもお似合いでいらっしやいますわ』

「えっ、あっ、はいっ！ 光栄ですうっ！」

？鯨鋒張った返事をする一条。この時点でめちやくちや面白いのだが、一応笑うのはまだ我慢する。ちなみに、僕は午前中の授業で深雪に「その髪型は、一体どうしたのかしら？」と尋ねられた。逆に、一条は何も話しかけられていなかった。とても可哀想だ。

？吉祥寺はカンニングペーパーを盗み見て、言葉が続ける。そもそも、この目的は愛に生きる一条の憑き物を落とさせること。深雪のガワを借りて、彼の恋を終わらせるのだ。

『……それで、実はお話ししたいことがあって。その、一条さんのお気持ちには嬉しいのですが、私には心に決めた人がいます。ですから、婚約の申し出を取り下げては貰えませんか』

？これは、僕の用意した言葉じゃない。吉祥寺の奴、アドリブを入れている。僕は「お願いです。私の為に達也様と争わないで下さい！」

私は（お兄様の手を煩わせるのは嫌なので）一条さんが傷つくところを見たくは無いです！」と書いていた筈。こんな、解釈違いだぞ！

「あれ……？ あ、あの、本当に司波さんですか？」

？やはり、怪しまれている。深雪は友人以外の人間には、回りくどい言い方でしか物を言わない。大抵、代わりに周りの人間が代弁してくれるので、自分で言う必要が無いのだ。「迷惑なのでやめてほしい」と思っている、直接は告げないだろう。その分、顔には出ているが。『えっ、えっ……。その……』

？あからさまに慌て出す深雪——もとい、吉祥寺。見兼ねた僕はタブレット端末に大きく文字を書いて、一条の頭の後ろから画面を出す。「抱きついて誤魔化せ！」である。

「しっ、司波さん!」

『そんな他人行儀な呼び方はやめて下さい。みつ……深雪って呼んで頂けませんか……？』

？これは僕の考えたセリフだ。確か、追憶編とかで見た。達也に言うような言葉を用意しておけば、一条への特攻には十分使える。

？二人の様子を見て、僕はとにかくゲラゲラ笑っていた。予想の百倍くらい面白い。個人的な興味からだだったが、やって良かった。笑い転げていると、状況をようやく呑み込んだ森崎が僕の方へやってくる。

「見事な偽装魔法だな。吉祥寺だと分かってても、司波さんにしか見えないぞ」

「そうだろ？ リーナはこの魔法が得意なんだよ」

「ワタシの『パレード』を、こんなにくだらないうちに使うのは初めてよ」

？リーナは冷ややかな声で、僕にそう言う。彼女は魔法の息継ぎが滑らかで、「パレード」の効果は一度も断絶しない。光宣も非常にこれが上手いが、違和感を魔的知覚力の高い人間に殆ど感じさせない点はリーナに軍配が上がりそうだ。

「でも、良いのか？ 最終的にはバレるだろ、こんな作戦」

「しばらくしたら、催眠ガスで眠らせるから。今日のごとは、全部夢になるよ」

「悪辣な男だな……」

「四葉だからね」

？しかし、この時の僕は知らなかった。

？一条将輝という男は、僕の想定を上回るレベルで根性があった。彼は夢を現実にしようと、余計に空回りし始める。それらに、僕達はいつも振り回されてしまうようになるのだった。

亜夜子、助けに来たぞ！

？子供の頃の僕は、武倉の本拠地である旧静岡県に住んでいた。しかし、小中学校は旧愛知県にあるエスカレーター式の名門校出身で、文弥も同じ学校の卒業生だ。亜夜子も同じ系列の女子校に通っていた。

？そのような学校の内部進学者は、外部から入学する人間に酷く厳しいことで知られるが、外に出て行く人間に対してもとても冷淡だ。つまり、僕や双子達が他の学校に進学しても、誰も無関心だということ。もちろん高校は、魔法科高校に通うことになっている。誰の記憶にも残らないでフェードアウトするには、都合の良い学校であった。「魔女狩り、つてご存知？」

？ある日、僕は黒羽の家に遊びに行っていた。三人でおやつを食べながらお喋りをしていた時、亜夜子がそう話を切り出す。

「中世ヨーロッパの話？ 中には本物も居たらしいけど、殆どは占い師や薬師の女性だったんだよね」

？文弥が亜夜子の質問に、すぐさま答えを返す。クイズの早押しと見まごう早さだった。

「そうなの。それがね、私の学校でも残念ながら起こっているのよ」

？彼女は黒羽らしく学校一の情報通なのだ。

「魔法師の生徒をターゲットにした、いじめ……ってこと？」

「校風を考えれば、魔法師排斥という理論に繋がってもおかしくはないか……」

「ええ。私の学校、遠方からの生徒は寮生活が必須でしょう？」

「でも、普通は高校生になったら出て行くでしょ？ そこまでして、排除する必要があるの？」

「確かに……」

？動機が何とも曖昧だ。どちらも良くはないが、外に出る人間よりは、中に残る人間の方が口止めするのは楽だろう。それでは、魔法師を人間と思っていないだけなのか。

？だが、閉鎖空間という環境は偏った思想を凝り固まらせる場合も

ある。遠い昔の人間は、魔法師が生まれることを予期してはいなかった。だから、どこの教義には当てはまらない筈だが、世の中そう簡単に行かないようだ。

「寮内では明確なヒエラルキーがあるの。一番上位の人間の集団は『紅梅会』と呼ばれているわ」

「ネーミングの由来は？」

「学校の校章が牡丹なこと。そして、寮の建物の外壁が白いことよ。襲の色目は、表の白に裏の紅梅で『牡丹』になるでしょ？」

「上手いこと考える人が居るものだね」

？ 白壁が表の白で、中にいる生徒が裏の紅梅。

？ 腐っても名門校という訳だ。卑劣な行いをしていても、教養だけはあるらしい。

「紅梅会のメンバーはね、男子禁制の筈の寮に男性を連れ込んでいるわ。教員や寮監を丸め込んでいるのね。大体は、成績上位者で構成されているからでしょう」

？ 亜夜子の言葉に、文弥が顔を赤くする。中学二年生には、刺激の強い内容だろう。亜夜子が図太過ぎるのだ。

「それなら、その男達に裏があるってこと？」

「調べた所、大部分は反魔法団体の人間でした。寮生は規律正しい生活を徹底されてるでしょうから、それへの不満に漬け込んだのだと思うのですが」

「なるほど……。気をつけてね、姉さん！」

「ええ。まだ寮だけに留まってるけれど、同じ学校なものね」

「僕のCADは、目立たない端末型だけど……。文弥と亜夜子ちゃんは腕輪型を持ってたんじゃないかなかったっけ？」

「そうですね……。うまく隠せるのにしないと。当分は端末型にしようかしら」

？ 不穏な空気が学校に漂っても、卒業までは通わなくてはならない。亜夜子のことは心配だが、黒羽の叔父様もその辺りはしっかり考えてそうだ。何かあれば、僕だっですぐ動くつもりだが。

? しばらくの間は普通に学校生活を送っていたのだが、ある時急に僕と文弥は御当主様に呼び出された。

「亜夜子さんの学校で、不穏な動きがあるそうね。反魔法団体なんて、本当に迷惑……」

? 御当主様は吐き捨てるようにそう言い、皿の上のクッキーを摘む。僕達は何だか怖くて、黙って下を向いていた。とても機嫌が悪そうなので、突然「流星群」などを自分達に当てられたらどうしようか。そんなことは今まで無かったが、警戒しておくに越したことは無い。僕は干渉力が高いので、光の分布に干渉すれば何とかなる可能性もある。生きるか死ぬかは、どちらも50%。人生よりマシだ。

「ああ、美味しい……。二人も遠慮しないで、食べて良いのよ」

「お言葉に甘えさせて頂きます」

「ありがとうございます。では、頂きます」

? おずおずとクッキーに手を伸ばす。味なんか分からなかったが、「美味しいですね」と言った。

「そうでしょうか? 最近、よく届けさせているの」

? 御当主様は口元を緩ませ、華麗な仕草で紅茶を飲んだ。そして、思い出したようにCADを操作した。途端に、部屋の中が「夜」へと変わる。全ての光が、この場所では自由に存在することを許されない。

? 室内の明るさが元に戻った。床には割れたティーカップが転がり、紅茶の染みが絨毯を汚していた。一瞬の間に、投げられたティーカップが「流星群」によって貫かれたのだ。

「早く片付けて頂戴」

? 様子を伺いにきたメイドに、御当主様はそう言いつける。そのまま僕達の方へ顔を戻し、優しい微笑みを向けた。

「理澄さん、文弥さん。早急にしてもらいたい仕事があります。——例の反魔法団体をすぐに片付けて。そうはいつでも、二人も学校があるでしょうからね。自分でプランを考えて、人を上手く使ってごらんなさい。それは、貴方達の将来にも役に立つ筈だわ」

「はい、御当主様。お任せ下さい」

？僕達は揃って同じ言葉を言い、丁寧に頭を下げる。元よりそれは、懸念すべき事項だったのだ。正式な仕事になったことは、こちらにも都合の良いことであった。

？御当主様との謁見を終え、葉山さんから今回のターゲットのデータを受け取った。どうも、かの団体は芸能事務所を隠れ蓑としているらしい。僕も名前を聞いたことがあった。以前、深雪がスカウトされたりらしい。前に達也から、そのことを聞いた覚えがある。

？僕は本家から車を出して貰って帰ろうと思っていた。しかし、文弥が僕の家へ寄っていくと言ったので、一緒に帰ることにした。帰りの車内では、作戦を練る為の話し合いをする。とはいえ、殆どは不可解な命令内容についての話だったが。

「どうする？　僕が学校を休んで、本丸に突入する訳にもいかないし……。『ワルキューレ』を使えば一発なのに。どうして、御当主様はあんなことを言ったんだろう？」

「理澄兄さんありきの作戦ばかりでは、駄目だからじゃないのかな？　部下を育てるのも上に立つ者の役目、っていうことを学ぶ目的なのかも」

「暗殺は文弥の方に任せるしかないか……。ウチの魔法師は、洗脳とか意識誘導に向いてるのが多いし。僕の直属部隊は、それこそ僕ありきの編成だからね」

？僕の部隊は、武倉では珍しい制圧用の部隊だ。「ワルキューレ」の魔法特性を生かす為に急遽作られたもので、メンバーはほぼ10代から20代。彼らはガーディアン候補でもあるので、僕と年が近い方が良いという理由もあった。

「まあ、派手に殺した方が良いから、作戦上も仕方ないし。その代わりに、後始末は一手に引き受けるよ」

「任せといて。僕、今回は亜貿社を使おうと思ってたし」

「あそこ、黒羽傘下になったんだって？　良いなあ、景気が良くて。僕のところは精々、資金プール用の会社ぐらいだよ」

「黒羽と武倉じゃあ、方向性が違うから。まあ、それで僕が直接命令出来る暗殺者がね、そこには居るんだ」

？文弥が言っているのは、榛有希のことだろう。身体強化の異能を持った優秀な暗殺者だが、達也と遭遇してしまったせいで、とてつもない不幸に見舞われた人だ。

「ああ、それ聞いたよ。黒羽に仕えるのは癩だが、自分と対等に戦った文弥には仕えても良いって……。変わった人だよね。何、武士か何か？」

「さあ……？ 先祖が忍者らしいけど。多分、彼女にやらせておいたら大丈夫な筈。ただ、捕まらなくても、彼女の素性がバレると困る」「心配しないでいいよ。そこら辺は普通に誤魔化せる」

「了解。じゃあ、後で連絡しとくよ」



？榛有希は達也が絡まなければ、問題無く任務をこなせるらしい。数日後には、彼女は仕事を完遂していた。

？白昼堂々、芸能事務所（裏は反魔法団体）のトップが目出し帽を被った小柄な女性に殺されるショックな映像は、テレビでも何度か報道されていた。しかし、そのままでは見た人がPTSDになるかもしれないという理由付けで、魔法の言葉「映像は一部加工しております」というテロップを入れて適当に加工してある。元映像は握り潰したので、ネットにも殆ど上がっていない。アップロードされても、すぐに削除している。

？それと同時に、他にも裏工作をいくつか行ってる。反魔法団体だったから殺された、だと体裁が悪いので、それを掻き消すスクリーンダルを大量放出したのだ。「あんな奴なら殺されても仕方ない」という世論を作らなければならなかった。

？一週間後の昼休み、僕は端末でSNSを確認していた。今でも、風向きは悪くない。誘導した方向に話は進んでいる。上手くいった喜びで、思わず笑みが零れた。

？そんな時、教室の扉が勢いよく開いた。目を向けると、血相を変

えた文弥が肩で息をしながら立っていた。

「理澄兄さん！　ちよつと来てー！」

？彼はそう叫び、すぐに踵を返す。僕は端末をポケットにしまい、慌てて彼を追った。人気の少ない屋上に近い階段の踊り場で、漸く文弥は足を止める。

「これ見てー！」

？文弥は端末の画面を僕に向ける。顔に近過ぎて何も見えなかったが、文句を言う前に彼は内容を詳しく説明し始めた。

「姉さんのCADは指紋認証機能付きなんだ。違う人間の指紋を検知すると、登録しておいた人間に連絡が飛ぶようになってる。どうしようー！　姉さんが危ないー！」

「つまり、亜夜子ちゃんのCADは今は敵の手に落ちてる訳か……」

「そうなんだ！　いくら元を絶ってても、下っ端はそのまま残ってるんだから。紅梅会と繋がってる奴らもそうだ！　だから、魔法師ってバレて危害を加えられるのかも……。助けなきゃ！」

？もうすぐ授業が始まる時間だが、そんなことは言ってもらえない。僕も文弥同様、一刻も早く亜夜子の元に駆けつけたかった。だから、結論はすぐに出た。

「CADは持つてるな？」

「うんー！」

「じゃ、決まりだ。ウチの運転手は今も待つてる。それで行こう」

「サボったら怒られない？」

「眠らせる。代わりに僕が運転するから」

「えっ、出来るの!?!」

「任せな。F1レーサー並みの運転を見せてやるよ」

？運転は前世のゴーカート以来だが、何とかなるだろう。危なかったら、硬化魔法と移動魔法で無理に動かすつもりだ。

？とにかく、亜夜子を助けなければならぬ。「跳躍」の術式を使つて、学校を囲む塀を乗り越える。近くには、待機している武倉の車があつた。運転手はまだ僕らに気づいてはいない。

「よろしく」

「良心が痛むなあ……」

？「そう言いつつ、彼は「ダイレクト・ペイン」を運転手に向けて放った。

「よし、行くぞー！」

？「伸びてしまった運転手をトランクに放り込み、僕は車に乗った。80年後の車は運転操作も容易になって、意外とフィーリングでも行けるものだった。内心、僕はホツとする。

？「僕の中学と亜夜子の中学はそう距離がある訳でもない。20分程度で目的地に到着した。

「理澄兄さん……。ほんとに運転したことあった？」

「あるよ」

？「ゴーカートしか経験は無いのだが、一応これも立派な経歴である。

「それなら酷すぎ！ 死の覚悟を何度か決めたよ！」

「文弥は大袈裟だなあ。——突入するよ、いつでも良いから」

「OK！ 行くよー！」

？「文弥が「擬似瞬間移動」を発動。僕達は数秒で校門付近から、亜夜子の教室がある校舎近くに移動した。ここからは、僕の出番だ。CADを操作し、重力操作の魔法を使う。原作の飛行魔法程の自由度は無いが、空中で体勢を保持するくらいは可能だ。ラッキーなことに、亜夜子のクラスの窓は少し開いていた。なので、窓から僕と文弥は堂々と侵入した。

？「教室内では、学級会のようなものが開かれていた。亜夜子は教卓の横に立たされて居る。彼女は毅然とした態度で、劣勢に立たされているとは微塵も感じさせない。教卓では、きつい顔立ちをした心なし爬虫類の少女が亜夜子のCADを持って立っていた。学級委員長辺りだろうか。

「姉さん！」

「亜夜子ちゃん！」

「文弥!? それに、理澄さんも！」

？「亜夜子が元々大きな目を、更に大きく見開いた。文弥は彼女に笑

顔を向けたが、すぐに顔を引き締める。そして、彼は教卓の少女を睨みつけた。

「CAD、返して貰えますか」

「なんでよ！　そもそも、アンタは何なのよ！」

「そうですか。残念です」

？悲しそうに目を伏せた文弥は、「ダイレクト・ペイン」を少女に掛けた。手加減はしていたみたいだが、それでも精神に直接痛みを与えるのだ。彼女は呻き声を上げ、手にしていたCADを取り落す。僕はそれを拾い上げた。

？座っていた人間達が一斉に立ち上がり、蜘蛛の子を散らすように教室から逃げていく。一人残される形になった少女が可哀想だったので、僕は重力制御魔法で教室の外に出してあげた。

「大丈夫、姉さん？　何も酷い目には合っていない？」

「そうだよ。心配になって、学校抜け出して来たんだから」

？亜夜子は僕達の顔を交互に見遣り、大きな声で笑い始めた。

「ふふふつ。おかしいわ……。私、囃役だったのよ。普通にしてて、魔法師ってバレるようなハマをすと思う？　この周りにはね、部下達が潜んでいたの。頭に血が上ってて、気づかなかったのね」

？僕と文弥は顔を見合わせた。確かに、今なら潜んでいる人間の気配が微かに感じられる。

「まだ学級会は、始められたばかりだったのよ。ヒートアップすれば、私に暴力を振るう生徒も出て来たでしょう。そうしたら、そこを抑えるつもりだったのよ」

「そこから校内に監査を入れる予定だった、って訳か……」

「ええ。お父様は、今頃頭を抱えている筈よ」

「そもそも、何で教えてくれなかったのさ！」

「二人は別の仕事で忙しそうだったじゃない。それに学校がある日なんだから、知らなくても問題無かったんだもの。まさか、抜け出すとは思わなかったけれど……」

？僕達は項垂れることしか出来なかった。勢いだけの行動をしたことが、無性に恥ずかしく感じる。

「CADもね、取られた方はダミーなの。……ほら」

？彼女はしやがみ込んで、自分の靴下を捲る。白いレースのフワフワした靴下の下に現れたのは、薄型の腕輪型CADが巻かれた足首だった。僕の手にあるCADと見比べてみれば、亜夜子が普段使っているのはどちらかは一目瞭然だ。

「だから、本当に……二人とも本当に馬鹿だわ。——だけど、嬉しかった。助けに来てくれて、ありがとう」

？そう言つて、亜夜子にはっこりと笑つた。それは今まで見た中で一番、素敵な表情だった。

？今回のことは叔父様には勿論、お母様にもこつ酷く叱られてしまった。作戦の妨害という形になつたというのも大きな理由だったが、運転手を気絶させて勝手に運転したことに對してが主だった。

？その際に、僕にマトモな運転経験が全く無かつたことが文弥にバレた。流石に彼も怒るかもしれないと思つたが、「まあ、そうだろうね」とため息交じりに言うだけだった。つまり、余程下手な運転だったのだろう。

？だが、亜夜子を助けようと動いた点については、誰からも褒められた。一人の少女の為に一国を滅ぼす四葉には、それくらいの苛烈さとセンチメンタルな感情は必要なのかもしれない。

？亜夜子は結局、僕達と同じ学校に転校した。通っていた女子校が廃校予定になつたからだ。風紀の乱れが世間の知るところとなり、正常な学校運営が不可能になつたのである。それは、勿論四葉の手によるもの。紅梅会の人間や交際相手がどうなつたのかについては、僕も良く知らない。きっと、碌な人生は送れていないだろう。

？正義は悪に勝てるか分からないが、悪はより大きな悪に塗りつぶされる。世界はそんな理不尽な回り方しか出来ないのだ。

さらば、愛しき子供達よ

?人には皆、生まれてきた意味がある。

?それは、感動的な物語における台詞か。あるいは、一笑に付される綺麗事か。

?どちらにせよ、僕には生まれてきた理由というものが分からなかった。二度目の生を受け、魔法師として生きるということは、一体何の意味があつたのだろうか？

?答えが出なくとも、僕はこれからもこの世界で生き続けなければならない。

?だから、四葉家を、四葉真夜を斃す。彼女ではなく、僕こそが「四葉」となつたとき、きつと生まれてきた理由を実感出来る。そんな気がするのだ。



?魔法大学を卒業し、僕は大学院生になっていた。要は、モラトリアムを謳歌しているに過ぎない——という名目で、自由な立場を保有したままにしているのだ。

?そして、本家にクーデターを起こす時期としては、今が一番良い。下手に僕の身分に色が付くと、今後の身の振り方にも影響が出てくるからである。

?僕とリーナは、武倉の部隊を少数引き連れて、四葉の村に侵入していた。とはいえ、身内には村の警備も顔パスだ。簡単に中へは入れてしまう。

「ねえ、リズム。本当に撃つちゃって良いの？」

?リーナが四葉家謹製の「ブリオネイク」を抱えたまま、不安そうにこちらを見る。

?今回のクーデターに向け、作戦の全容は彼女に伝えてはいたが、この魔法を全力で使う状況には困惑もあるのだろう。

「構わないよ。これぐらいしないと、向こうを動かせないからね」

？ 第一の作戦は、四葉の村に「ブリオネイク」を数発撃ち込むこと。
？ リーナの魔法は、威力調節の自由が利くことが一番の強み。だから、一発で村を壊滅させるのでは無く、威嚇として用いるのだ。そもそも、第四研の為に地下施設は、熱核攻撃にも耐えられるシエルターのような構造になっている。プラズマによる熱線が村を灼いても、運悪く外に出ていたりしない限りは生き残れるだろう。

「……責任は貴方が取ってよ」

「勿論、そのつもりだよ」

？ 失敗してしまった時のことも、ちゃんと考えてはいる。

？ たとえ僕が捕まっても、リーナだけは絶対に守りきらないといけない。万一の為、彼女の亡命ルートは既に用意してあった。

？ 行き先はスイス。まさか、USNAに戻す訳にもいかないからだ。もしもの時は、部下の中から選定した、メイド兼ガーディアン数人と共に脱出させる予定である。そういう時は来て欲しく無いが。

？ そして、リーナに責任を負わせない為の準備もしていた。洗脳の証拠があれば、彼女では無く僕が悪くなる。

？ 来たるべきクーデターに向け、僕は光波振動系魔法の練習を重ねていた。習得した魔法は「邪眼^{イヒルアイ}」。無理矢理に彼女を逃す際、それを掛けてやれば一石二鳥だ。

？ 僕の命と引き換えの片道切符のことは、リーナ本人には言っていない。彼女のガーディアンにのみ、それを伝えている。本人に言ってしまったら、本当に起こってしまう気がしたからである。

「……分かったわ」

？ 彼女はブリオネイクのグリップをきつく握り直す。一瞬で想子がCADに流れ込み、プラズマが勢いよく放射される。建物が一気に幾つか破壊されたが、外からは何も変化は無いように見えるのだろう。認識障害の結界が、悪い方向に作用している。僕にとつては、都合が良いけれども。

「本家の館と離れだけは、そのままにしてね。後はどんどん壊しちゃって。どうせ、老朽化してるから。折角だし、全部壊しとこう」
「そんな軽い理由で良いのかしら？」

？軽い理由の所だけを行わせているからだ。本邸や離れの建物に攻撃すると、後で誤魔化しが効かない。でも、周りの建造物ならば「爆破解体」などで言い訳が出来る。かなり無茶な言い分だろうが。

？最初はリーナを巻き込まないで、「何も知らなかった」で押し切らせることも考えた。だが、スケールの割に問題性は低いところに聞わらせておく方が、まだ安全だと思い直したのだ。クーデターの計画を、一番近くにいる人間が気づかない筈は無いのだから。

？破壊されていく建物を眺めながら、僕は直属部隊に突入の指令を出す。「毒蜂」を配備させた今の部隊は、以前よりも戦力が上がっている。黒羽の叔父様には、足を向けては寝られない。

「黒羽と新発田はこちら側に付いた。津久葉は、まあ僕の方と考えて良い。静と真柴、椎葉は向こう側だけど、それはブラフだ。タイミングを見計らって、こっちに寝返る。あの家達は、外からの突入組なんだ」

「驚いたわね。いくら貴方を可愛がっていたらしいとはいえ、こんなクーデターにまで付いてくるなんて」

「リーナも付いてきてくれたじゃないか？」

「そつ、そりゃあそうよ！ 貴方一人じゃ、心配なもの。ワタシがいないと、リズムは本当にダメなんだから！」

「そうだね。僕一人だったら、生き残れないかもしれない」

？リーナは一人でもきつと大丈夫だ。そうでないと、こんな作戦は考えない。

「黒羽と新発田はどのルートから入っているの？」

「離れで待機させていた。多分、ウチの部隊と既に合流してるよ。――そろそろ、僕も行かなきゃ。じゃあね」

「ちよつと待って！ ワタシは!?!」

？そう叫んだ彼女に向け、僕は「邪眼」イビルアイを発動する。

？命令はただ一つ。「四葉理澄が死ねば、国外に逃げなくてはならない」だ。僕は魔法の効果を確かめる前に、本邸に向かって急いで走り出す。後は、彼女のガーディアンが何とかしてくれる。

？クーデターは始まったばかり。立ち止まっている時間は、僕には

少しも無かった。



？本家が召し抱えている魔法師は、他の十師族に属している魔法師よりも練度が高い。大漢報復戦レベルを想定した訓練を積みまされているのもあって、実戦への比重がかなり重いのだ。その条件は、分家も同様。ぶつかり合えば、苦戦は免れない筈だった。しかし――

「――拍子抜けするくらいに、こちらが押ししてるな……」

？四葉家本拠地の地下で繰り広げられている戦闘は、明らかに侵入側が優位に立っていた。

「本家の戦闘員は、護衛に特化した使用人が多いですから。裏仕事をするような人間は、殆どが分家所属でしょう」

「それを考えてもこれは……」

？魔法師だけで行われる戦闘は、ランチェスターの法則における一次法則が成り立つ。一騎討ちを基本とする古典的戦闘と魔法師の争いは極めて近いからだ。

？1対多数の魔法戦闘であれば、広域干渉魔法を使える。しかし、多数対多数における広域干渉魔法の使用はリスクが高過ぎる。その為、範囲を狭めた魔法しか使えない。結果、一騎討ちに近い状態になってしまうのだ。

？とはいえ、護衛タイプと戦闘タイプではあまりにも方向性が違うようだった。明らかに差が露呈している。ランチェスターの法則は実力差までは考えてくれない。

？こんな風に話している間にも、本家の魔法師が攻撃しては来る。でも、ベクトル反転術式と鉛直下向きの加重系魔法で黙らせられた。拘束するのを部下に任せ、僕は単独で先へ進む。

「理澄兄さん」

？背後から、僕を呼ぶ声がする。振り向くと、文弥がこちらに走って来ていた。今日は女装をしていない。

「どう、文弥？ 抑え切れてる？」

「村の外からの突入組も到着してるし、今のところ問題は無いよ。ここに敵が突入するというのは中々無いから、向こうも混乱してるんだと思う」

「なるほどね……。それはあるかもしれない」

「?そこまで話したところで、僕達は嫌な予感を感じる。咄嗟に廊下の端に転がった。すると、そこへに「夜」が通り抜けて行く。

「二人とも、よく訓練しているのね。とても偉いわ」

「御当主様……!」

「?先程は不意打ちだったとはいえ、ミーティア・ライン「流星群」が脅威であるのには変わらない。レーザー光線が身体を掠めたせいで、僕も文弥も無傷では済まなかった。焼け焦げたタンパク質の匂いが、周辺に不快な臭いをさせる。流れ出た血は、床にどす黒い染みを作った。

「でも、残念ね。そんな貴方達を処分しないといけないなんて」

「?彼女はそう言い、CADに手を伸ばす。けれども、ミーティア・ライン「流星群」は発動しなかった。僕の光に対する干渉力が、御当主様の干渉力を上回ったのだ。僕が光波振動系魔法を訓練したのは、この為だったのである。イビルアイ「邪眼」の習得は精々副産物に過ぎない。

「?すかさず「加速」を相手に掛け、御当主様の身体を壁に無理に叩きつける。思考操作型CADを愛用しているので、倒れたままでも魔法は放てる。

「?衝撃によって向こうの情報強化が弱まったところで、すぐに重力制御魔法でCADを奪い取った。

「?確かに御当主様は、「夜の女王」と呼ばれた最強の魔法師だった。だが、それは昔のことだ。今は殆ど戦いには出ない。逆に、僕は現役の戦闘魔法師である。しかも、制圧よりも対人戦闘に特化しているのだ。

「……処分されるのは、どちらの方でしょうか?」

「誰に物を言っているつもり……!」

「お判りになられませんか?」

「?御当主様は僕を鋭く睨みつける。そして、それは焦点の合わない虚ろな目に段々と変わって、何処か遠くを仰ぎ見た。

「母親が大変な時なのに、息子が居ないわ……。一体、何処へ行つたのかしら。達也は本当に、困つた子……」

「立ち上がった僕は、文弥の身体が御当主様の視線から隠れるような位置へと移動する。」

「……達也なら、もう来ませんよ」

「……！ 貴方、まさか……」

「彼らは、この先四葉に一切関わらないでしょう。——いやあ、苦勞しましたよ。あの兄妹は我儘ですからね、黙って隠居はしてくれない。新しい箱を用意するのに、かなり骨を折られました」

「高3の時、僕は達也を四葉から解放すると、本人に宣言した。そして、魔法を使ったエネルギー開発を目的とした研究所の設立こそが、その答えだった。金の卵を産むような研究なので、設置の認可は直ぐに降りた。まあ、方々に金を握らせたりはしたのだが。まず、金脈はその目的で作ったのだ。」

「その為にも、四葉家ではタブーであった、政争への介入を僕は行つたのである。国立の研究所は、僕だけの力では設置出来なかったからだ。政界に足を突っ込んだのは、その辺りの事情が大きい。」

「ある派閥の後ろ盾になった僕は、特務機関的な役割を担っていた。黒羽でなくても、それくらいの仕事はこなせる。対魔法師で無ければ、尚更のことだ。」

「政治家と連みだしたと思っていたら……。最初から、達也さんを追い出す腹積もりだったのね。私が深雪さんを当主に選んだから、その腹いせかしら？ 当主の地位が、そんなに欲しかったの？」

「少し違いますね。四葉を率いることに、深雪はあまりにも向いていないと思つたからです。だけど、達也が四葉に居たままの状態で、僕が当主になろうとするのは危険なことだった」

「僕の言葉に、御当主様が眉をひそめた。」

「……貴方が当主に向いているのは、確かにそうでしょう。でも、深雪さんが向いていない、ということは無い筈よ。あの子も怒りに吞まれば、幾らでも冷酷になれます」

「それですよ。損切りと、感情的な肅清では意味が違ってくる。恐怖

だけで統治出来るのは、3代目まで。そのことは、今までの歴史が教えてくれる」

「このまま進めば、四葉は崩壊の一途を辿るだろう。しかし、崩れてバラバラになっても、深雪は困らない。達也は、どんなことがあっても彼女を守ってくれる。そういう風に作られているからだ。」

「しかし、今まで四葉に仕えていた人間はどうなる？ 為す術も無いまま、時代に流されていくのは何とも忍びない。」

「理由は、もう一つあります。——…：…：…：御当主様、貴女に世界は滅ぼさせません」

「どうしてよ!? どうして、私の邪魔をするの!?!」

「金切り声が廊下に響く。けれども、僕はそれに応えなかった。」

「…：…：昔、わたし達はどちらも同じだったわ！ わたしはわたし達！ 真夜は深夜で、深夜は真夜だった！ それなのに、それなのに…：…：」

「御当主様は、頭を掻き毟り始めた。綺麗にセットされていた髪型が、どんどん乱れていく。抜けた髪の毛が、彼女の指の間に挟まっているのが見えた。」

「——どうして、『わたし』だったの!?! 他の誰でも無く、わたしだったのは何故？ …：…：貴方達、それに答えられるの？ 答えられないでしょう!」

「御当主様から目を逸らし、思わず目を伏せた。」

「そんな僕を見てか、少し前の錯乱具合が嘘のように、彼女はこちらに優しく微笑みかけた。」

「理由なんて無かったのよ。世界は、無作為にわたしを選んだ。そして、不幸の全てをわたし一人に押し付けたの…：…：。そんな理不尽な世界に復讐したい、って気持ちは何処か間違っているかしら」

「…：…：それでも、認められません。それをしても、誰も貴女と共に堕ちてはくれない。御当主様が、もっと不幸になるだけです」

「それはおかしいわ。子供を産み育て、親は子供に自らの夢や期待を重ねる。それが、わたしの望むささやかな幸せだわ。…：…：達也が世界を滅ぼせば、きつとわたしは幸せになれるの」

「? そう言つて、夢見る乙女のように指を組む。けれども、目は光を失っていた。」

「いいえ。達也は深夜様の息子です。お間違え無きよう!」

「……うるさい! うるさいのよ! あんたなんか、姉さんから生まれてもない癖に! そこまで期待もされてなかつた癖に! 偶然、使える魔法を持つてただけのお前が、思い上がるなつ!!」

「? 御当主様は僕の首に手を伸ばし、思い切り締め上げた。気管が狭まり、息が吸えなくなる。本能的に、そこから逃れようと僕は身体を捻る。しかし、「流星群」ミレティア・ラインによるダメージで思うように動かない。」

「? 反撃の方法を考えていた時、急に御当主様の身体に黒い羽が纏わりついた。それにより拘束が緩まったので、僕は後ろに飛び退く。」

「理澄さん!」

「? 御当主様の背後に、CADを構えた亜夜子が居た。何か言葉を返そうとしたが、咳き込んだせいで何も言えなかつた。すると、誰かに背中をさすられる。」

「大丈夫か、理澄くん」

「? ふと気づけば、僕の横に勝成さんが立っていた。それだけでなく、他の人間もここに集まっている。文弥も黒服に肩を貸して貰っていた。」

「僕は、一応……大丈夫。それよりも……」

「? 言葉を途中で切り、目の前に視線を戻す。御当主様は感情のパラメータがおかしくなったのか、蹲って子供のように泣き始めている。そちらに、そつと歩み寄る。勝成さんは僕を止めようとしたが、その手を強引に振り払う。」

「……御当主様。貴方は昔に、こう仰られました。『分家の子供達は、私の子供のようなものだ』と。それは、決して間違いではない筈です」
「……覚えていないわ、そんなの。言ったとしても、口先だけのものよ」

「ええ。本心から仰られた訳では無いでしょうね。ですが、『四葉の子供』のアイデンティティの源泉は貴女の存在故です。自分達の両親だけでは、そうはいきません——」

？僕は御当主様の手を、包み込むように握る。

「——四葉である僕達は紛れも無く、貴女の子供だった。だけど、みんな大人になってしまいました。もう、貴女を頼らずとも生きていける。だから、ここで終わりにしましょう。……40年近くも悪夢を見たのです。夢なら、必ず目覚められる」

？彼女はゆらりとした緩慢な動作で、顔を上げた。化粧は殆ど剥がれていて、長い付け睫毛が前髪に引っかかっている。滑らかな陶器のように白い肌を作っていたファンデーションはひび割れ、今は本当の肌の色が分かる。

「……そう。これは夢だったのね……」

「悪夢の続きは僕が見ます。ですから、ゆつくりとお休みになれば宜しいのですよ——」

？それに呼応して、僕のCADが起動式を吐き出した。

「そうね……。久しぶりに姉さんに会いたいわ……」

？そう呟き、彼女は静かに目を瞑る。口元は僅かに緩み、薄く弧を描いている。そのまま、身体が前へと倒れていく。床にぶつからないよう、僕は急いで受け止める。

「——おやすみなさい。お母様」

？抱きとめた身体は、骨張った部分が多かった。フリルとレースで出来た鎧の下は、懸命に生き続けた一人の女性が居たのだ。そのことに気づいた僕は、彼女の代わりに世界に向けて、慟哭せずには居られなかった。喉が焼けるのではないかと、と一部分の冷静な思考が回る。

？亜夜子が、何度も目を拭って溢れ出る涙を抑えようとしている。文弥が、苦しげな嗚咽を漏らしている。それだけではない。誰もが、四葉真夜の為に泣いていた。本家も分家も、今は関係無かった。

？正直、良い思い出なんて一つもなかった。今も頭の中を駆け巡る記憶は、恐怖に塗り潰されている。それは、皆同じだろう。だが、僕らはそんな彼女の下で「四葉」として生きていたのだ。

？どうして、自分は生まれてきてしまったのか。

？生温かい体温を感じながら、その理由を僕はようやく理解した。

？魔法は己の描いたイメージを現実投影する。強い願いは、現実

そのものを捻じ曲げる。世界を憎み、救いを求めた、四葉真夜の祈り。それが僕という形となって、世界に形成されたのだ。

？武倉理澄は、世界を塵殺する魔王を殺す為に、生まれてきたのではない。世界で一番可哀相な12歳の少女を救う為に、生まれてきたのだ。仮に誰もがその答えを否定したとしても、僕だけはそう信じたかった。